挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—7	SD06	弥生甕形土器	口径(16.5)	◦胴部に3本単位の櫛状施文具による刺突列点文がめぐっている	◦口縁部内外面とも横方向のナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	◦微砂粒を多量に含む。焼成やや良好。灰褐色～暗茶褐色
—8		弥生土器底部	口径(14.4)		◦底部外面ていねいなナデ◦あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦0.5～1㎜くらいの小微砂粒を含む。焼成良好◦外面うすい黄橙、内面暗い灰
—9		〃	底径(5.6)		◦内面ナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明。底面に焼成後穿孔している	◦0.5～1㎜くらいの小微砂粒を含む。焼成良好◦うすい黄橙
86—1	SI01	弥生壷形土器	口径(30.0)	◦口縁端部に先端の鋭い篦状施文具で上下に斜格子文と斜行文が施されている	◦口縁部外面ナデ。頸部外面刷毛目。内面ていねいなナデ	◦1㎜以下の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。やや暗い灰褐色
—2		〃	口径(9.3)		◦内外面とも磨滅が著しく調整不明	◦3㎜以下の砂粒及び微砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。灰色
—3		弥生甕形土器	口径(13.4)		◦口縁部内外面ともナデ外面に指頭圧痕が残る。胴部外面刷毛目、内面ナデ	◦2㎜以下の砂粒を含む◦焼成やや不良もろい。灰褐色
—4		弥生壷形土器		◦胴部にタマキ貝の腹縁を用いて斜行沈線文を施し、その下に同じくタマキ貝の腹縁で平行沈線文を4条施し更にその下にタマキ貝の周縁を回転させた2条の沈線文を有する、突帯を貼り付ける	◦内外面ともていねいなナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。灰褐色。黒斑あり
—5		弥生甕形土器	口径(19.4)		◦口縁部内外面とも横方向ナデ。胴部内面ナデ、外面磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。暗灰褐色
88	SK01	弥生壷形土器		◦頸部に断面三角形の貼り付け突帯を2条めぐらす	◦磨滅が著しいが内外面ともナデと思われる	◦微砂粒を多く含む。焼成不良、もろい。灰色を帯びたオレンジ色
90—1	SK02	〃	口径(26.2)	◦口縁端部平坦には櫛描き波状文がめぐり、その端に半截竹管状の施文具による刻目が施され、その下に半截竹管状（篦状？）の施文具による刻目を有する貼り付け突帯が4条めぐる。頸部には5本単位の櫛描き波状文と櫛描き平行沈線が交互に3回ずつめぐっている	◦口縁部内外面及び頸部外面上部、刷毛目後ナデ。頸部外面下部及び頸部内面上部刷毛目。頸部内面下部ナデ	◦2㎜以下の砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。灰褐色。黒斑あり
—2		弥生甕形土器	口径(23.9) 底径(16.6)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目下半刷毛目後篦磨き、内面上半ナデ、下半刷毛目後ナデ。底部内外面ともナデ	◦0.5～1㎜くらいの小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。白っぽい灰褐色
92—1	SK03	弥生甕形土器	口径(19.4)		◦内外ともナデ	◦微砂粒を含む。焼成良好、やや堅い。外面灰黒褐色、内面灰褐色
—2		弥生土器底部	底径(10.2)		◦磨滅が著しく調整不明	◦2㎜以下の砂粒を多く含む。焼成やや良好、もろい。灰～黒褐色
—3	SK04	弥生壷形土器	口径(24.0)	◦口縁端部に鋭い斜行文を施す。頸部に篦状施文具による押圧を有する突帯が1条めぐる	◦口縁部内外面ともナデ。頸部外面刷毛目内面ナデ？	◦1㎜以下の小微砂粒を多く含む。焼成やや良好◦灰褐色
—4	SK05	弥生土器底部	底径(4.6)		◦胴部外面篦磨き内面ナデ◦底部内外面ともナデ	◦漆が塗布されている。0.5～1㎜くらいの小微砂粒を含む。焼成良好。胎土は明るい灰、漆くらい橙
—5		弥生壷形土器	口径(21.6)	◦口縁端部に指頭圧痕を2列にわたって施しその間に沈線文が1条めぐる	◦口縁端部ナデ。口縁部外面横方向の刷毛目後横方向の雑な篦磨き、内面篦磨き	◦1㎜以下の小微砂粒を含む。焼成やや良好、もろい。灰褐色
—6		〃	口径(17.0)		◦口縁部内外面ともナデ。頸部刷毛目後ナデ内面ナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良、少しもろい◦灰褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
98—1	SK09	弥生甕形土器		◦頸部に半截竹管状(篦状)施文具による刺突を有する突帯を1条貼り付ける	◦外面刷毛目後ナデ◦内面上部縦方向の刷毛目下部ナデ	◦2㎜以下の砂粒を含む◦焼成やや不良、ややもろい◦灰～黒褐色
—2		弥生土器底部	底径(4.9)		◦胴部外面篦磨き内面ナデ◦底部内外面ともナデ	◦漆が塗布されている◦1㎜以下の小微砂粒を多く含む◦焼成良好、堅い◦胎土は灰褐色、漆の部分は黒色
100-1	SK15	弥生甕形土器	口径(19.2)	◦口縁端部に篦状施文具で斜格子文を施す	◦内外面ともナデ	◦微砂粒を多く含む◦焼成やや良好堅い◦灰褐色
—2		〃	口径(17.9)	◦胴部に刺突列点文が入る	◦口縁部内外面ともていねいなナデ◦胴部外面刷毛後篦磨き内面ていねいなナデ	◦0.5㎜以下の微砂粒を含む◦焼成やや良好、堅い◦灰褐色
102-1	SK16	〃			◦内外面ともナデ	◦1㎜以下の小微砂粒を多く含む◦焼成やや不良、もろい◦灰褐色
104-1	SK20	〃	口径(21.4)	◦口縁下に1ヶ所焼成後の穿孔あり	◦口縁部内外面ともていねいなナデ◦胴部内外面ともていねいなナデ	◦1㎜以下の小微砂粒を多く含む◦焼成良好、堅い◦灰褐色
—2		弥生ミニチュア壷形土器	口径(6.1)		◦内外面ともナデ	◦1㎜以下の小微砂粒を多く含む◦焼成不良、もろい◦赤褐色
—3		弥生高坏形土器	底径(15.0)		◦外面ていねいなナデ、内面磨滅が著しく調整不明	◦脚部◦微砂粒を多く含む◦焼成良好、やや堅い◦黒褐色
107-1	SK22	弥生壷形土器	口径(17.7)		◦口縁端部ていねいなナデ◦口縁部外面縦方向の刷毛目後ナデ？内面ていねいなナデ	◦微砂粒を多く含む◦やや良好、堅い◦灰色
—2		〃	口径(24.2)		◦口縁端部ナデ？◦口縁部外面刷毛目後横方向ナデ、内面ナデ◦頸部外面刷毛目、内面ナデ	◦2㎜以下の砂粒を多く含む◦やや良好で堅い◦あかるい灰褐色◦黒斑あり
—3		弥生甕形土器	口径(16.5)		◦磨滅が著しく調整不明	◦3㎜くらいの砂粒を少々と1㎜以下の小微砂粒を多く含む◦焼成やや不良、もろい◦やや褐色を帯びた灰白色
—4	SK22～25	〃	口径(26.0) 底径(9.0) 器高(29.4)	◦口縁端部に鋭い篦状施文具で刻目を施している	◦口縁部内外面ともナデ◦胴部外面上半刷毛目、下半篦磨き内面ナデ？◦底部外面ナデ、内面ナデ、部分的に刷毛目	◦3㎜以下の砂粒を多く含む◦焼成やや良好、もろい◦外面明るい灰褐色、内面黒褐色
—5	SK22	弥生高坏形土器	口径(17.8)	◦口縁端部に半截竹管状の施文具で刻目を施す	◦口縁端部ナデ◦坏部外面上部ていねいなナデ、下部刷毛目内面ていねいなナデ	◦坏部◦微砂粒を多く含む◦焼成やや良好、堅い◦灰褐色
—6	SK25	弥生壷形土器	口径(17.5)	◦口縁端部に3条の平行沈線文をめぐらせ更に上下2列の斜行文と3ヶ1組の円形浮文を7ヶ所に貼り付ける◦口縁部内面に篦状施文具で沈線文を3条めぐらせる◦頸部に2条以上の断面三角形の突帯を貼り付ける	◦口縁部外面ナデ部分的に刷毛目◦頸部外面刷毛目◦口頸部の内面刷毛目後ていねいなナデ	◦微砂粒を多く含む◦焼成良好、堅緻◦灰褐色
107-7	SK25	弥生高坏形土器	底径(16.0)	◦脚部上方に篦状施文具で平行沈線文を3条めぐらせ、その下には8条、さらにその下には7条の櫛描き平行沈線文をめぐらせる。その下に3本単位の櫛描き斜行文を施し、次に櫛描き平行沈線文を7条めぐらせ、その下には断面三角形の突帯を3条貼り付ける。さらに櫛描き平行沈線文を7条、7条、8条とめぐらせ、その間に羽状に3本単位の櫛描き斜行文をめぐらせる◦裾端部には篦状施文具で刻目を施す	◦円板充填法◦内外面ともナデ、内面に絞り痕が残る	◦脚部◦微砂粒を多く含む◦焼成良好、もろい◦外面黒褐色、内面灰褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—8	SK25	弥生壷形土器			◦外面ていねいなナデ、内面刷毛目、部分的に後ナデ	◦0.5mm以下の微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅い。灰褐色
113-1	SK29	弥生土器	底径 (4.4)		◦胴部外面篦磨き？◦底部外面ナデ。胴部～底部内面雑な篦磨き	◦微砂粒をわずかに含む◦焼成良好、堅緻。外面明淡色、内面黒色。黒斑あり
—2	SK34	弥生甕形土器	口径(21.8)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面縦方向の刷毛目後ナデ、内面横方向の刷毛目後ナデ	◦2～3mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好で少し堅い。暗灰色
114-1	SK37	〃	口径(23.2)	◦口縁端部に刷毛の角で三角刺突文をめぐらす。胴部上方に1条沈線文をめぐらせ、その下に、5本単位の櫛描き平行沈線文を3回施し、更に下には刷毛の角による三角刺突文をめぐらす	◦口縁部外面ナデ、内面横方向ナデ。胴部外面上半ナデ、下半刷毛目でその下方になると後ナデ、内面刷毛目でその下方になると後ナデ、内面刷毛目後ナデ	◦3～5mmくらいの砂粒、0.5mm以下の微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少しもろい。外面黒褐色でスス状の炭化物付着、内面茶褐色
—2		弥生壷形土器			◦胴部外面刷毛目、底部近くになると刷毛目後ていねいなナデ、内面刷毛目後ナデ	◦1mm以下の小・微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅い。外面暗灰褐色
—3		弥生甕形土器	口径(21.4)		◦口縁部外面横方向ナデ、内面ていねいなナデ、内外面とも指頭圧痕が残る。胴部外面磨滅が著しく調整不明、内面ていねいなナデ	◦2～3mmの砂粒、微砂粒を多く含む。焼成やや良好、もろい。灰褐色
—4			口径(25.1)	◦胴部上方に櫛描き平行沈線文がめぐり、その下には櫛状施文具による刺突文を施す	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面磨滅が著しく調整不明、内面ていねいなナデ	◦0.5mm以下の微砂粒を多く含む。焼成やや良好、少し堅い。灰～黒褐色
—5		弥生甕形土器		◦胴部上方に5本単位の櫛描き平行沈線文を3回めぐらせ、その下に櫛描き波状文を施す	◦胴部外面刷毛目。内面刷毛目、部分的に後ナデ	◦2～4mmの砂粒及び微砂粒を多く含む。焼成良好、やや堅い。暗灰褐色
117-1	SK44	弥生壷形土器	口径(15.8) 底径 (6.2) 器高(26.3)	◦頸部と胴部の3ヶ所に5～6条の篦描き平行沈線文がめぐる	◦口縁部の内外面及び胴部の外面刷毛目後横方向の篦磨き。胴部内面ナデ	◦2～3mmの砂粒を多く含む。焼成良好、堅緻。肌色を帯びた灰褐色。黒斑あり
—2		弥生甕形土器	口径(16.2) 底径 (6.4) 器高(18.6)	◦胴部上半に篦状施文具による沈線文が1条めぐる	◦口縁部内外面とも刷毛目後ナデ。胴部外面刷毛目、底部近くは刷毛目後ナデ、内面上半刷毛目、下半ナデ◦底部内外面ともナデ	◦1～3mmくらいの砂粒及び微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅緻。外面灰褐色、内面やや赤味を帯びた灰褐色。黒斑あり
—3		〃	口径(18.5) 底径 (6.8) 器高(23.1)	◦胴部上半に篦描き沈線が1条めぐる	◦口縁部内外面とも刷毛目後ナデ。胴部外面刷毛目、底部近くは刷毛目後部分的に粘土を貼り付けナデ、内面上半刷毛目、下半ナデ。底部内外面ともナデ	◦2～3mmの砂粒及び微砂粒を多く含む。焼成やや良好、堅緻。灰褐色。黒斑あり
—4	SK45	弥生壷形土器	口径(13.6)		◦磨滅が著しく調整不明	◦大小砂粒を多く含む。焼成やや不良、もろい。灰オレンジ色
—5	SK46	弥生土器	底径 (4.4)		◦胴部外面篦磨き？◦底部外面ナデ。胴部～底部の内面雑な磨磨き	◦微砂粒をわずかに含む◦焼成良好、堅緻。外面明淡色、内面黒色。黒斑あり
120-1	P—4	弥生甕形土器	口径(13.6)	◦口縁端部に篦状施文具で平行沈線文を2条めぐらす	◦内外面ともナデ	◦0.5mm以下の微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。白っぽい灰褐色
126	第9グリッド	弥生壷形土器	口径(14.4)	◦頸部に貝殻の腹縁で押圧を施し沈線状のものを1条めぐらせる。肩部には弱い段が形成され、その下には篦描き平行沈線文が2条めぐる。更にその下には、羽状文が施され、その羽状文は縦方向の4本の篦描き沈線文によって区切られる	◦内外面とも横方向の篦磨き	◦1～2mmくらいの砂粒を多く含む。焼成良好。うすい黄橙

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
Ⅳ B 区						
130-1	S D01	弥生甕形土器	口径(33.5)		◦内外面とも横方向ナデ	◦1㎜以下の小砂粒を多量に含む。焼成やや不良、少しもろい。赤褐色
—2			口径(18.7)		◦口縁部外面ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	◦砂粒を含む。焼成やや良好。外面赤褐色、内面暗黄褐色
—3		弥生壷形土器		◦頸部に突帯を貼り付け指頭圧痕をめぐらす。胴部に4本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらす	◦内外面とも磨滅が著しく調整不明。内面に指頭圧痕が残る	◦砂粒を多く含む。焼成不良。灰褐色
—4		弥生甕形土器			◦口縁部内面ナデ？。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成不良。黄褐色～黒色
134-1	S D02	弥生壷形土器	口径(20.7)		◦口縁部内面刷毛目？後ナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒を含む。焼成不良。黄褐色
—2		〃	口径(17.8)	◦口縁端部に3本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらす	◦磨滅が著しく調整不明	◦1㎜くらいの砂粒を多く含む。焼成不良。黄褐色
—3		〃	口径(17.5)		◦磨滅が著しく調整不明。口縁部外面に指頭圧痕が残る	◦1～3㎜の砂粒を多く含む。焼成不良。やや赤味を帯びた黄褐色
—4		弥生甕形土器	口径(23.8)		◦口縁部外面下部ナデ、内面刷毛目後ナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒を多く含む。焼成不良。暗黄褐色
—5		〃			◦胴部上半、内外面とも刷毛目、下半外面縦方向の篦磨き、内面ナデ？	◦微砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗褐色
—6		〃	口径(23.1)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面ナデ？内面ナデ	◦微砂粒をやや多く含む。焼成不良。白っぽい黄褐色
—7	S D04	〃	口径(18.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面ナデ、指頭圧痕が残る	◦微砂粒を多く含む。焼成良好。灰黄褐色
—8		〃	口径(24.6)		◦胴部内面刷毛目後ナデ、指頭圧痕が残る。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦1～3㎜の砂粒を多く含む。焼成不良。やや赤っぽい黄褐色
—9		〃	口径(24.5)		◦磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成不良。赤褐色
137-1	S I 01	〃	口径(12.5)		〃	◦1～2㎜の砂粒を極く少々含む。焼成不良。黄灰色
—2		弥生壷形土器	口径(15.9)		〃	◦2～3㎜の砂粒をかなり多く含む。焼成不良。赤褐色
—3		〃	口径(20.4)		◦磨滅が著しく調整不明。口縁部外面に指頭圧痕が残る	◦微砂粒を含む。焼成不良。白に近い黄褐色
139-1	S K01	弥生土器	底径 (6.2)		◦胴部外面縦方向の篦磨き、内面ナデ？。底部外面ナデ、内面ナデ？	◦1～2㎜の砂粒含む。焼成やや良好。外面黒色、内面灰色
—2	S K05	弥生壷形土器	口径(21.7)	◦口縁端部に刻目をめぐらせる	◦内外面ともナデ	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。灰褐色
—3		弥生甕形土器	口径(15.1)	◦口縁端部に篦状施文具で刻目を上下2列にめぐらす	◦内外面ともナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成やや良好。黄灰褐色
—4		〃	口径(22.1)		◦磨滅が著しく調整不明	◦砂粒を少々含む。焼成不良。淡赤黄褐色
139-5	S K05	弥生甕形土器	口径(27.9)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒をやや多く含む。焼成不良。黄色を帯びた赤褐色
142-1	S K02	〃	口径(22.4)	◦口縁端部に刻目をめぐらせその下に指頭圧痕を有する貼り付け突帯をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明、内面に指頭圧痕が残る	◦砂粒を多く含む。焼成不良。白っぽい黄褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—2	SK03	〃		◦頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯をめぐらせる	◦胴部、外面刷毛目、内面ナデ、指頭圧痕が残る	◦1㎜くらいの砂粒を多く含む。◦焼成やや不良。淡黄褐色
—3	SK04	〃	口径(24.1)		◦口縁部内外面ともナデ?◦胴部外面刷毛目?後ナデ内面ナデ	◦微砂粒を含む。◦焼成やや良好。白っぽい黄褐色
—4		〃	口径(19.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦微砂粒を含む。◦焼成不良。黒色を帯びた灰褐色
—5		弥生土器高坏	底径(13.4)		◦外面ナデ。磨滅が著しく調整不明	◦脚部。微砂粒を多く含む。◦焼成やや良好。灰褐色〜黒色
148-1	SK07	弥生甕形土器	口径(18.9)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面斜め方向の刷毛目後横方向の篦磨き	◦2〜3㎜の砂粒を含む◦焼成やや不良。淡黄褐色
—3	SK08	弥生土器底部	底径 (7.8)		◦内外面ともナデ	◦微砂粒をかなり多く含む、1〜3㎜の砂粒を含む。◦焼成やや不良。灰色〜灰黄褐色
—4	SK10	弥生甕形土器	口径(23.1)		◦口縁部内外面ともナデ、外面に指頭圧痕が残る。胴部外面ナデ、指頭圧痕が残る、内面刷毛目	◦3〜4㎜の砂粒を多く含む、大小の砂粒を多く含む。◦焼成不良。外面暗褐色〜赤褐色、内面暗黄褐色。胴部外面下部にスス状炭化物が付着
—5	SK14	〃	口径(17.7)	◦口縁端部に篦状施文具による刻目をめぐらせる	◦口縁部外面ナデ。胴部外面刷毛目。内面は磨滅が著しく調整不明	◦1〜2㎜くらいの砂粒をやや多く含む。◦焼成不良。外面赤褐色、内面白に近い黄褐色
150-1	SK11	〃	口径(22.9)	◦頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯がめぐる	◦磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒やや多く含む。◦焼成不良。灰黄褐色
—2	SK12	〃	口径(21.5)	◦胴部に篦状施文具による刺突文をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上部刷毛目、下部縦方向の篦磨き、内面刷毛目後篦磨き、部分的にナデ	◦微砂粒をやや含む。◦焼成不良。赤褐色〜黒褐色◦外面スス状炭化物付着
—3		〃	口径(22.4) 底径 (5.5)	◦胴部に5本単位の櫛描き刺突文をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部上半外面刷毛目、内面刷毛目後横方向の篦磨き、下半外面縦方向の篦磨き、内面刷毛目後横方向の篦磨き。底部内外面ともナデ	◦微砂粒や1〜2㎜の砂粒を含む。◦焼成やや不良◦黒色〜黒褐色
154-1	遺物包含層上層	弥生壷形土器	底径 (9.6)	◦頸部に4本単位の櫛描き平行沈線文と斜行文を交互にめぐらせ、その下に同施文具による波状文をめぐらせる、さらにその下には10本単位の櫛状施文具による刺突文が上下2列にめぐる	◦頸部〜胴部上半の外面刷毛目。胴部下半、外面上部横方向の篦磨き、下部縦方向の篦磨き。頸部内面ナデ指頭圧痕が残る。胴部内面刷毛目。底部内外面ともナデ、内面に指頭圧痕が残る	◦1〜2㎜くらいの砂粒をかなり多く含む。◦焼成不良。茶色を帯びた黄褐色。黒斑あり
—2		〃	口径 (8.7)	◦口縁部近くに透孔を1ケ有する	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面ナデ	◦微砂粒を多く含む。◦焼成やや不良。赤褐色、断面白黄褐色
—3		〃	口径(20.2)		◦口縁部外面ナデ。頸部外面縦の篦磨きか?内面磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒を多く含む。◦焼成やや不良。黄褐色断面灰褐色。黒斑あり
—4		〃	口径 (22)		◦口縁端部ナデ。口縁部外面刷毛目後ナデ、内面上部刷毛目、下部刷毛目後篦磨き	◦1〜2㎜の砂粒、微砂粒を多く含む。◦焼成やや不良。暗褐色。黒斑あり
—5		〃	口径(20.5)	◦口縁端部斜格子文がめぐる	◦口縁端部ナデ。口縁部外面ナデ、内面上部ナデ、下部磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒をかなり多く含む。◦焼成不良。外面淡赤褐色、内面黒色
—6		〃		◦頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯を1条めぐらせる	◦口縁下部外面ナデ、磨滅が著しく調整不明。頸部〜胴部の外面刷毛目。頸部内面横方向の篦磨き。胴部内面ナデ、指頭圧痕が残る	◦1〜3㎜の砂粒をかなり多く含む。◦焼成やや不良。暗黄褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
154-7	遺物包含層上層	弥生甕形土器	口径(16.9)	◦胴部に2本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらす	◦口縁部内外面ともナデ、外面に指頭圧痕が残る。胴部外面上部刷毛目、下部篦磨き、内面刷毛目後篦磨き	◦1～2㎜の砂粒を含む◦焼成やや良好。暗黄褐色。全体にスス
—8		〃	口径(19.4)	◦胴部に篦描き刺突文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部、外面上半縦方向の刷毛目後横方向の刷毛目、下半縦方向の篦磨き、内面刷毛目後ナデ指頭圧痕が残る	◦微砂粒を含む◦焼成不良。淡赤褐色。胴下半部は内外面ともスス
—9		〃	口径(24.6)	◦胴部に刺突文をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半縦方向の篦磨き、内面刷毛目	◦1～2㎜の砂粒をかなり多く含む◦焼成不良。赤褐色。外面は全体にスス
—10		〃		◦口縁端部に刻目がめぐる◦胴部に5本単位の櫛描き刺突列点文を3回にわたって施してある	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、部分的に後ナデ、下半縦方向の篦磨き、内面磨滅が著しく調整不明	◦1㎜くらいの小砂粒をかなり多く含む◦焼成不良。赤褐色、断面白を帯びた黄褐色
—11		〃	口径(23.5)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒をかなり多く含む◦焼成不良。淡赤褐色
155-1		〃	口径(28.5)	◦胴部に貝殻による刺突文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半縦方向の刷毛目部分的に後横方向の刷毛目、下半縦方向の刷毛目後篦磨き、内面刷毛目、底部近くは篦磨き？指頭圧痕が残る	◦微砂粒を多く含む◦焼成不良。暗黄褐色～灰黒色。外面全体にスス状の物質が付着
—2		〃	口径(17.1)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部、外面上半刷毛目下半刷毛目後ナデ、内面上半刷毛目、下半刷毛目後ナデ、指頭圧痕が残る	◦1㎜の小砂粒を多く含む◦焼成やや不良。暗黄褐色。外面全体にスス
—3		〃	口径(18.4)		◦口縁部外面ナデ、内面磨滅が著しく調整不明。胴部外面ナデか？内面刷毛目	◦1～2㎜の砂粒を多く含む◦焼成不良。赤褐色～黄褐色
—4		〃	口径(12.5)		◦口縁部外面ナデ。胴部外面刷毛目。磨滅が著しく調整不明	◦1㎜くらいの小砂粒を多く含む◦焼成不良。灰褐色
—5		〃	口径(10.4)		◦口縁部外面ナデ。胴部外面横方向の篦磨き、内面磨滅が著しく調整不明	◦2～3㎜の砂粒を多く含む◦焼成やや良好。暗褐色
—6		〃	口径(27.7)	◦口縁端部に2条の凹線文をめぐらせその上に上下2列に刻目を施す。頸部は指頭圧痕を有する貼り付け突帯がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面ていねいなナデ、指頭圧痕が残る	◦1～2㎜くらいの砂粒を多く含む◦焼成やや不良。灰黄褐色
—7		〃	口径(22.5)	◦口縁端部に2条以上の凹線文がめぐる。頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯がめぐる	◦口縁部外面磨滅が著しく調整不明、内面ナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ、指頭圧痕が残る	◦微砂粒を含む◦焼成不良。赤褐色
—8		〃	口径(27.1)	◦口縁端部に2条の凹線文をめぐらす。頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯をめぐらせる	◦胴部外面刷毛目。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒を多く含む◦焼成不良。明黄褐色、断面灰色
—9		〃	口径(22.0)	◦口縁端部に三本単位の櫛描き平行沈線文をめぐらす◦頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯をめぐらす	◦磨滅が著しく調整はよくわからないが、口縁部内外面ともナデ。胴部外面ナデ、内面刷毛目	◦1㎜の小砂粒を含む◦焼成不良。外面暗褐色、内面白褐色、断面灰褐色
—10		〃	口径(20.0)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦石英系の1～2㎜の砂粒を含み、微砂粒も多く含む◦焼成良好。黒褐色
—11		〃	口径(20.0)		◦口縁部外面ナデ、内面刷毛目後ナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ	◦1～2㎜の砂粒を含む◦焼成不良。外面暗黄褐色、内面灰褐色
—12		弥生高坏形土器	口径(19.8)		◦口縁部外面ナデ。坏部外面横方向の篦磨き？◦内面篦磨き	◦坏部。微砂粒を含む◦焼成やや不良。暗黄褐色、断面黒色～黄褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—13	遺物包含層上層	弥生壷形土器	口径 (9.6)	◦口縁部近くに透孔を2ケ有する	◦外面、縦方向の篦磨き。内面、磨滅が著しく調整がよくわからないが上部ナデ、下部刷毛目後ナデか？	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。灰褐色。黒斑あり
155-14		弥生高坏形土器	口径(22.8) 底径 (6.0) 器高(18.6)	◦口縁部に5条の凹線文がめぐる。脚部上半に5条の凹線文がめぐり、その下に篦描き沈線文が2回にわたってらせん状にめぐる	◦円板充塡法。坏部、外面刷毛目後ていねいな篦磨き、内面指頭圧痕が残る。裾部外面横方向ナデ、内面ナデ。裾端部ナデ	◦1㎜くらいの小砂粒をかなり多く含む。焼成やや良好。暗黄褐色
156-1	遺物包含層下層	弥生壷形土器	口径(13.4)		◦口縁部内外面ともナデ、外部に指の痕？が残る。頸部外面刷毛目、内面上部横方向の篦磨き、下部刷毛目	◦微砂粒を少量含む。焼成やや良好。黒褐色。内外面にスス
—2		〃	口径 (9.0)		◦頸部下半刷毛目。あとの部分はナデ	◦1～2㎜の砂粒を含む。焼成やや良好。暗褐色
—3		〃	口径(14.6)		◦内外面ともナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。白黄褐色
—4		〃	口径(15.0)		◦口縁部外面ナデ、内面上部横方向の刷毛目、下部横方向の篦磨き。頸部外面刷毛目、内面横方向ナデ	◦微砂粒を含む。焼成やや不良。淡黄褐色、断面灰白色～灰黒色
—5		〃	口径(22.4)	◦口縁端部に斜格子文がめぐる	◦口縁部内面下部刷毛目後ナデ。あとの部分は磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒を含む。焼成やや不良。暗黄褐色
—6		〃	口径(23.9)	〃	◦内外面ともナデ	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成良好。暗褐色、断面暗茶褐色。口縁部内面にスス
—7		〃	口径(20.7)	◦口縁端部に斜格子文をめぐらせる。頸部に貼り付け突帯の痕跡が残る	◦口縁部外面ナデ。頸部外面ナデ。内面磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。灰褐色～赤色を帯びた暗黄褐色
—8		〃	口径(31.0)		◦内外面ともナデ	◦微砂粒を多く含む、土がやや疎い感じ。焼成良好。暗褐色、断面黒褐色。内面にスス
—9		〃	口径(30.4)	◦口縁端部に斜格子文がめぐる	◦磨滅が著しく調整がよくわからないが、内外面ともナデ？	◦1～2㎜の砂粒や微砂粒を多く含む。焼成不良。赤色を帯びた黄褐色、断面淡黄褐色
—10		〃	口径(26.6)		〃◦口縁部内外面ともナデ。頸部外面刷毛目、内面ナデあるいは篦磨きか？	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。赤褐色、内面黒色、断面灰褐色
—11		〃	口径(25.4)	◦口縁端部及び内面に3本単位の櫛描き鋸歯文がめぐり、さらに内面に同一施文具による刺突列点文がめぐる	◦頸部外面刷毛目。あとの部分はナデ	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成やや不良。暗黄褐色、断面灰褐色
—12		〃	口径(27.0)	◦口縁端部に2～3本単位の櫛描き斜格子文がめぐる。口縁上端に刻目を施す。口縁部内面に10本単位の櫛描き刺突文さらに3本単位の櫛描き斜格子文がめぐる	◦口縁部外面上部ナデ、下部縦方向の刷毛目、内面上部ナデ、下部横方向の刷毛目	◦微砂粒を含む。焼成やや不良。灰黒色、断面灰色
—13		〃	口径(23.0)	◦口縁端部に4本単位の櫛描き斜格子文をめぐらせその上に3ケ1組の円形浮文を貼り付ける。口縁下端部に刻目を施す。口縁部下に4本単位の櫛描き波状文をめぐらせその下には刻目を有する貼り付け突帯を5条めぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。頸部外面横方向ナデ、内面横方向の刷毛目後、横方向の篦磨き	◦1～2㎜の砂粒を少量を含む、微砂粒も含む。焼成良好。黒褐色、断面灰褐色～黒褐色
—14		〃	口径(26.8)	◦口縁端部に刻目を施す。口縁部上面に3本単位の櫛描き斜格子文をめぐらせる。頸部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯が1条めぐる	◦口縁部内外面ともナデ。頸部外面刷毛目、内面上部ナデ、下部刷毛目、部分的に後ナデ	◦1㎜の小砂粒含む、微砂粒もかなり多く含む。焼成やや不良、ややもろい。黒褐色断面茶黒色～灰褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—15	遺物包含層下層	弥生壷形土器	口径(43.2)	◦口縁端部に斜格子文がめぐる。頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯を1条めぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。頸部外面上部刷毛目、下部刷毛目後ナデ、内面磨滅が著しく調整不明	◦微砂粒を含む。焼成不良。暗茶褐色、断面灰褐色
—16		〃	口径(34.2)	◦口縁端部は凹線文状にくぼむ	◦口縁部外面上部ナデ、下部縦方向の刷毛目、内面上部ナデ下部刷毛目後ナデ？	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成良好。暗赤褐色、断面黒褐色
—17		〃		◦3本単位の櫛描き斜行文を施し、その下に櫛描き平行沈線文が9条めぐる、さらに下には3本単位の櫛描き斜格子文を施し、それら上記の文様をなぞるように斜格子文が朱によって描いてある	◦外面ナデ。内面上部ナデ、下部刷毛目	◦朱（ベンガラ）塗り。0.5〜0.2㎜くらいの砂粒を多く含む。焼成良好。外面暗い灰、内面うすい黄橙、朱の色ふかい赤
156-18		〃		◦頸部上半に刻目を有する貼り付け突帯を1条めぐらす。胴部上半に刻目を有する貼り付け突帯を3条めぐらせその下に刷毛状施文具による刺突文をめぐらせる	◦頸部外面刷毛目、内面横方向の篦磨き。胴部外面刷毛目、内面ナデ	◦微砂粒含む。焼成やや良好。暗黄褐色〜灰褐色、断面灰褐色
—19		〃	底径（4.9）		◦胴部外面上半の上部縦方向の刷毛目後横方向の篦磨き。それ以下は縦方向の篦磨き、底部近くは後ナデ。胴部内面刷毛目、底部近くは粗いナデ。底部外面ナデ、内面粗いナデ	◦1〜2㎜の砂粒を含む微砂粒を多く含む。焼成やや不良。黒褐色、断面暗黄褐色
—20		〃	底径（5.8）	◦胴部に4本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらせる	◦胴部外面、上半刷毛目下半縦方向の篦磨き、底部近くはナデ、指頭圧痕が残る、内面上半刷毛目、部分的にナデ、指頭圧痕が残る、下半篦磨き。底部外面刷毛目？内面篦磨き	◦細かい砂粒を多く含む植物質の物質を含む。焼成ややもろい。黒色を帯びた黄褐色
157-1		〃		◦胴部に断面三角形の突帯が1条めぐる	◦胴部外面横方向の篦磨き。胴部上半内面上部横方向のナデ、下部横方向の篦磨き、指頭圧痕が残る。胴部下半ナデ	◦1〜3㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。茶褐色〜暗赤褐色、断面暗赤褐色〜淡黄褐色。外面にスス
—2		弥生甕形土器	口径(17.3) 底径（8.2） 器高(15.3)	◦口縁部下に櫛描きの浅い平行沈線文が3条めぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面、縦方向の篦磨き、内面上半刷毛目、部分的に刷毛目後篦磨き、下半篦磨き部分的に後ナデ、指頭圧痕が残る。底部内外面ともナデ	◦2〜6㎜くらいの砂粒をかなり含む。焼成良好。外面は暗褐色〜黒褐色、内面黄褐色〜黒褐色。外面全体にスス状のものが付着
—3		〃	口径(26.2)	◦胴部に刺突文がめぐる	◦口縁部外面ナデ、内面ナデ。胴部外面ていねいなナデ、内面横方向の篦磨き	◦1〜3㎜の砂粒を含む。焼成やや良好。暗褐色〜暗黄褐色。外面全体にスス状
—4		〃	口径(18.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目？、内面横方向の篦磨き	◦微砂粒を含む、1㎜の砂粒含む。焼成良好。外面暗褐色、内面黒色、断面灰黒色。外面にスス
—5		〃	口径(18.1)		◦口縁部外面ナデ。胴部外面刷毛目後横方向の篦磨き。口縁部に内外面とも指頭圧痕が残る	◦1〜2㎜の砂粒を含む。焼成良好。暗褐色〜暗黄褐色。外面にスス
—6		〃	口径(23.6)		◦口縁部外面ナデ、内面横方向のナデ。胴部外面縦方向のナデ、内面縦方向のナデ後横方向の篦磨き	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。暗褐色〜暗黄褐色、断面灰褐色。外面はスス
—7		〃	口径(19.0)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半縦方向の篦磨き、内面刷毛目	◦微砂粒を含む。焼成良好。淡赤褐色。外面にスス

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—8	遺物包含層下層	弥生甕形土器	口径(18.8)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ後横方向の篦磨き	◦微砂粒多く含む。焼成良好。外面暗赤褐色、内面茶黒色、断面灰白色。外面にスス
—9		〃	口径(18.5)		◦口縁端部篦磨き？◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ	◦微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色、断面灰黄褐色。外面及び口縁部内面にスス
—10		〃	口径(21.4)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ	◦微砂粒を含む。焼成不良。淡赤褐色、表面黒褐色、断面灰褐色。内外面にスス
—11		〃	口径(28.6)		◦口縁部内外面ともにナデ◦胴部内外面とも刷毛目	◦微砂粒を多く含む、1～3㎜の砂粒も含む。焼成やや不良。茶褐色、断面暗黄褐色。外面にスス
—12		〃	口径(18.4)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面縦方向のナデ？	◦微砂粒を多く含む。焼成やや良好。黒褐色。外面に炭化状物が付着あるいはススか？
157-13		〃	口径(25.0)	◦口縁端部に凹線文が1条めぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦1～2㎜の砂粒や微砂粒を含む。焼成やや良好堅い。暗黄褐色、断面灰黒色
—14		〃	口径(17.3)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半縦方向の篦磨き、内面刷毛目	◦1～2㎜の砂粒を含む微砂粒を多く含む。焼成やや不良。黒褐色。外面にスス
—15		〃	口径(20.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、内面下部刷毛目	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや不良。黒褐色～暗褐色、断面暗黄褐色。内外面ともスス
—16		〃	口径(17.7)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目、内面に指頭圧痕が残る	◦1～2㎜の砂粒を少量含む。焼成やや良好。黒褐色、断面灰褐色
—17		〃	口径(21.6)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ、指頭圧痕が残る	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗褐色。外面及び口縁部内面にスス
158-1 -2		〃 〃	口径(21.5) 〃 (19.5)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ	◦微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色。外面にスス
—3		〃	口径(16.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデか？内面刷毛目後横方向のナデ	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。黒褐色断面暗褐色。外面にやや厚くスス
—4 —5		〃 〃	口径(28.3) 〃 (17.8)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦1～2㎜の砂粒を少量含む。焼成やや良好。黒褐色
—6		〃	口径(19.2)		◦口縁部外面刷毛目後ナデ◦あとの部分はナデ	◦微砂粒をやや多く含む◦焼成不良。暗灰褐色
—7		〃	口径(16.7)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後ナデ？、内面刷毛目	◦微砂粒を含む。焼成良好。灰黄褐色。外面及び口縁部内面スス
—8		〃	口径(21.4)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目、部分的に篦磨き	◦1～3㎜の砂粒を多く含む。焼成やや不良。暗黄褐色。外面にスス
—9		〃	口径(19.6)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面縦方向のナデ、内面刷毛目	◦1㎜の砂粒を含む。焼成やや良好。淡赤褐色
—10		〃	口径(21.3)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面横方向の篦磨き	◦焼成良好。黒褐色～黒色。外面はスス、断面暗褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—11	遺物包含層下層	弥生甕形土器	口径(19.0)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面ナデ、内面刷毛目	◦1㎜の小砂粒をやや多く含む。焼成良好。茶褐色〜暗黄褐色。外面にスス
—12		〃	口径(18.3)	◦胴部に3本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面縦方向の篦磨き、指頭圧痕が残る、内面刷毛目部分的に横方向の篦磨き	◦微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色。外面にスス状物が付着し、内面にも炭化物が付着している
—13		〃	口径(19.4)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半縦方向の篦磨き、内面刷毛目後ナデか？、部分的に横方向の篦磨き、指頭圧痕が残る	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。黒褐色、断面灰黒色。外面全体にスス
—14		〃	口径(17.0)	◦胴部に刺突文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦微砂粒を含む。焼成やや良好。外面黒褐色、内面黒色、断面暗黄褐色。外面にスス
—15		〃	口径(19.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面下部刷毛目後ナデ	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗褐色。外面に口縁端部を除きスス
—16		〃	口径(18.0)		◦口縁部外面ナデ、内面刷毛目。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後ナデ	◦1㎜の小砂粒を含む。焼成良好。外面灰褐色、内面黒色、断面黒褐色
—17		〃	口径(25.3)	◦胴部に4本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半篦磨き、内面ナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗褐色断面やや白色を帯びた暗褐色
158-18		〃	口径(15.4)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目後縦方向の篦磨き、内面刷毛目	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。黒褐色、断面茶褐色。外面にスス
—19		〃	口径(16.7)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成不良。赤褐色〜黄褐色
—20		〃	口径(17.5)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面縦方向の刷毛目、内面ナデ後横方向の篦磨き	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成良好。黒褐色、断面灰褐色。外面にやや厚くスス付着
159-1		〃	口径(18.1) 底径(5.6) 器高(22.3)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも上半刷毛目下半縦方向の篦磨き。底部外面ナデ、指頭圧痕が残る内面篦磨き	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。黒褐色。内外全面に厚くスス
—2		〃	口径(28.6)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	◦1〜2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや不良。茶褐色、断面灰黒色
—3		〃	口径(14.5)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半刷毛目後篦磨き、内面刷毛目後横方向の篦磨き	◦微砂粒を多く含む。焼成不良。灰褐色、断面淡赤褐色。外面全体にスス
—4		〃	口径(21.0)	◦胴部に3本単位の櫛描き刺突列点文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半刷毛目後ナデか？内面刷毛目	◦微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色、断面暗黄褐色。外面は全体にスス状物付着、内面は炭化物付着
—5		〃	口径(18.4)	◦口縁端部に刻目を施す。胴部に4本単位の櫛描き刺突列点文が上下2回にわたってめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面縦方向の篦磨き内面下部刷毛目	◦微砂粒を多く含む。焼成不良。茶褐色〜灰褐色、断面黒褐色
—6		〃	口径(29.9)	◦胴部に3本単位の櫛描き刺突列点文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、下半縦方向の篦磨き。胴部内面上半刷毛目、下半刷毛目後ナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成不良。暗褐色〜赤褐色、断面灰色。外面にスス状物質付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—7	遺物包含層下層	弥生土器底部	底径(12.7)	◦胴部に3本単位の刺突列点文がめぐる	◦胴部外面上半刷毛目、下半刷毛目後横方向の篦磨き、底部近くは篦磨きの後ナデ、内面刷毛目、底部近くはナデ、指頭圧痕が残る◦底部内外面ともナデ	◦2～5㎜の砂粒を含む、微砂粒も多く含む。焼成良好。白っぽい黄褐色。黒斑あり
—8		弥生甕形土器	底径(26.3)	◦胴部に3本単位の櫛描き刺突列点文をめぐらせる	◦胴部外面上半縦方向のナデ、下半縦方向の篦磨き、指頭圧痕が残る。胴部内面上半刷毛目、下半縦方向の篦磨き。底部内外面ともナデ、内面に指頭圧痕が残る	◦5㎜くらいの砂粒を含み、また1㎜くらいの小砂粒を多く含む。焼成良好。黄褐色、断面は暗灰色。黒斑あり
—9		〃	口径(29.3)		◦口縁部外面ていねいなナデ、内面ナデ、胴部外面刷毛目内面ていねいなナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成良好。暗黄褐色、断面灰黒色
—10		〃	口径(27.8)	◦口縁端部に刷毛状施文具による刻目がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面ナデ	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成良好。暗褐色
—11		〃	口径(25.2)	◦口縁端部に刻目がめぐる	◦磨滅が著しく調整不明	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成不良。赤褐色
—12		〃	口径(11.8)	◦口縁部下に透孔を1ヶ有する	◦口縁部内外面とも横方向のナデ。胴部外面漆が厚く塗られているため調整不明、内面刷毛目後横方向の篦磨き	◦内外面とも漆塗り◦0.5～1㎜位の小微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。胎土にぶい黄橙、漆、暗い赤
—13		弥生土器底部	底径(4.6)		◦胴部外面縦方向の篦磨き◦底部外面ナデ。胴部～底部の内面漆が厚く塗られているため調整不明	◦内外面とも漆塗り◦0.5～1㎜くらいの小・微砂粒を多く含む。焼成良好、堅い。胎土うすい黄橙、漆くらい赤
—14		弥生甕形土器	口径(27.6)	◦口縁端部に刻目を施す。口縁部下に刻目を有する貼り付け突帯を3条めぐらす	◦内外面ともナデ	◦4～5㎜の砂粒含む、微砂粒も多く含む。焼成良好。灰褐色
—15		〃	口径(30.6)	◦口縁端部に刻目がめぐる◦口縁部下に刻目を有する貼り付け突帯が3条めぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目（突帯部分はナデ）内面刷毛目後ナデ	◦1㎜の小砂粒含む。焼成良好。淡黄褐色～暗褐色
160-1		〃	口径(19.7)底径(7.4)	◦口縁端部に刷毛状施文具による刻目がめぐる。胴部に3本単位の櫛描き刺突列点がめぐり、その下に更に刺突文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面上半刷毛目、部分的に横方向のナデ、下半横方向の篦磨き～縦方向の篦磨き、内面刷毛目、指頭圧痕が残る。底部外面ナデ、指頭圧痕が残る、内面横方向の刷毛目	◦微砂粒を多く含み、底部に近くなるにつれ砂粒が1～2㎜のものへと大きくなる。焼成良好。外面黒褐色、内面暗灰褐色、断面灰黒色～暗黄褐色
—2		〃	口径(16.2)	◦口縁下に沈線文が1条めぐる。胴部に3本以上の単位の櫛描き刺突列点文をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦1～2㎜の砂粒含む。焼成良好。暗褐色、断面黒褐色
—3		〃	口径(20.6)	◦口縁端部に刻目を施す。胴部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯が1条めぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面刷毛目後部分的にナデ	◦微砂粒を含む。焼成やや良好。暗黄褐色
—4		〃	口径(21.1)	◦胴部に指頭圧痕を有する貼り付け突帯が1条めぐりその下に爪形の刺突文がめぐる	◦口縁部外面、刷毛目後ナデ、内面ナデ、指頭圧痕が残る。胴部内外面とも刷毛目	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成やや不良。黒褐色、断面暗黄褐色
—5		〃	口径(18.1)	◦口縁端部に刻目がめぐる	◦内外面ともナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。外面赤褐色、内面灰黒色
—6		〃	口径(17.9)	◦口縁端部に斜格子文がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦1～3㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗褐色、断面灰黒色
—7		〃	口径(17.6)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。黒褐色
—8		〃	口径(23.5)		◦口縁部外面ナデ、内面横方向の刷毛目。胴部内外面とも刷毛目	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。暗褐色、断面灰色
—9		〃	口径(15.6)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部外面刷毛目、内面下部ナデ	◦1～2㎜の砂粒を多く含む。焼成やや良好。暗褐色

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—10	遺物包含層下層	弥生甕形土器	口径(16.2)	◦胴部に4本単位の櫛描き刺突文を上下に2回にわたってめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。胴部内外面とも刷毛目	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成やや不良。暗黄褐色
—11		〃	口径(20.0)	◦口縁下端に刻目を施す	◦内外面ともナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成良好。淡赤褐色
—12		弥生高坏形土器	口径(25.0) 底径(16.2) 器高(22.9)	◦口縁端部に1条の凹線がめぐる。口縁部に穿孔を2ケ有する	◦円板充填法。口縁部外面ナデ、内面ナデ後篦磨き。坏部外面上部刷毛目、下部縦方向の篦磨き、内面上部刷毛目、下部横方向の篦磨き、底部の内面は後ナデ。脚部外面上部ナデ後縦方向の篦磨き、一部刷毛目、下部ナデ後横方向篦磨き、内面上部絞り痕が残る、下部横方向のナデ～刷毛目。裾端部ナデ	◦微砂粒を含む。焼成良好・堅い、外面は全体に黒色～黒褐色、内面暗黄褐色
—13		〃	口径(22.2)	◦口縁部平坦に2本単位の櫛描き斜格子文をめぐらせその上に4ケ1組の円形浮文を貼り付け、横に透孔を1ケ穿つ。口縁端部に刻目をめぐらせる	◦口縁部内外面ともナデ。坏部外面刷毛目後縦方向の篦磨き、内面上部刷毛目、下部横方向の篦磨き	◦坏部。微砂粒を含む、1～2㎜の砂粒もやや多く含む。焼成良好。黒褐色
—14		〃	口径(21.1)		◦口縁部内外面ともナデ。坏部外面刷毛目後篦磨き、内面横方向の刷毛目後、横方向の篦磨き	◦坏部。1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。外面暗黄褐色～暗褐色、内面黒褐色
—15		〃	口径(17.9)	◦口縁端部に刻目を施す	◦外面上部ナデ、下部篦磨き？。内面ナデ	◦微砂粒を多く含む。焼成やや不良。暗褐色
—16		〃	口径(21.1)		◦外面ナデ。内面刷毛目？指頭圧痕が残る	◦坏部。微砂粒をやや多く含む。焼成不良。灰褐色
—17		〃	口径(17.3)	◦口縁端部に刻目がめぐる	◦口縁部内外面ともナデ。坏部外面刷毛目、内面縦方向の篦磨き	◦坏部。微砂粒を含む。焼成良好。黒褐色。黒斑あり
160-1		〃		〃	◦磨滅が著しく調整不明	◦坏部。1～2㎜微砂粒を多く含む。焼成不良。黄褐色、内面赤褐色
—2		〃	口径(35.0)		◦口縁部内外面ともナデ。坏部外面縦方向の篦磨き、内面刷毛目後横方向の篦磨き	◦坏部。微砂粒を含む。焼成やや良好。黄褐色
161-3		〃	口径(23.5)	◦口縁端部に刻目がめぐる。口縁部近くに穿孔を2ケ有する	◦外面上部ナデ、下部縦方向の篦磨き、内面刷毛目後横方向の篦磨き	◦坏部。微砂粒を含む。焼成良好。外面赤褐色、内面暗褐色。黒斑あり？
—4		〃	底径(13.6)	◦脚部に透孔を1ケ有する	◦脚部外面上部縦方向の篦磨き。裾部外面ナデ。脚部～裾部の内面粗いナデ。裾端部ナデ	◦脚部。微砂粒を含む、植物繊維？を含む。焼成良好、堅い。赤褐色
—5		〃		◦脚部上方に3条の凹線がめぐり、その下に指頭圧痕を有する、貼り付け突帯が1条めぐる	◦脚部外面縦方向の篦磨き、内面上部絞り痕が残る下部横方向のナデ	◦脚部。微砂粒をやや多く含む。焼成やや不良。外面暗褐色、内面暗黄褐色
—6		〃		◦脚部上方に沈線文が1条めぐり、その下方に篦描き平行沈線文が2条めぐる	◦外面縦方向の刷毛目後縦方向の篦磨き、部分的に横方向の刷毛目。内面上部絞り痕が残る、下部横方向のナデ～刷毛目	◦脚部。小微砂粒を多く含む。焼成やや良好、ややもろい。外面黒褐色、内面暗褐色
—7		〃	底径(14.9)		◦脚部外面上部縦方向篦磨き、下部ナデ、内面上部絞り痕が残る、下部ナデ、指頭圧痕が残る。裾端部ナデ	◦脚部。1～2㎜の砂粒、微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色
—8		〃	底径(14.5)		◦脚部外面縦方向の篦磨き、内面刷毛目、指頭圧痕が残る。裾端部ナデ	◦脚部。1～2㎜の砂粒を含む、微砂粒も含む。焼成不良。暗赤色、断面黒褐色
—9		弥生甕形土器	口径(12.4)		◦口縁部ナデ。胴部外面刷毛目後ナデ、さらに縦方向の篦磨き内面刷毛目後ナデ	◦1～2㎜の砂粒を含む。焼成不良。黒褐色内面黒色断面暗黄褐色。小型

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—10	遺物包含層下層	弥生壷形土器			◦頸部内外面ともナデ。胴部外面上半篦磨きか？下部横方向の篦磨き、内面上半ナデ、下半縦方向の刷毛目	◦1㎜の小砂粒を多く含む。焼成不良。外面淡赤褐色、内面および断面黒色。小形
—11		〃			◦頸部外面刷毛目、胴部刷毛目後、横方向の篦磨き。頸部～胴部の内面縦方向のナデ、指頭圧痕が残る	◦微砂粒やや多く含む。焼成やや不良。灰黄褐色。黒斑あり。小形
—12		弥生土器底部	底径 (3.9)		◦底部中央に焼成後穿孔する。胴部外面篦磨き？内面篦磨き底部内外面ともナデ	◦1～2㎜の砂粒を含む。焼成良好。灰褐色
—13		弥生鉢形土器	口径(22.2)		◦口縁部内外面ともナデ。胴部縦方向の篦磨き、内面篦削り	◦1～4㎜くらいの砂粒を多数混入。焼成良好。外面暗い灰、内面灰味橙
179-1	Ⅳ A区試掘第9グリッド	須恵器蓋	口径(12.0)		◦つまみ部回転ナデ。天井部外面篦削り後回転ナデ、内面一定方向のナデ。口縁部内外面とも回転ナデ	◦口縁部外面に自然釉が掛。0.2～0.3㎜くらいの微砂粒を多く含み、1㎜くらい小砂粒もわずかに含む。焼成良好。灰味青
—2		〃	口径(12.2)		◦内外面とも回転ナデ	◦0.2～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含み、1㎜くらいの小砂粒もわずかに含む。焼成良好。外面灰色、内面灰味青、断面灰味赤紫
—3		〃			◦天井部外面篦削り後回転ナデ、内面一定方向のナデ。口縁部内外面とも回転ナデ	◦0.2～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含み、1㎜くらいの小砂粒もわずかに含む。焼成良好。外面灰色、内面灰味青、断面灰味青紫
—4	Ⅱ B区第1層	須恵器坏			◦内外面ともナデ	◦0.2～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含む。焼成良好。外面灰色、内面断面灰味青
—5	Ⅳ A区試掘第9グリッド	〃	口径(12.6)		◦口縁部内外面ともナデ。体部、外面磨滅が著しく調整不明、内面一定方向のナデ	◦0.2～0.3㎜くらいの微砂粒を多く含む。焼成良好。外面灰色、内面～断面灰味青
—6	試掘11グリッド	〃	口径(17.4)		◦内外面とも回転ナデ	◦0.2～0.3㎜くらいの微砂粒を多く含む。焼成良好。灰色
—7	Ⅳ A区試掘第9グリッド	〃	口径(10.2)		◦内外面とも回転ナデ	◦0.2～0.3㎜くらいの微砂粒を多く含み、2㎜くらいの砂粒もわずかに含む。焼成良好。内外面灰色、断面灰味青
179-8	〃	須恵器坏			◦篦切り。体部～高台部外面回転ナデ。底部外面回転ナデ、内面一定方向のナデ、指頭圧痕が残る	◦0.3～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含み、2㎜くらいの砂粒もわずかに含む。焼成良好。灰味青
—9	Ⅱ A区第1層	〃	底径 (9.0)		◦回転糸切り。底部外面は磨滅が著しく調整か未調整かは不明。あとの部分は回転ナデ	◦0.2～0.3㎜くらいの微砂粒を多く含み、0.5㎜くらいの砂粒も含む。焼成良好。灰味黄
—10	Ⅱ B区第1層	〃	底径(10.6)		◦切り離し不明。底部内面磨滅が著しく調整不明。あとの部分は回転ナデ	◦0.3～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含み、1～2㎜くらいの砂粒もやや含む。焼成良好。明るい灰
—11	Ⅲ区第1層	〃	口径(13.0)		◦回転糸切り。底部外面未調整。あとの部分は回転ナデ	◦0.2～0.3㎜くらいの微砂粒を多く含み2㎜くらいの砂粒もやや含む。焼成良好、堅緻。外面灰色、内面断面青灰色
—12	採集	〃	口径 (9.8)		◦静止糸切り。体部～高台の内外面回転ナデ。底部外面未調整、内面磨滅していて調整不明	◦0.3～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含む1㎜くらいの小砂粒もわずかに含む。焼成良好。灰味青

布田遺跡

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	文様の特長	手法の特長	備考
—13	ⅡB区第1層	須恵器壺	口径 (9.4)		◦外面回転ナデ◦内面自然釉が掛っているためよくわからないが回転ナデか？	◦自然釉が内面と口縁部外面に掛っている◦0.3㎜～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含み、1㎜くらいの砂粒を含む◦焼成良好◦外面灰味青紫、内面灰味黄、断面灰味赤紫
—14	ⅣA区試掘第9グリッド	須恵器甕	口径(25.4)		◦内外面とも回転ナデ	◦0.3～0.5㎜くらいの微砂粒を多く含む◦焼成良好、堅緻◦内外面暗い灰、断面灰味青紫

Ⅳ 中竹矢遺跡

―松江市竹矢町―

1. 調査の経過 …… 199
2. 遺跡の概要 …… 201
3. 検出遺構と遺物 …… 202
4. 小結 …… 341

挿　図　目　次

第１図　調査区配置図 …… 200
第２図　Ｉ区土層図 …… 202
第３図　ＩＡ区遺構配置図 …… 203
第４図　ＩＢ区遺構配置図 …… 205
第５図　Ｉ区ＳＫ01～07実測図 …… 211
第６図　Ｉ区ＳＫ08～16実測図 …… 212
第７図　Ｉ区ＳＫ17～22実測図 …… 213
第８図　Ｉ区ＳＫ23～30実測図 …… 214
第９図　Ｉ区ＳＫ31～36実測図 …… 215
第10図　Ｉ区ＳＫ37～43実測図 …… 216
第11図　Ｉ区ＳＫ44～51実測図 …… 217
第12図　Ｉ区ＳＫ52～59実測図 …… 218
第13図　Ｉ区ＳＫ60～66実測図 …… 219
第14図　Ｉ区ＳＫ67～72実測図 …… 220
第15図　Ｉ区ＳＫ73～78実測図 …… 221
第16図　Ｉ区ＳＫ79～83実測図 …… 222
第17図　Ｉ区ＳＫ84～94実測図 …… 223
第18図　Ｉ区ＳＫ95～101実測図 …… 224
第19図　Ｉ区ＳＫ102～109実測図 …… 225
第20図　Ｉ区ＳＫ110～115実測図 …… 226
第21図　Ｉ区ＳＫ116～123実測図 …… 227
第22図　Ｉ区ＳＫ124～133実測図 …… 228
第23図　Ｉ区ＳＫ134～142実測図 …… 229
第24図　Ｉ区ＳＫ143～148実測図 …… 230
第25図　Ｉ区ＳＫ149～157実測図 …… 231
第26図　Ｉ区ＳＫ158～166実測図 …… 232
第27図　Ｉ区ＳＫ167～176実測図 …… 233
第28図　Ｉ区ＳＫ177～184実測図 …… 234
第29図　Ｉ区ＳＫ185～192実測図 …… 235

第30図　Ⅰ区ＳＫ03・06・07出土遺物実測図 …… 249
第31図　Ⅰ区ＳＫ11・16・17・18・21・23・27・28出土遺物実測図 …… 250
第32図　Ⅰ区ＳＫ28・31・34・37出土土器実測図 …… 251
第33図　Ⅰ区ＳＫ38・48・63・65・68・71・74・79・81出土土器実測図 …… 252
第34図　Ⅰ区ＳＫ88・92・97・99・110出土遺物実測図 …… 253
第35図　Ⅰ区ＳＫ112・113・116・118・120・124・125・130・131・132
出土遺物実測図 …… 254
第36図　Ⅰ区ＳＫ127・157出土木製品実測図 …… 255
第37図　Ⅰ区ＳＫ132・136・138・139・141・146・153・155出土土器実測図 …… 256
第38図　Ⅰ区ＳＫ156・159・163・172・179出土遺物実測図 …… 257
第39図　Ⅰ区ＳＫ181・182・188・190出土遺物実測図 …… 258
第40図　Ⅱ区遺構配置図 …… 260
第41図　Ⅱ区ＳＢ01実測図 …… 261
第42図　Ⅱ区出土遺物実測図（１） …… 262
第43図　Ⅱ区出土遺物実測図（２） …… 263
第44図　Ⅱ区出土遺物実測図（３） …… 264
第45図　Ⅲ区地形測量図 …… 266
第46図　Ⅲ区遺構配置図 …… 267
第47図　Ⅲ区ＳＢ02・03実測図 …… 268
第48図　Ⅲ区南側加工段実測図 …… 269
第49図　Ⅲ区ＳＤ04・09実測図 …… 270
第50図　Ⅲ区ＳＤ05実測図 …… 270
第51図　Ⅲ区ＳＤ06実測図 …… 270
第52図　Ⅲ区ＳＤ07・ＳＫ26実測図 …… 271
第53図　Ⅲ区ＳＤ07土器出土状態 …… 272
第54図　Ⅲ区ＳＤ07出土遺物実測図 …… 273
第55図　Ⅲ区ＳＫ01実測図 …… 274
第56図　Ⅲ区ＳＫ02実測図 …… 274
第57図　Ⅲ区ＳＫ03・04実測図 …… 275
第58図　Ⅲ区ＳＫ05実測図 …… 275
第59図　Ⅲ区ＳＫ06実測図 …… 275
第60図　Ⅲ区出土遺物実測図（１） …… 276

第61図　Ⅲ区出土遺物実測図（２）…… 277
第62図　Ⅲ区ＳＫ07～10・12～14・21実測図 …… 279
第63図　Ⅲ区ＳＫ15実測図 …… 282
第64図　Ⅲ区ＳＫ16・20実測図 …… 282
第65図　Ⅲ区ＳＫ17実測図 …… 282
第66図　Ⅲ区ＳＫ18実測図 …… 282
第67図　Ⅲ区ＳＫ22・24実測図 …… 283
第68図　Ⅲ区ＳＫ24実測図 …… 284
第69図　Ⅲ区ＳＫ23実測図 …… 284
第70図　Ⅲ区ＳＫ25実測図 …… 285
第71図　Ⅲ区石組実測図 …… 285
第72図　Ⅲ区Ｊ―10区遺物出土状態 …… 285
第73図　Ⅲ区ＳＫ27・ＳＤ02実測図 …… 286
第74図　Ⅲ区ＳＤ02土器出土状態 …… 289
第75図　Ⅲ区Ｋ11区土器出土状態 …… 289
第76図　Ⅲ区ＳＫ27実測図 …… 287
第77図　Ⅲ区ＳＫ32実測図 …… 290
第78図　Ⅲ区ＳＫ32遺物分布図 …… 291
第79図　Ⅲ区ＦＰ01～04実測図 …… 292
第80図　Ⅲ区Ｐ01実測図 …… 292
第81図　Ⅲ区出土遺物実測図（３）…… 293
第82図　Ⅲ区出土遺物実測図（４）…… 295
第83図　Ⅲ区出土遺物実測図（５）…… 295
第84図　中竹矢２号墳墳丘実測図 …… 296
第85図　中竹矢古墳墳丘実測図 …… 297
第86図　中竹矢２号墳墳丘土層図 …… 289
第87図　Ⅲ区ＳＫ28実測図 …… 299
第88図　Ⅲ区ＳＫ29実測図 …… 299
第89図　Ⅲ区ＳＫ30実測図 …… 299
第90図　中竹矢２号墳墳裾土器出土状態 …… 300
第91図　中竹矢２号墳出土土器実測図（１）…… 301

第 92 図　中竹矢 2 号墳出土土器実測図（2） …… 302
第 93 図　Ⅲ区方台状遺構実測図 …… 303
第 94 図　Ⅲ区方台状遺構土器出土状態 …… 304
第 95 図　Ⅲ区方台状遺構出土遺物実測図（1） …… 305
第 96 図　Ⅲ区方台状遺構出土遺物実測図（2） …… 306
第 97 図　Ⅲ区方台状遺構出土遺物実測図（3） …… 307
第 98 図　中竹矢 1 号穴実測図 …… 310
第 99 図　中竹矢 2 号穴実測図 …… 311
第100図　中竹矢 1 号穴遺物出土状態 …… 313
第101図　中竹矢横穴群出土遺物実測図（1） …… 312
第102図　中竹矢横穴群出土遺物実測図（2） …… 315
第103図　中竹矢横穴群出土遺物実測図（3） …… 316
第104図　中竹矢横穴群出土遺物実測図（4） …… 317
第105図　中竹矢横穴群出土遺物実測図（5） …… 318
第106図　Ⅳ区地形測量図 …… 321
第107図　Ⅳ区遺構配置図 …… 322
第108図　Ⅳ区石組遺構実測図 …… 323
第109図　Ⅳ区ＳＢ04実測図 …… 324
第110図　Ⅳ区出土遺物実測図 …… 325
第111図　Ⅲ区南北土層図 …… 345

1 調査の経過

昭和55年度

7月14日　Ⅰ区に4m×4mのグリッドを設定し、耕作土の除去を開始する。調査対象地区全域に南北線を磁北にとり、これと直交する東西線を座標軸に10m×10mの方眼を組んでグリッドの1単位とした。北西隅に原点を置き東へ向って1・2・3……、南へ向かってA・B・C……とし、グリッド名はそれぞれ北東コーナーの交点をもって呼ぶことにした。

7月15日　瓦、須恵器、土師器などの破片が出土する。瓦は出雲国分寺瓦と同文である。

7月21日　中竹矢、布田、夫敷の各遺跡の正確な範囲を把握するため試掘を行なうことになったのでしばらく調査は中止。

9月2日　調査を再開するが、グリッドの壁面が崩れ、溜水があるので、排水と泥土の除去をせねばならない。

9月16日　灰白色土の面で土壙状、溝状のプランを検出。大きなもので70～80cm×40～50cmの楕円形、小さなもので50～60cm×30～40cmの方形プランである。溝は深さ10cmのV字形をしている。

10月4日　幅3mの溝状プランを検出。土壙の広がりの範囲を示すものか。

10月9日　すでに42の土壙を掘ったが、壁面、底面を確認して完掘できたものは7ケしかない。

10月23日　畿内の弥生後期のものに酷似した壺が出土。

10月27日　山本清先生、現地指導。

11月7日　木製品が2点出土。加工痕がみられ、形は一見櫂のように見える。

11月17日　全体写真撮影のため排水、清掃を始める。

11月20日　全体写真の撮影と残りの平面図の実測を行ない、Ⅰ区の調査を終了する。
土坑の数は192で弥生前期から古墳時代前半まで。

昭和56年度

4月6日　丘陵部（Ⅱ～Ⅳ区）の伐開終了。調査前の写真撮影。

4月8日　平板測量開始。

4月13日　Ⅳ区にトレンチを設定し、表土剝ぎ開始。

4月15日　住居跡状のプラン検出（SB05）。

4月17日　Ⅲ区にグリッド設定。
表土剝ぎ開始。

5月13日　重機によりⅣ区池の泥土除去を行なう。
50cmぐらい取り除くと、植物遺体と伴に瓦片がコンテナ8杯出土。遺構はない。

5月15日　V区水田部を発掘する。包含層や遺構はない。

5月18日　2号墳地形測量。

5月25日　3号墳地形測量。Ⅱ区雑木の除去。

6月1日　Ⅱ区北側最上段部分で柱穴らしきプラン検出。

2号墳表土剝ぎ開始。

6月2日　3号墳表土剝ぎ開始。

6月4日　3号墳から近世陶磁器が出土。近世の墳墓か。方台状遺構と呼ぶことにする。

6月5日　2号墳裾部に山陰第Ⅲ期と思われる須恵器が散在しているのが発見される。

6月23日　方台状遺構の盛土の下から溝のプラン検出（ＳＤ01）。

6月24日　Ⅳ区池の南側の平坦面の調査開始。

7日6日　Ｋ－11で溝状のプラン検出（ＳＤ02）。

7月14日　Ｌ－14で落ち込み確認（ＳＤ07）。須恵器が出土。

7月18日　Ⅳ区で集石された遺構検出。かわらけが多量に出土。

7月20日　2号墳の主体部と思われるＳＫ28の発掘を行なうが深さは5㎝ぐらいしかない。

7月31日　ＳＤ03のプラン検出。

8月5日　ＳＤ04、ＦＰ01、ＳＫ01・02・03・04検出。

8月10日　ＳＫ01から刀子出土。土壙墓か。

8月17日　重機によりⅡ区の表土剝ぎ開始。

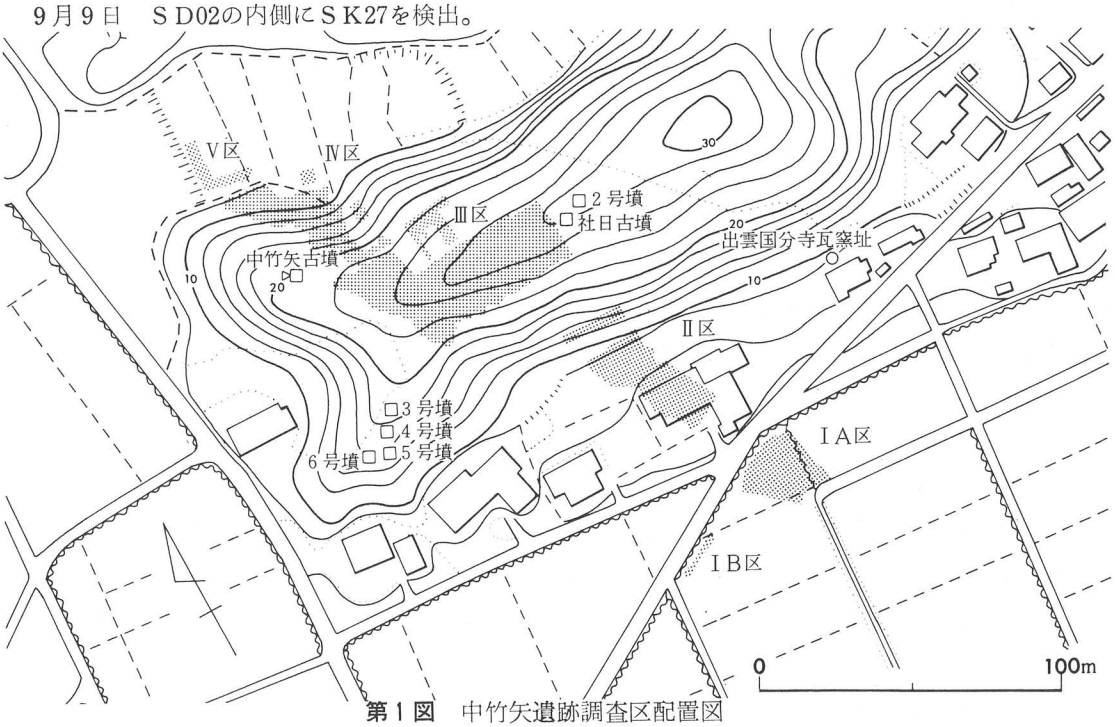
8月24日　Ｋ－13でコの字状の溝を検出。

8月25日　コの字状の溝の内側からＳＫ09・10を検出。方形周溝墓か？

8月26日　ＳＢ03・04のプラン検出。

9月3日　ＳＢ03の柱穴には柱痕がみられるのでＳＢ04が古く、その後の建て変えでＳＢ03が建てられたがそのまま立ち腐れしたものと思われる。

9月9日　ＳＤ02の内側にＳＫ27を検出。



第1図　中竹矢遺跡調査区配置図

9月10日　SK27から礫床検出。白玉2ケ出土。

9月17日　SK32の発掘。多量の木炭と人骨が出土。火葬墓と思われる。

9月21日　2号墳の南側斜面で南北にのびる溝状のものを検出（1号穴）。

9月29日　II区で多数の柱穴様ピットを検出。III区のものに比べ径は小さい。

10月2日　1号穴から馬具、鉄鏃、ガラス小玉、刀などが出土。

10月3日　1号穴の東側で2号穴確認。相次ぐ貴重な遺構の出現に、調査員一同非常な焦燥感を抱く。

10月15日　III、IV区調査終了。

11月10日　II区調査終了。

11月11日　機材撤収。

2　遺跡の概要

遺跡は意宇平野の東北部、松江市竹矢町中竹矢字水操・畑廻・寺屋敷・大日前・中竹矢後及び馬潟町御崎谷にあり、標高3mの水田と27mほどの丘陵及びその斜面から成っている。

東側には出雲国分尼寺跡、出雲国分寺瓦窯跡が隣接し、西側には谷をはさんで出雲国分寺跡がある。丘陵の上からは前面に意宇川下流域の美田地帯が展開し、その南東背後には、はるかに大山の霊峰が遠望され、南西の意宇川沿いには出雲国庁跡も見渡される。まさに眺望絶佳であるとともに要衝の地である。また県道沿いの水田には東隣して法華寺前遺跡や宮内遺跡、平浜八幡宮前遺跡などの縄文から弥生時代に至る遺物散布地がある。

調査区は便宜上、県道竹矢—八重垣線の南側水田部をI区とし、県道北側の菅井武夫宅跡地から丘陵斜面の通称八幡水路までをII区、丘陵をIII区、丘陵北側斜面をIV区、その北側の水田部をV区と呼ぶことにした。

検出された主な遺構は堀立柱建物跡4（II・III・IV区）、土壙222（I・III区）、火葬墓1（III区）、古墳1（同）、近世墓1（同）、横穴2（同）、溝14（I・III区）、ピット群（II区）などである。

水田部のI区からは土壙192とこれを囲むと思われる溝1が検出されている。土壙からは弥生土器と土師器、木製品などが出土しており、弥生時代前期から古墳時代前半頃の時期のものと思われる。宅地跡から丘陵裾部に至るII区には約350ケのピット群があり堀立柱建物跡が1棟確認されている。丘陵上のIII区では古墳時代前期のものと思われる土壙や、後期のものと思われる古墳、横穴などのほか14世紀頃の7～8才の小児の火葬墓、方墳状の盛土をもつ近世の遺構が検出されている。土壙にはL字状の溝を伴った礫床を有するものやコの字状の溝に囲まれたものもあった。堀立柱建物跡も2棟検出されているが、1棟の柱穴は柱根の痕跡を残しており、建て変えが行なわれたことが考えられる。概ね奈良時代の終り頃のものと思われる。丘陵北側斜面から裾部の池に至るIV区では堀立柱建物跡のほか性格不明の石組み遺構が見つかっている。また池からは多量の瓦が出土し、出雲国分尼寺跡出土のものと同文の鬼瓦も見つかっている。V区の水田も、池の北側付近では多量の瓦が出土しているが、堀立柱建物跡の北側の水田では何も出土していない。　（宮沢明久）

3　検出遺構と遺物

Ⅰ　区

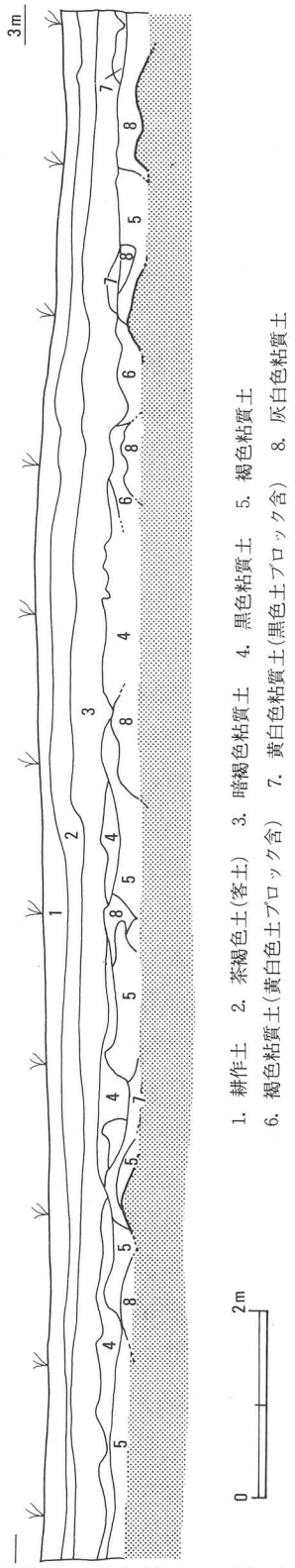
Ⅰ区は県道竹矢―八重垣線の南側水田中に立地している。調査の都合によってⅠ区をさらに2分し、漸定道路工事分をⅠA区、工事用進入道路分をⅠB区と呼び調査を行った。

土層（第2図）は耕作土（約20㎝）、客土（約10～20㎝）を除去すると、暗褐色粘質土が約20～30㎝堆積していた。この層からは、奈良～平安時代の須恵器、瓦などが出土しているが、Ⅱ区または出雲国分尼寺跡から流れてきたものと思われる。以下、黒色粘質土（約10㎝）、灰白色粘質土と続き、さらに下層には青灰色砂礫層が認められた。出土遺構は灰白色粘質土層の上面から掘り込まれていることからこれが地山と思われた。この灰白色粘質土は、南がⅠA区南側の用水路付近、西がⅠB区の溝状遺構まで広がっている。

遺構（第3～29図、図版56～70）

遺構は、ⅠA区から土壙189、ⅠB区から土壙3、溝状遺構1が検出された。土壙は、平面形が方形、円形、だ円形などを呈しているが、不整形なものがほとんどである。その規模は最小で58×53㎝、最大で192×168㎝と大小さまざまである。底面は平坦なものは少なく、多くは凹凸が著しい。テラスを有するものもかなりみられる。壁は垂直に掘り込まれるもの、緩い角度で掘り込まれるもの、袋状に掘り込まれるものといろいろな形態を呈している。このようにⅠ区で検出された土壙は、形態、法量など規格性が認められない。またこれらの土壙からは、土器、木器、木片などが出土しているが完形品は少なくすべて破損している。出土土器は、最も古いもので弥生時代前期後半、最も新しいもので古式土師器の小谷式（SK153出土土器、37―10など）のものなどがある。このことから、Ⅰ区の土壙群は弥生時代前期後半から古墳時代前期まで長年にわたって作られたものと思われる。

ⅠB区のほぼ中央からは溝状遺構が検出されている（第4図）。検出できたものは一部であるが、確認し得た範囲では長さ約3ｍ、北端幅約7.8ｍ、南端幅約5.9ｍ、深さ約0.4ｍであった。この遺構を境にして西側では土壙がみられなくなることから、土壙群との関係は深いと思われる。



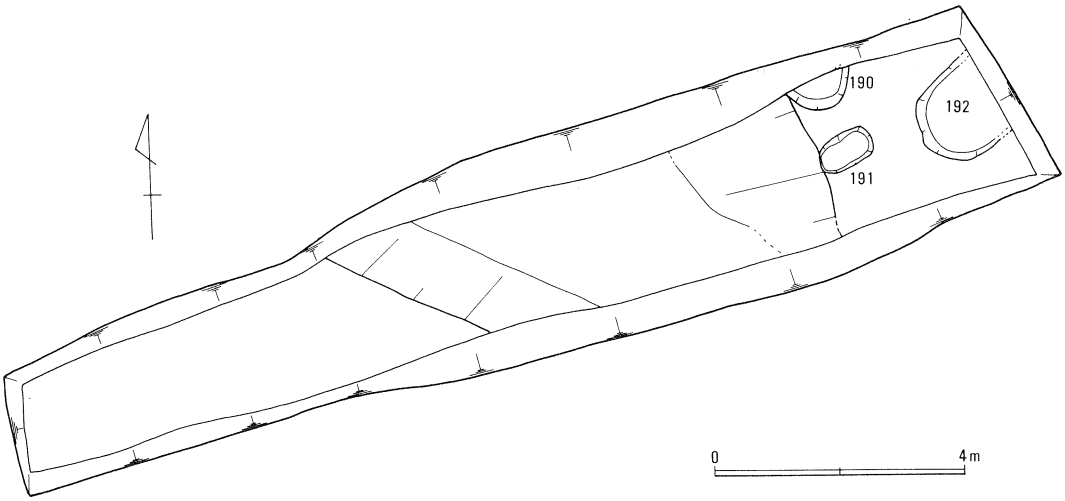
第2図　中竹矢遺跡Ⅰ区土層図

第3図　中竹矢遺跡ＩＡ区遺構配置図

中竹矢遺跡工区出土土壙一覧表

(法量の単位は*cm*)

挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
5	SK01	不整円形?	?	?×76以上	40	弥生土器片		弥生中(?)期
5	SK02	不整だ円形	130× 76	110× 50	42	弥生土器片		弥生
5	SK03	不整長方形	160× ?	150?×74	46	弥生土器	30—8	弥生中期
5	SK04	不整だ円形	138× 66	120× 56	54	弥生土器片		弥生中期
5	SK05	不整方形	130×116	110× 86	42			
5	SK06	不整長方形	192×138	176×110	72	弥生土器、木製鋤	30—1～6 9	弥生中期
5	SK07	不整方形	154× 96	126× 94	54	弥生土器	30—7	弥生前期
6	SK08	?	?	?	43			
6	SK09	不整方形	120?×90	90× 82	41	弥生土器片		弥生中期
6	SK10	不整長方形	138×118	63× 51	45			
6	SK11	不整円形	100× 78	90× 74	56	弥生土器	31—1、2	弥生中期
6	SK12	不整方形	100× 86	98× 64	34			
6	SK13	不整円形	100× ?	62× ?	20			
6	SK14	だ円形	95× 69	82× 56	36			
6	SK15	不整円形	108× 82	92× 54	32	弥生土器片		弥生中(?)期
6	SK16	不整だ円形	156× 52	132× 42	58	弥生土器	31—3	弥生中期
7	SK17	不整だ円形	186×126	172×110	32	弥生土器	31—4	弥生後期
7	SK18	だ円形	180× 82	136× 68	42	弥生土器、土師器	31—5、6	古墳前期
7	SK19	不整円形	101× 71	96× 68	70			



第4図　中竹矢遺跡ＩＢ区遺構配置図

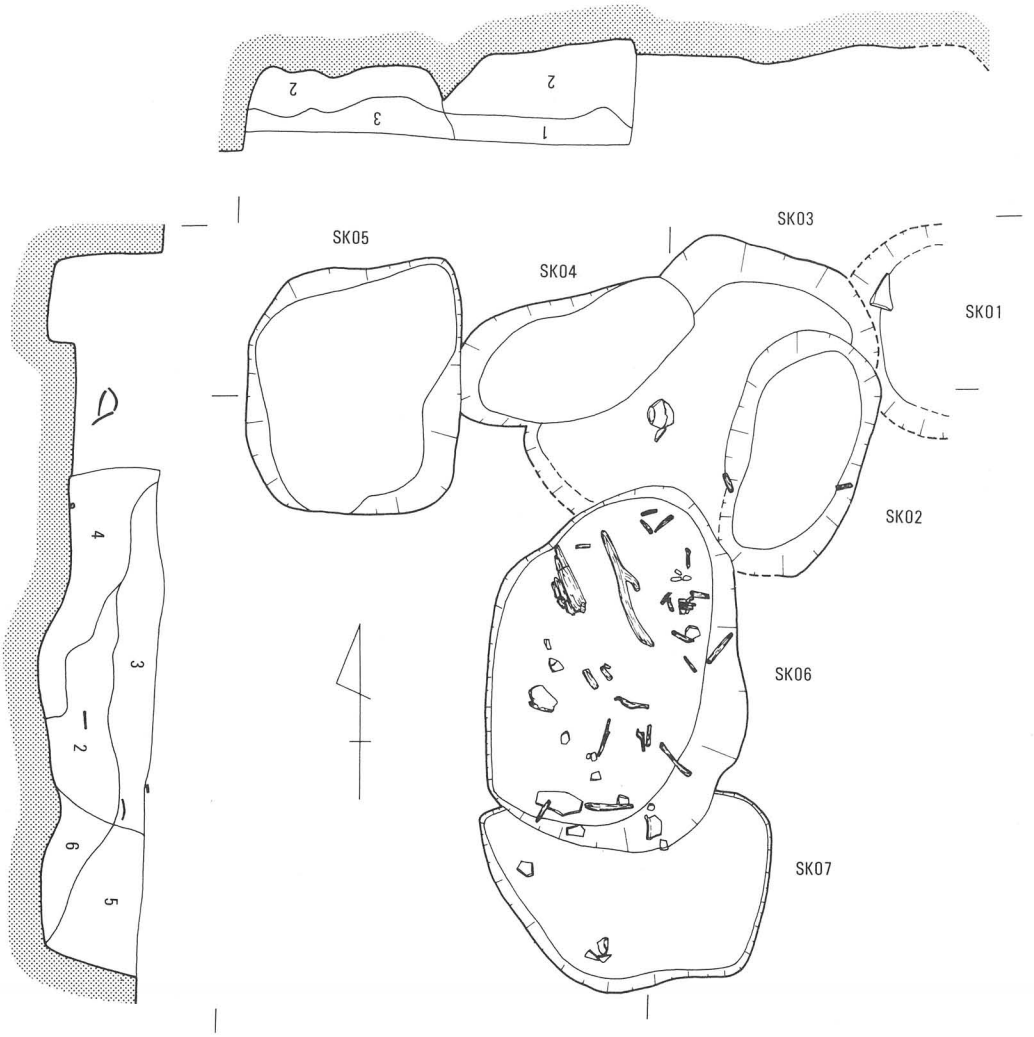
挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
7	SK20	不整円形	140×130	126× 96	38			
7	SK21	不整円形	148×129	107× 80	33	弥生土器、木製鉢	31－7、8	弥生中期
7	SK22	?	?	?	46	弥生土器	35－13	弥生中(?)期
8	SK23	だ円形	82× 58	80× 60	33	弥生土器	31－9	弥生中期
8	SK24	不整方形	148?×105	96× 78	31			
8	SK25	だ円形	89× 61	64× 44	40以上			
8	SK26	だ円形	150× 70	128× 51	68	弥生土器片		弥生中期
8	SK27	長方形	95× 78	90× 76	57	弥生土器	31－10	弥生前期
8	SK28	不整円形	165×155	147×146	41	弥生土器	31－11～13 32－1～3	弥生中期
8	SK29	不整長方形	123× 94	108× 60	50			
8	SK30	不整円形	120× 95	100× 62	66	弥生土器片		弥生中期
9	SK31	長方形	135× ?	132× ?	59	弥生土器	32－4～8	弥生中期
9	SK32	不整だ円形	108× 77	97× 57	59			
9	SK33	長方形?	150?×84	146?×76	40	弥生土器片		弥生中期
9	SK34	不整円形	168×140	104×108	65	土師器	32－12	古墳前期
9	SK35	?	180以上×143	168以上×126	36	弥生土器片		弥生中(?)期
9	SK36	だ円形	96× 56	74× 43	42	弥生土器片		弥生中期
10	SK37	だ円形	113×74?	74× 44	56	土師器	32－9～11	古墳前期
10	SK38	方形	104× 83	91× 70	50	弥生土器	33－1	弥生中(?)期
10	SK39	不整方形	164×138	148×108	31			
10	SK40	不整だ円形	116× 86	112× 83	38	弥生(?)土器片		弥生(?)
10	SK41	不整円形	108×104	84×100	39			
10	SK42	不整長方形	158×112	148×104	52	弥生土器片		弥生中期
10	SK43	不整円形	89× 78	71× 65	24			
11	SK44	不整だ円形	148×106	118× 80	36			
11	SK45	不整だ円形	202×90?	171×70?	36			
11	SK46	不整円形	114×104	100×100	37			
11	SK47	?	?	?	38			
11	SK48	?	?	?	33	土師器	33－2	古墳前期
11	SK49	?	?	?	42			
11	SK50	不整長方形	134× 83	130× 76	52	弥生土器片		弥生中(?)期
11	SK51	だ円形	120?×94	106× 71	38			

挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
12	SK52	円形	58× 53	42× 42	34			
12	SK53	だ円形	140× 50	136× 74	32			
12	SK54	だ円形	132× 50	132× 47	40			
12	SK55	不整円形	70× 52	70× 52	42	弥生土器片		弥生中期
12	SK56	不整長方形	132× 60	132× 44	34	土師器片		古墳前期
12	SK57	不整だ円形	108× 84	106× 80	35			
12	SK58	不整円形	48× 78	46× 76	34			
12	SK59	不整だ円形	128× 51	98× 46	32			
13	SK60	不整だ円形	122× 60	122× 56	32			
13	SK61	不整方形	91× 84	84× 76	31			
13	SK62	不整円形	112× 90	106× 76	46			
13	SK63	不整長方形	124× 88	100× 74	46	弥生土器	33－3	弥生中期
13	SK64	不整円形	124×100	120× 96	38	弥生土器片		弥生中期
13	SK65	不整だ円形	92× 60	69× 58	31	弥生土器	33－4、5	弥生前期
13	SK66	だ円形	123× 75	104× 70	38			
14	SK67	だ円形	112× 61	106× 54	40			
14	SK68	不整だ円形	186×114	170×103	40	弥生土器	33－6～9	弥生中期
14	SK69	不整円形	116× 99	104× 86	38	弥生土器片		弥生中期
14	SK70	不整長方形	156×104	139× 92	38	弥生土器片		弥生中期
14	SK71	不整円形	86× 82	76× 70	43	弥生土器	33－10	弥生中期
14	SK72	不整方形	78× 87	96× 86	46			
15	SK73	不整長方形	122×102	101× 68	64			
15	SK74	不整長方形	204×114	186×112	34	弥生土器	33－11	弥生中期
15	SK75	不整円形	62× 78	50× 48	36			
15	SK76	不整長方形	116× 94	106× 83	46			
15	SK77	だ円形	164×120	135×112	40	土師器(？)片		古墳前期(？)
15	SK78	だ円形	126×110	98× 67	35			
16	SK79	不整方形	138×111	126×104	44	土師器	33－14	古墳前期
16	SK80	不整方形	126×106	114× 86	26			
16	SK81	不整方形	180？×152	134×112	40	弥生土器	33－12、13	弥生中期
16	SK82	不整円形？	？×158	？×146	29			
16	SK83	不整長方形	163× 98	145×417	43			

挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
17	SK84	不整円形	140×120	142×115	44			弥生中期
17	SK85	不整円形?	120× ?	98× ?	29	弥生土器片		
17	SK86	不整円形	52× 86	74× 48	44	弥生土器片		弥生中(?)期
17	SK87	だ円形	102× 70	94× 61	26			
17	SK88	不整方形	76× 68	68× 48	32	弥生土器、木製杭	34—1、2	弥生前期
17	SK89	不整長方形	141× 62	121× 35	35	土師器片		古墳前期
17	SK90	円形	64× 54	50× 40	25			
17	SK91	長方形	111?×86	101× 66	44			
17	SK92	不整方形	76× 60	65× 62	34	弥生土器	34—3	弥生中期
17	SK93	長方形	85× 69	81× 50	42			
17	SK94	だ円形	76× 61	67× 52	26			
18	SK95	不整長方形	158× 45	122× 66	36			
18	SK96	だ円形	96× 68	90 × 66	40			
18	SK97	だ円形	102× 68	100× 59	49	土師器	34—7	古墳前期
18	SK98	不整だ円形	158×106	129× 78	30			
18	SK99	?	102以上×81	78以上×38	28	土師器	34—4～6	古墳前期
18	SK100	不整だ円形	130×114	118× 97	40	土師器片		古墳前期
18	SK101	不整方形	116× 84	110× 79	38			
19	SK102	不整だ円形	106× ?	90× ?	25			
19	SK103	不整円形	66× 64	70× 64	34			
19	SK104	不整長方形	130× 98	111× 72	34			
19	SK105	だ円形	70以上×60	64以上×52	40			
19	SK106	不整三角形	170×138	152×132	31			
19	SK107	だ円形	79× 60	66× 78	32			
19	SK108	不整円形	64×58以上	42× 52	26			
19	SK109	不整円形	80× 74	80× 64	42			
20	SK110	不整だ円形	128×100	114× 89	32	弥生土器	34—8、9	弥生後期
20	SK111	不整だ円形	112以上×82	104以上×58	40			
20	SK112	だ円形	123× 66	114× 52	38	弥生土器	35—1、2	弥生中期
20	SK113	不整方形	66× 52	55× 46	34	土師器	35—7、8	古墳前期
20	SK114	不整だ円形	122×101	112× 68	20	弥生土器片		古墳前期
20	SK115	不整円形	106×100	67× 76	36			
21	SK116	不整だ円形	126× 88	120× 79	30	弥生土器	35—6	弥生中期
21	SK117	不整だ円形	110以上×98	104以上×84	35			

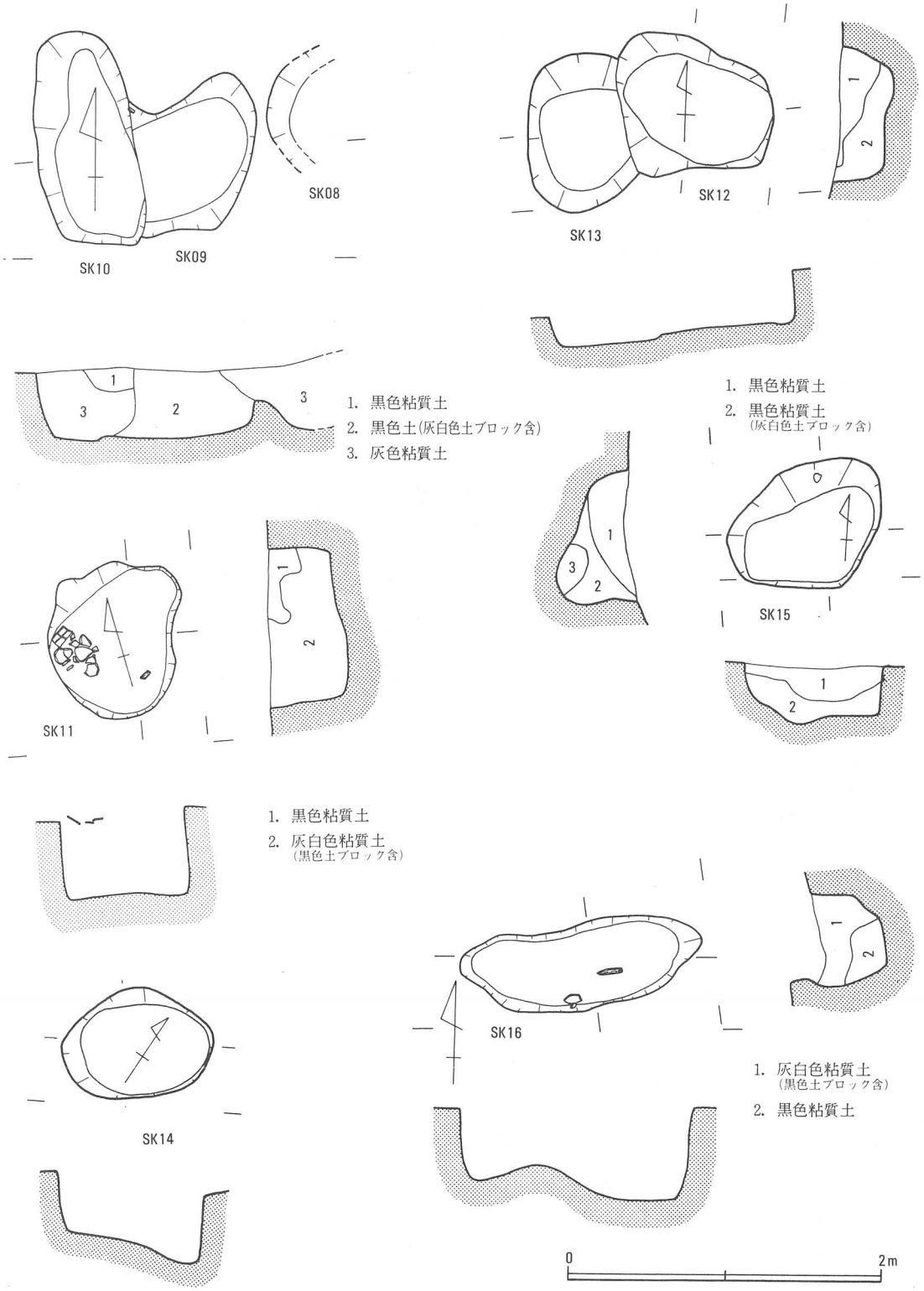
挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
21	SK118	不整円形	130×106	114×100	49	弥生土器	35—3、4	弥生中期？
21	SK119	不整円形	103× 80	56× 50	44			
21	SK120	不整円形	110×108	56× 76	32	土師器	35—5	古墳前期
21	SK121	不整だ円形	128× 88	98× 78	36			
21	SK122	不整だ円形	111× 88	84× 69	24			
21	SK123	だ円形	90以上×99	80以上×71	32			
22	SK124	不整円形	82× 74	82× 62	34	弥生土器	35—9、10	弥生中期
22	SK125	不整方形	134× 78	124× 80	34	弥生土器	35—11、12	弥生中期
22	SK126	不整形	111×102	102× 82	28			
22	SK127	不整方形	128×106	120×112	56	木製杭、櫂状木製品	37—1、2	
22	SK128	だ円形	118× 76	78× 64	27	弥生(？)土器片		弥生(？)
22	SK129	？	？× 84	？× 78	12			
22	SK130	不整だ円形	130× 90	122× 78	53	弥生土器	35—14	弥生中期
22	SK131	不整長方形	192×118	160× 80	42	土師器	35—15、16	古墳前期
22	SK132	だ円形	118× 96	108× 76	76	土師器	36—1、2	古墳前期
22	SK133	不整だ円形	130× 81	124× 74	28			
23	SK134	不整方形	106×106	100× 98	41	弥生土器片		弥生中期
23	SK135	不整方形	112× 88	107× 80	24			
23	SK136	不整方形？	92×62以上	86×62以上	34	弥生土器	36—3	弥生中期
23	SK137	長方形	192×168	74× 73	48			
23	SK138	不整円形	140×134	114× 72	42	土師器	36—4、5	古墳前期
23	SK139	不整だ円形	106以上×127	84以上×90	40	土師器	36—6、7	弥生中期
23	SK140	不整三角形	120×106	96× 80	30	弥生土器片		弥生中(？)期
23	SK141	不整だ円形	183×104	126× 71	56	土師器	36—8	古墳前期
23	SK142	円形	84× 80	78× 66	28			
24	SK143	不整だ円形	108× 34	40× 32	36			
24	SK144	不整だ円形	113× 64	111× 60	34			
24	SK145	不整だ円形	116× 62	112× 52	24			
24	SK146	不整長方形	94× 79	94× 76	36	弥生土器	36—9	弥生中(？)期
24	SK147	不整円形	86× 80	66× 72	40			
24	SK148	不整だ円形	122× 96	114× 74	32			
25	SK149	だ円形	94× 76	89× 64	33			
25	SK150	不整長方形	166×110以上	112×90以上	29	弥生土器片		弥生中(？)期

挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
25	SK151	不整長方形	184×112	142× 70	56	弥生土器片、弓	37—3	弥生
25	SK152	不整だ円形	94× 58	91× 56	24			
25	SK153	不整方形	189×168	128×106	30	土師器	36—10	古墳前期
25	SK154	だ円形？	192×160以上	154×148以上	32			
25	SK155	不整円形	121×100	112×110	46	土師器	36—11	古墳前期
25	SK156	だ円形	112× 94	86× 85	38	弥生土器	38—1、2	弥生中期
25	SK157	だ円形	92以上×104	72以上×88	36	弥生土器片		弥生中期
26	SK158	円形	106× 97	94× 90	34			
26	SK159	円形	78× 68	52× 54	15	弥生土器	38—3	弥生後期
26	SK160	不整長方形	122×104	86× 94	40	弥生土器片		弥生中(？)期
26	SK161	だ円形	130以上×82	112以上×62	28			
26	SK162	不整円形	84以上×82	42以上×40	18			
26	SK163	不整だ円形	114× 96	116×100	42	弥生土器、木製建築部材	38—4、5 7、8	弥生前期
26	SK164	不整だ円形	120× 78	106× 50	44			
26	SK165	不整だ円形	126以上×114	100以上×84	64	弥生土器片		弥生中期
26	SK166	不整円形	90 × 62	96× 72	38			
27	SK167	不整円形	82×70以上	90×70以上	26			
27	SK168	不整だ円形	125× 86	118× 76	46			
27	SK169	不整だ円形	176×128	168×129	40	土師器(？)片		古墳(？)
27	SK170	不整円形	83× 78	34× 54	34			
27	SK171	？	？× 80	？× 73	22			
27	SK172	不整だ円形	147× 74	144× 70	30	弥生土器	38—6	弥生前(？)期
27	SK173	長方形	86× 70	72× 46	34			
27	SK174	不整円形	128×114	102×102	26			
27	SK175	不整方形	72× 67	58× 58	30			
27	SK176	不整だ円形	118× 78	88× 78	34			
28	SK177	円形	76× 68	44× 44	40	弥生土器片		弥生中期
28	SK178	不整だ円形	110以上×80	90以上×60	34	土師器(？)片		古墳(？)
28	SK179	不整方形	158×148	149×144	44	土師器	38—9、10	古墳前期
28	SK180	だ円形	171×106	128× 82	40	弥生(？)土器片		弥生(？)
28	SK181	不整長方形	100× 58	94× 53	22	土師器	39—1	古墳前期
28	SK182	不整円形	54× 48	50× 45	37	弥生土器	39—2	弥生中期
28	SK183	不整だ円形	108× 86	96× 73	37			
28	SK184	不整方形	136×118	111×106	42	弥生土器片		弥生中期

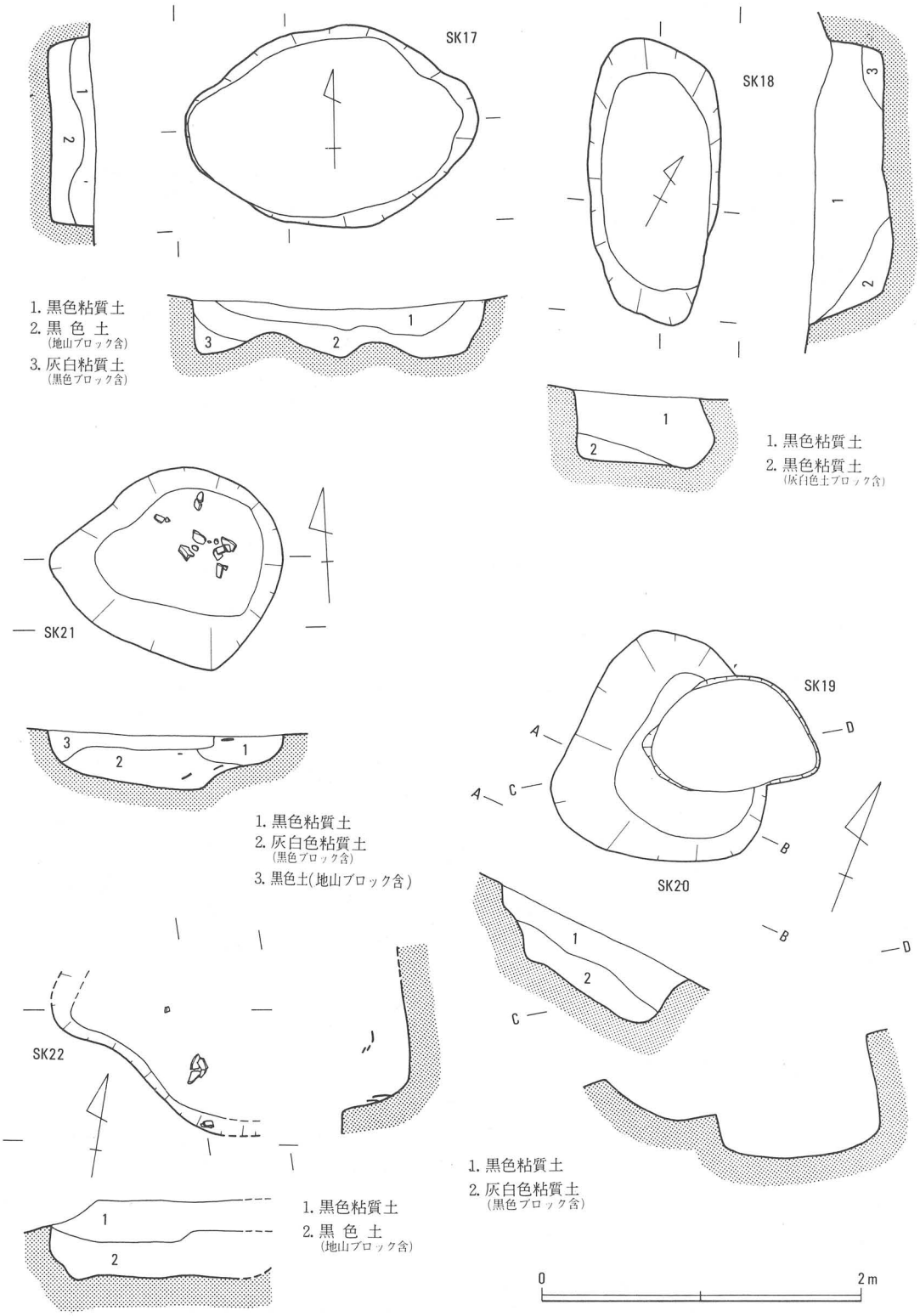


第5図　中竹矢遺跡Ⅰ図ＳＫ01～07実測図（Ｌ＝2.30m）

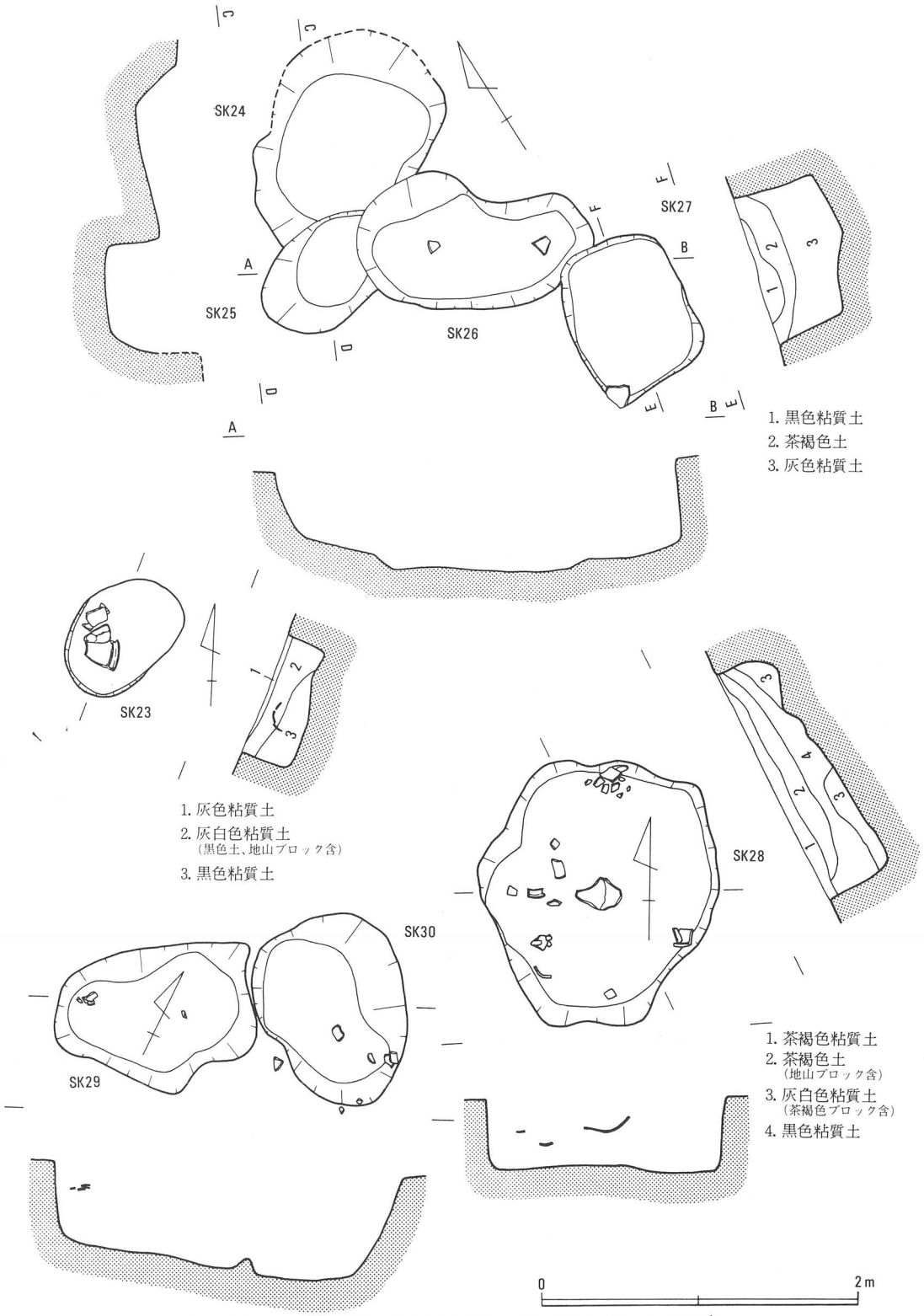
挿図番号	遺構番号	平面形	上面 長軸×短軸	下面 長軸×短軸	深さ	出土遺物	出土遺物挿図番号	時期
29	ＳＫ185	だ円形	98× 82	80× 60	20	弥生土器片		弥生中(？)期
29	ＳＫ186	だ円形	88× 75	66× 63	30	弥生土器片		弥生中(？)期
29	ＳＫ187	だ円形	112× 90	93× 82	36			
29	ＳＫ188	？	86× ？	94× ？	14	弥生土器	39―4	弥生前期
29	ＳＫ189	不整だ円形	74×80以上	74×60以上	26	木製杭		
29	ＳＫ190	だ円形？	？×110	？× 81	22		39―3	
29	ＳＫ191	方形	94× 56	84× 46	30			
29	ＳＫ192	だ円形？	？×129	？×108	16			



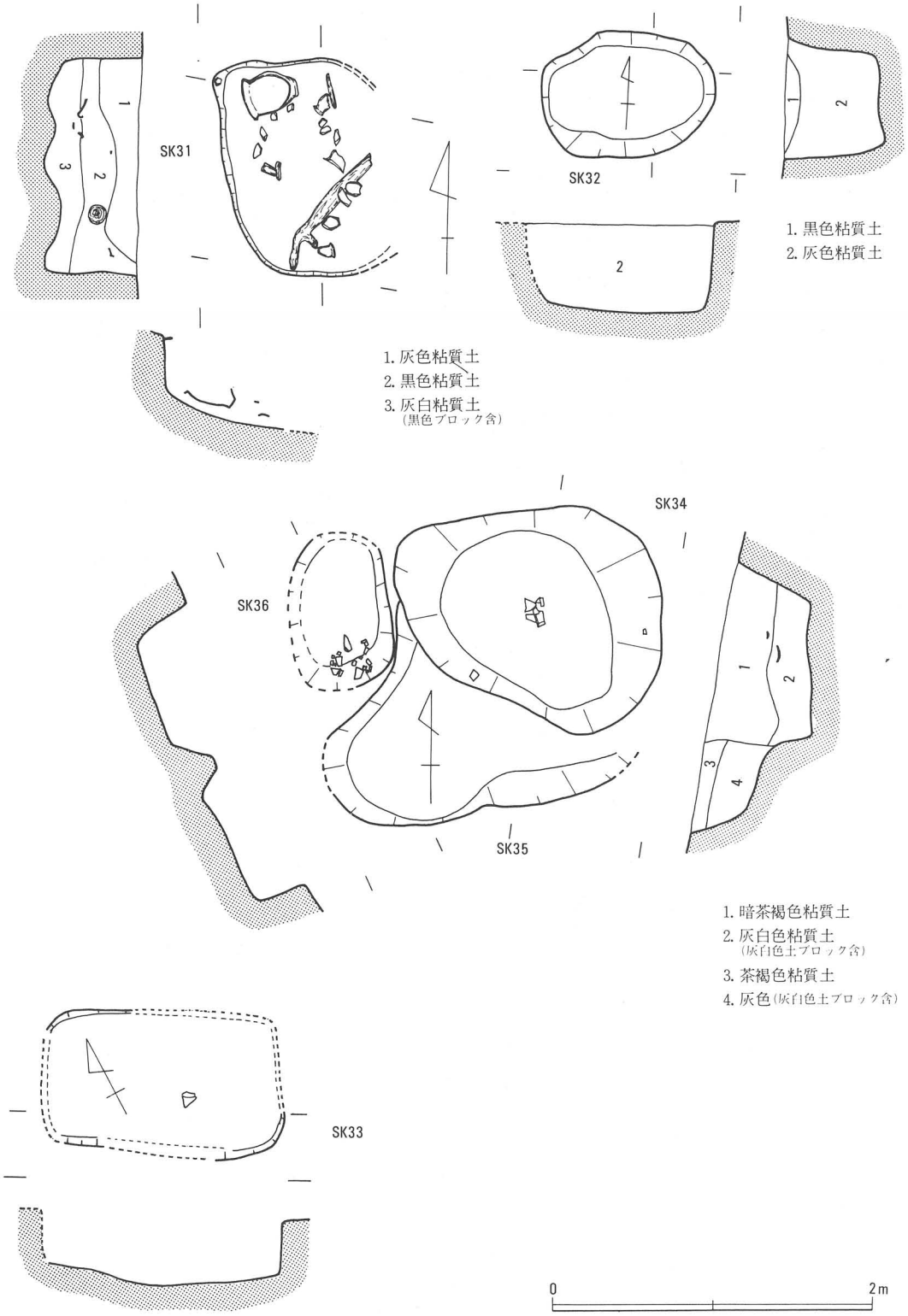
第6図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ08～16実測図（Ｌ＝2.30m）



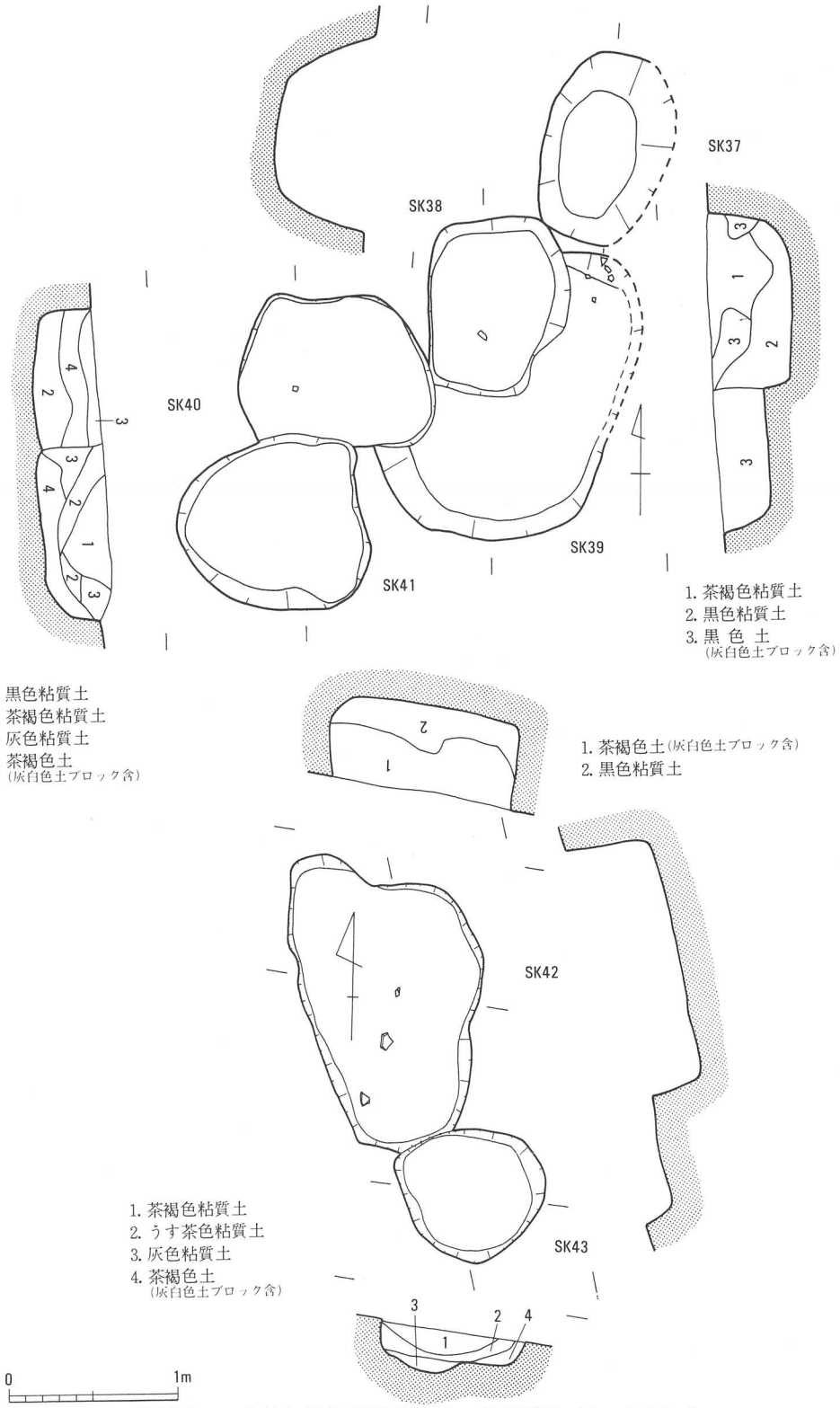
第7図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ17～22実測図（Ｌ＝2.30m）



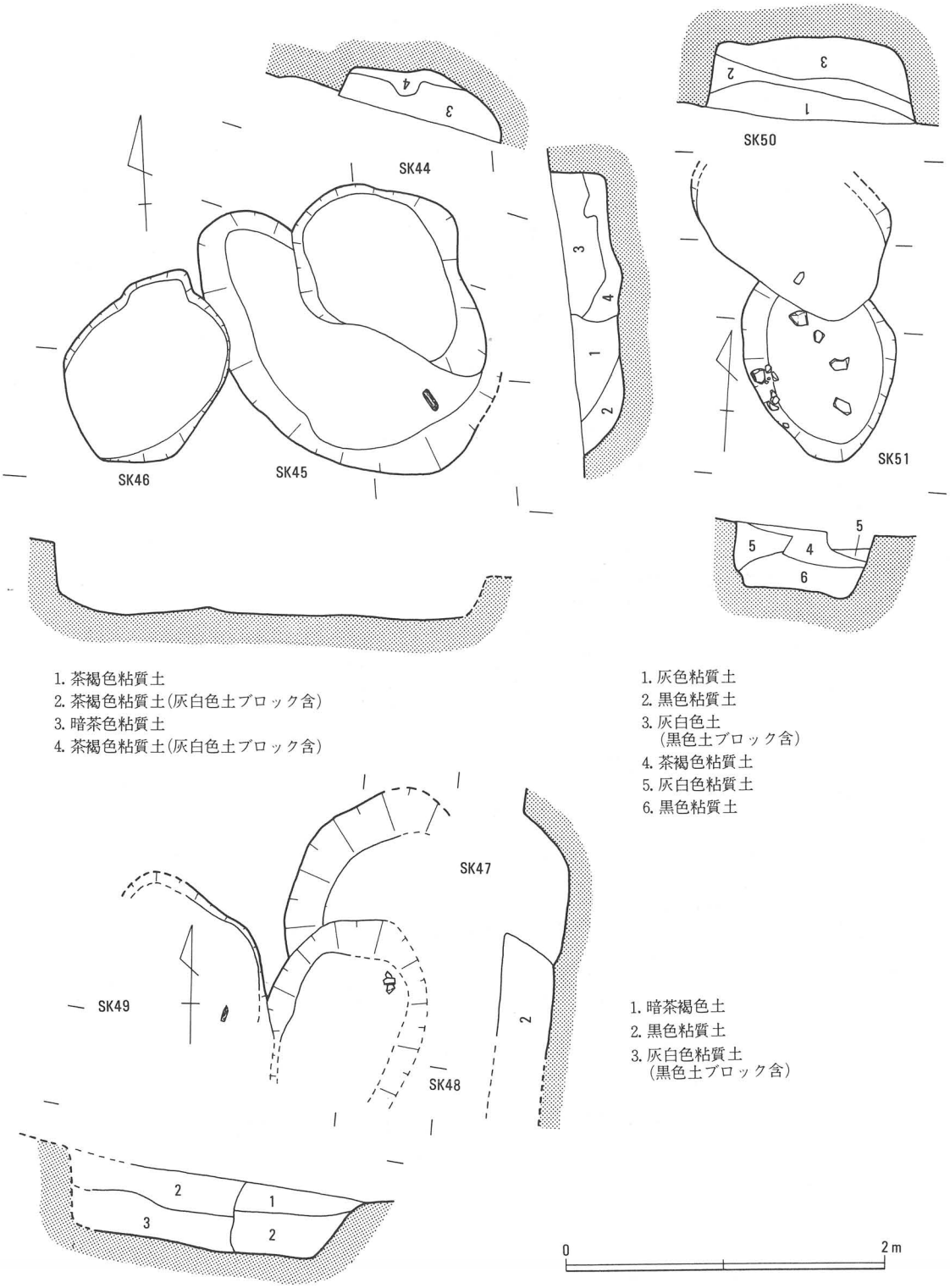
第8図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ23～30実測図（Ｌ＝2.30m）



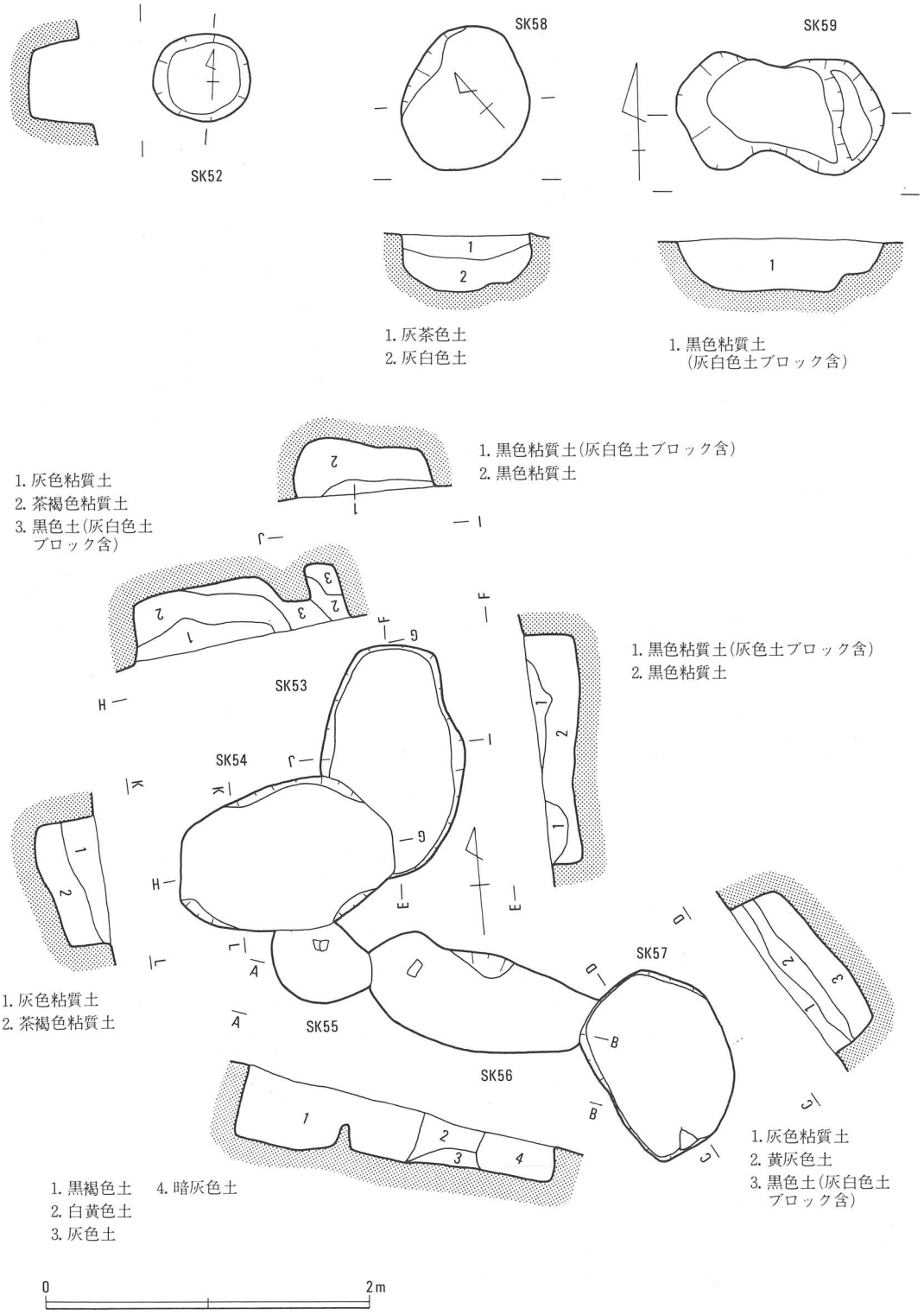
第9図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ31～36実測図（Ｌ＝2.30m）



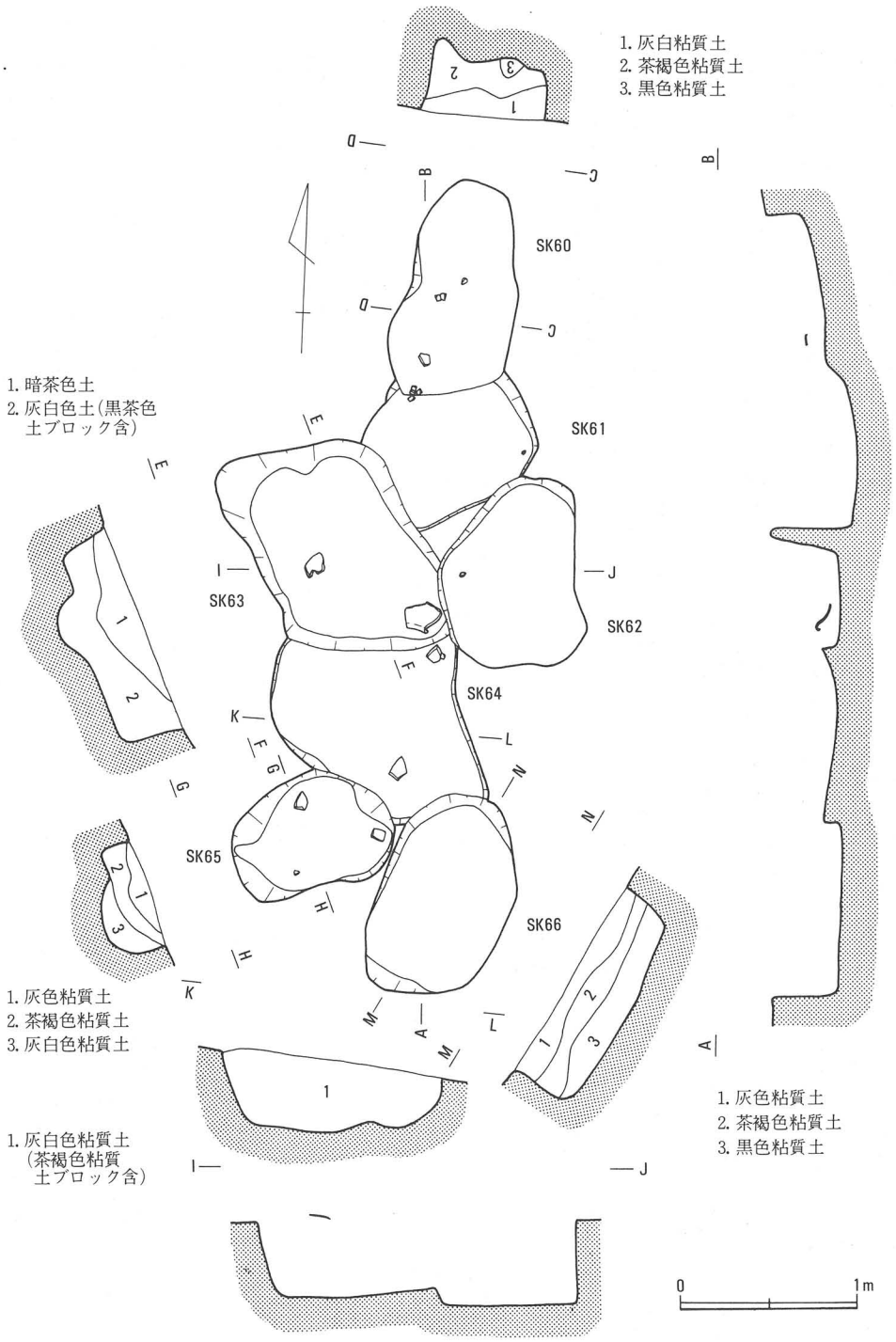
第10図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ37～43実測図（Ｌ＝2.30m）



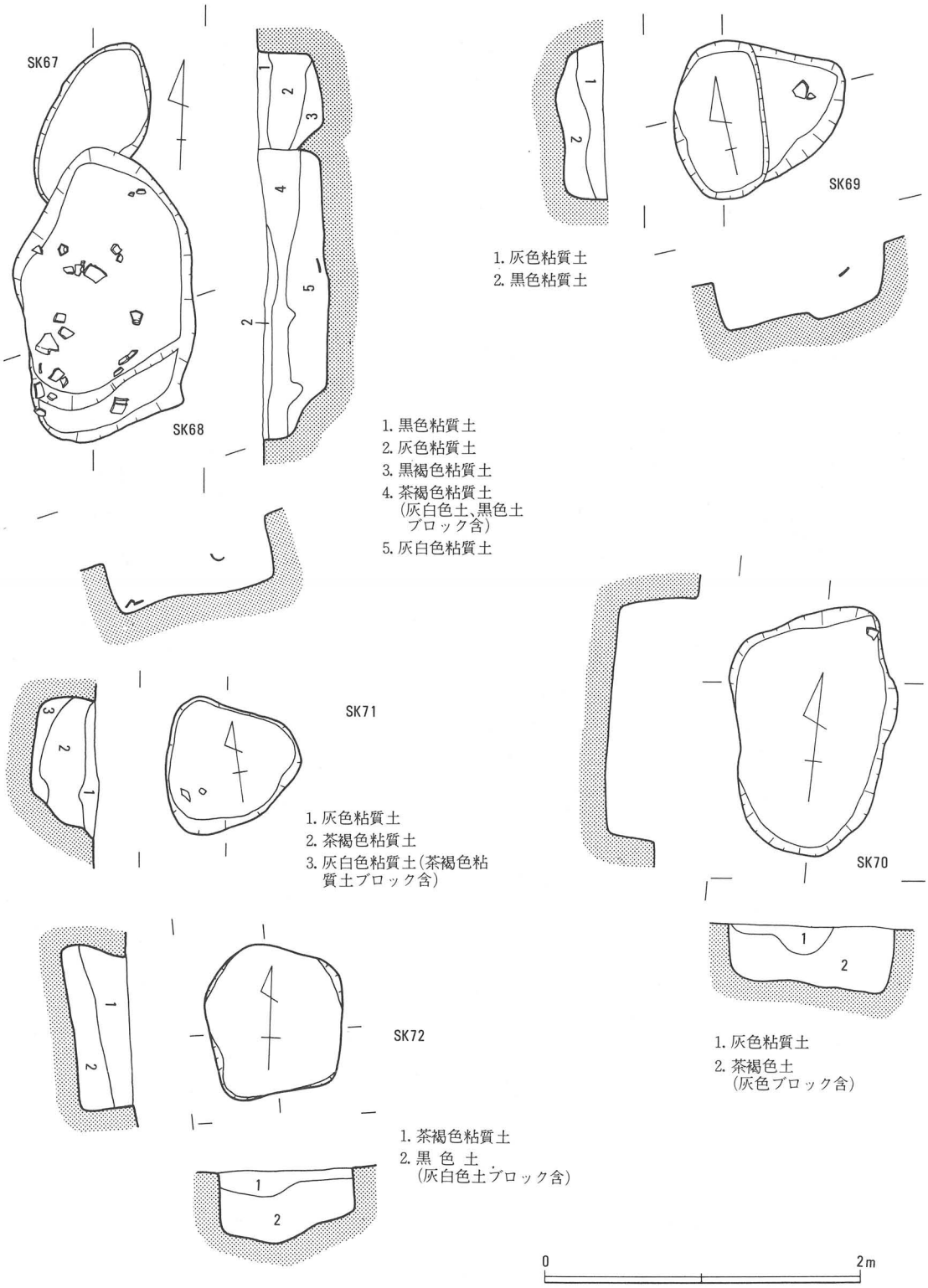
第11図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ44～51実測図（Ｌ＝2.30m）



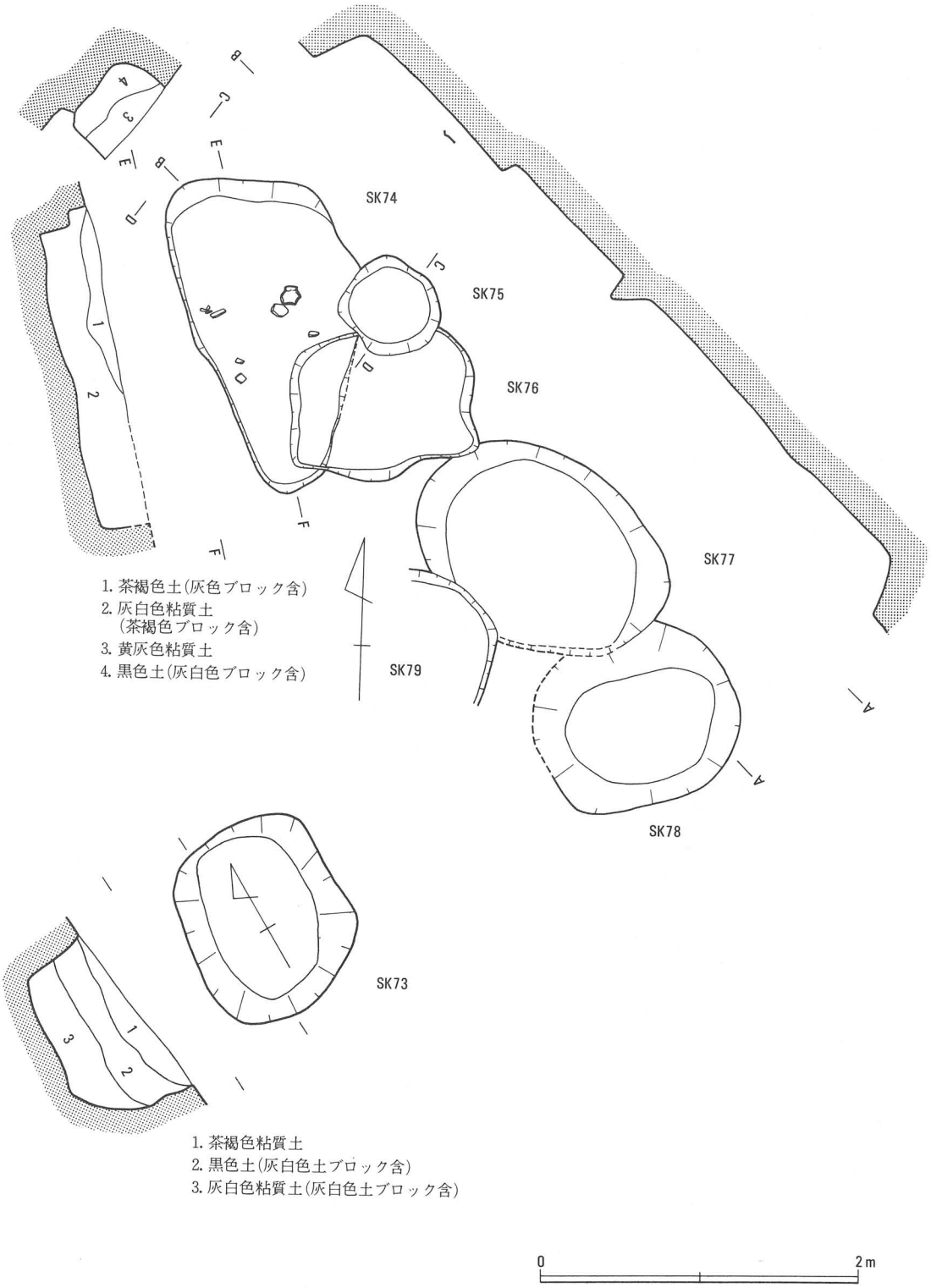
第12図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ52～59実測図（Ｌ＝2.30m）



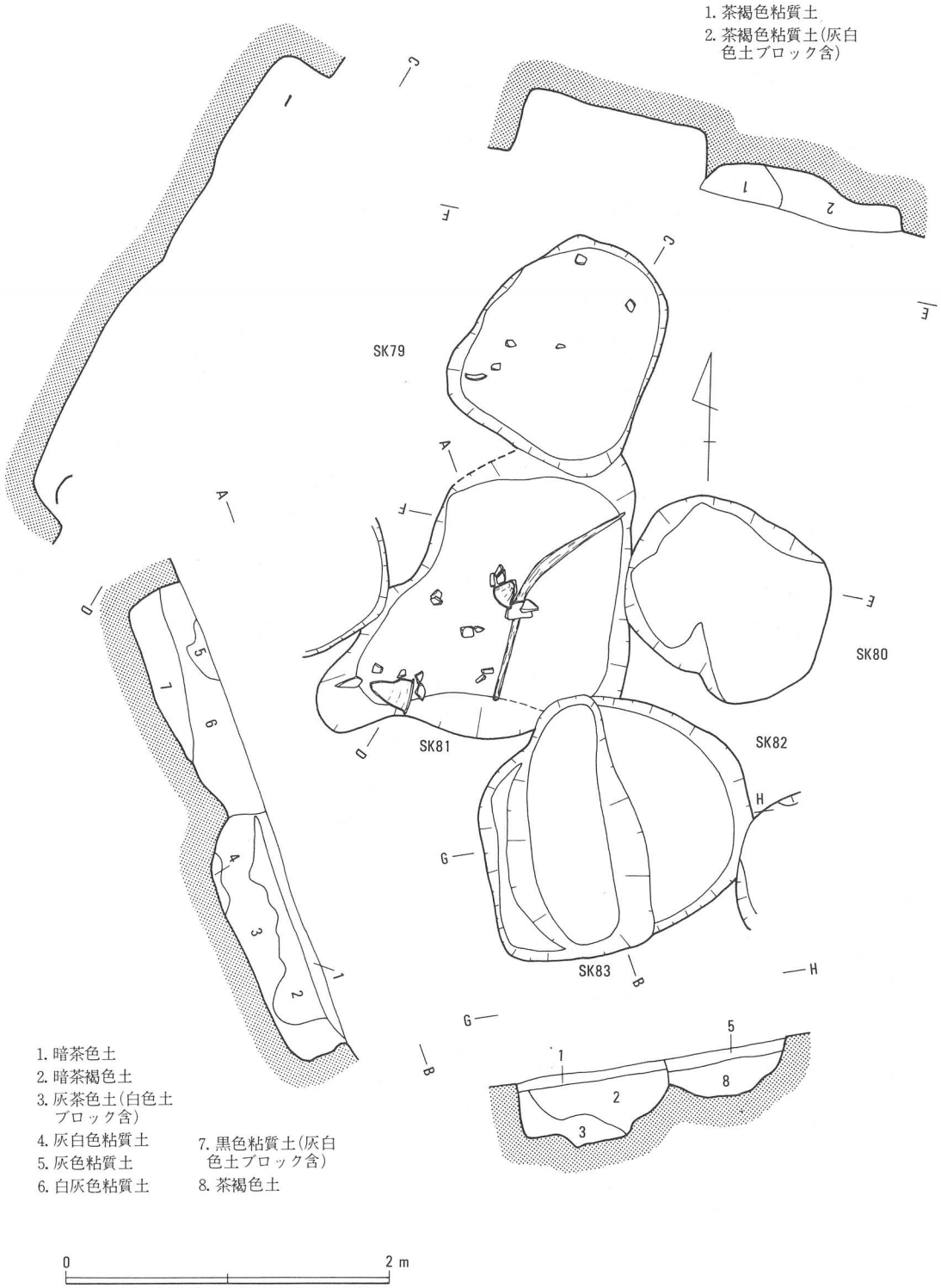
第13図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ60～66実測図（Ｌ＝2.30m）



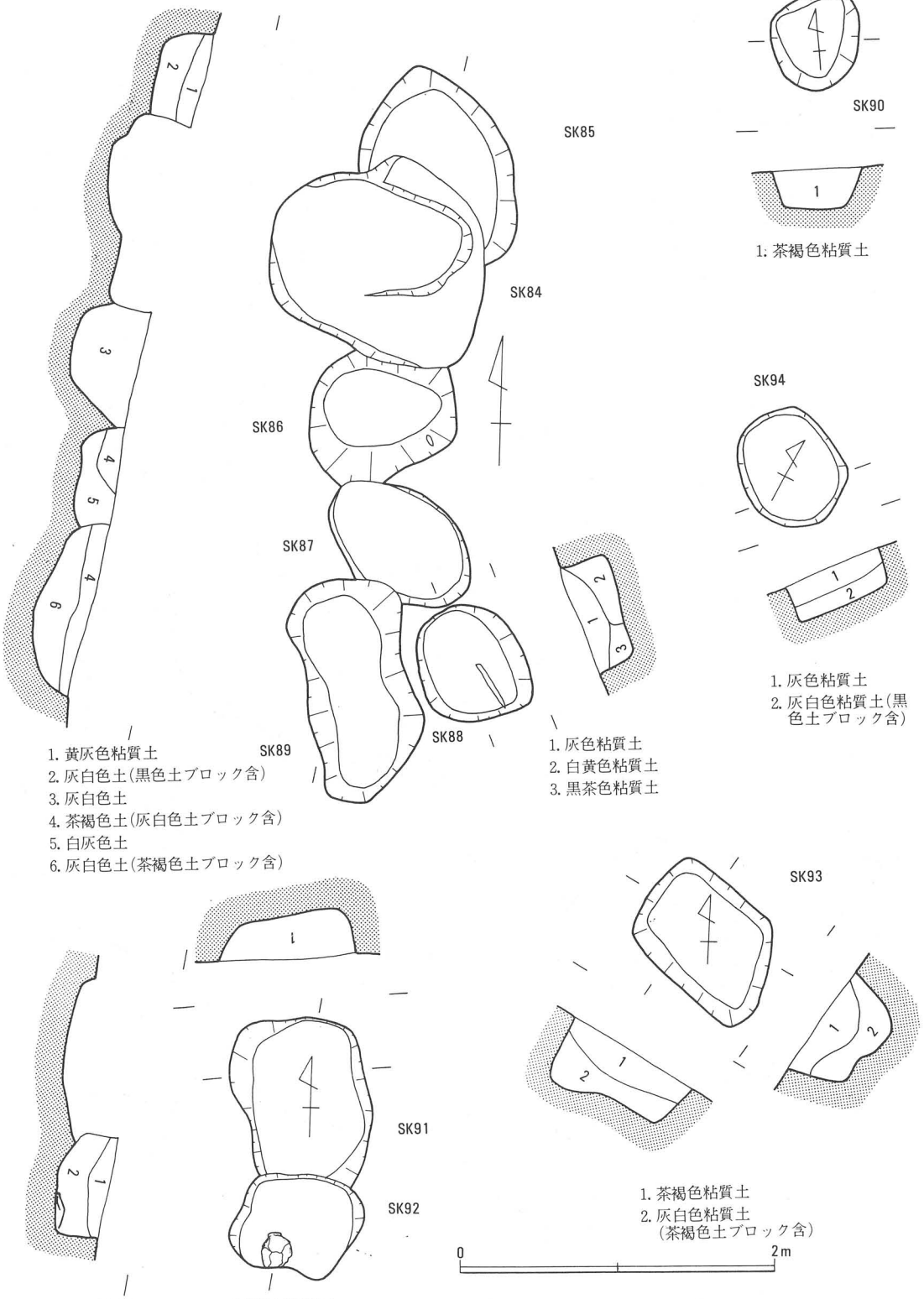
第14図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ67～72実測図（Ｌ＝2.30m）



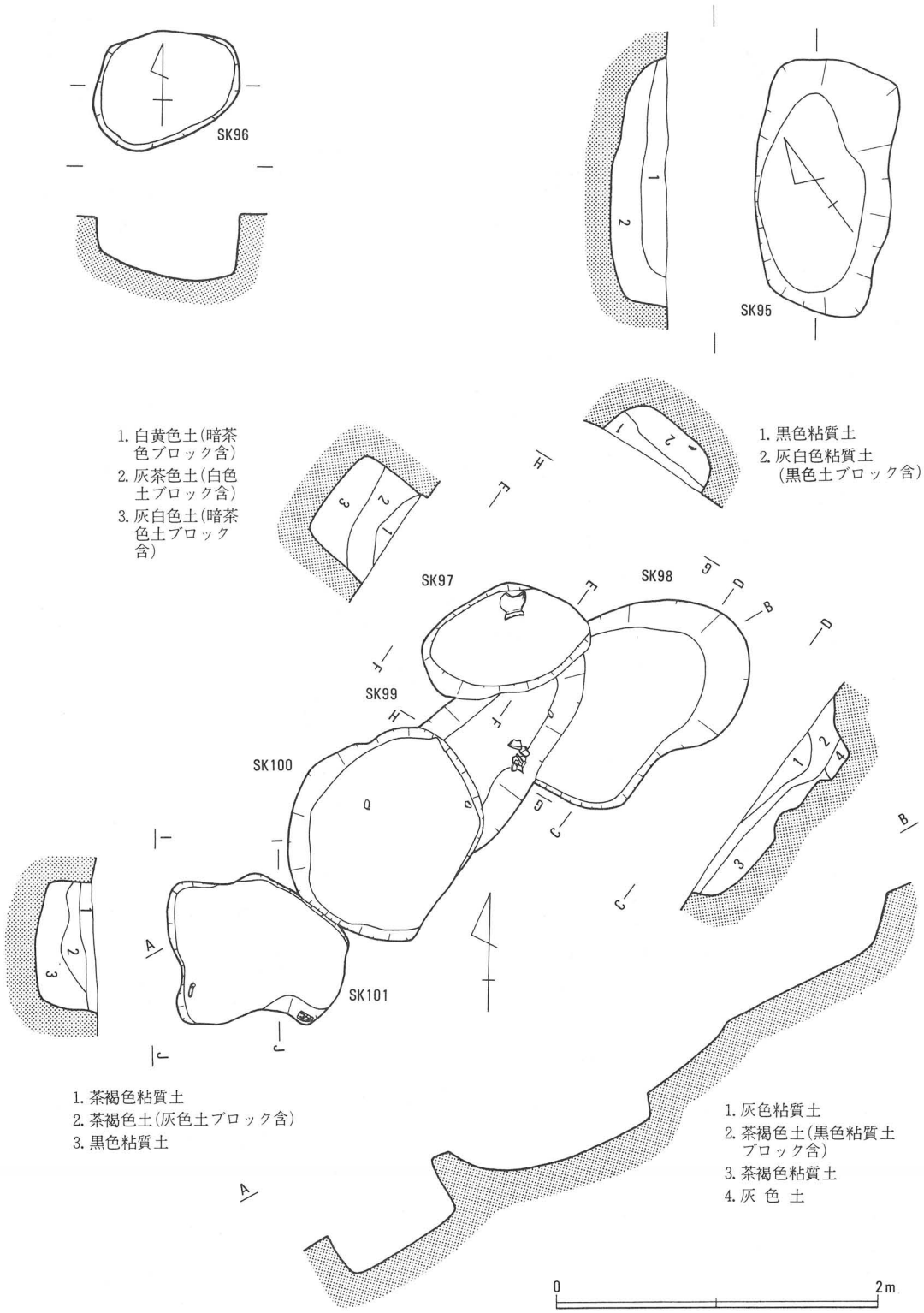
第15図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ73～78実測図（Ｌ＝2.30m）



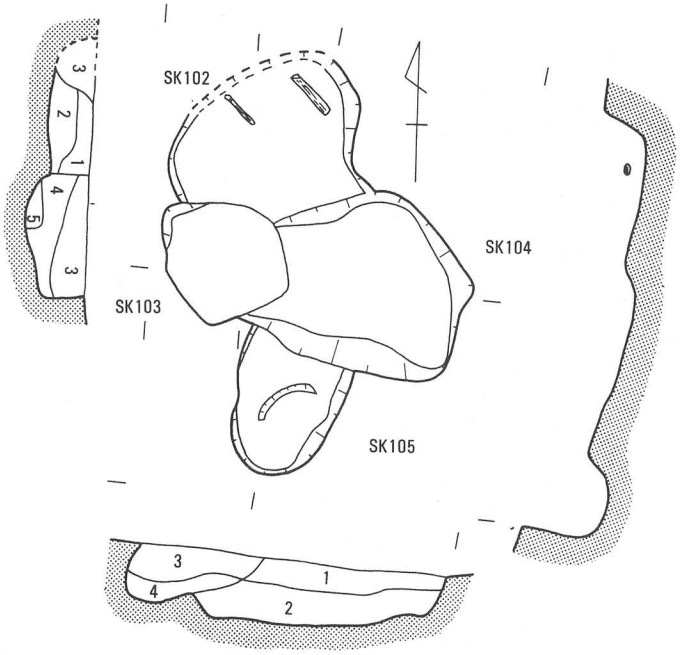
第16図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ79～83実測図（Ｌ＝2.30*m*）



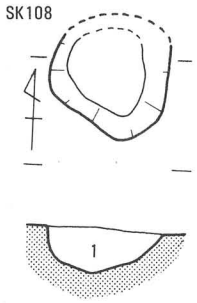
第17図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ84～94実測図（Ｌ＝2.30m）



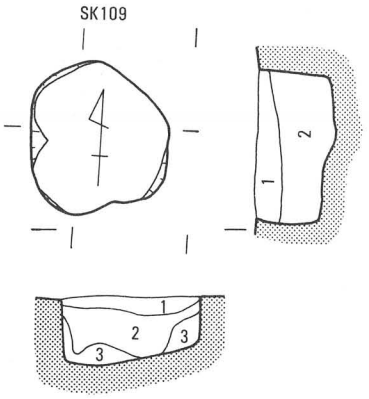
第18図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ95～101実測図（Ｌ＝2.30m）



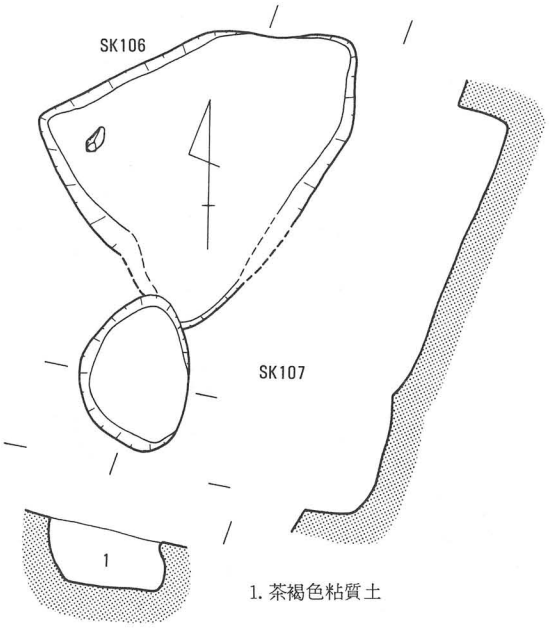
1. 茶褐色粘質土
2. 黒色粘質土(灰白色土ブロック含)
3. 茶色粘質土
4. 灰色粘質土
5. 灰白色粘質土
6. 白灰色粘質土
7. 黒色粘質土



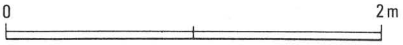
1. 黒色土(灰白色土ブロック含)



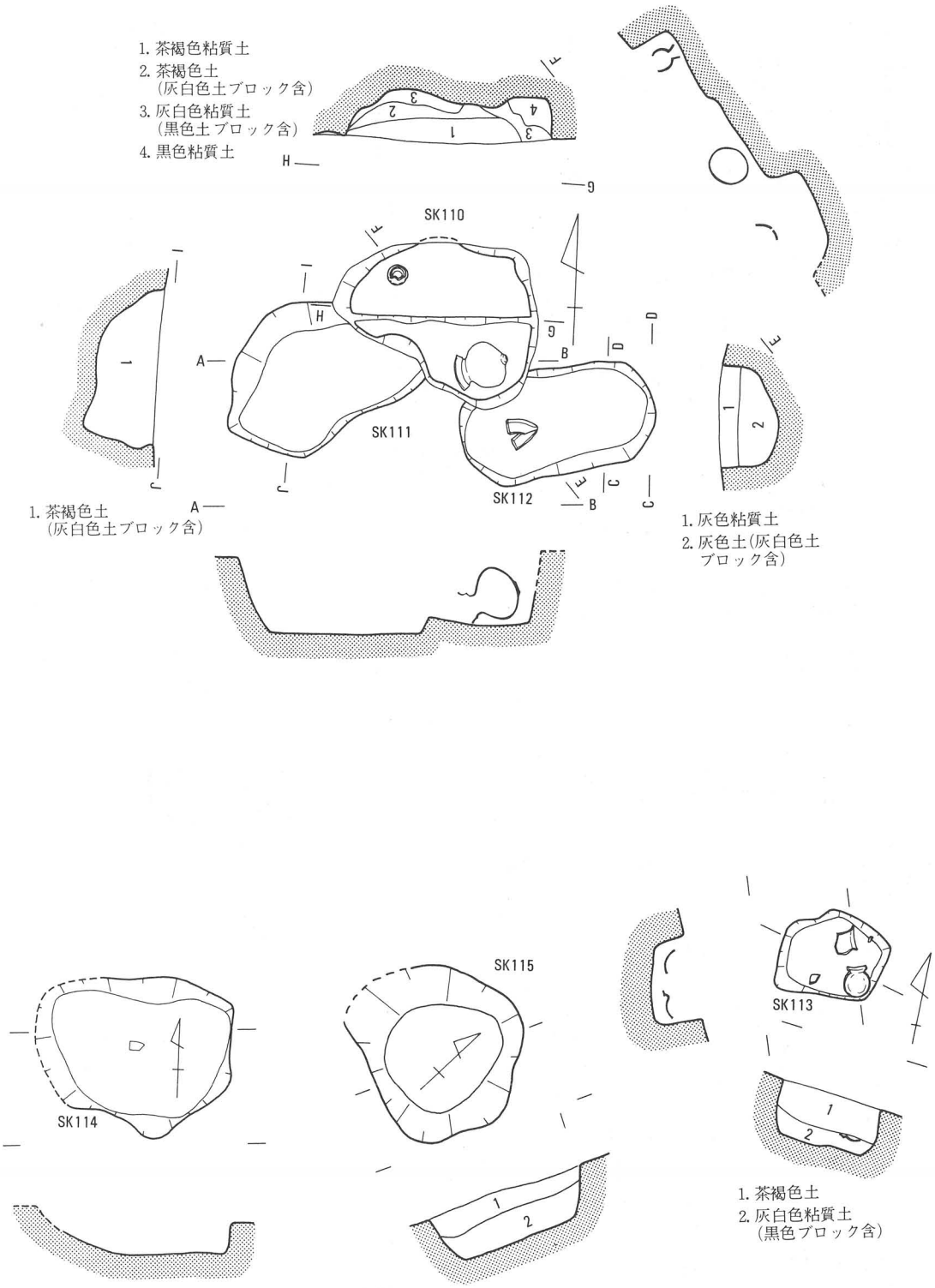
1. 灰色粘質土
2. 明灰色粘質土
3. 灰色粘質土



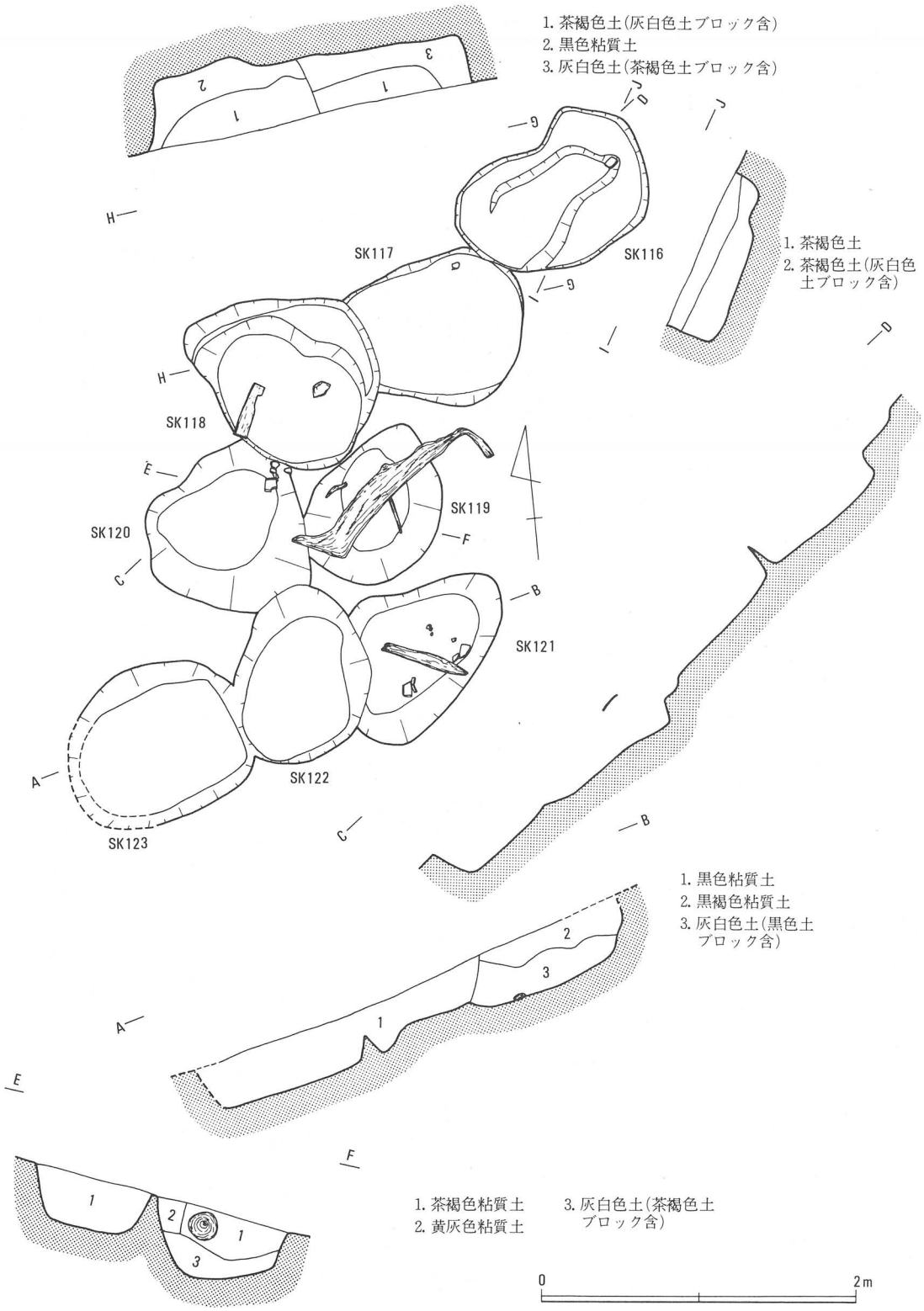
1. 茶褐色粘質土



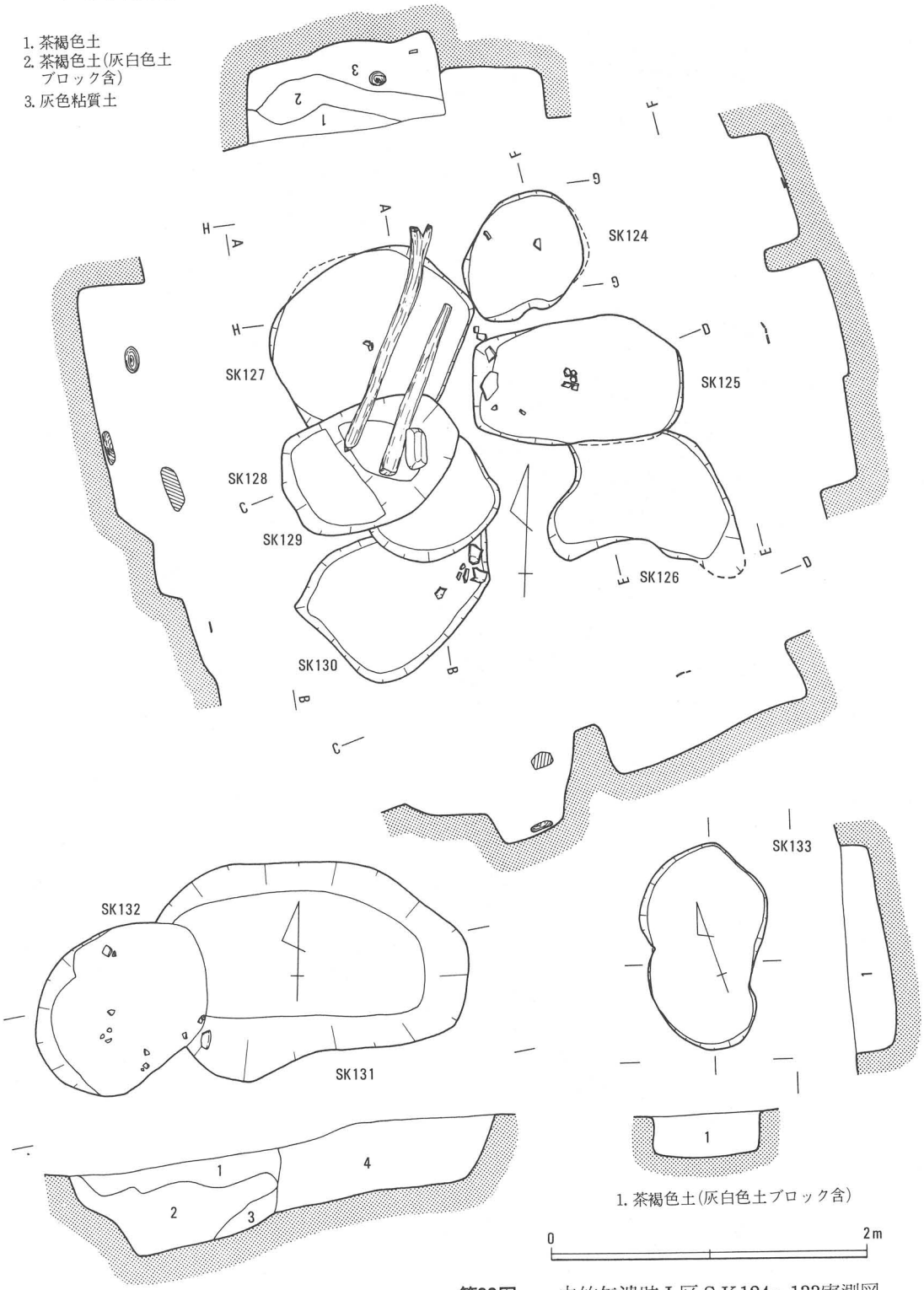
第19図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ102～109実測図（Ｌ＝2.30m）



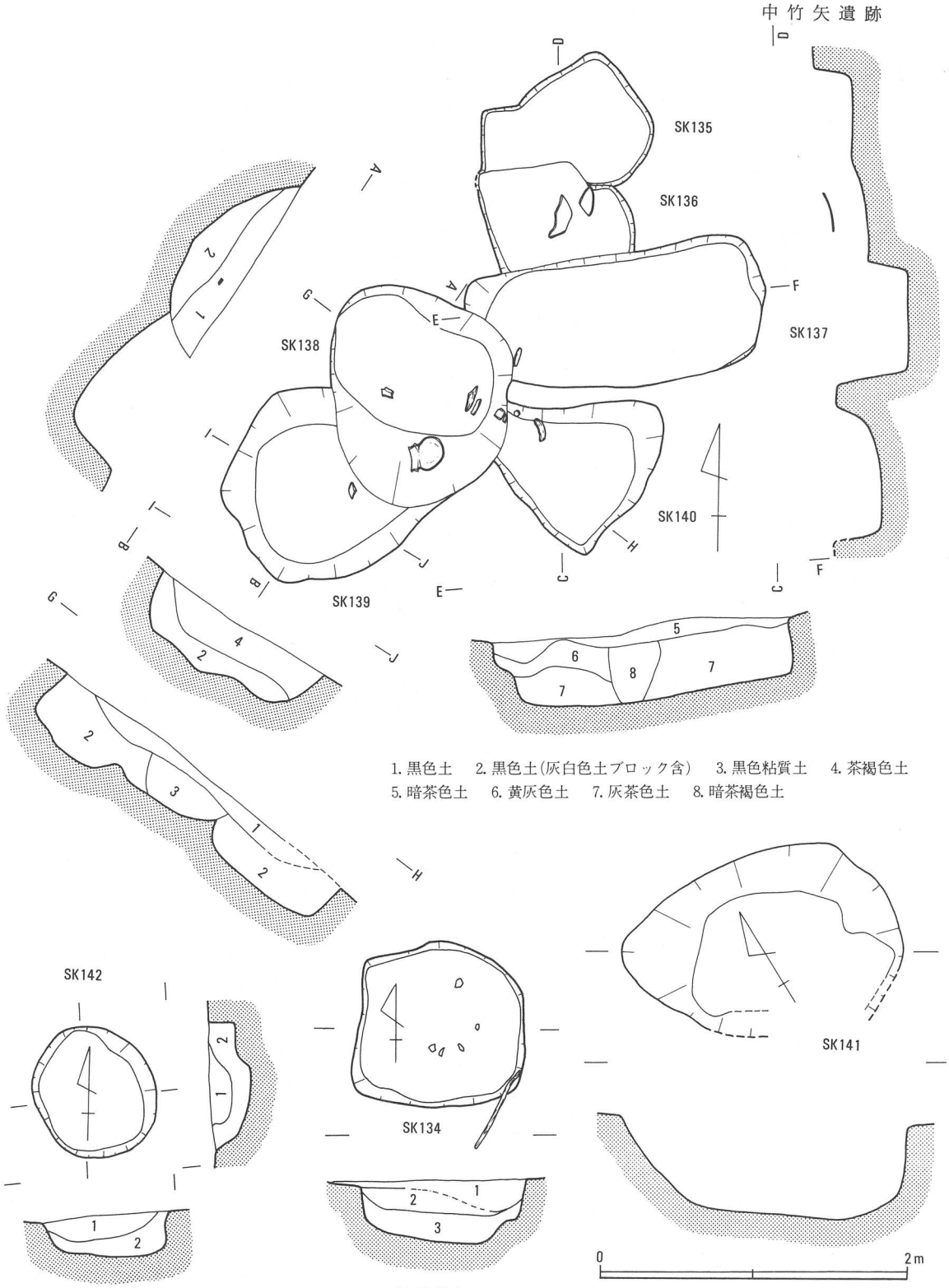
第20図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ110～115実測図（Ｌ＝2.30m）



第21図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ116～123実測図（Ｌ＝2.30m）



第22図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ124～133実測図
（Ｌ＝2.30m）

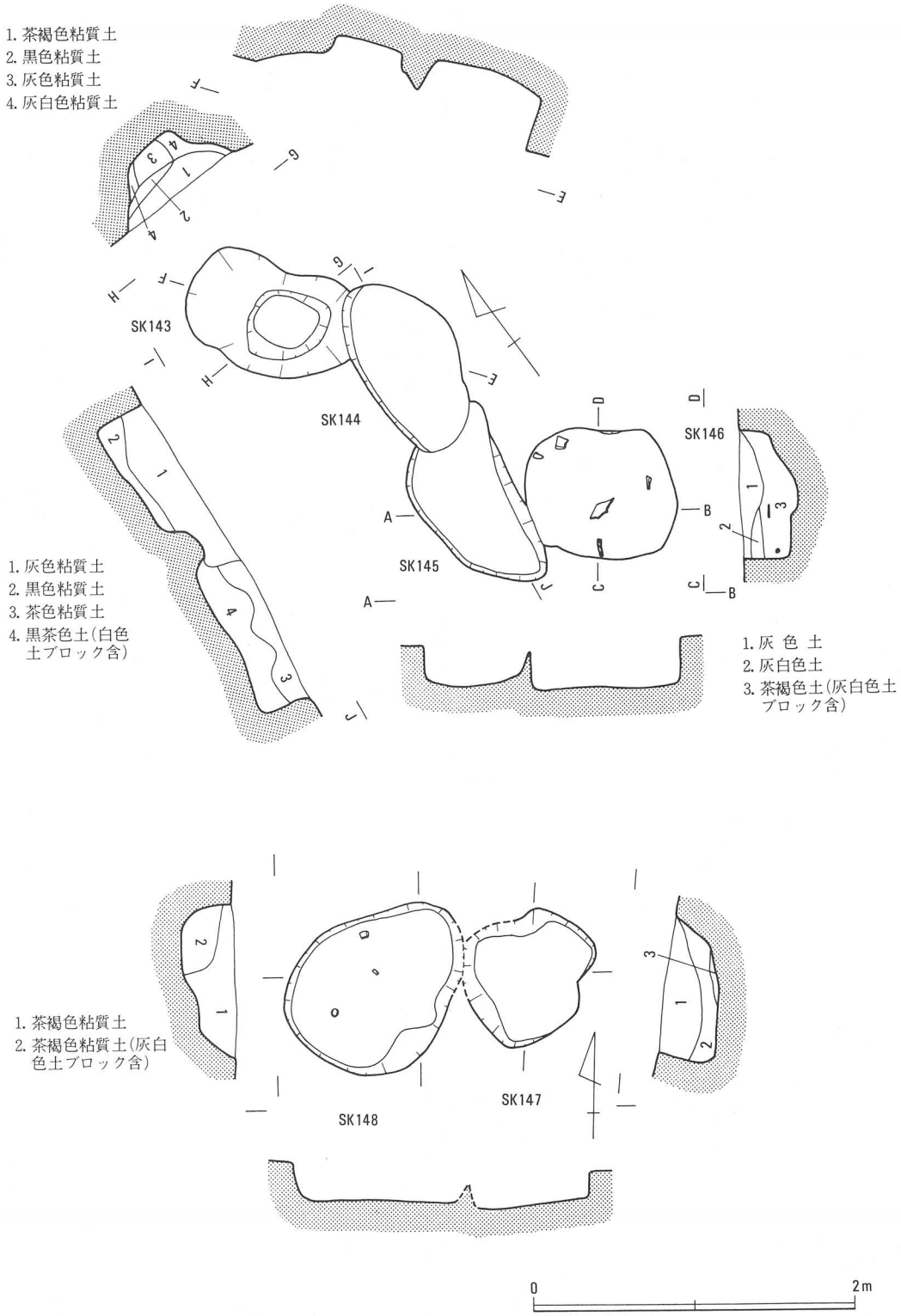


1. 黒色土　2. 黒色土(灰白色土ブロック含)　3. 黒色粘質土　4. 茶褐色土
5. 暗茶色土　6. 黄灰色土　7. 灰茶色土　8. 暗茶褐色土

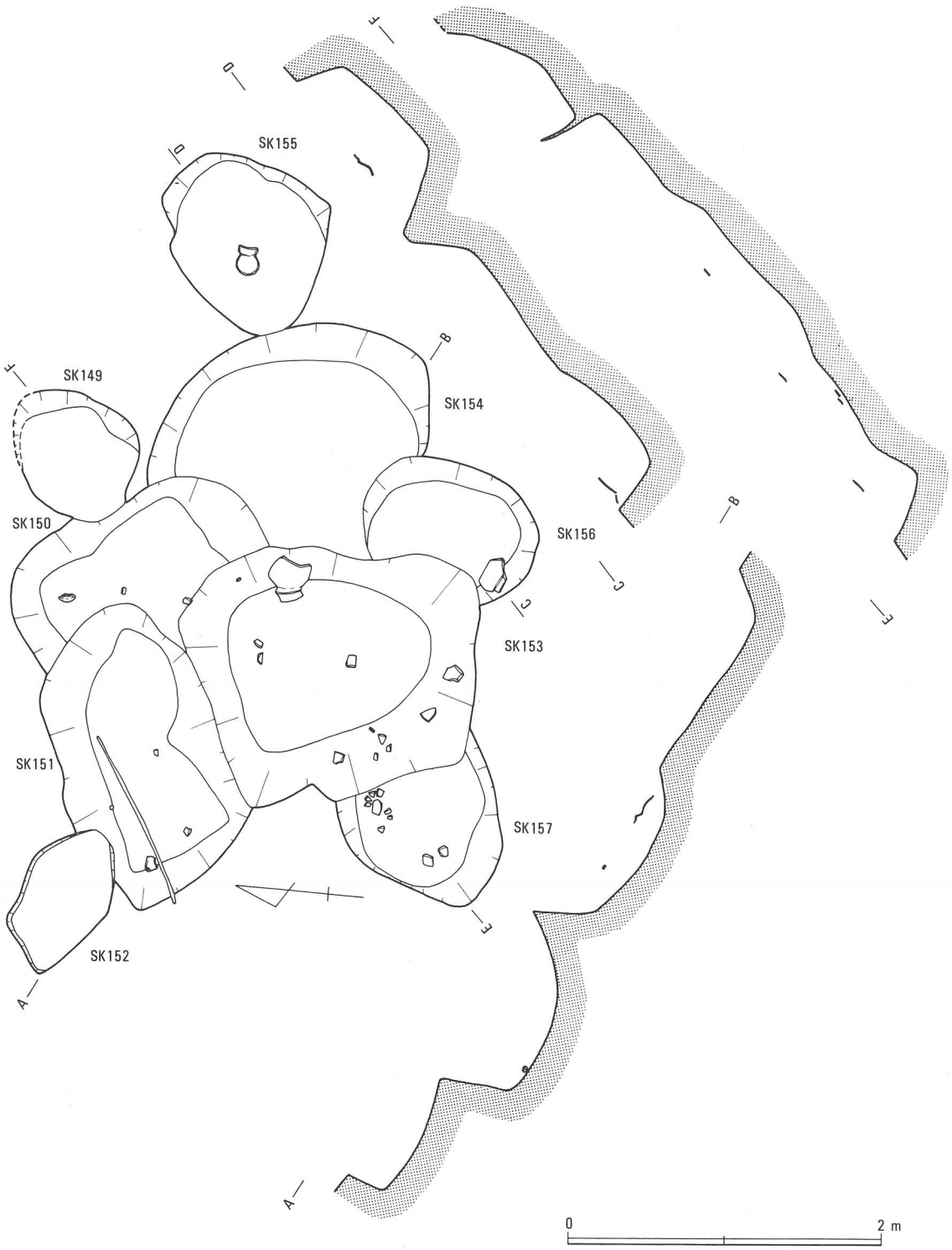
1. 暗茶色土(白色土ブロック含)
2. 灰白色土

1. 灰色粘質土
2. 茶褐色土
3. 黒 色 土

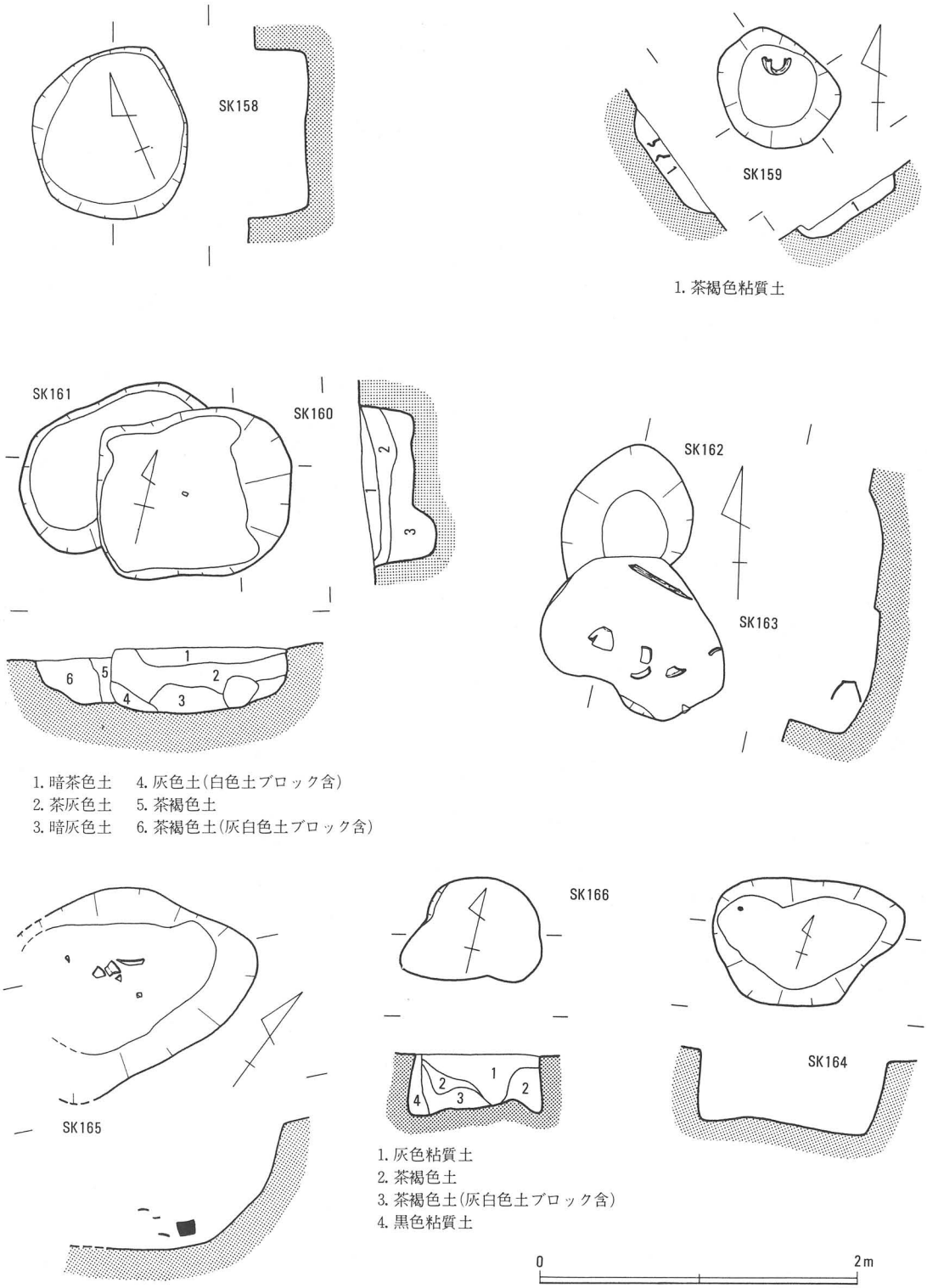
第23図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ134～142実測図
(Ｌ＝2.30m)



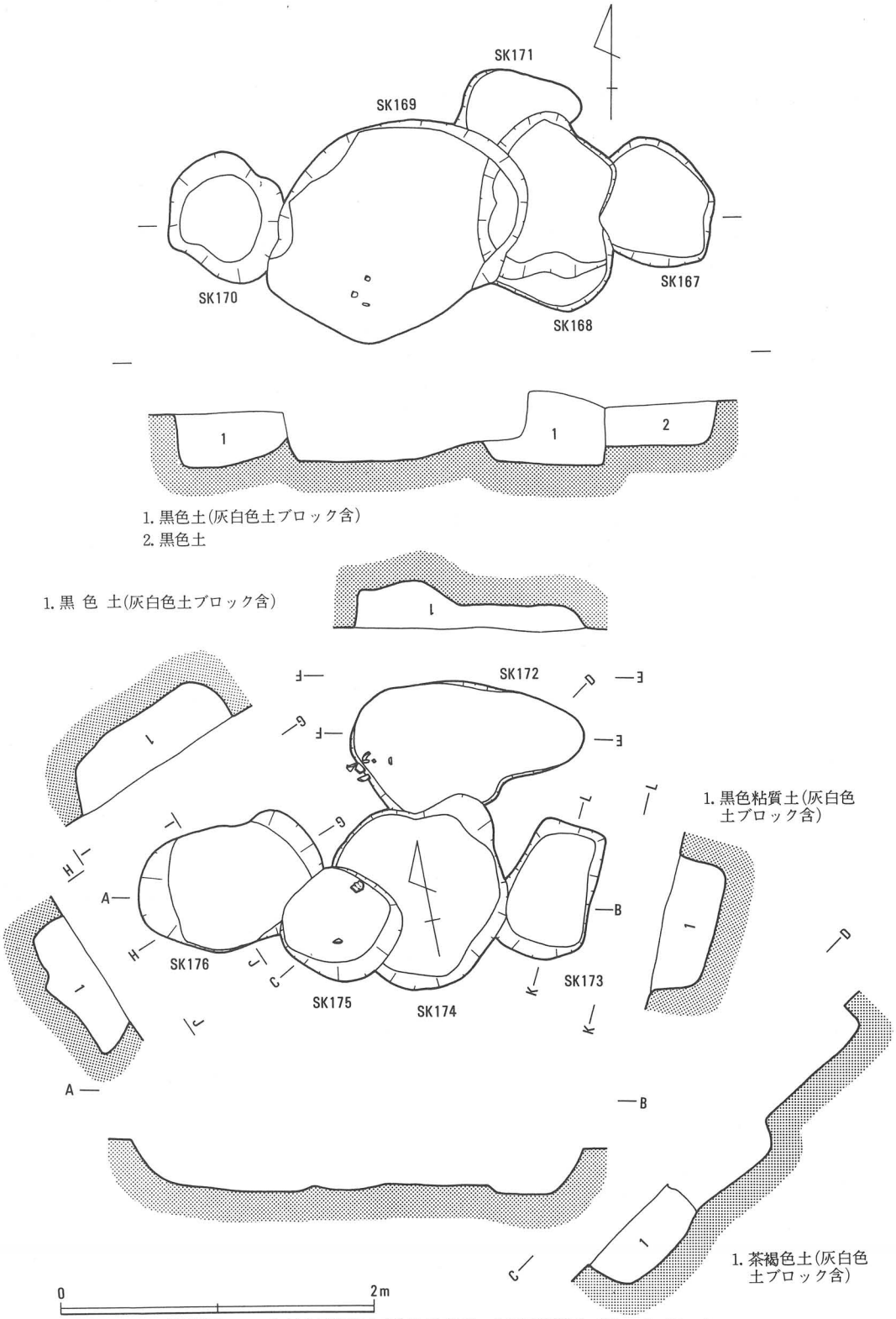
第24図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ143～148実測図（Ｌ＝2.30*m*）



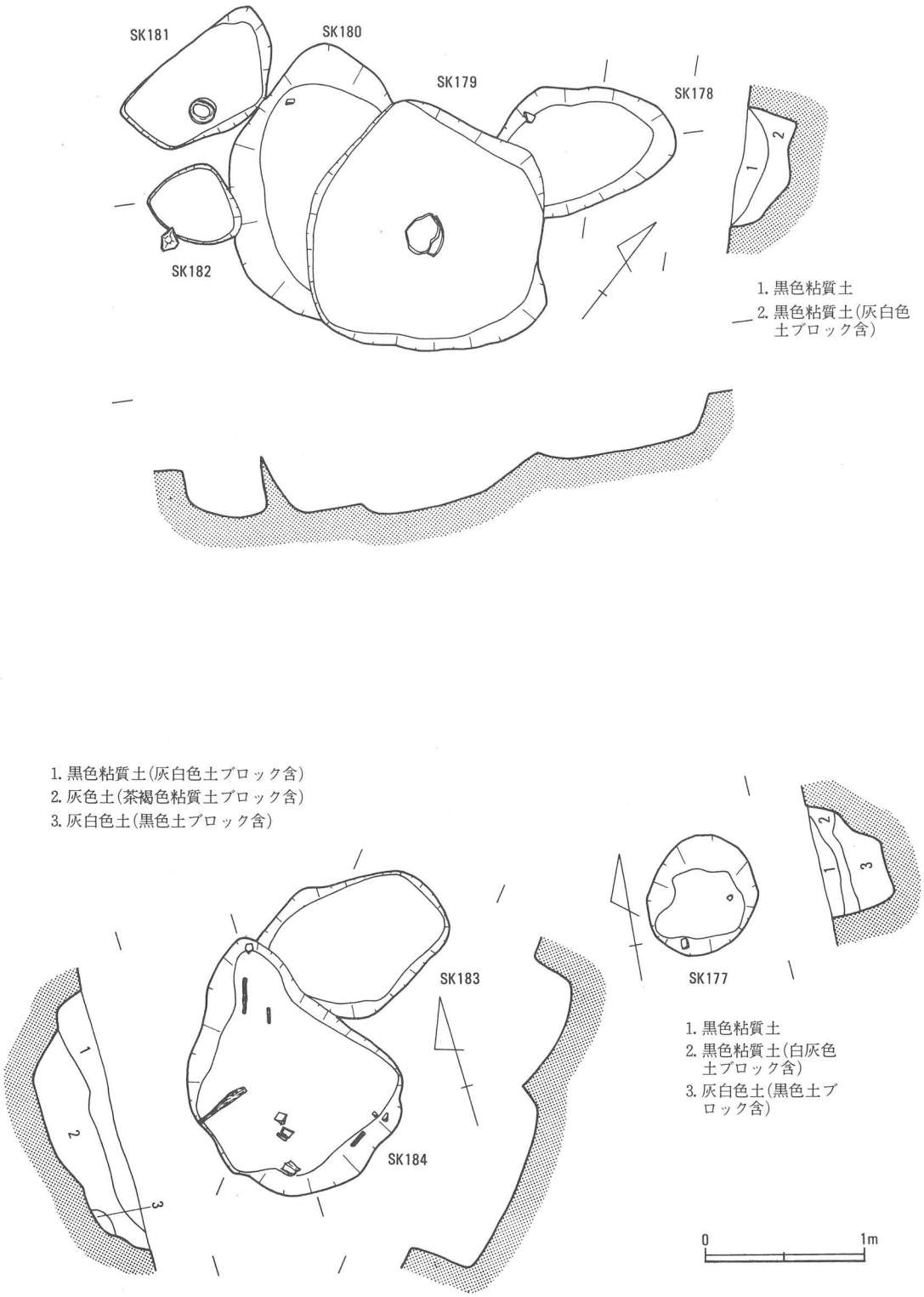
第25図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ149～157実測図（Ｌ＝2.30m）



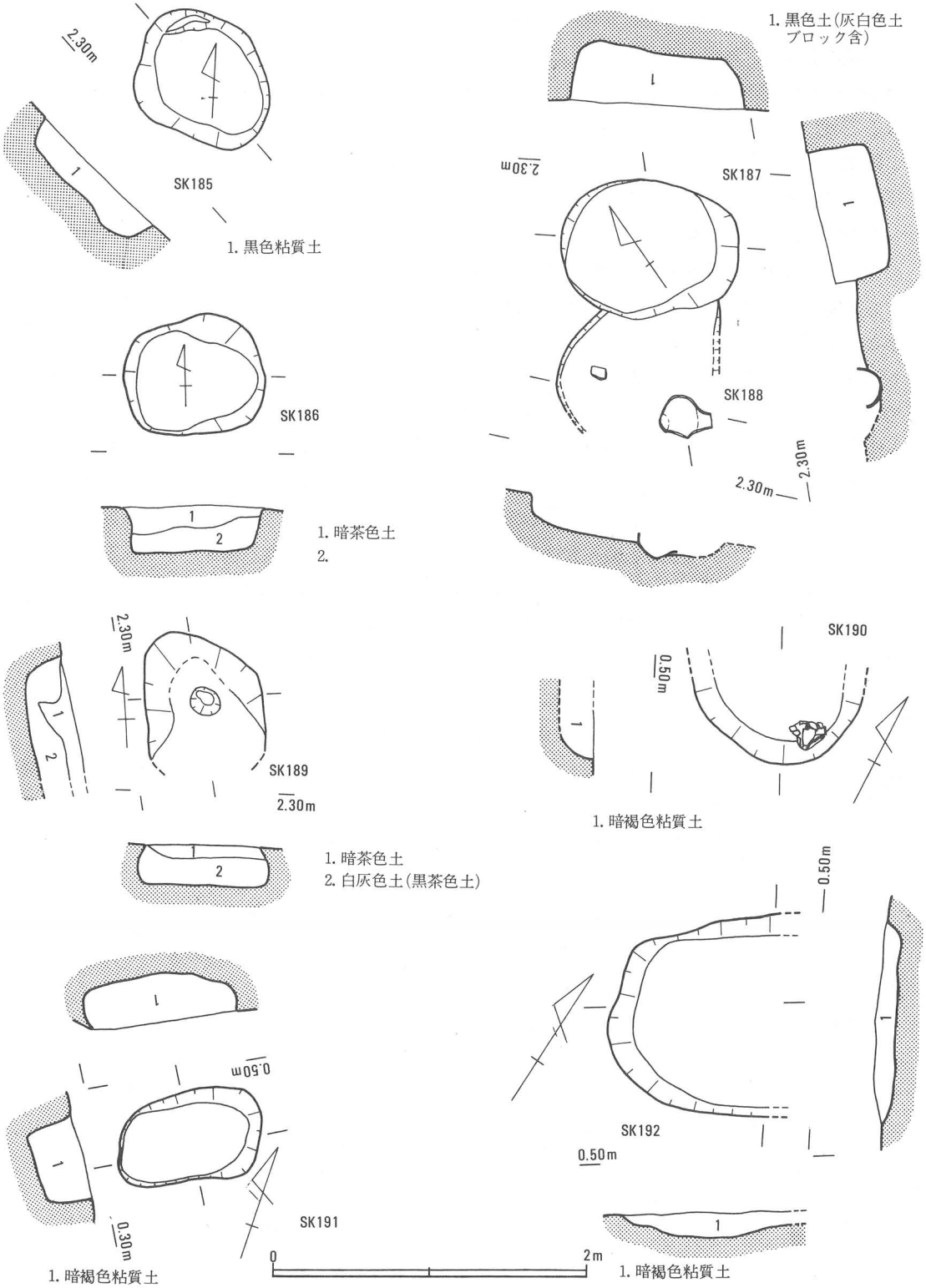
第26図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ158～166実測図（Ｌ＝2.30m）



第27図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ167～176実測図（Ｌ＝2.30m）



第28図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ177～184実測図（Ｌ＝2.30m）



第29図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ185～192実測図（Ｌ＝2.30m）

2. 出土遺物（第30～39図、図版71～78）

土壙内からは、弥生土器、土師器、木器、木片などが出土しているが、図示できたのは第30図～第39図のものだけである。出土遺物についての詳細は一覧表に譲り、ここでは大まかな分類をするにとどめたい。

弥生土器　前期後半、中期中葉～後期の土器が出土しているが、ほとんどが中期中葉のものである。また中期前葉の土器は出土していない。

前期の土器は、壺、甕、鉢が出土している。壺（33－4、38－4、39－4）はいずれも胴部が強く張り、最大径は上部にあると思われる。いずれも肩部、胴部にヘラ状工具による沈線文が施され、さらに38－4は竹管文、39－4は羽状文で飾られている。甕はいずれも口縁部が短く外反し胴部はほとんど張らない。33－5、34－1は無文だが、35－2はヘラ状工具による平行沈線文、連弧文、竹管文で飾られている。鉢は38－8が1個出土しているだけである。ほとんどがヘラ磨き調整主体であるのが特徴的である。これらの土器は、文様、形態などから前期後半のものと思われる。

中期の土器は、壺、甕、高坏が出土している。壺は小片が2点出土しているが、全体を窺うことはできない。30－1の肩部には凸帯文が廻っている。甕は出土土器の大多数を占める。いずれも安定した平底を呈すが、口縁部頸部の形態から次のように分類できる。頸部が屈曲せず口縁部が肥厚して上面が平坦なもの（甕Ⅰ、31－9など）頸部は「く」の字形に屈曲し胴部がやや張るもの（甕Ⅱ、32－5など）、頸部が「く」の字形に屈曲し胴部が強く張るもの（甕Ⅲ、33－3など）、頸部が「く」の字形に屈曲し口縁端部が肥厚して凹線文が施されるもの（甕Ⅳ、31－4）である。また甕Ⅱは端部が肥厚するもの（甕Ⅱa、32－5など）と肥厚しないもの（甕Ⅱb、32－4など）とがある。甕Ⅲには文様がみられないが甕Ⅰ、Ⅱには胴部にクシ状工具による刺突文が施されるものがある（31－9、32－4、32－5など）。また甕Ⅰの頸部には指または、ヘラ状工具による刻目凸帯文が貼付されている。高坏はＳＫ06から1点出土しているだけである（30－3）。体部は内湾し口縁部が肥厚して上端は平坦面をなす。口縁端部にはヘラ状工具による刻目文、上面には格子文が施されている。これらの土器は形態、文様などから甕Ⅰ～Ⅲ、高坏が中期中葉、甕Ⅳが中期後葉のものと思われる。なお壺は小片のため詳細な時期は不明である。

後期の土器は壺が2点出土している（34－8、38－3）。ともに口縁部は複合口縁だが口縁部が5－8は大きく外反し、38－3は内傾している。甕は34－9の1点が出土している。頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が外反している。

土師器　出土した土師器はすべて古式土師器の甕で、複合口縁のものと単純口縁のものとがある。複合口縁の甕は、口縁端部が外反するものがほとんどだが（32－10など）、内傾するものもある（32－12）。いずれも口唇部は平坦面をなす。胴部はほぼ球形で、底部は丸くわずかに平底の痕跡が残る程度である。単純口縁のものは胴部が球形をし底部は丸い（39－1）。複合口縁の土器はすべて小谷式に当ると思われ、概ね古墳時代前期のものであろう。ＳＫ113からは複合口縁の甕とともに単純口縁の甕が出土していることから単純口縁の土器もほぼこの時期のものと思われる。

木製品　鋤（30－9）、鉢（31－8）、櫂状木製品（37－2）、弓（37－3）、杭状木製品（37－1、34－2、39－3）、板状木製品（35－3）などがある。共伴した土器から、鋤、鉢は弥生時代中期中葉のものと思われる。

中竹矢遺跡Ⅰ区土壙内出土遺物一覧表

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
30—1	SK06	壷	上端径8	肩部は「ハ」の字形に広がり、胴部はかなり張ると思われる。	上部に貼付凸帯文。	外面　全面ヨコナデ。	胎土　砂粒少し含む。焼成　良好　色調　外面灰白色、内面黒色。
30—2	SK06	甕	口径15	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は横方向のハケ目。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下横方向のヘラ削り。	胎土　小砂粒多く含む。焼成　良好　色調　外面黒色。(外面スス付着)内面暗褐色。
30—3	SK06	高坏	口径25.8	体部は内湾して伸び、口縁部は肥厚して「T」字形になり、平坦面をなす。	口縁端部にはヘラによる刻目文。口縁部上端の平坦面には斜格子文。	外面　口縁部はヨコナデ。体部は横斜方向の小さなヘラ磨き。脚部との接着部分はヨコナデ。 内面　口縁部はヨコナデ。体部から底部にかけて横、斜方向の小さなヘラ磨き。 坏部と脚部の接合は円板充填。	胎土　小砂粒わずかに含む。緻密。焼成　良好　色調　灰黄色。
30—4	SK06	壷の底部	底径8.6	底部はほぼ平坦で、胴部は大きく開いて伸びる。		外面　胴部上端は縦方向のハケ目。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境はヨコナデ。底部は不整方向のナデ。 内面　胴部上半は縦方向のハケ目。胴部下半から底部にかけて横方向の粗いヘラ磨き。	胎土　小砂粒多く含む。やや粗。焼成　良好。色調　黄褐色。
30—5	SK06	壷	口径11.6	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁端部はやや肥厚し、平坦面となる。胴部はかなり張るものと思われる。頸部には円形の穴あり。		外面　口縁部から肩部にかけてヨコナデ。肩部下半は縦方向のハケ目。以下ヘラ磨きか？ 内面　口縁部はハケ目後ヨコナデ。以下縦横のハケ目。一部をその後ナデで消去。	胎土　砂粒少量含む。焼成　良好。色調　外面白黄色、内面淡黒色。
30—6	SK06	甕	口径22.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反する。 口縁端部は平坦面をなす。		不明。	胎土　小砂粒含む。焼成　不良。色調　外面黄白色、内面暗灰色。
30—7	SK07	壷の底部	底径8.2	底部はほぼ平坦で、胴部は大きく開いて伸びる。		外面　全面横方向のヘラ磨き。 内面　全面ナデ。	胎土　大粒の砂粒含む。焼成　良好。色調　外面茶褐色、内面黒色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
30—8	SK03	底部	底径7.6	底部は平坦で、胴部はやや大きく広がって伸びる。		外面　胴部上端は縦方向のハケ目。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境はヨコナデ。底部は不整方向のナデ。 内面　胴部上半は縦方向のハケ目。胴部下半から底部にかけて横方向の粗いヘラ磨き。	胎土　小砂粒多く含む。やや粗。 焼成　良好。 色調　黄褐色。
30—9	SK06	鋤（木製）	長44 身長20.5 身幅11.8 厚1.7～0.5	スコップ形を呈し、身はやや反っている。		鋤身は共木から削り出されている。	板目材使用。
31—1	SK11	胴部	胴部最大径32.2	胴部のみ残存。胴部はやや張り気味。	胴部に単位1の刺突文。	外面　縦方向のハケ目。（単位23本）。 内面　ナデ。	胎土　やや大粒の砂粒含む。 焼成　やや不良。 色調　外面黒色、内面黄褐色。
31—2	SK11	胴部	胴部最大径34.8	胴部のみ残存。胴部はかなり張りほぼ球形を呈す。	肩部に単位3のクシ状工具による刺突文。	外面　肩部は縦方向のハケ目、胴部中央は横方向のヘラ磨き。胴部下半は斜方向のヘラ磨き。内面　ナデ。	胎土　やや大粒の砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面黄褐色。
31—3	SK16	甕	口径約17.2	口縁部は肥厚、上端はほぼ平坦。胴部はほとんど張らない。		外面　口縁部はヨコナデ。肩部はハケ目の後ヨコナデ。以下縦方向のハケ目。内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下ハケ目の後ヨコナデ。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　灰白色。
31—4	SK17	甕	口径18.4	口縁部は外反し、端部は肥厚し面をなす。	口縁端部に擬凹線状の沈線文3条。	不明。	胎土　大粒の砂粒多く含む。 焼成　不良。 色調　灰褐色。
31—5	SK18	甕	口径18.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反する。端部は平坦面をなす。胴部はあまり張らないと思われる。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は縦方向のハケ目。 内面　口縁部はヨコナデ。	胎土　砂粒わずかに含む。 焼成　良好。 色調　白灰色。
31—6	SK18	甕	口径15.2	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。口縁端部はやや肥厚し、平坦面をなす。胴部は球形を呈すと思われる。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。他は不明。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下ヘラ削り。	胎土　小砂粒含む。粗。 焼成　不良。 色調　外面黒色、内面茶褐色。外面にスス付着。
31—7	SK21	甕	口径15.6	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外反し、端部は面をつくる。胴部はかなり張ると思われる。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下縦方向のハケ目。 内面　口縁部から肩部にかけてヨコナデ。以下縦方向のハケ目。	胎土　砂粒非常に多く含む。やや粗。 焼成　やや不良。 色調　灰色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
31—8	SK21	鉢（木製品）	口径28	底部は上底で、周辺は高台状を呈す。体部は大きく逆「ハ」の字形に開く。		外面に削り痕あり。	刳物。
31—9	SK23	甕	口径25 底径13.6 高20.4	底部は平端で胴部は内湾して伸び、肩はほとんど張らず口縁部に至る。口縁部は「T」字形に肥厚し、上端は平坦でわずかに内傾する。	口唇部にはヘラ状工具による刻目文、頸部には指押圧による刻目貼付凸帯文。胴部には単位2のヘラ状工具による刺突文。	外面　口縁部から貼付凸帯文までヨコナデ。胴部上半は縦方向のハケ目。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境はヨコナデ。底部は不整方向のナデ。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部上半は粗いハケ目後横方向の粗いヘラ磨き。胴部下半は横方向の小さなヘラ磨き。底部は不整方向のヘラ磨き。	胎土　ほとんど砂粒含まず。 焼成　やや不良。 色調　黄褐色。
31—10	SK27	壷の底部	底径6	底部はほぼ平坦で、胴部は内湾して伸びる。		外面　胴部上端は縦方向のハケ目。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境、及び底部はナデ。 内面　全面縦方向のハケ目の後、横方向のヘラ磨き。	胎土　砂粒含む。やや粗。 焼成　良好。 色調　外面灰黄色、内面　暗褐色。
31—11	SK28	甕	口径18	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反する。端部はやや肥厚し平坦面をなす。胴部はかなり張ると思われる。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部から胴部にかけて縦、斜方向のハケ目（単位13）。 内面　口縁部はヨコナデ。頸部以下横方向のヘラ磨き。	胎土　小砂粒わずかに含む。 焼成　良好。 色調　黒褐色。
31—12	SK28	甕	口径23	頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部は短く外反する。口縁端部は肥厚し平坦面をなす。胴部はかなり張る。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下縦方向のハケ目（単位18）。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下ハケ目の後ていねいなナデ。	胎土　砂粒含む。 焼成　良好。 色調　外面暗黄褐色、内面　暗灰色。
31—13	SK28	甕	口径21	胴部はあまり張らず、口縁部は緩く外反する。口縁端部は平坦面をなす。		外面　口縁部から肩部にかけてヨコナデ。以下縦方向のハケ目（単位6）。 内面　口縁部ヨコナデ。他は不明。	胎土　大粒の砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　暗茶褐色。
32—1	SK28	甕？	頸部径10.4	頸部は「く」の字に屈曲すると思われる。胴部はかなり張る。		外面　全面縦方向のハケ目（単位16）。 内面　頸部はヨコナデ。胴部は縦方向のハケ目。	胎土　小砂粒含む。緻密。 焼成　良好。 色調　灰色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
32—2	SK28	甕の胴部	胴部径26.2	胴部は内湾し張る。	ヘラ状工具による刺突文2列。	外面　上半は縦方向のハケ目。（単位18）。下半は横方向のヘラ磨き。 内面　上半は縦方向のハケ目。（単位10）。下半は横方向のヘラ磨き。またはナデ。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　黄灰色。
32—3	SK28	甕の底部	底径5.6	底部はほぼ平坦で胴部は内湾して伸びる。		外面　胴部、縦方向のヘラ磨き。底部はヨコナデ。 内面　全面ナデ。	胎土　小砂粒多く含む。密。 焼成　良好。 色調　黄褐色。
32—4	SK31	甕	口径24.8	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反し端部は平坦面をつくる。胴部は張り気味である。	胴部に単位3のクシ状工具による刺突文。	外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部から胴部上半にかけて縦方向のハケ目。以下不明。 内面　口縁部ヨコナデ。以下ハケ目の後ナデか。	胎土　砂粒多く含む。粗。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面茶褐色。外面にスス付着。
32—5	SK31	甕	口径23.6 底径 8.4 器高25.1	底部はほぼ平坦で胴部は内湾しながら伸びやや張る。頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部は外反し端部は肥厚して平坦面をなす。	胴部に単位3のクシ状工具による刺突文。 口唇部にヘラ状工具による刻目文。	外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部から胴部中程にかけて縦方向のハケ目。胴部中程から下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部との境はヨコナデ。底部は不整方向のナデ。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は縦、斜方向のハケ目。底部ナデ。	胎土　砂粒ほとんど含まない。 焼成　良好。 色調　灰黄色。
32—6	SK31	甕	頸部径14.2	頸部は「く」の字形に屈曲し胴部はやや張る。		不明。	胎土　小砂粒含む。 焼成　不良。 色調　白灰色。
32—7	SK31	甕	頸部径18	頸部は「く」の字形に屈曲し、胴部はやや張る。		外面　頸部はヨコナデ。以下縦方向のハケ目。 内面　頸部はヨコナデ。以下横方向のハケ目。	胎土　砂粒ほとんど含まず。 焼成　良好。 色調　黄灰色。
32—8	SK31	底部	9.6	底部はほぼ平坦で、胴部は逆「ハ」の字形に伸びる。		不明。	胎土　大粒の砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　淡灰色。
32—9	SK37	甕	16	口縁部は外反し、端部はわずかに肥厚し面をなす。		内外面ともヨコナデ。	胎土　大粒の砂粒含む。 焼成　不良。 色調　灰色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
32—10	SK37	甕	口径15.8	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。口縁端部はやや肥厚し平坦面をなす。胴部は球形と思われる。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部、胴部は不明瞭だがわずかにハケ目残る。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下ヘラ削り。	胎土　砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　灰白色。
32—11	SK37	底部		底部はほぼ丸底だが、わずかに平底の痕跡残る。		外面　ハケ目。 内面　底部は指による押圧。その他はヘラ削り。	胎土　砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　暗褐色。
32—12	SK34	甕	口径17	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。口縁部上半はやや内傾し、口縁端部は肥厚し平坦面をなす。胴部はほぼ球形。	肩部に単位6のクシ状工具による波状文。	外面　口縁部から肩部にかけてヨコナデ。胴部中程は横方向のハケ目。以下、斜方向のハケ目。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部、胴部はヘラ削り。	胎土　小砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　黄褐色。
33—1	SK38	底部	底径5.8	底部はほぼ平坦で胴部は逆「ハ」の字形に伸びる。		不明。	胎土　小砂粒多く含む。 焼成　やや不良。 色調　灰色。
33—2	SK48	甕	口径14.6	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外傾する。端部の器壁は薄くわずかに平坦面をなす。		外面　全面ヨコナデ。 内面　口縁部はヨコナデ。頸部はヘラ削り。	胎土　大小の砂粒含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面茶褐色。外面にスス付着。
33—3	SK63	甕	口径16.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁部はやや肥厚し端部は平坦面をなす。		外面　口縁部ヨコナデ。胴部上半縦方向のハケ目。下半斜方向のヘラ磨き。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部上半横方向のヘラ磨き。以下縦方向のハケ目。一部ヨコナデ。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　茶褐色。
33—4	SK65	壷胴部	胴部径21	胴部ほぼ球形を呈す。	ヘラ状工具による1条の沈線文。	外面　横方向のヘラ磨き。 内面　ナデ。	胎土　大粒の砂粒含む。 焼成　良好。 色調　暗黄褐色。
33—5	SK65	甕	口径19.2	胴部はほとんど張らず、口縁部は短く外反する。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下縦方向のハケ目。 内面　口縁部ヨコナデ。頸部は横方向のハケ目。（単位11）。以下指頭による押圧の後ナデか。	胎土　大粒の砂粒含む。 焼成　不良。 色調　黒褐色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
33—6	SK68	甕	口径19.2	胴部はわずかに内湾気味だがほとんど肩が張らない。口縁部は肥厚し、上面は平坦面をなす。	口縁端部にヘラ状工具による刻目文。頸部に指押圧による刻目凸帯文。	外面口縁部から胴部上端にかけてヨコナデ。以下縦方向のハケ目。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下横方向のヘラ磨き。	胎土　小砂粒わずかに含む。 焼成　良好。 色調　灰黄色。
33—7	SK68	甕	口径14.2	頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部は短く外傾し、端部は平坦面をつくる。胴部はやや張る。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は縦方向のハケ目。 内面　口縁部ヨコナデ。頸部以下はハケ目の後小さなヘラ磨き。	胎土　ほとんど砂粒含まない。 焼成　良好。 色調　茶褐色。外面にスス付着。
33—8	SK68	甕	口径1.5	胴部は内湾して伸び肩はあまり張らない。口縁部は肥厚し上面は平坦面をなす。	頸部に指押圧による刻目凸帯文。胴部に単位4のクシ状工具による刺突文。	外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。頸部から胴部上半にかけて縦方向のハケ目。以下縦方向のヘラ磨き。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部上半は横方向のハケ目。胴部中程は縦方向のハケ目。胴部下半は横方向のヘラ磨き。	胎土　わずかに砂粒含む。緻密。 焼成　良好。 色調　灰黄色。
33—9	SK68	甕	底径4.8	平坦な底部から胴部は急に伸び、全体に細長い。		外面　胴部縦方向のヘラ磨き。底部ヨコナデ。 内面　胴部上半ハケ目の後ナデ。下半は横方向のヘラ磨き。底部ヨコナデ。	胎土　砂粒含まない。 焼成　良好。 色調　黒色。
33—10	SK71	壷の底部	底径8.2	底部はほぼ平坦で胴部は大きく張ると思われる。		外面　胴部上半は縦方向のヘラ磨き。胴部下半はヨコナデ。底部不整方向のナデ。 内面　全面粗いヘラ磨き（胴部は横方向、底部は不整方向）。	胎土　砂粒ほとんど含まない。やや粗。 焼成　良好。 色調　外面灰黄色、内面　黒色。
33—11	SK74	甕	口径20	頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部は外傾する。胴部はやや強く張る。		口縁部内外面ヨコナデ。他は不明。	胎土　小砂粒含む。 焼成　不良。 色調　外面赤褐色、内面　黒色。
33—12	SK81	底部	底径6.8	底部は平坦で胴部は内湾して伸びる。		外面　胴部は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境および底部はヨコナデ。 内面　全面不整方向のナデ。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　外面茶褐色、内面　灰白色。
33—13	SK81	底部	底径8	底部はほぼ平坦で、胴部は内湾して伸びる。		外面　胴部は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境から底部はヨコナデ。 内面　ナデか。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　灰白色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
33—14	SK79	甕	口径14.6	頸部は「く」の字形に屈曲すると思われる。口縁部は複合口縁で、端部はわずかに肥厚し平坦面をなす。		内外面ともヨコナデ。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　黄灰色。
34—1	SK88	甕	口径22.6	胴部はほとんど張らず、口縁部は緩く外反し、端部は平坦面をなす。		外面　口縁部はヨコナデ。胴部は斜方向のヘラ磨き。内面　全面横、斜方向のヘラ磨き。	胎土　大粒の砂粒含む。焼成　良好。色調　外面黒褐色。内面　黒色。
34—2	SK88	杭状木製品	断面径3 長17.2	先端は「くさび」形を呈す。		側辺と先端を加工。	心持ち材使用。
34—3	SK92	甕	底径5.6	底部はほぼ平坦と思われる。胴部はやや張り、長胴。頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部は外反すると思われる。		外面　頸部はヨコナデ。肩部から胴部上半は縦方向のハケ目（単位16）。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部との境はヨコナデ。 内面　頸部はヨコナデ。肩部から胴部上半は斜方向のハケ目（単位13）。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。底部はヨコナデ。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　黄茶褐色。
34—4	SK99	甕	口径15.2	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。口縁端部はやや肥厚し、平坦面ができる。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部に横方向のハケ目。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部は横方向のヘラ削り。	胎土　小砂粒含む。緻密。焼成　良好。色調　外面黒色、内面茶褐色。外面にスス付着。
34—5	SK99	底部		底部は丸底で、胴部は内湾して伸びほぼ球形と思われる。		外面　全面ハケ目（単位11）。内面胴部は縦方向のヘラ削り。底部は指頭による押圧の後ナデ。	胎土　あまり砂粒含まない。焼成　良好。色調　外面黒色、内面暗茶褐色。外面スス付着。
34—6	SK99	底部		底部はわずかにアクセントをもち、平底の痕跡がある。胴部はほぼ球形。		外面　全面ハケ目（単位11）。内面胴部縦方向のヘラ削り。底部は指頭痕残る。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　外面暗茶褐色、内面　黒褐色。外面にスス付着。
34—7	SK97	甕	口径14.8	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。口縁端部は平坦面をなす。胴部はほぼ球形。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部縦方向のハケ目。以下斜方向のハケ目。 内面　口縁部内面から頸部ヨコナデ。以下ヘラ削り。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　黒色。外面スス付着。

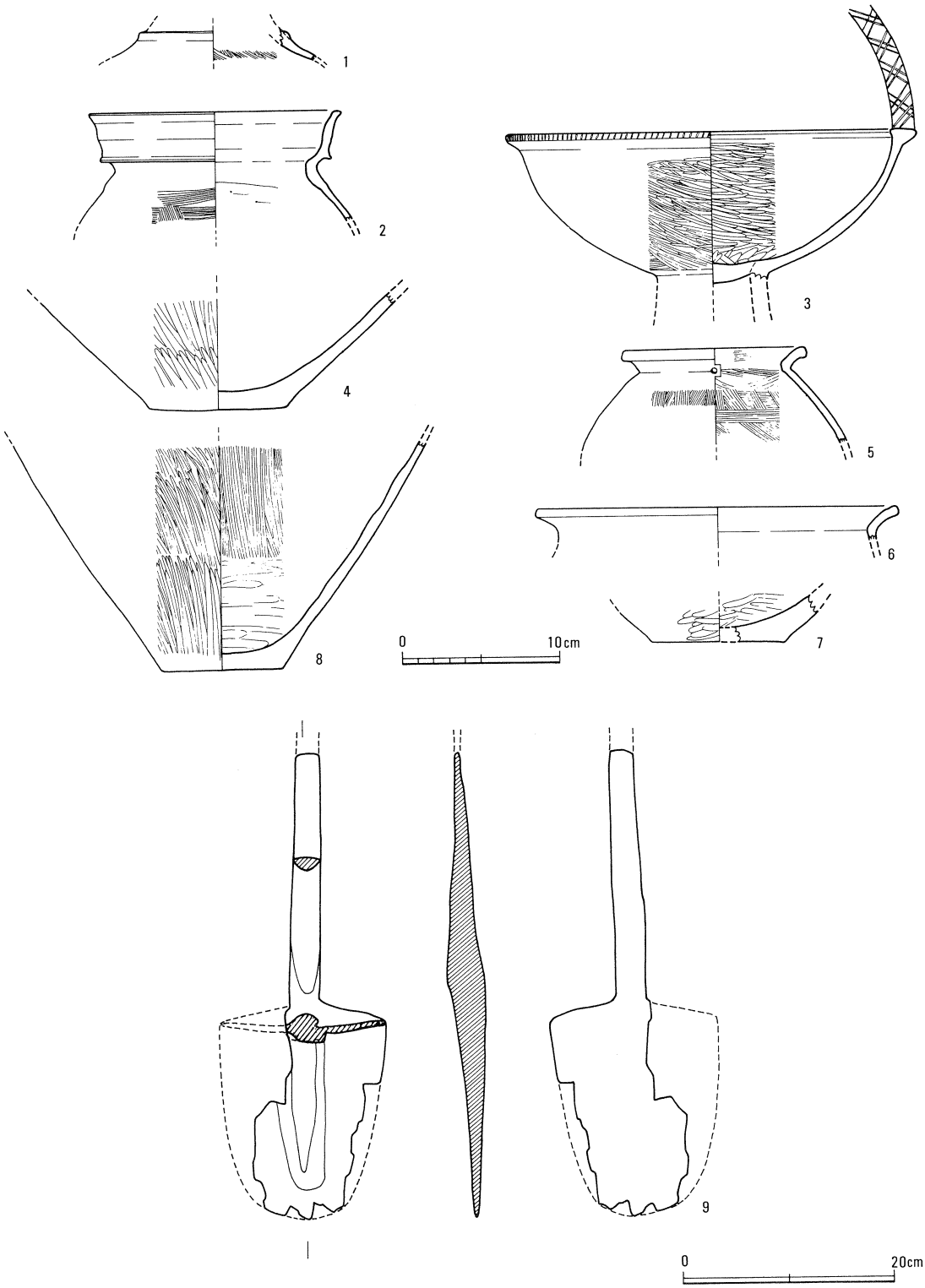
挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
34—8	SK110	壷	口径19.4 底径4.6 高30.1	底部は平坦で、胴部はかなり張る。頸部は緩く外反し、口縁部は複合口縁。口縁部上半は大きく外反する。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部はハケ目の後ヨコナデ。以下斜方向のハケ目。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部はヨコナデ。胴部上半は指による横方向の削り。胴部下半から底部にかけて不整方向のハケ目。	胎土　砂粒含む。 焼成　良好。 色調　黄褐色。
34—9	SK110	甕	口径11.1	肩はあまり張らず、胴部は細長い球形をし、口縁部は外傾し、逆「ハ」の字形を呈す。		外面　口縁部はヨコナデ。肩部は縦方向のハケ目。胴部は斜方向のヘラ削り。 内面　口縁部はヨコナデ。肩部以下縦方向のヘラ削り。	胎土　大砂粒含む。粗。 焼成　良好。 色調　黒褐色。
35—1	SK112	甕	口径22	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反する。端部は肥厚し、平坦面をなす。		口縁部内外面ヨコナデ。他は不明。	胎土　砂粒多く含む。 焼成　不良。 色調　黄褐色。
35—2	SK112	甕	頸部径9.6	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反すると思われる。胴部はわずかに張り気味。	ヘラ状工具による3条の平行沈線文。1条目と2条目の間は広く、2列の刺突文を施す。2条目の沈線文の下から連弧文。	外面に一部ハケ目残るも、風化のため調整不明。	胎土　大粒の砂粒多く含む。 焼成　不良。 色調　白灰色。
35—3	SK118	板状木製品	長342 幅8.4 厚0.8	側辺には抉りが入る。		両面削り。	
35—4	SK118	底部	底径4.2	底坦はほぼ平坦で胴部はあまり開かずに伸びる。		外面　胴部は縦方向のヘラ磨き。底部はヨコナデ。 内面　不明。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面灰色。
35—5	SK120	甕	口径17.6	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。肩はあまり張らず、胴部はほぼ球形。		外面　口縁部ヨコナデ。胴部ハケ目。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面黄灰色。
35—6	SK116	壷底部	底径7	底部は平坦で、胴部は広がって伸びる。		外面　胴部縦方向のヘラ磨き。底部ヨコナデ。 内面　粗いヘラ磨き。	胎土　砂粒ほとんど含まない。 焼成　良好。 色調　外面黄灰色、内面　黒色。
35—7	SK113	甕	口径17.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。口縁端部はやや肥厚し、平坦面をなす。胴部はほぼ球形。		外面　口縁部から肩部上半にかけてヨコナデ。肩部下半は縦方向のハケ目。胴部上半は横方向のハケ目。以下不明。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は横斜方向のヘラ削り。	胎土　小砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面黄褐色。外面スス付着。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
35—8	SK113	甕	口径17.8	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外反する。端部は平坦面をなす。胴部はわずかに張る。		外面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削りか。 内面　口縁部ヨコナデ。胴部ヘラ削り。	胎土　小砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面淡茶色。
35—9	SK124	甕	口径20.6	口縁部は肥厚し、上端は平坦面をなす。		不明。	胎土　大粒の砂粒多く含む。 焼成　不良。 色調　赤褐色。
35—10	SK124	壷の底部	底径8	底部は平坦で、胴部は大きく開き内湾して伸びる。		外面　胴部はヘラ磨きか。胴部と底部の境及び底部はヨコナデ。 内面　ヘラ磨きか。	胎土　砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面黄褐色、内面　黒色。
35—11	SK125	甕	口径18.6	口縁部は短く外反し、端部は平坦面をなす。	口縁端部にヘラ状工具による刻目文。	内外面ともヨコナデ。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　黒色。
35—12	SK125	甕	口径21.8 底径8.6 高22	底部は平坦で、胴部は内湾して伸び、肩はほとんど張らず口縁部に至る。口縁部は「T」字形に肥厚し、上端部は平坦である。	口唇部にヘラ状工具による刻目文。頸部に指押圧による刻目貼付凸帯文。胴部に単位3のクシ状工具による刺突文。	外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部上半は斜方向のハケ目。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境はヨコナデ。底部は不整方向のナデ。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部上半は縦方向のハケ目後ナデ。胴部下半ハケ目後ヘラ磨き。底部ナデか。	胎土　小砂粒多く含む。やや粗。 焼成　良好。 色調　黄褐色。
35—13	SK22	胴部	頸部径11.6	胴部はかなり張る。		外面　縦方向のハケ目。 内面　ナデか。	
35—14	SK130	甕	口径16.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は短く外反し、端部はわずかに肥厚して平坦面をなす。胴部はわずかに張る。		外面　口縁部はヨコナデ。他は不明。	胎土　砂粒含む。 焼成　不良。 色調　灰黄色。
35—15	SK131	甕	口径約14.2	口縁部は複合口縁で、端部はやや肥厚し平坦面をなす。		内外面ともヨコナデか。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面黄褐色。
35—16	SK131	甕	口径16.2	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。口縁端部はわずかに肥厚し、平坦面をなす。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部は横方向のハケ目。 内面　口縁部はヨコナデ？頸部以下は横方向のヘラ削り。	胎土　小砂粒多く含む。小空孔多い。粗。 焼成　やや不良。 色調　外面黒色、内面灰白色。外面にスス付着。

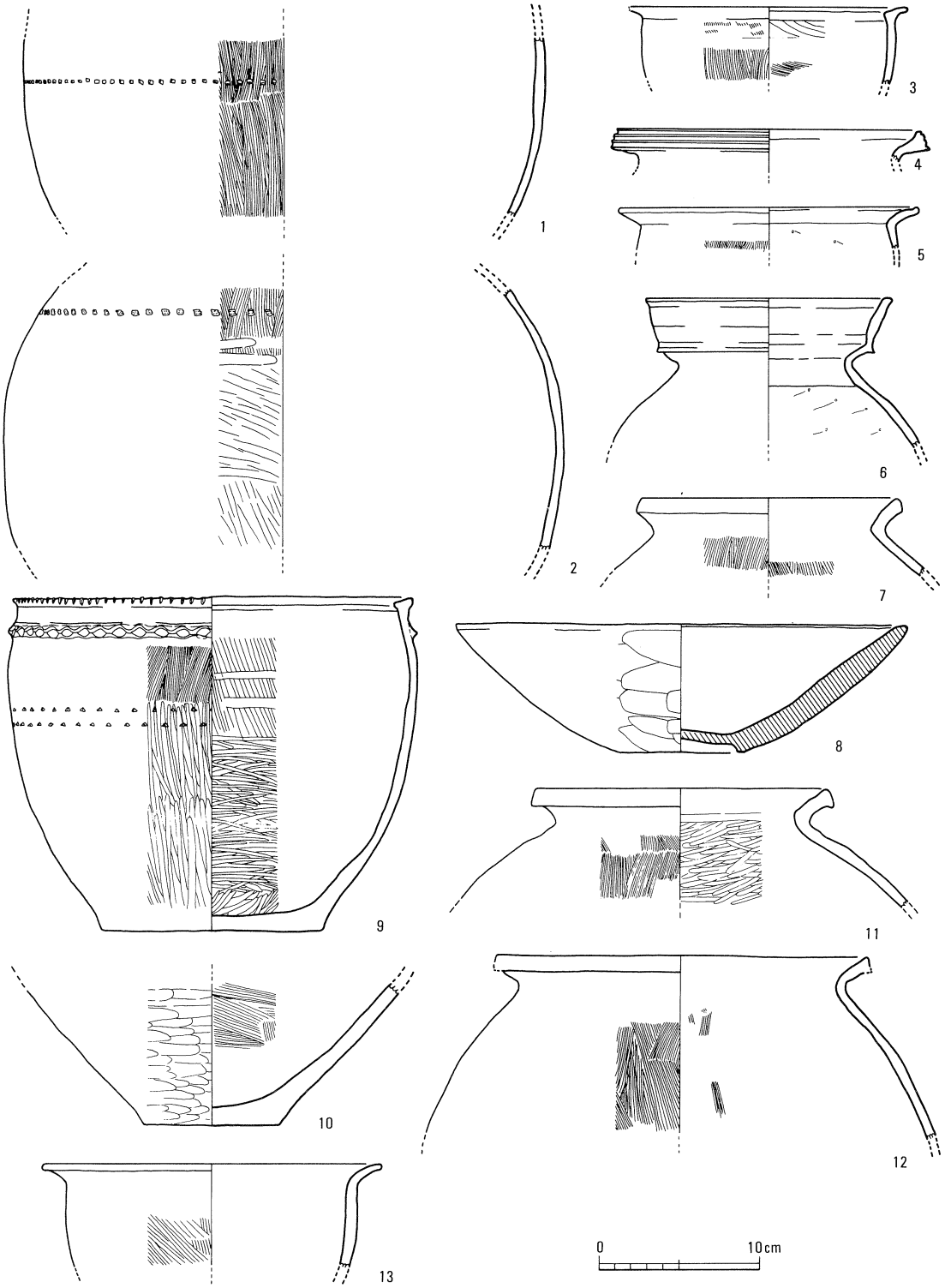
挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
36—1	SK132	甕	口径19	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。口縁端部はやや肥厚し、平坦面をなす。肩部はあまり張らず、胴部はほぼ球形と思われる。	肩部に単位17のクシ状工具による平行沈線文。	外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は縦斜方向のハケ目。 内面　口縁部はヨコナデ。頸部以下ヘラ削り。	胎土　小砂粒多く含む。焼成　良好。色調　外面黒色、内面白灰色。外面スス付着。
36—2	SK132	甕	口径16	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁で、端部はやや肥厚し平坦面をなす。		内外面ともヨコナデ。	胎土　小砂少し含む。焼成　不良。色調　暗灰色。
36—3	SK136	底部	底径7.6	底部は平坦で、胴部はやや大きく広がって伸びる。		外面　胴部上端は縦方向のハケ目。胴部下半は縦方向のヘラ磨き。底部は不整方向のナデ。 内面胴部上半は縦方向のハケ目。胴部下半から底部にかけて横方向の粗いヘラ磨き。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　黄褐色。
36—4	SK138	甕	口径18	頸部は「く」の字形に屈曲すると思われる。口縁部は複合口縁で、上半部は肥厚し、わずかに外傾する。口唇部の断面はわずかに角張る。		内外面ともヨコナデ。	胎土　大粒の砂粒含む。焼成　不良。色調　外面黒色、内面黄灰色。外面スス付着。
36—5	SK138	甕	口径16.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。口縁端部はやや肥厚し、平坦面をなす。胴部はほぼ球形。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。肩部はハケ目の後ヨコナデ。胴部上半は横、縦方向のハケ目。以下不明。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下ヘラ削り。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　外面黒色、内面黄褐色。外面スス付着。
36—6	SK139	底部	底径9.2	底部は平坦で、胴部はやや開いて伸びる。		外面　胴部は縦方向のヘラ磨き。胴部と底部の境はヨコナデ。底部はナデ。 内面　不明。	胎土　砂粒含む。焼成　良好。色調　外面黄褐色、内面　灰色。
36—7	SK139	甕	口径27.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外反し、端部は平坦面をなす。		不明。	胎土　大粒の砂粒含む。焼成　不良。色調　灰白色。
36—8	SK141	甕	口径17.2	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外傾する。頸部に比べ口縁部上端は器壁が薄い。		外面　全面ヨコナデ。 内面　口縁部上半ヨコナデ。口縁部下半横または斜方向のハケ目。	胎土　大粒の砂粒含む。焼成　良好。色調　茶褐色。外面スス付着。
36—9	SK146	肩部？	頸部径17.4	胴部はかなり張ると思われる。		外面　肩部はヨコナデ。以下縦方向のハケ目。 内面　頸部ヨコナデ。以下ハケ目の後ナデか。	胎土　小砂粒わずかに含む。緻密。焼成　良好。色調　灰白色。

挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
36—10	SK153	甕	口径19.4	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。口縁端部はやや肥厚して平坦面をなす。胴部はほぼ球形。		外面　口縁部から肩部にかけてヨコナデ。胴部上半は横方向のハケ目の後ヨコナデ。胴部下半は縦方向のハケ目（単位10）。内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。以下横、斜方向のヘラ削り。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　外面灰褐色、内面　灰色。外面スス付着。
36—11	SK155	甕	口径21	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁。		外面　口縁部上半はヨコナデ。他は不明。	胎土　小砂粒含む。粗。焼成　不良。色調　灰黄色。
37—1	SK127	杭状木製品	長216.8 径10.4	先端を加工し、尖らせる。		先端を削って加工。	心持材使用。
37—2	SK127	櫂状木製品	現存長158.4 幅5.6～10 厚0.8～4.4	先端が広くなり、ていねいに加工する。全体に扁平。		表裏面を削る。	
37—3	SK151	丸木弓	現存長121.2 径　2.6	丸木をそのまま利用し、先端に弓筈を作り出す。		弓筈近くを削る。	心持材を使用。
38—1	SK156	甕	口径29	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部はわずかに肥厚し、平坦面をなす。胴部はわずかに張ると思われる。		外面　全面ヨコナデ。 内面　不明。	胎土　小砂粒含む。焼成　不良。色調　外面灰白色、内面　黒灰色。
38—2	SK156	甕	口径17	頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外傾する。		外面　全面ヨコナデ。 内面　口縁部ヨコナデ。頸部横方向のヘラ磨きか。	胎土　小砂粒含む。焼成　良好。色調　外面白黄褐色、内面　黒茶褐色。
38—3	SK159	壷？	口径15.2	頸部は「く」の字形に屈曲すると思われる。口縁部は複合口縁で上半は内傾する。口縁端部はやや肥厚し、平坦面をつくる。		内外面ともヨコナデ。	胎土　小砂粒含む。粗。焼成　良好。色調　灰色。
38—4	SK163	壷	胴部径30	胴部はかなり張る。	肩部に4条のヘラ描き平行沈線文を入れる。上から1条目と2条目の沈線文の間には2列の竹管文を入れる。肩部にはさらにこの沈線に直交する3本のヘラ描き平行沈線を何ケ所かに配す。	外面　全面ハケ目の後ヘラ磨き（肩部にわずかにハケ目残る）。 内面　全面ナデ。肩部に指頭痕あり。	胎土　小砂粒多く含む。焼成　良好。色調　黄灰色。
38—5	SK163	建築部材	長13 幅5.2	上端はホゾ状に削り出す。		ホゾの周辺は削り。	

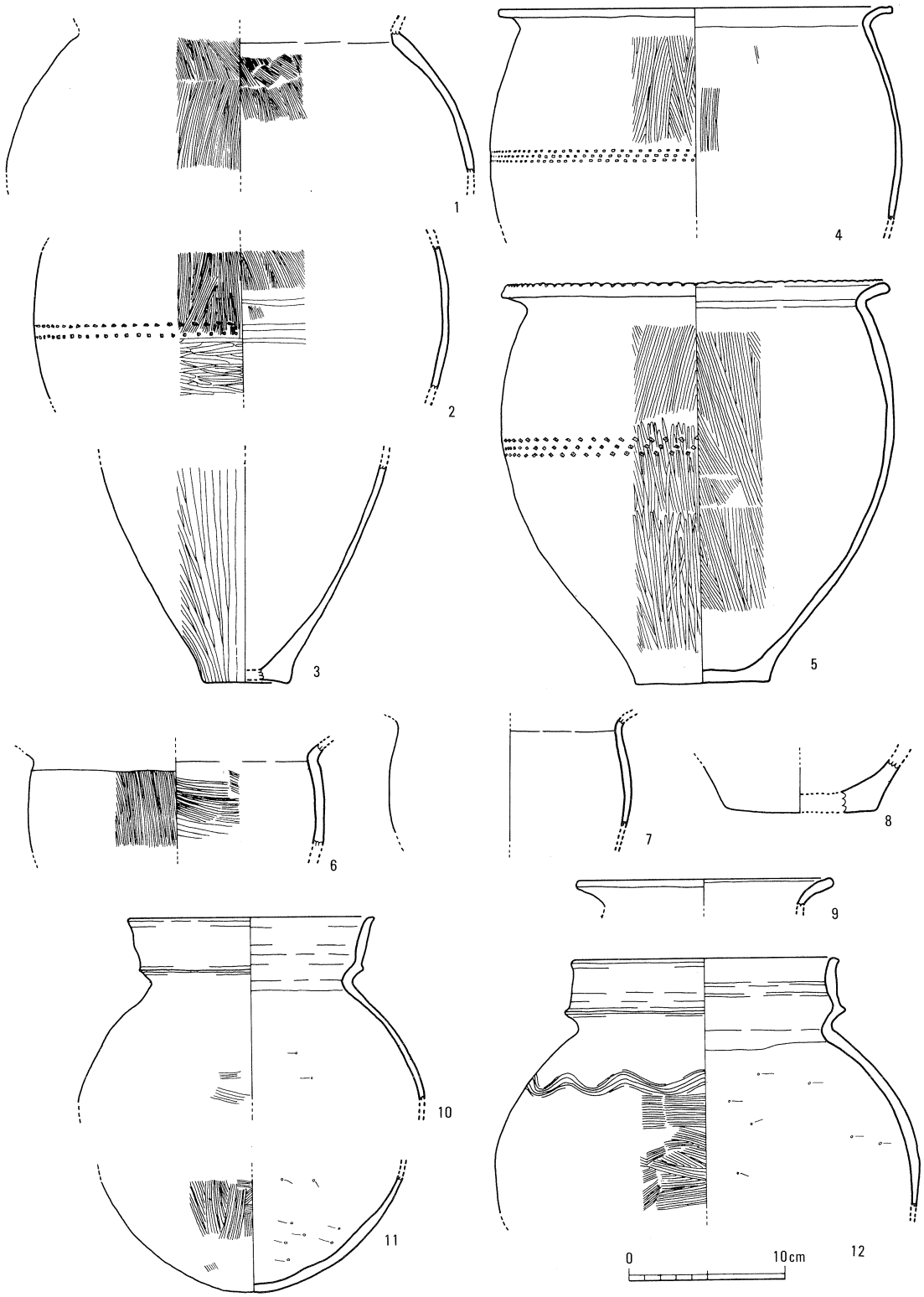
挿図番号	出土遺構	器種	法量（cm）	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
38—6	SK172	底部	底径7	底部はほぼ平坦で、胴部は内湾気味に伸びる。		不明。	胎土　やや大粒の砂粒含む。 焼成　不良。 色調　外面灰褐色、内面黄褐色。
38—7	SK163	壷の底部	底径7.6	底部はほぼ平坦で、胴部は大きく開いて伸びる。胴部はかなり張ると思われる。		外面　全面横方向のヘラ磨き。 内面　粗いハケ目（単位6）の後、粗いナデ。	胎土　砂粒非常に多く含む。 焼成　良好。 色調　外面茶褐色、内面黄褐色。
38—8	SK163	鉢	口径18.2 底径6.9 高12.2	底部はほぼ平坦で、胴部は内湾して伸び、口縁部に至る。口縁端部は平坦面をなす。		外面　横方向のヘラ磨き。 内面　上半は横方向のヘラ磨き。下半は斜方向のヘラ磨き。	胎土　小砂粒含む。 焼成　良好。 色調　黒灰色。
38—9	SK179	底部	底径7.3 胴部径26	底部はわずかにアクセントをもち、平底の痕跡が残る。胴部はほぼ球形。		外面　全面縦、斜方向のハケ目（単位13）。一部ナデ。 内面　胴部は横方向、底部は縦方向のヘラ削り。	胎土　極小砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面暗茶褐色、内面白灰色。
38—10	SK179	底部	底径6.8 胴部径28	底部はわずかにアクセントをもち、平底の痕跡残る。胴部はほぼ球形。		外面　全面縦、斜方向のハケ目（単位13）。一部ナデ。 内面　全面横方向のヘラ削り。底部近くに指頭痕残る。	胎土　極小の砂粒含む。 焼成　良好。 色調　黄褐色。
39—1	SK181	甕	口径15.7 底径3.7 高17.4	底部はわずかにアクセントをもち、平底の痕跡を残す。胴部はほぼ球形。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部は上方につまみ上げ、口嘴状を呈す。		外面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。他は不明。 内面　口縁部から頸部にかけてヨコナデ。胴部は横、斜方向のハケ目。底部に指頭痕あり。粘土紐積痕跡明瞭。	胎土　小砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面白黄褐色。外面スス付着。
39—2	SK182	甕の底部	底径7.8	底部はわずかに上底風。胴部は内湾して伸びる。		外面　胴部はナデか。胴部と底部の境および底部はヘラ削り。 内面　ハケ目か。	胎土　大粒の砂粒多く含む。 焼成　良好。 色調　外面黒色、内面黄褐色。
39—3	SK190	杭状木製品	長31 径2.8	先端は円錐形。		先端を削る。	心持材使用。
39—4	SK188	壷	底径10.6	底部はほぼ平坦で胴は大きく張る。最大径は器高の½付近にあると思われる。	頸部と肩部の境に3条のヘラ描平行沈線文、各肩部に有軸羽状文。	外面　全面ヘラ磨き。 内面　肩部と胴部の境には指押圧痕あり。肩部から胴部上半にかけてナデ。胴部下半から底部にかけて横方向の粗いハケ目（単位6本）。部分的にナデ。	胎土　大粒の砂粒多く含む。密。 焼成　良好。 色調　外面暗茶褐色。内面　黄褐色。



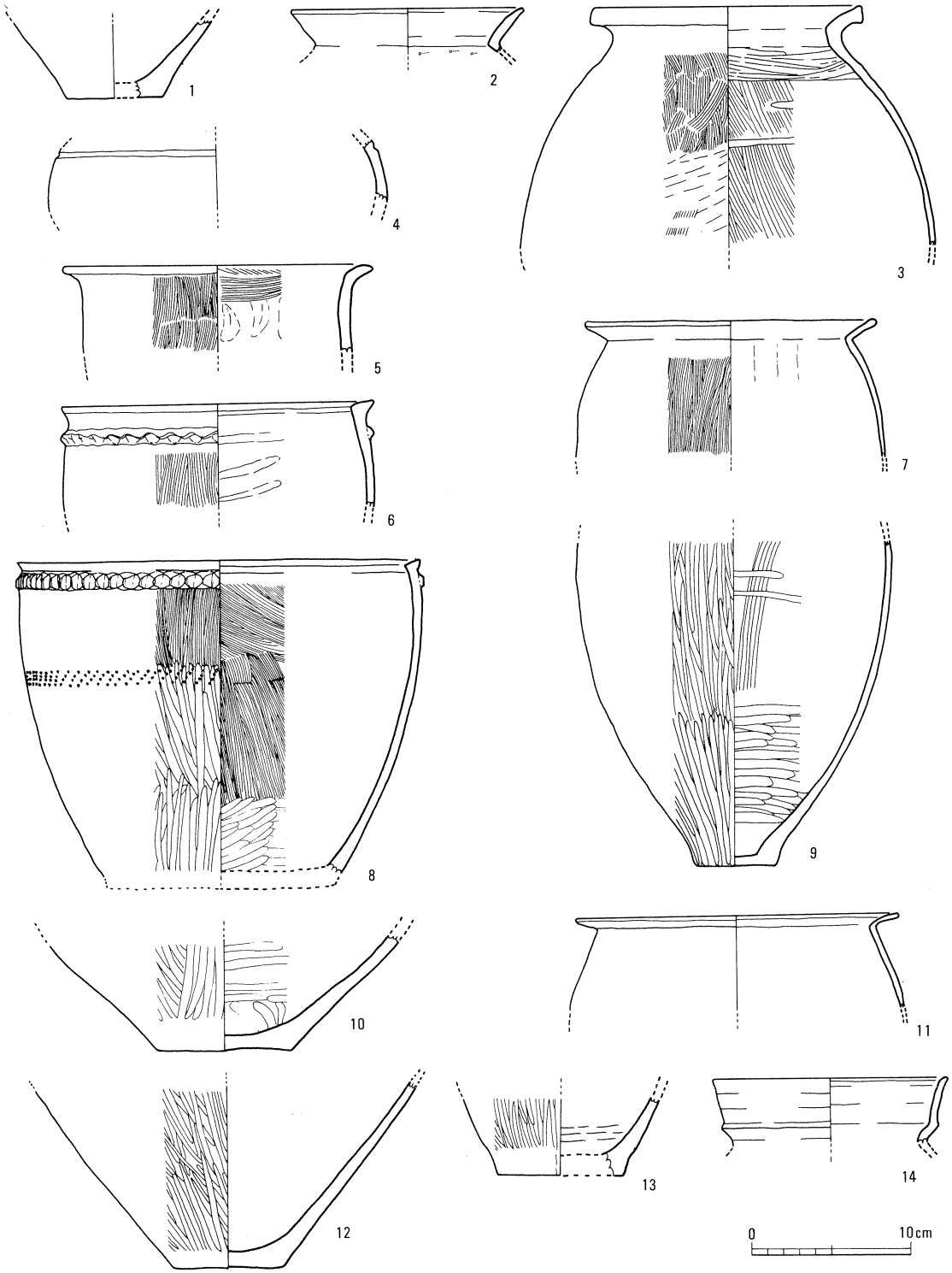
第30図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ03(8)、06(1～6.9)、07(7)出土遺物実測図



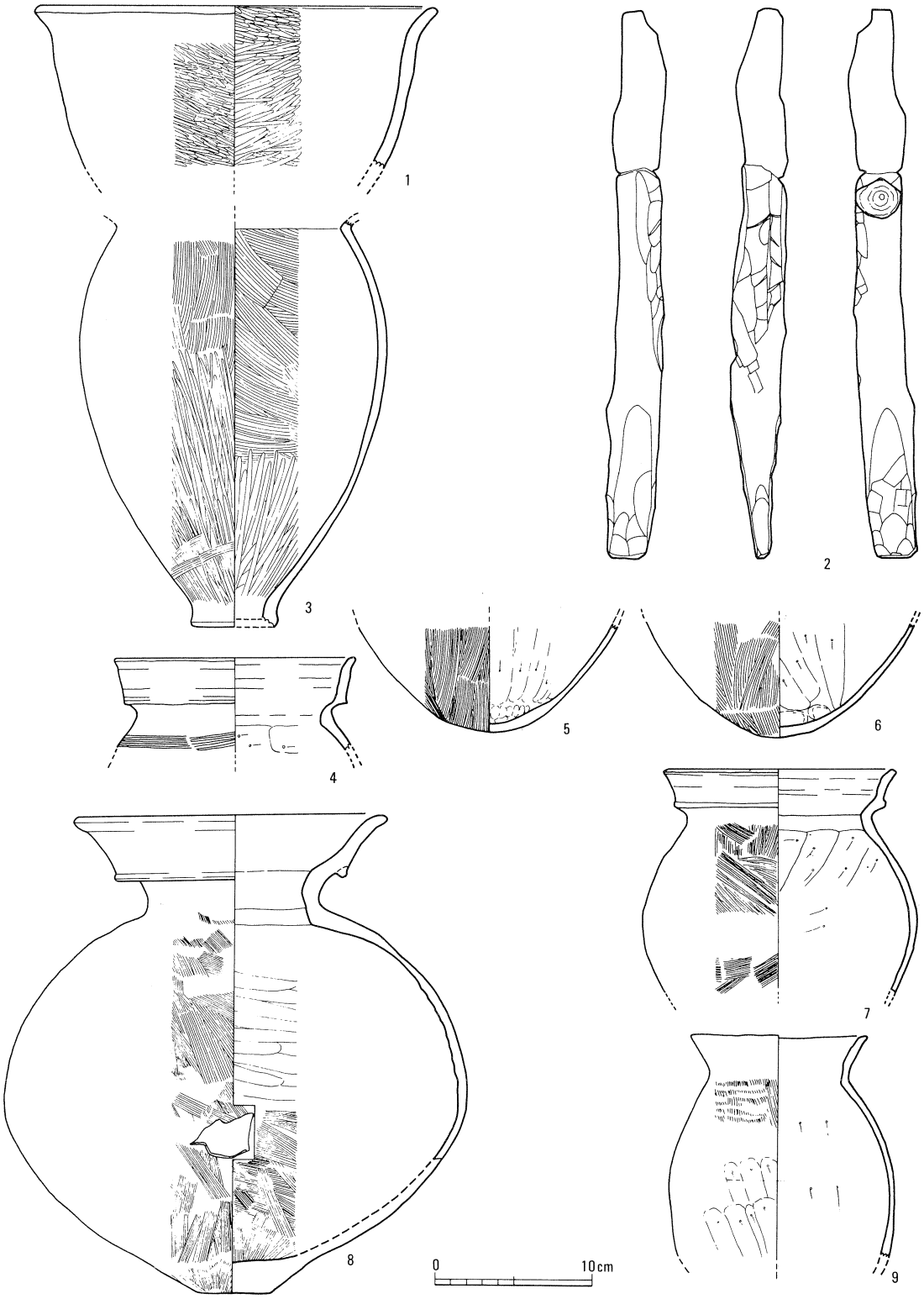
第31図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ11(1.2)、16(3)、17(4)、18、(5.6)
21(7.8)、23(9)、27(10)、28(11～13)出土遺物実測図



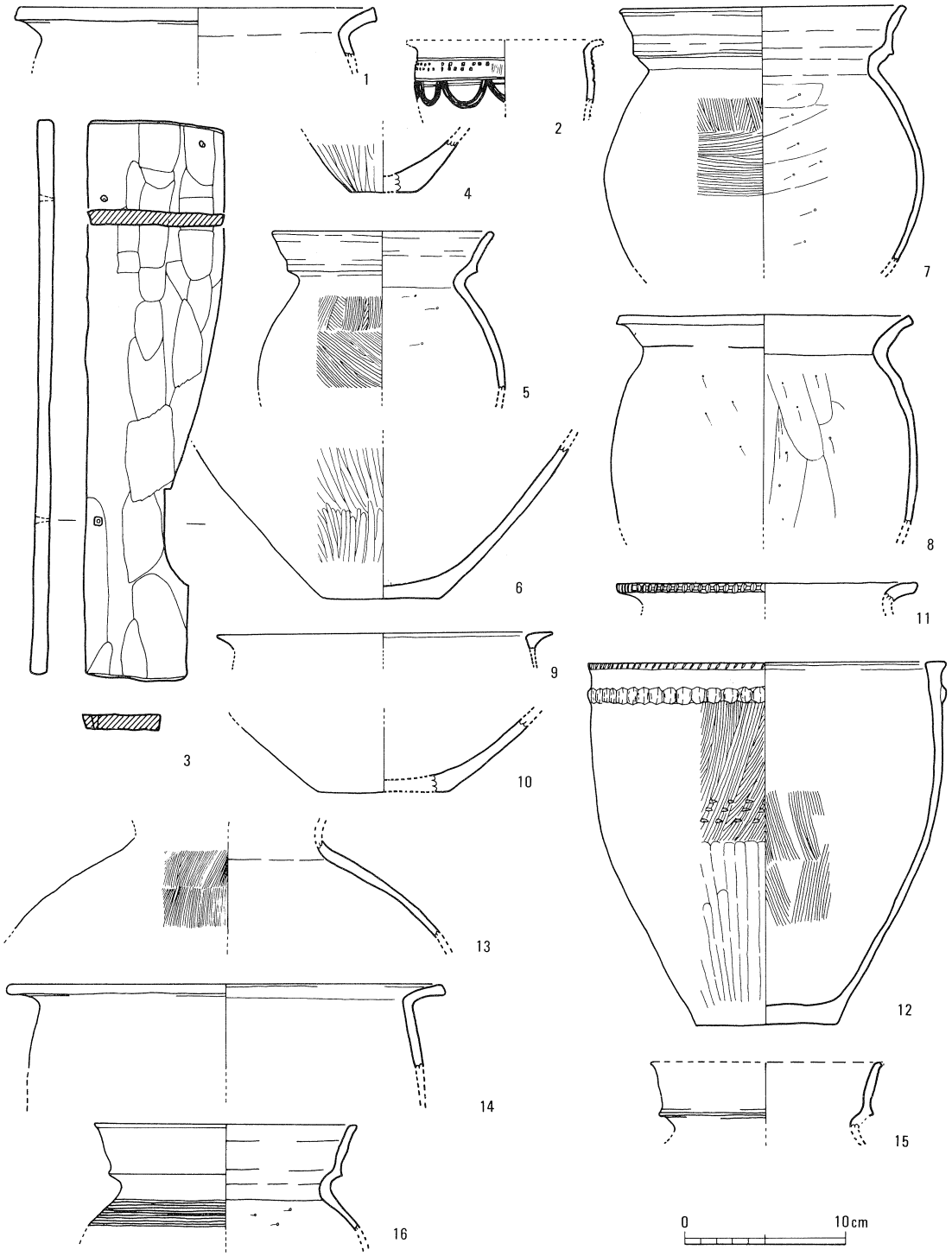
第32図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ28(１～３)、31(４～８)、34(12)、37(９～11)出土土器実測図



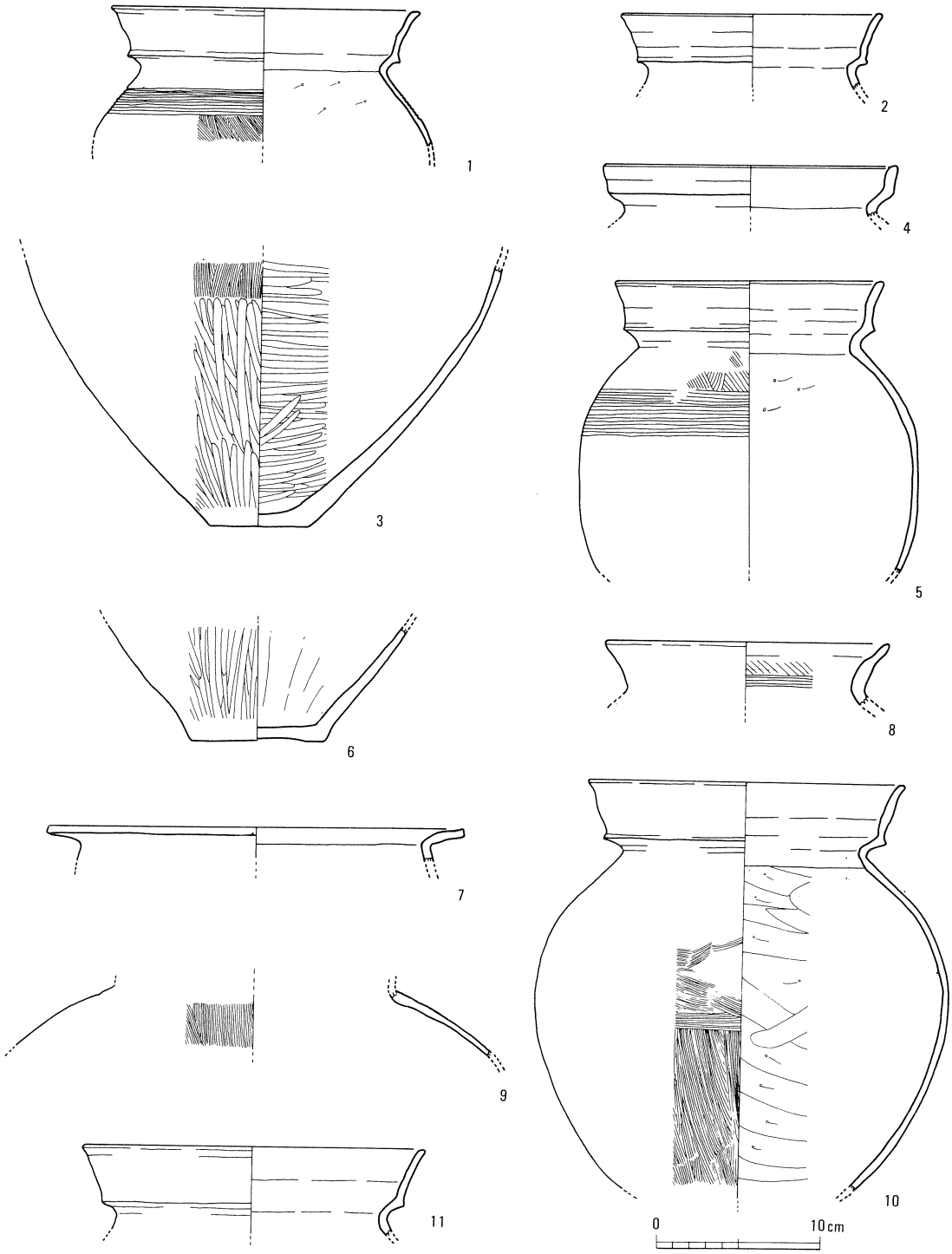
第33図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ38(1)、48(2)、63(3)、65(４、５)、68(６～９)、71(10)、74(11)、79(14)、81(12、13)出土土器実測図



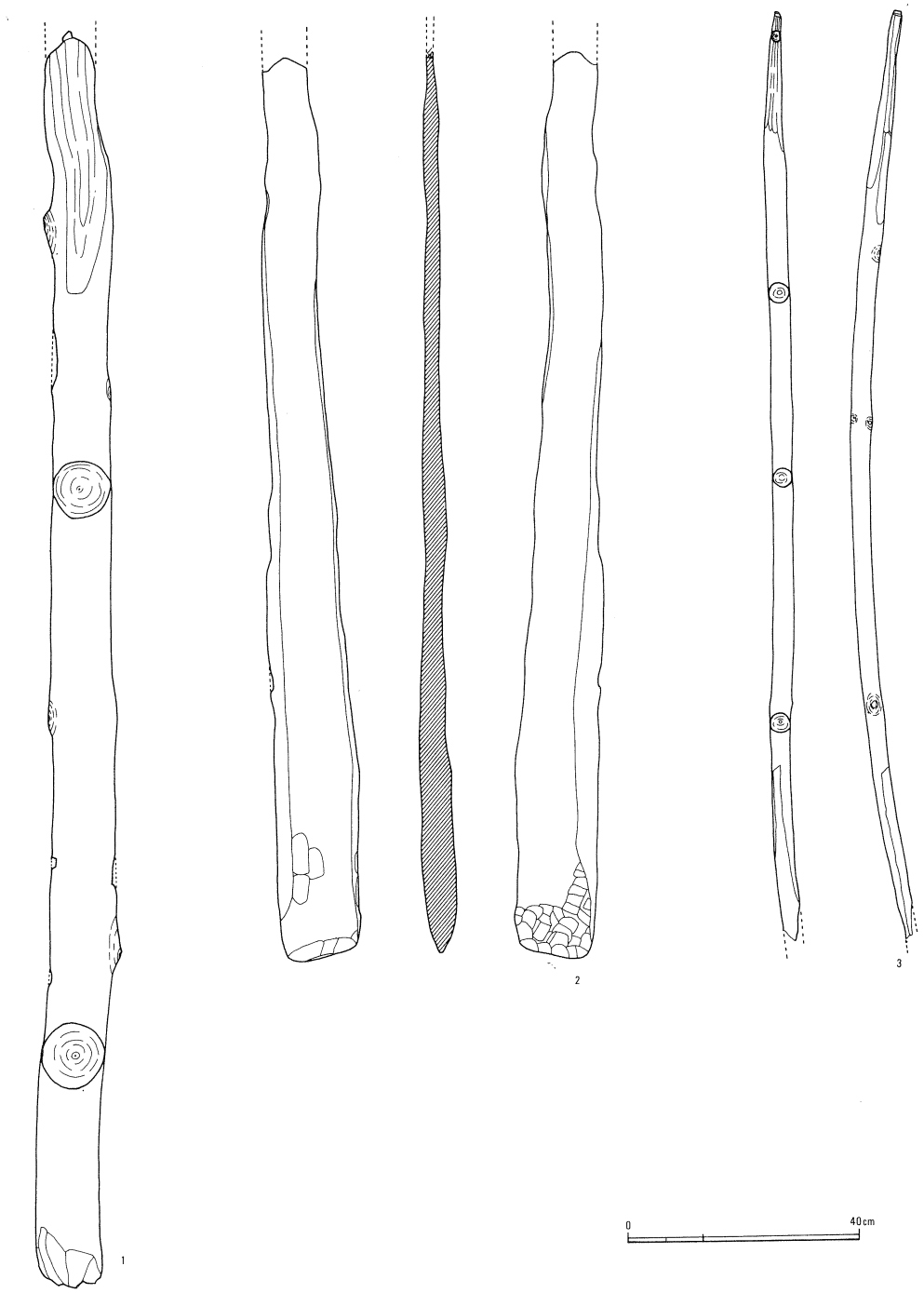
第34図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ88(1、2)、92(3)、97(7)、99(4～6)、110 (8、9)出土遺物実測図



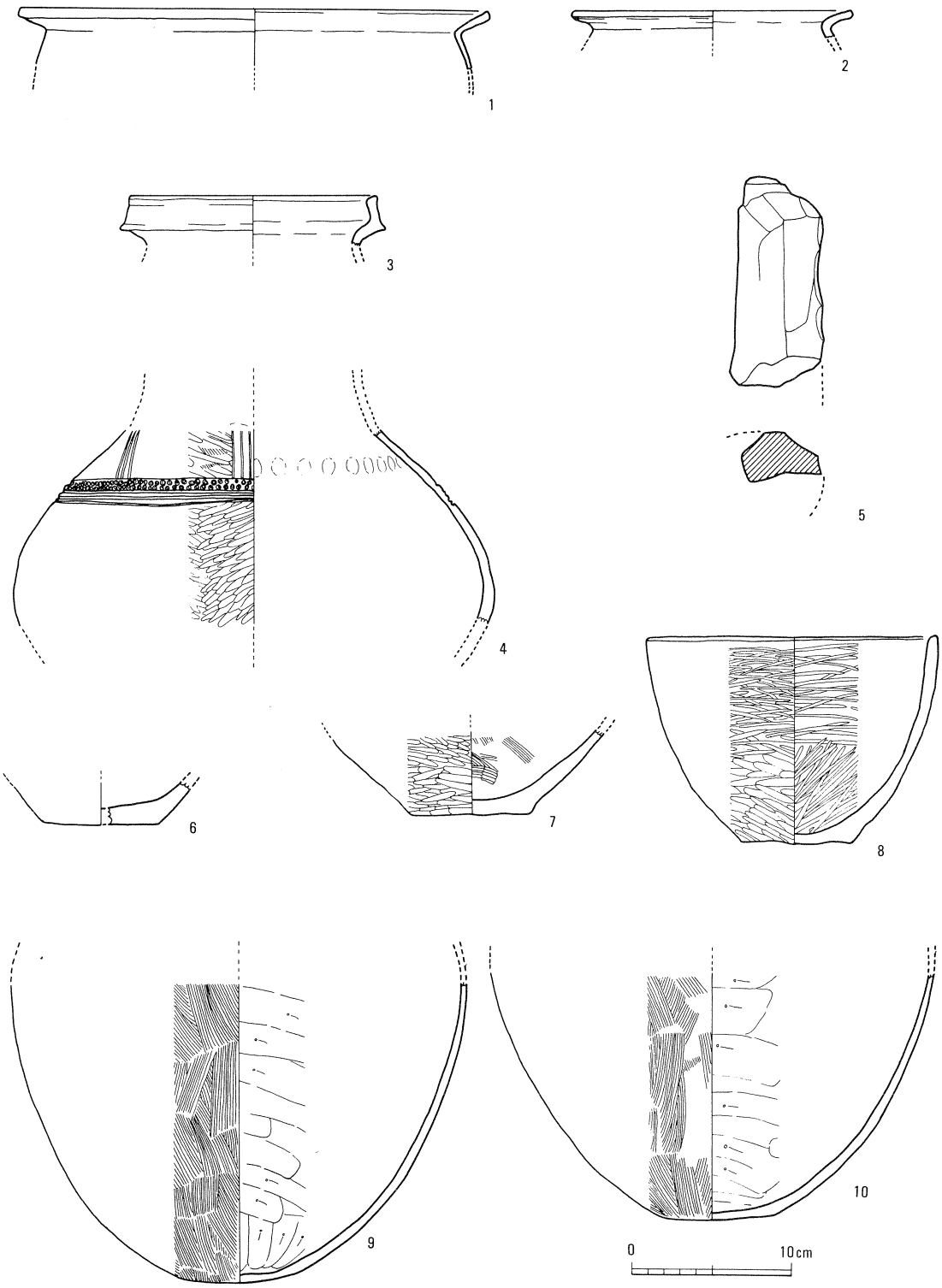
第35図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ112(1、2)、113(7、8)、116(６)、118(3、4)、120(５)、124(９、10)、125(11、12)、22(13)、130(14)、131(15、16)出土遺物実測図



第36図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ132(１、２)、136(３)、138(４、５)、139(６、７)、141(８)、146(９)、153(10)、155(11)出土土器実測図



第37図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ127(１、２)、151(３)出土木製品実測図



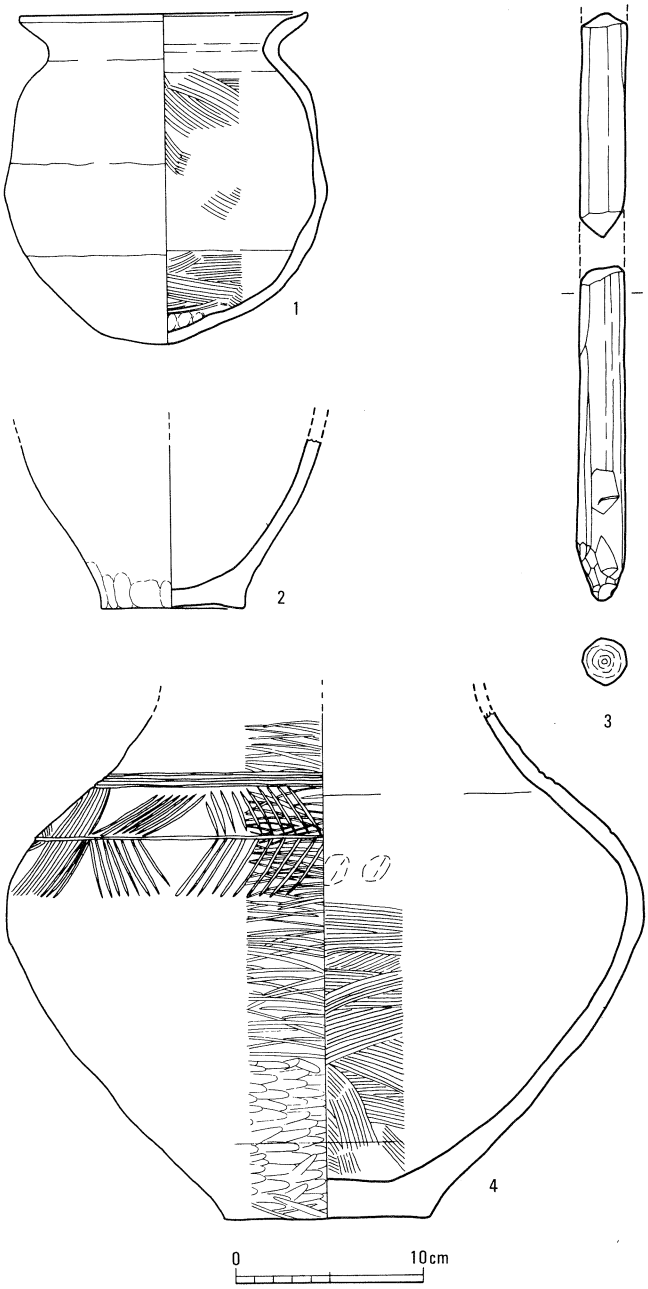
第38図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ156(１、２)、159(３)、163(４、５、７、８)、172(６)、179(９、10)出土遺物実測図

土壙群の時期と範囲

以上のようにⅠ区からは土壙192、溝状遺構1が検出された。

土壙は複雑に重っており、すべての土壙が一度に掘られたのではない。土壙内から出土した土器をみると、最も古いと思われるものはＳＫ163、ＳＫ188などで弥生時代 前期 後半と考えられる。また最も新しいと思われるものはＳＫ37などで古墳時代前期と考えられる。このようにこの土壙群は弥生時代前期から古墳時代前期まで長期間にわたって作られたものである。しかしながら、弥生時代中期前葉、古墳時代初頭（いわゆる鍵尾式土器の時期）のものはなく、全ての時期を通じて作られたものではない。これらの土壙を時期別に分けると、弥生時代前期後半７、同中期中葉53、同中期後葉１、同後期３、古墳時代前期（古谷式期）21で、特に弥生時代中期中葉と古墳時代前期の土壙が多いことがわかる。

この土壙群は前述のとおりＩＢ区の溝状遺構より西には広がっていないことから、この溝状遺構は土壙群の西の境界となっていると思われる。また、ＩＡ区南の用水路以南でも土壙が検出されていないことから、土壙群の広がりはこの用水路付近までと思われる。北は、Ⅱ区から土壙が検出されていないことから、県道竹矢－八重垣線あたりが境界と思われる。東の境界は不明だが、出雲国分尼寺の調査でⅠ区から約200m離れた中竹矢集落の南側の水田中からは土壙が検出されていない。このことから、少なくとも土壙群はこの付近まで広がっていないことがわかる。



第39図　中竹矢遺跡Ⅰ区ＳＫ181(1)、182(2)、188(4)、190(3)出土遺物実測図

Ⅱ区

遺構　Ⅱ区は三段の階段状加工段があり、それぞれに大小のピット群を検出した。1段目は標高4*m*で南にいくにしたがい低くなり、標高2*m*ほどになる。2段目は標高6*m*でほぼ水平な加工段である。最も多くのピットを検出した。この中に後述するＳＢ01が含まれる。3段目は標高10*m*の高さで、南側2段目の加工段までの間9*m*ほどが後世削られている。現在は幅5*m*残存しているが元来、遺構はもう少し南にも延びていると考えられる。

また、2段目、3段目の加工段で検出されたＳＢ01以外のピット群の多くは東側未発掘区に続くものであろう。

ＳＢ01（第41図　図版）

Ⅱ区中央の宅地跡より一段高いところで検出された2間（4.4*m*）×2間（3.2*m*）の掘立柱建物跡で、柱間距離は桁行220*cm*、梁間160*cm*を測る。柱穴は平面不整円形プランで直径30～40*cm*、深さ20～60*cm*のもの7個が検出されている。建物軸方位はＮ－32°－Ｅを指している。

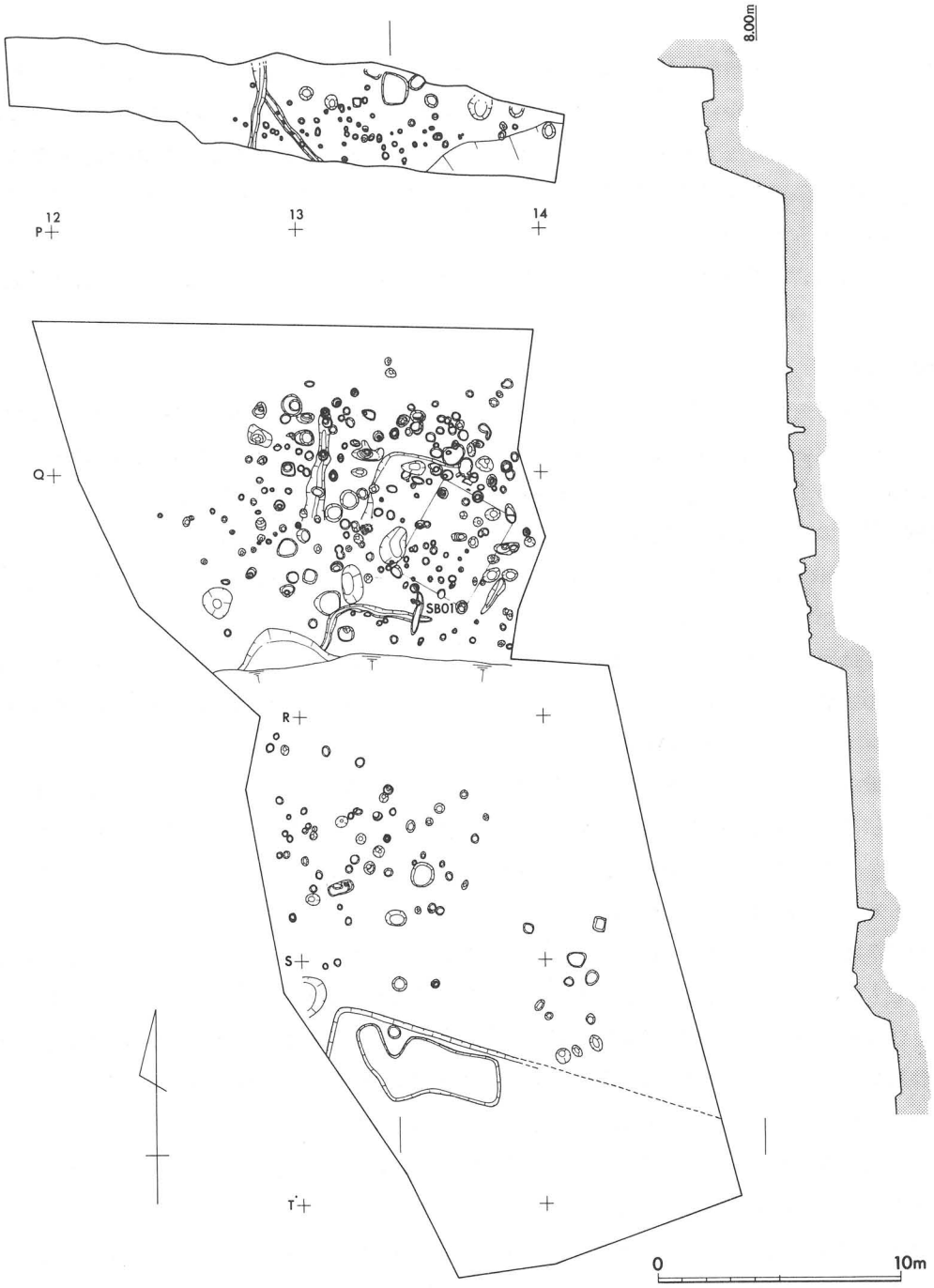
遺物　Ⅱ区の出土遺物は、発掘区内の全域にわたり出土した。（図版104）

図示した土師器は6個体ある（第42図1～3、第43図4～6）。いずれも、Ⅱ区の中で最南の最も低い加工段から出土した甕形土器である。

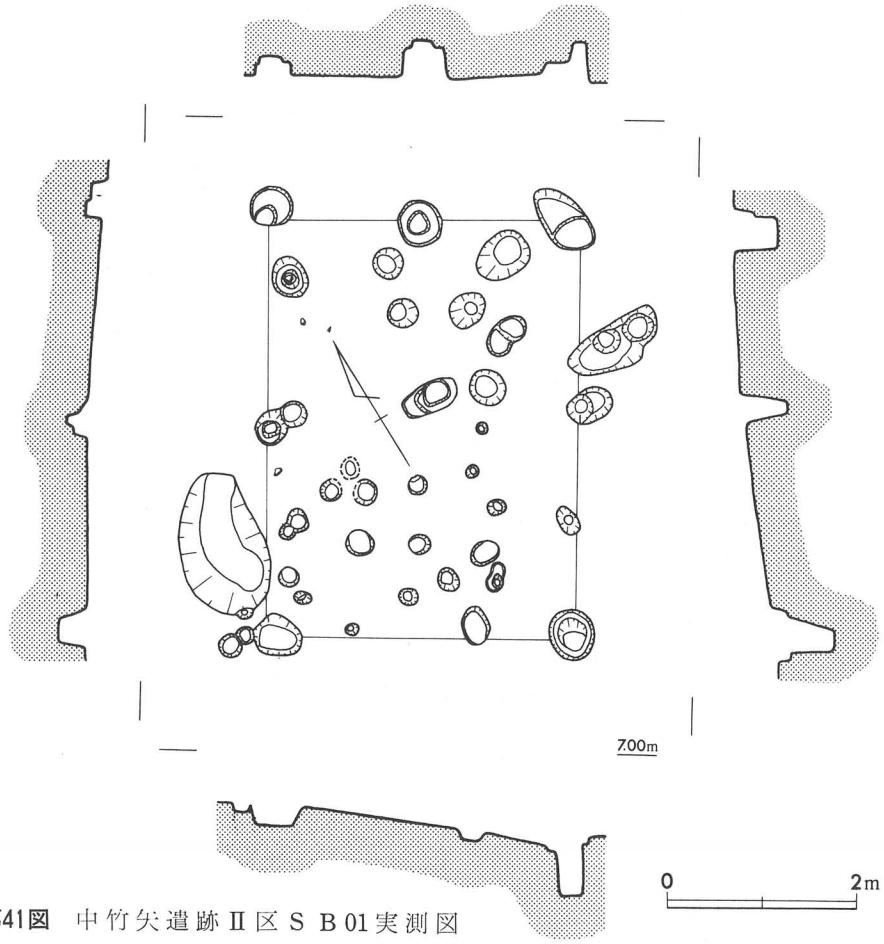
第42図1は器高26.8*cm*、口径19.0*cm*で、胴部中央に最大径があり26.0*cm*を測る。底部は丸底。口縁部はくの字形で厚くならない。外面は頸部より下をタテ方向にハケ目調整。内面は口縁のみハケによるヨコナデ調整。頸部と底部あたりはヨコ方向、その中間はタテ方向にヘラ削り。2も1と同様な甕の破片である。3も1と同様な丸底の底部片である。第43図4は大形の甕で口径は22.0*cm*、最大径は胴部にあり27.5*cm*を測る。5はやや小形の甕形土器で、口径17.5*cm*、胴部径19.5*cm*を測る。丸底を呈し、内面は頸部の下をタテ方向に、中ほどから底部にかけてはヨコ方向にヘラ削りを施している。6は口径28*cm*の大形の甕形土器である。

第44図7は大形打製石斧、8は敲石である。7、8とも2段目の加工段の覆土から、須恵器、陶磁器とともに出土し、遺構にはともなわない。現存部は長さ13.3*cm*、最大幅10.5*cm*、厚さ3.0*cm*を測る。頭部を欠いている。材質は硬質砂岩である。中央に第1次剝離面を残しながら、側縁部に粗い調整剝離を加える。8の材質は安山岩である。径は10.5×9.7*cm*、厚さ6.7*cm*の楕円形を呈す。手ごろな自然石を利用したものである。両面中央部に径約3.0*cm*の浅い敲打痕を、側面には一周する浅い敲打痕を残している。7はその特徴から縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのものであろう。8もほぼ同じ時期と考えられる。

第44図9～21は須恵器である。1段目、2段目の加工段の覆土中から出土し、直接遺構にともなうものはない。9、13、14、15、21は坏形、16、17、18、19は蓋形、12、20は盤形、10は頸部を欠く小形の壺である。蓋はつまみを欠くがかえりのないもので、復元口径19.3*cm*(16)、18*cm*(19)の大形のものと、それより小形のもの（17、18）がある。坏は高台のつかないもの（9）と低い高台がつくもの（13、14、15、21）とがあり、いずれも底部に回転糸切痕を残す。これらの須恵器は8世紀後半から9世紀代のものと考えられる。



第40図 中竹矢遺跡Ⅱ区遺構配置図

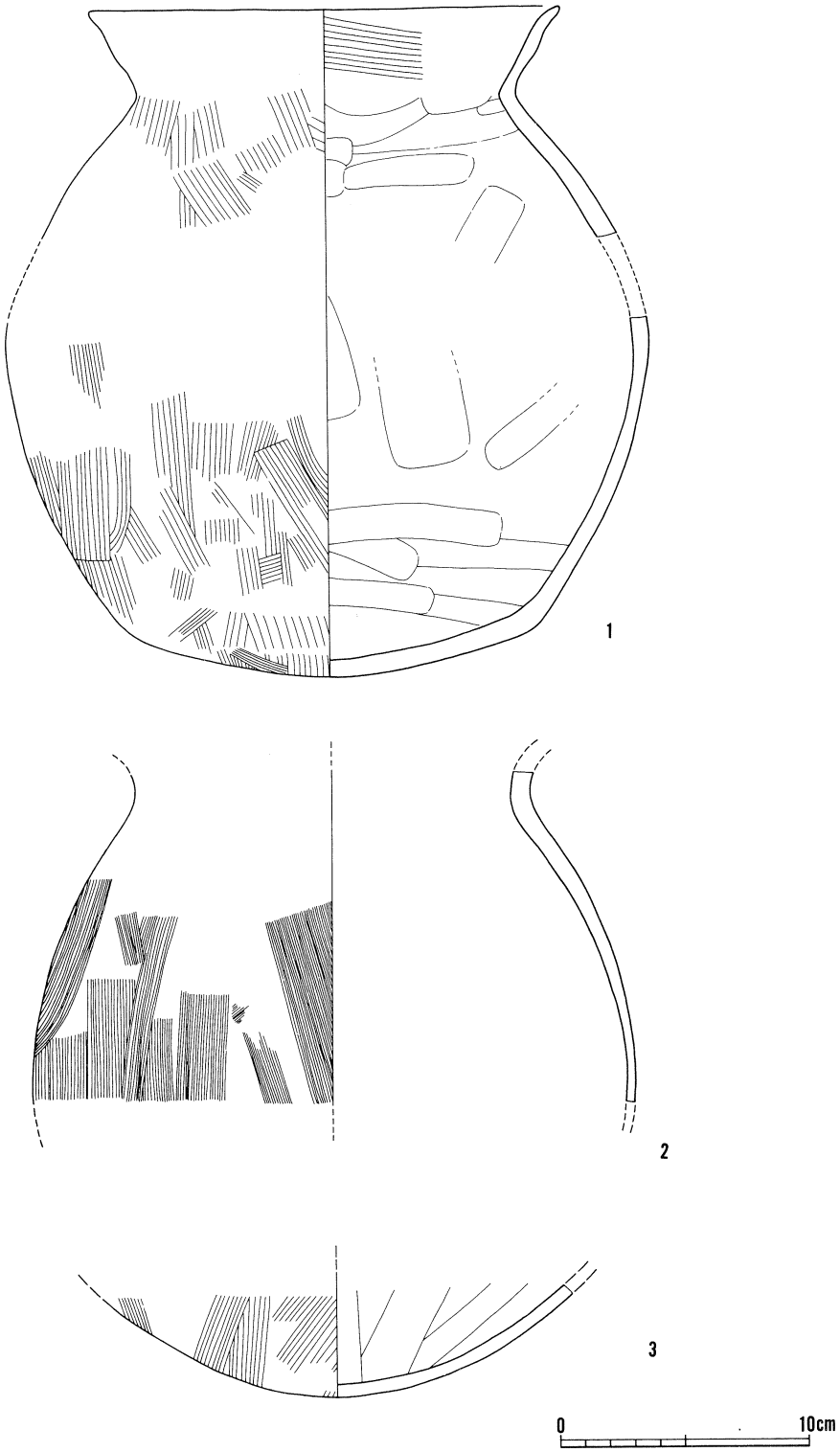


第41図　中竹矢遺跡Ⅱ区ＳＢ01実測図

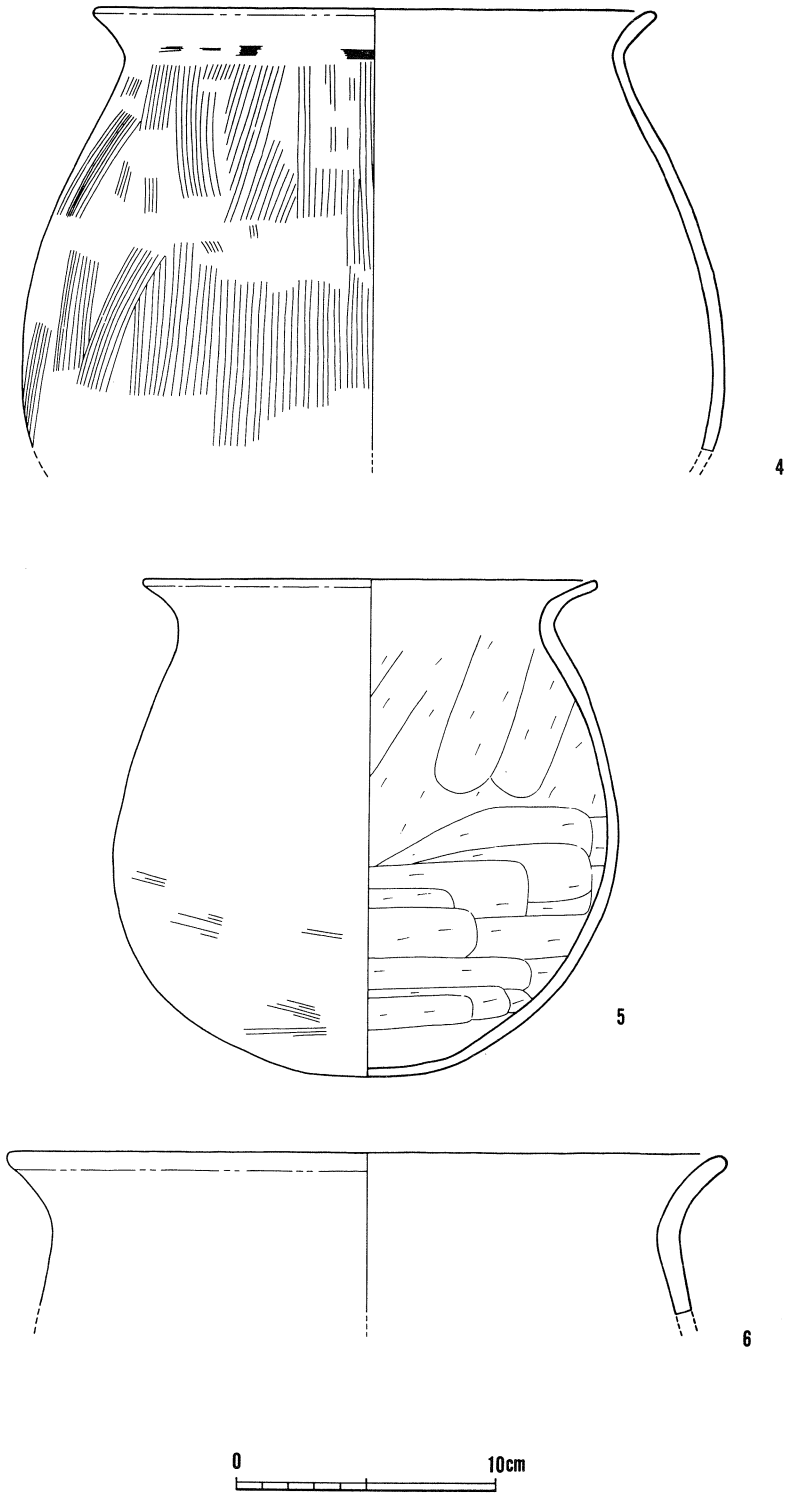
陶磁器第44図22～30は中・近世の陶磁器類である。このうち、確実に遺構にともなうものは24の中国製染付片である。第44図31の石製硯片と供伴している。碗の胴部であろう。他の陶磁器は、表採と耕作土中のものである。22は中国製青磁碗の破片である。ややくすんだ緑色青磁釉である。23は美濃、瀬戸地方で焼成された天目茶碗片。胎土は乳白色、茶褐色の釉。25、26、27は唐津焼の小皿片である。25は口唇部で縁溝はつかない。26は高台付近の破片で胎土目当が底部に残る。27は高台から体部にかけてのもので内面底部に砂目当が残る。いずれも薄緑色の釉で、慶長から元和頃の焼成と考えられる。28、29は伊万里系染付である。28は碗の底部で見入に大極圏図文が描かれている。29は砂金袋である。いずれも、江戸末～明治初期にかけてのものであろう。30は伊万里系青磁香炉で底部を失っている。

硯　第44図31は石製の硯である。現存するのは、6.0×5.5㎝、厚さ0.9㎝で、 池の部分を欠く破片である。黒色を呈した粘板岩製である。第44図24の中国製染付とともに二段目の加工段のピット内から出土した。

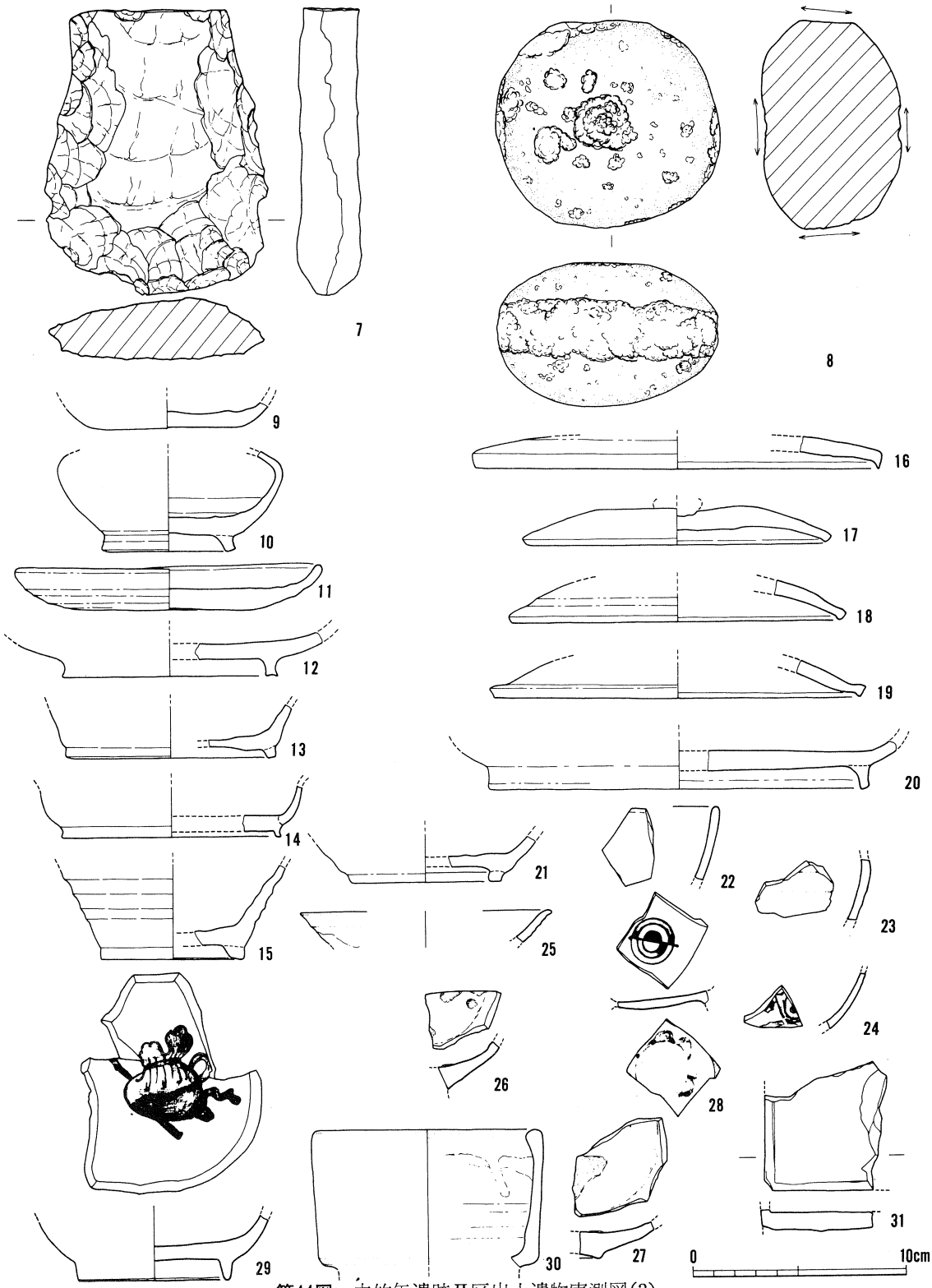
Ⅱ区で検出されたピット群の年代は、中国製染付の年代が示す如く16世紀末～17世紀初頭が下限であり、上限は奈良時代にさかのぼると考えられる。



第42図　中竹矢遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(1)



第43図　中竹矢遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(2)



第44図　中竹矢遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(3)

Ⅲ区

Ⅲ区は中竹矢遺跡の中でも丘陵部にあたる。東にむかいY字状につき出た馬の背状の丘陵にあり、標高は頂上部で約28m。意宇平野のほぼ全域を見下すことができる位置と高さである。

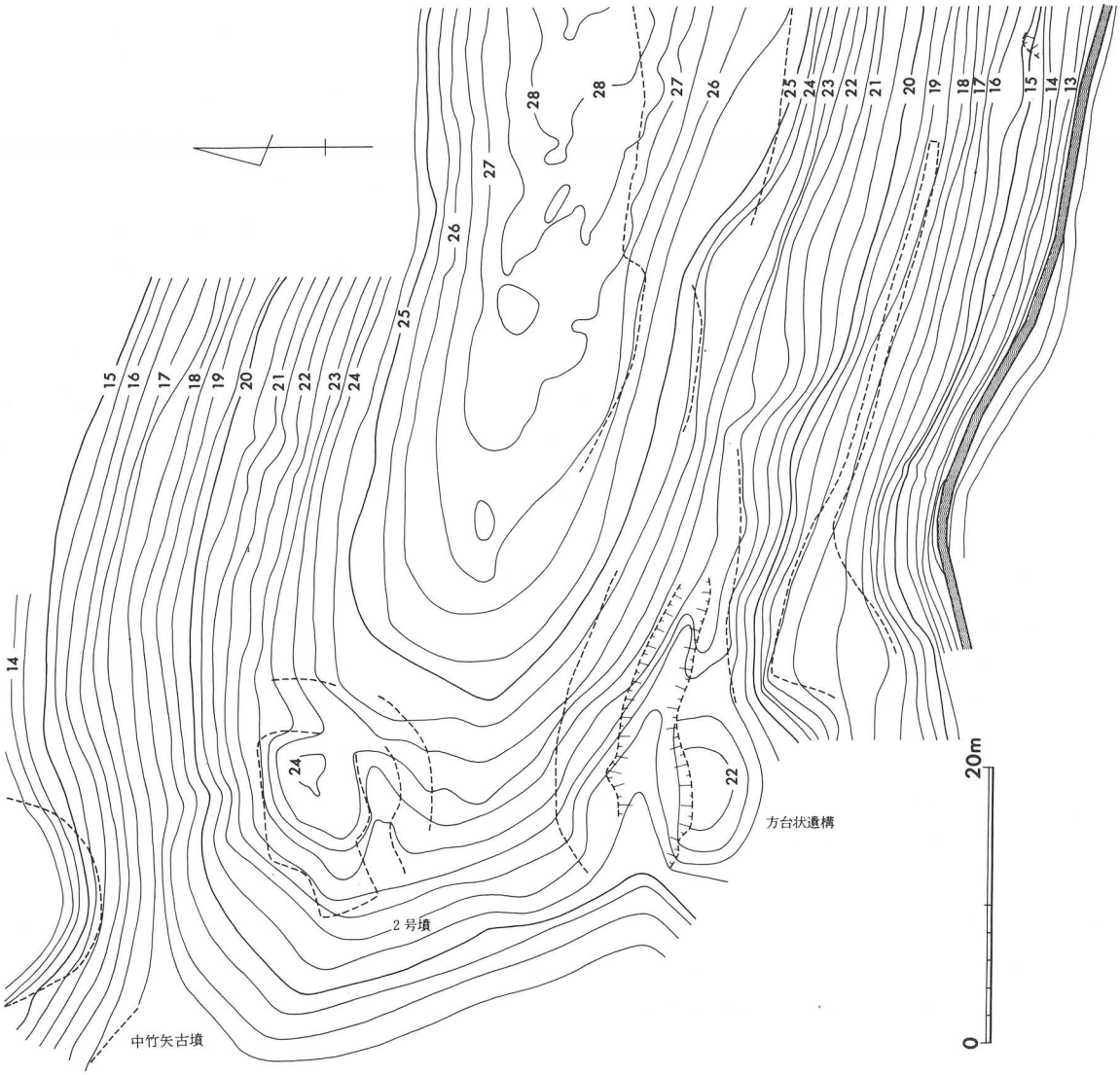
発掘調査区では、調査以前に、中竹矢2号墳と、同3号墳（後に方台状遺構と変更）が分布調査で確認され、頂上部には10×40mのかなり広い人工的と思われる平坦面があり、遺構の存在が予想された。また、発掘調査区外では、中竹矢2号墳の西に延びる丘陵上に、著名な前方後方墳中竹矢古墳（中竹矢1号墳）が知られており、方台状遺構の西には、一辺10m内外の方墳4基を確認し中竹矢古墳群として把握することとした。さらに、発掘調査区の東側には、社日古墳群（いずれも、一辺10m内外の方墳で2基存在）が周知の古墳として確認されていた。また、社日1号墳は、現在でも「社日さん」と称され、社日信仰に関する祭祀が毎年春秋の社日の日に行われている。さらに、方台状遺構の西南に隣接して「荒神さん」と称される神木があり、秋に付近の人々によって祭礼が行われている。このように、Ⅲ区は原始古代の遺跡ばかりでなく、民俗学的にも興味深い丘陵である。

Ⅲ区丘陵部で検出した遺構は、溝状遺構14、土壙31、前方後方墳、横穴2、方台状遺構、石組遺構、掘立柱建物跡2棟であった。このうち、土壙のほとんどは丘陵の頂部平坦面に集中し、ＳＫＯ８、ＳＫＯ９とそれを囲む溝は方形周溝墓と考えられた。また、ＳＫ27は礫床で、この丘陵が後世削平を受けていることを重視すれば、ＳＤ02に囲まれた墳墓の可能性がある。発掘調査以前の地形測量においても、わずかに盛り上りのコンターがみられ、築成当時は盛土を有した古墳であったとも考えられる。中竹矢2号墳は、全長14.0mという、現在のところ全国的にみても最小規模の前方後方墳であることが判明した。墳丘には明確な主体は確認することは出来ず、後方部直下にある中竹矢1号横穴との間に密接な関係があるように、両者の出土遺物からも考えられるにいたった。

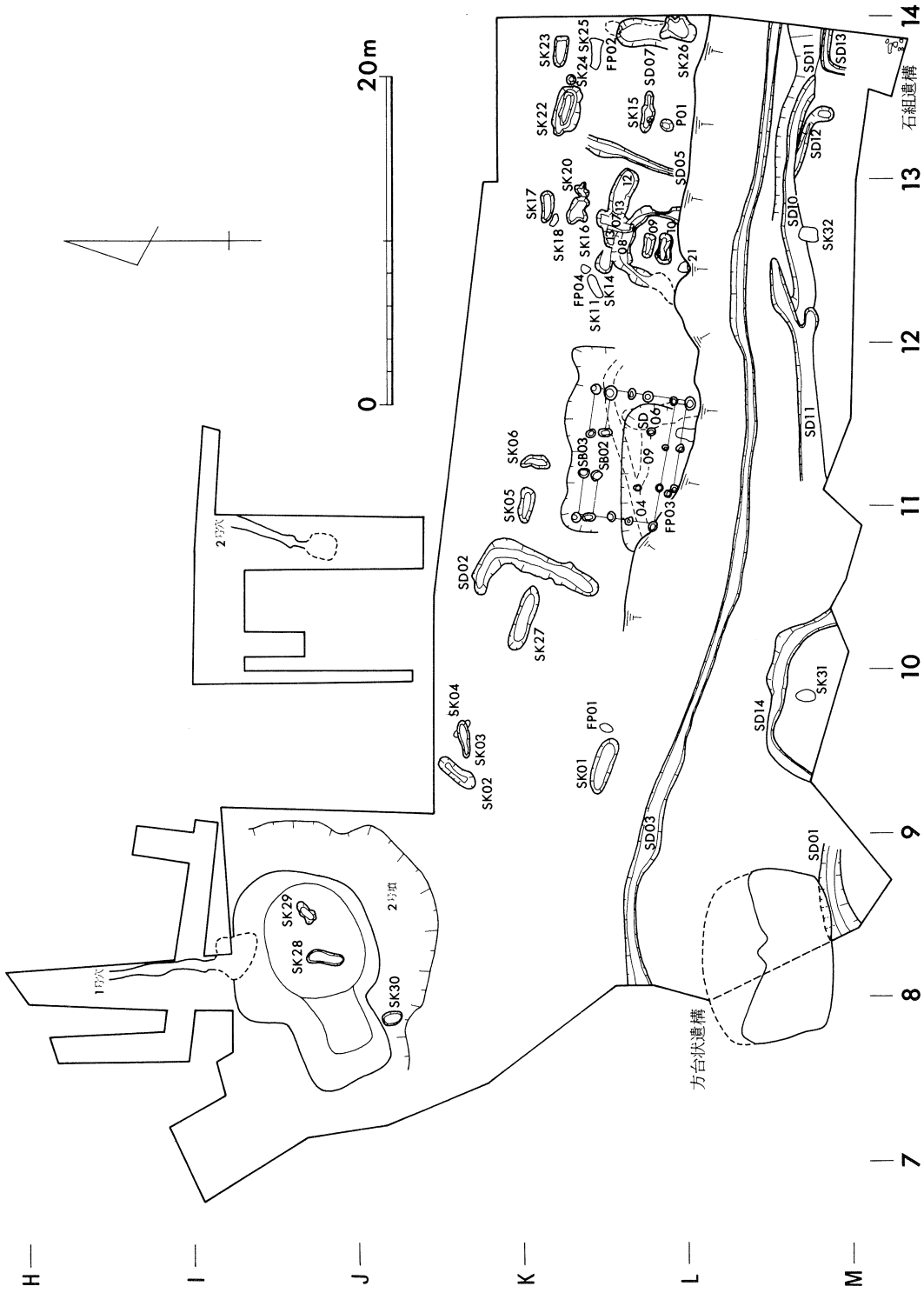
ＳＢ02（第47図）

Ⅲ区中央付近の丘陵部から南側斜面にかかる傾斜変換点に営まれているため、南側の一部が消滅している。2間（840cm）×3間（800cm）の東西棟で建物軸方位はＮ—11°—Ｅを示し、柱間距離

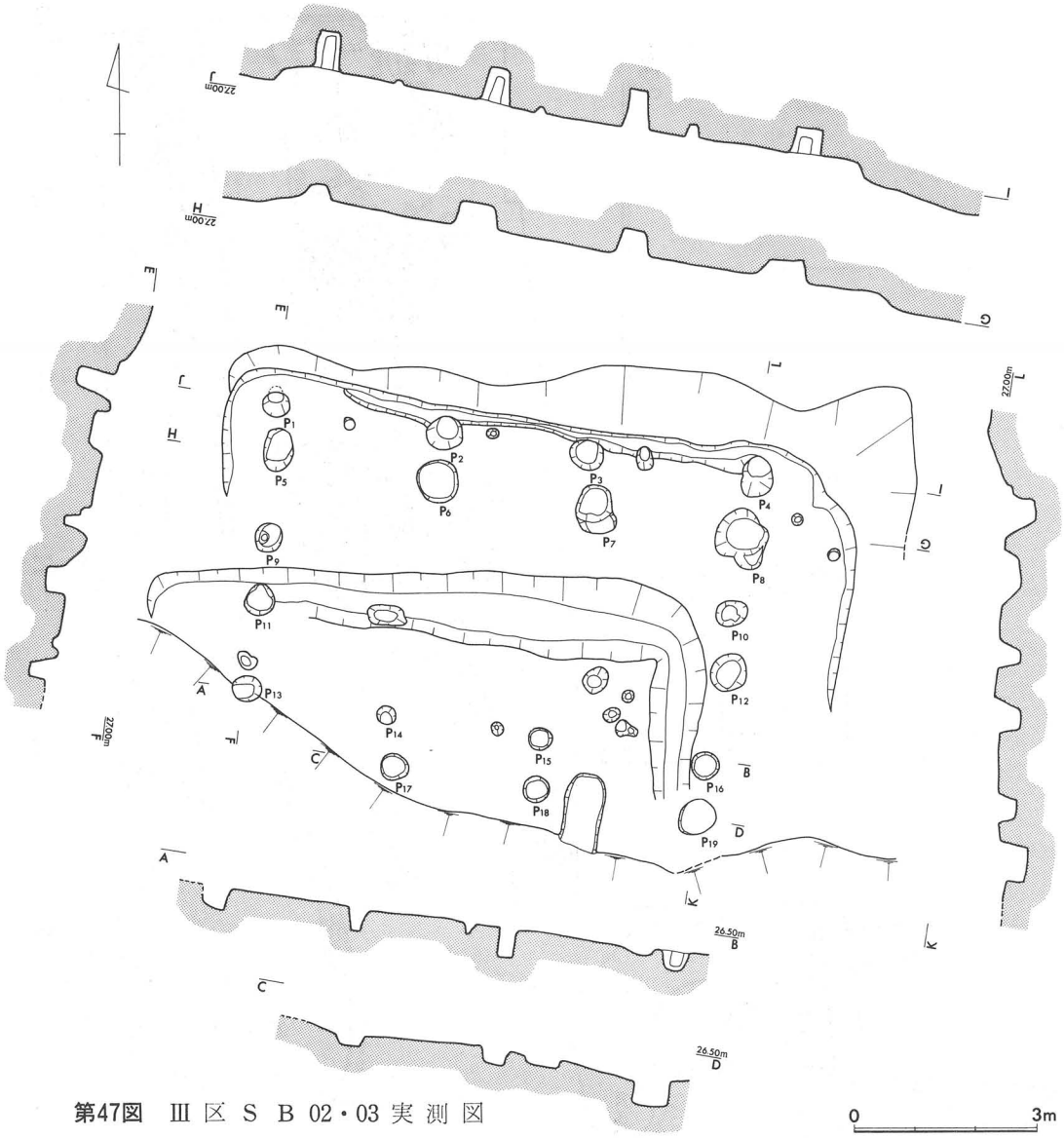
ＳＢ０２						ＳＢ０３					
ピット番号	上縁径		底径		深さ	ピット番号	上縁径		底径		深さ
5	70	50	46	32	26	1	48	42	26	27	62
6	76	72	58	56	36	2	60	55	36	34	58
7	58	60	38	43	42	3	58	50	37	38	65
8	86	80	52	54	32	4	50	70	36	40	44
11	50	52	38	42	33	9	46	48	38	32	41
12	60	64	48	33	38	10	50	44	24	30	38
17	48	45	38	34	18	13	48	40	22	34	36
18	44	44	34	32	26	14	32	30	20	18	36
19	62	60	51	60	40	15	40	37	27	30	48
						16	46	48	36	36	30



第45図 Ⅲ区地形測量図



第46図　Ⅲ区遺構配置図



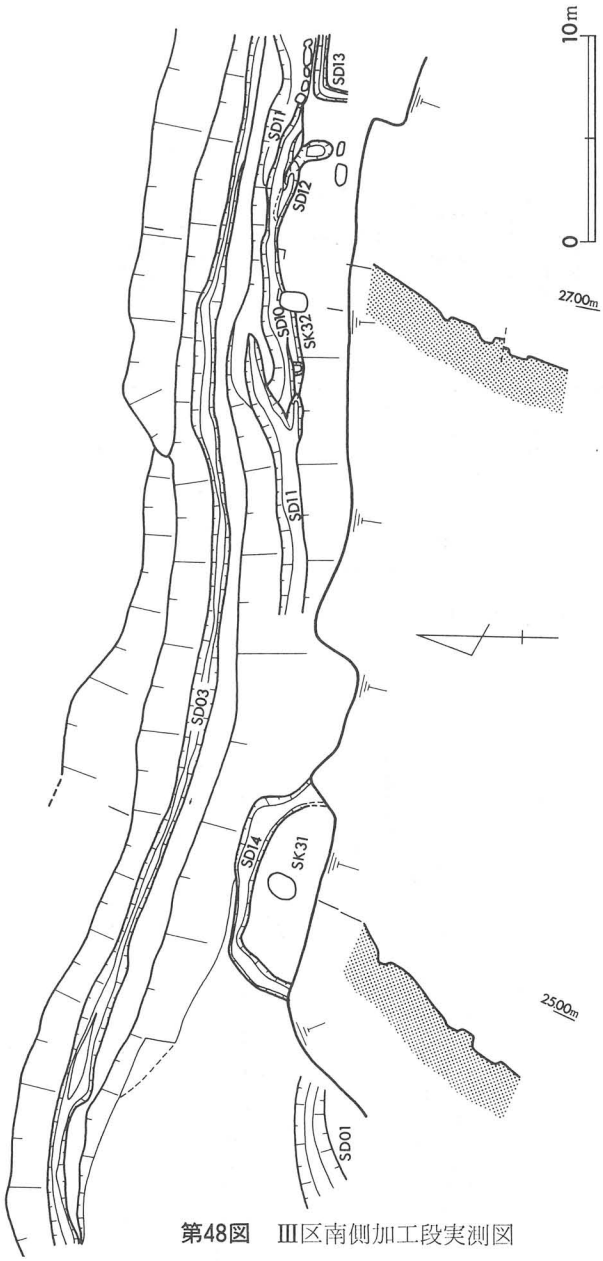
第47図　Ⅲ区ＳＢ02・03実測図

は桁行９尺（267*cm*）等間、梁行８尺（237*cm*）等間になる。検出した９個の柱穴はいずれも不整形な円形プランですべて柱痕は残っていない。規模は前表のとおりである。

ＳＢ03（第47図）

ＳＢ02より北側に80*cm*ほどずれる形で重複して検出された２間（480*cm*）×３間（800*cm*）の東西棟で、建物軸方位はＮ—11°—Ｅを示し、柱間距離は桁行９尺（267*cm*）等間梁行８尺（237*cm*）等間になる。検出した10個の柱穴はいずれも不整形な円形プランで、すべて柱痕を残している。規模は前表のとおりである。

ＳＢ03には柱痕があり、しかも建物の位置が北側の周壁に接するように建てられていることから、ＳＢ02を建てかえたものがＳＢ03で、ＳＢ03はそのまま立ち腐れしたものと思われる。



第48図　Ⅲ区南側加工段実測図

ＳＤ01（第48図）

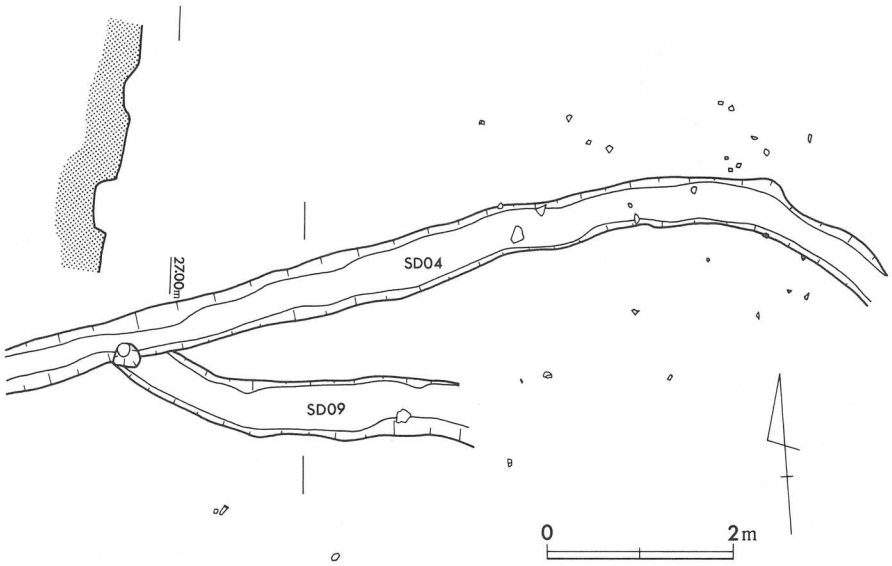
方台状遺構の盛土の下から検出した東西方向の溝である（第48図）。長さ約6.0m、幅1.5～2.0m、深さは30～70cm、第93図の13、14の土層がこの溝の覆土であると考えられる。性格は不明である。この溝の中より弥生式土器片が出土した（第97図、137、図版92）。復元した口径は約19.0cmで口縁部に浅い三条の沈線が入る。甕形土器片である。内面は頸部より下はヘラ削りが施されている。弥生時代後期前半のものである。

ＳＤ02（第74図、81図、図版87）

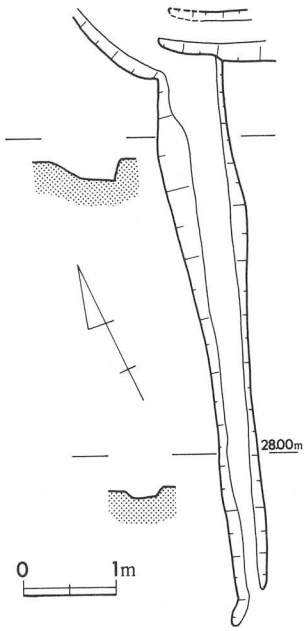
ＳＫ27の礫床の東側に、それを囲むように検出された溝状遺構である。ＳＫ27の東端とＳＤ02までは約１mある。恐らくこの溝はＳＫ27の礫床に伴うものであろう。Ⅱ区全体が後世削平を受けている為、調査以前は発見できず、測量図にも表われてこなかったが、あまり盛土のない方墳であった可能性が強い。しかしながら、この溝内で検出された遺物は必ずしも礫床の時代を示すものではなかった（第81図）。溝内の土器はかわらけで、まとまって溝内の上層より検出された（第81図35～41）。ほとんどが１～２cmの細片となっている為、復元は困難であったが、図示できたものは７個体あった。いずれもロクロ使用による成形で坏形を呈す。口径は11.5～13.2cm、器高は2.5～3.3cm、厚さは約４mmほどである。赤褐色を呈し、焼成は良好。底部がほぼ水平で、口唇部にむかい直線的に開く。口唇部に黒い付着物がみられるものもあるので、燈明皿として使用されたものであろう。ＳＤ02を利用した祭祀か、あるいは、他の場所での祭祀後投棄されたものと思われる。時期は不明である。

ＳＤ03（第46図）

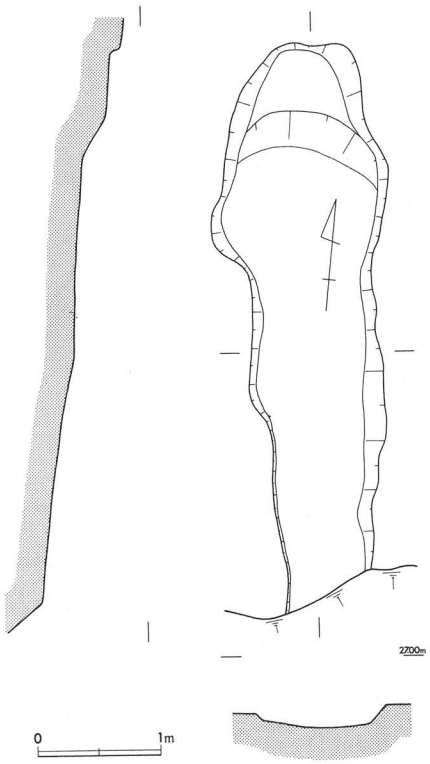
Ⅲ区南側加工段を東西に走る東高西低の溝で、幅50～60cm、深さは北側で20～30cm、南側で４～12cmある。調査区を東西に走り抜けており、検出された長さだけでも60mほどある。標高は中央で



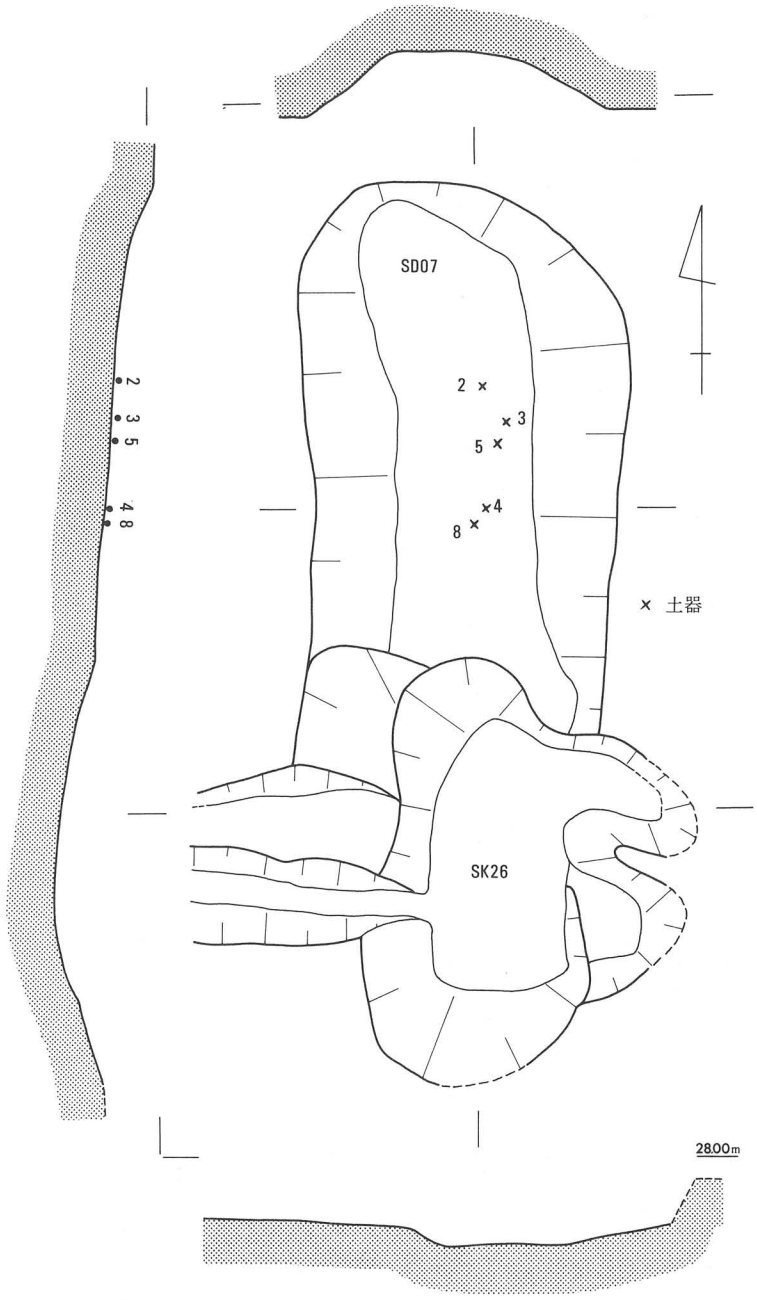
第49図　Ⅲ区 SD 04・09 実測図



第50図　Ⅲ区 SD 05 実測図



第51図　Ⅲ区 SD 06 実測図



第52図　Ⅲ区ＳＤ07・ＳＫ26実測図

約24.2mの高さを測る。さらに東西に延びるものと考えられる。

ＳＤ04（第49図）

ＳＢ02・03の上層で検出された長さ10mほどの溝で、幅45cm、深さ２cm～６cmを測る。

ＳＤ05（第50図）

Ⅲ区丘陵上をほぼ南北に走る溝で、ＳＫ15と西側のＳＫ07～14を区分するように丘陵を切っている。幅40～80cm、深さ８～23cmで長さ5.6mを測る。

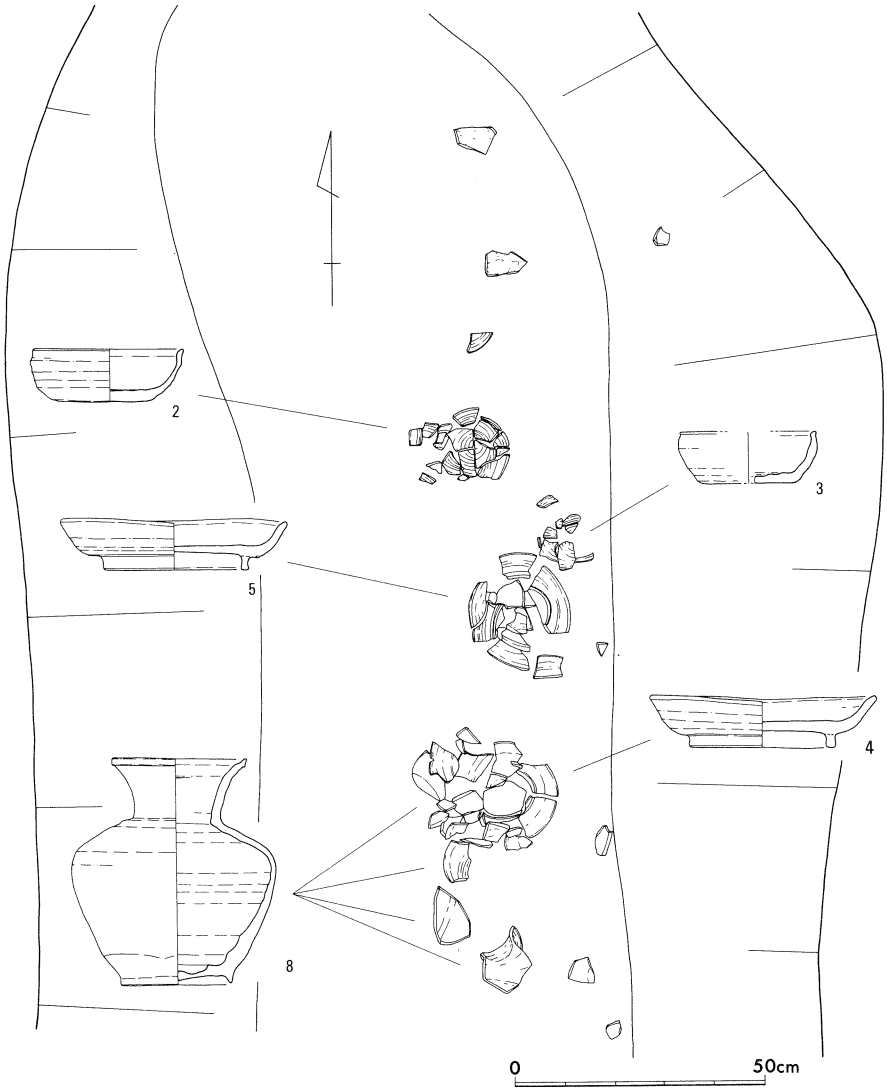
ＳＤ06（第51図）

ＳＢ02・03の上層で検出された長さ4.5mほどの溝で、幅80～140cm、深さ５～14cmを測る。覆土には炭化物が混入していた。遺構の南側は崖面の為削失している。

ＳＤ07（第52図）

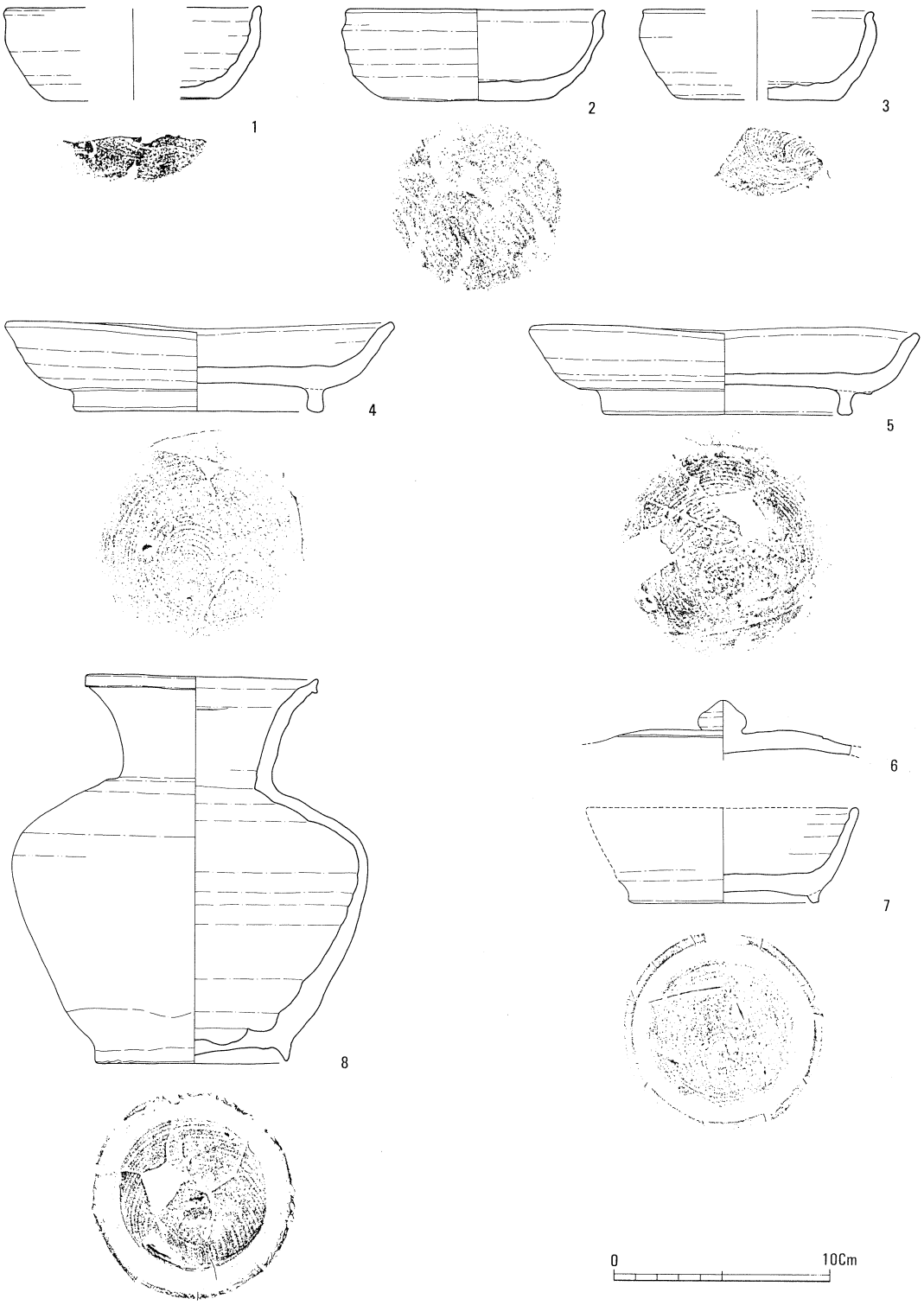
Ⅲ区東端、社日１号墳西側墳裾に位置する幅170cm、深さ30～40cmほどの南北に長い溝である。南側がＳＫ26と重複しているため、長さは約2.8m検出された。

遺物はＳＤ07内とその上面より須恵器が出土した。（第53、54図、図版107）。図示できた須恵器は高台のつかない坏３点（第54図１、２、３）、高台付坏（同７）、盤形（同４、５）、蓋（同６）、壺（同８）である。このうち、第54図、（及び第53図）の２、３、４、５は口縁を下にしたすなわち伏せた状態で出土したことが注目される。

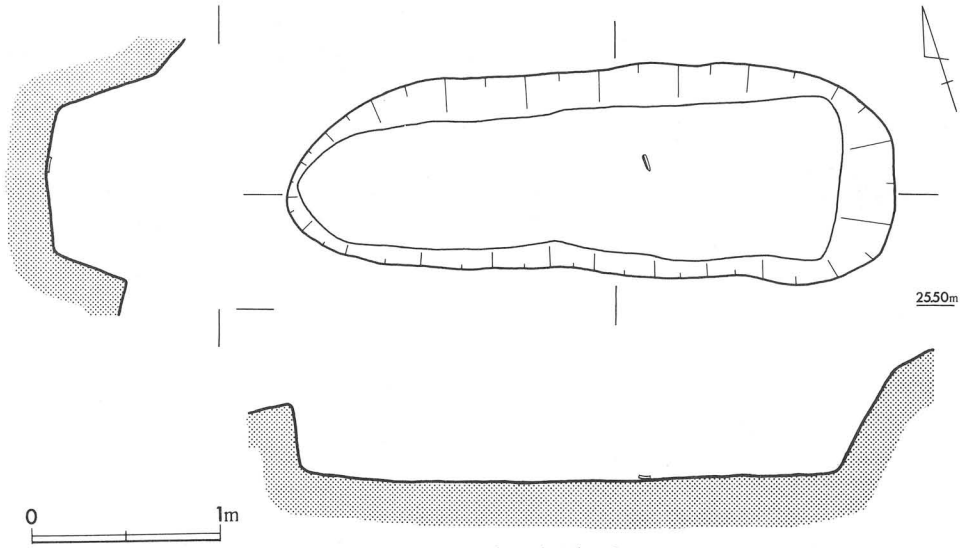


第53図　Ⅲ区 SD 07 土器出土状態

第54図1、2、3は口縁が12cm以下、器高が4.5cm以下の坏である。いずれも外面底部は回転糸切痕が残り未調整である。体部はやや内湾しながら立ちあがり、口唇部は「く」字状にわずかに外反する。内外面とも回転横ナデ痕が明瞭につく。それぞれ若干はあるものの同一技法、規画による成形と考えられる。第54図4、5は盤で、口径は17.8cm、器高は3.7cmある。両者とも全く同一技法、規画による成形である。外面底部には明瞭な回転糸切痕が残り未調整である。高台は約1cmの高さ

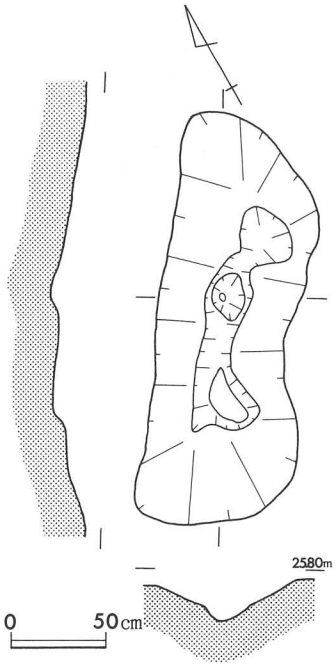


第54図 Ⅲ区 SD 07 出土遺物実測図



第55図　Ⅲ区ＳＫ01実測図測

があり貼りつけている。第54図７は低い高台のつく坏である。体部は逆「八」の字状に直線的に立ち上る。外面底部には回転糸切痕が残り未調整で、高台は貼りつけている。第39図６は宝珠状つまみをもつ坏蓋である。口唇部を欠く。７の坏とセットになる可能性がある。第54図８は壺で器高は18.0㎝を測る高さ約5㎜の突った高台がつく。外面底部は回転糸切痕が残り末調整である。これらの須恵器の坏、盤類には使用痕が認められず、焼成後、あまり時間のたたないうちに一括してＳＤ07に入れられた可能性が強く、いずれも、同時期のものとしてとらえられよう。



第56図　Ⅲ区ＳＫ02実測図

ＳＤ09（第49図）

ＳＢ02の上層で検出された長さ3.8ｍほどの東西に走る溝で、幅45～65㎝、深さ4.9～12.4㎝を測る。西側はＳＤ04に接していたのか切り合っているのか同時のものかは不明である。

ＳＤ10（第48図）

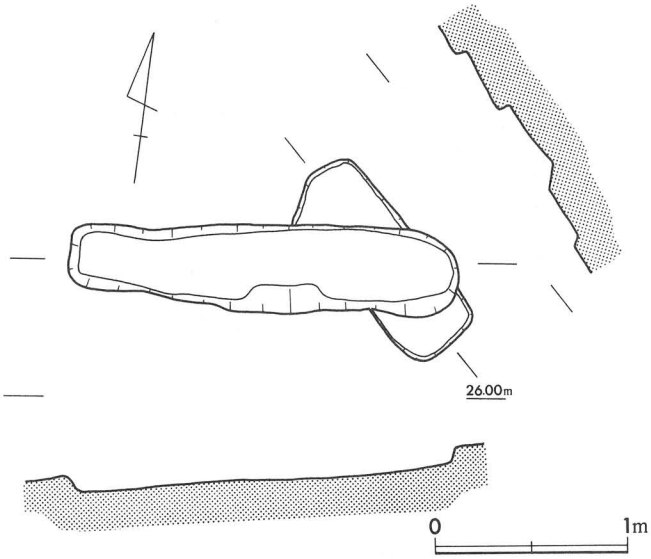
南側加工段の東よりを東西に走る溝で、ＳＤ11、12と重複している。また中央付近ではＳＫ32により切られている。幅約70㎝、深さ２～33㎝で、長さ15ｍほどを測る。

ＳＤ11（第48図）

ＳＤ10の北側に接して東西に走る溝である。幅70～110㎝、深さ17～39㎝で、長さ約29ｍを測る。

ＳＤ12（第48図）

ＳＤ10の中央付近から東南へ向って延びる溝で、幅50～80㎝、深さ１～７㎝、長さ４ｍを測る。



第57図　Ⅲ区ＳＫ03・04実測図

ＳＤ13（第48図）

南側加工段の東端に位置するＬ字状の溝で幅40cm、深さ20cmほどのものが長さ４mほど検出されている。ＳＤ11、12より一段低くなったところに位置する。

Ⅲ区

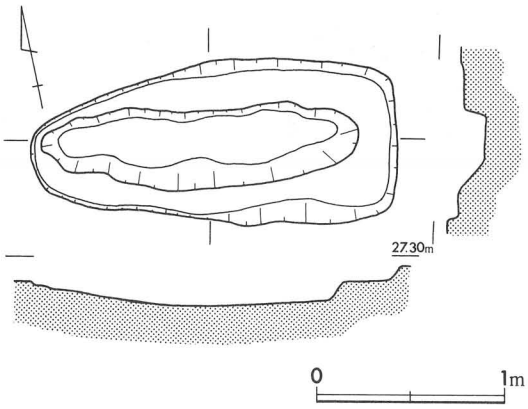
ＳＫ01（第55図）

丘陵上Ⅲ区西端に位置し、主軸をＥ—15°—Ｓにとる土壙である。325cm×110cmの隋円形の平坦プランを呈し、深さは東側で55cm、西側で40cmを測る。床は平坦で、床面中央において刀子が出土した。

刀子（第81図42）は8.2cm、刃部は約５cmで関の部分で幅1.5cmを測る小形のものである。中枢の部分に木質が残っている。

ＳＫ02（第56図）

ＳＫ01の北９mの所に位置し、主軸をＮ—34°—Ｅにむけた土壙である。220cm×70mの歪んだ長方形プランを呈し、深さは一番深いところで20cmを測る。遺物は検出されなかった。



第58図　Ⅲ区ＳＫ05実測図

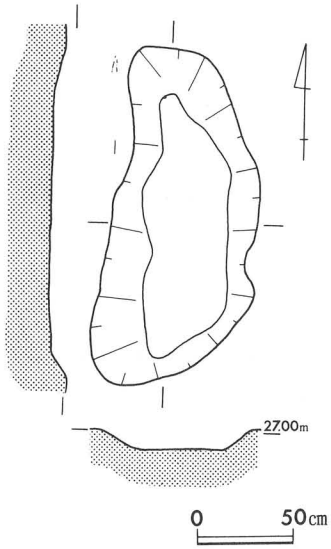
ＳＫ03（第57図）

ＳＫ02の東側に隣接して位置し、ＳＫ04と重複している。主軸をＫ—7°—Ｎにとり、210cm×45cmの細長い長方形のプランを呈している。

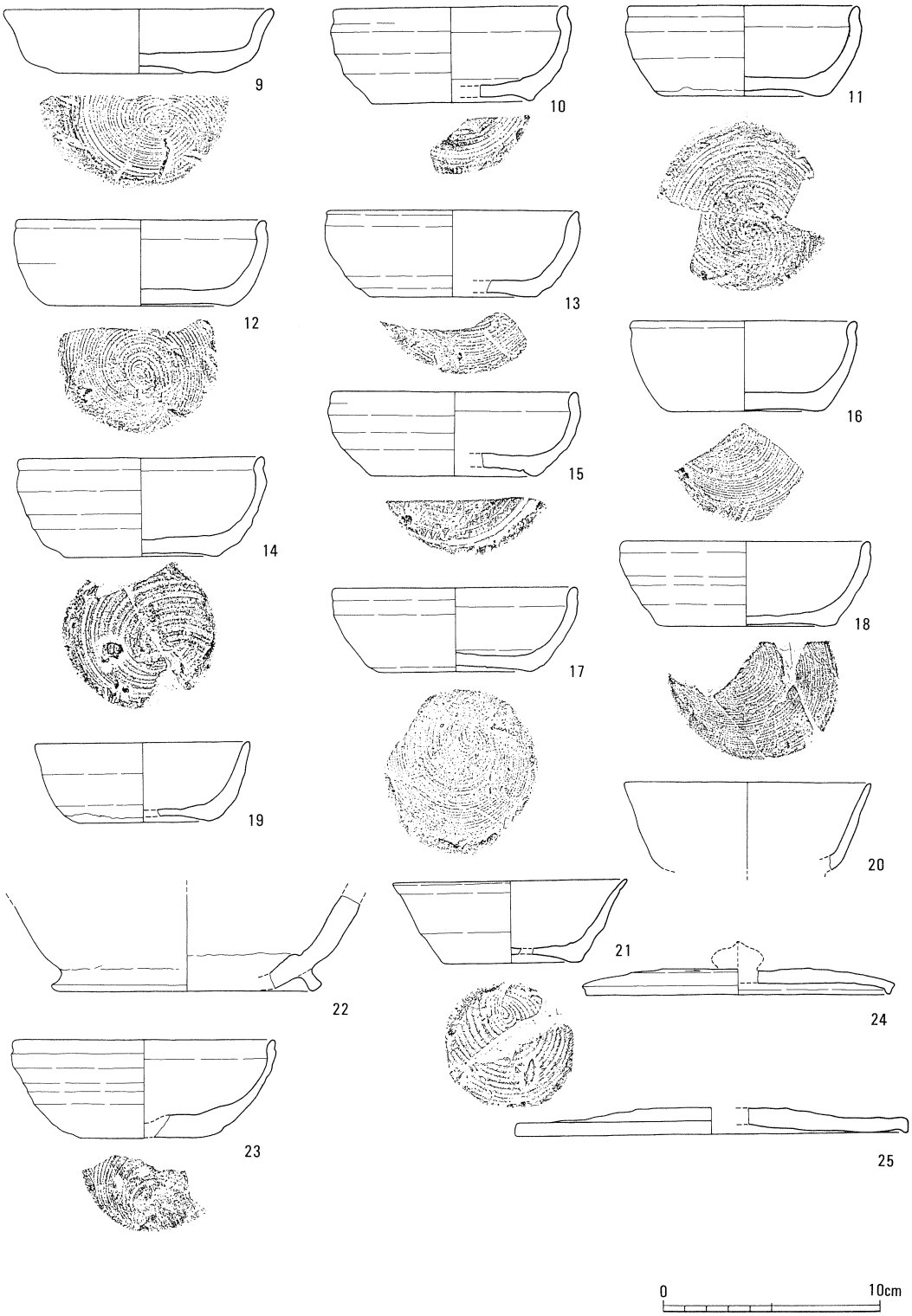
深さは10cmほどで床面は平坦であるが、西側へ傾斜している。ＳＢ04との新旧関係は、ＳＫ04(古)→ＳＫ03(新)と考えられる。遺物は検出されなかった。

ＳＫ04（第57図）

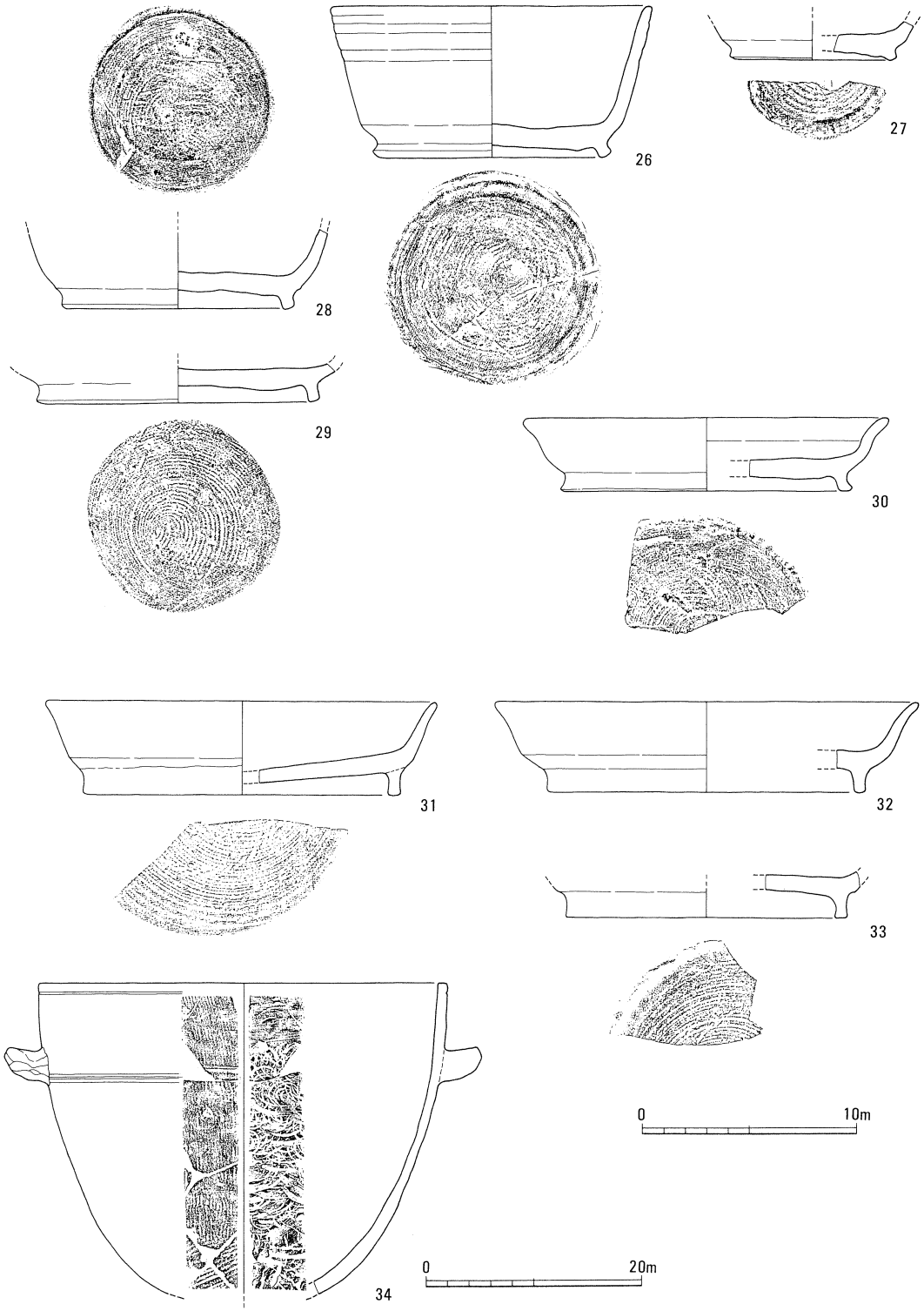
ＳＫ03により中央部が消滅している。主軸をＮ—46°—Ｗにとる、115cm×45cmの長方形プランの土壙で、深さは５cmほどである。遺物は検出されなかった。



第59図　Ⅲ区ＳＫ06実測図



第60図 Ⅲ区出土遺物実測図(1)



第61図 Ⅲ区出土遺物実測図(2)

ＳＫ05（第58図）

Ⅲ区丘陵上中央部に位置し、Ｅ―12°―Ｓに主軸をとる土壙である。不整長方形プラン を 呈し、二段に掘り込まれている。規模は上縁の長さ196㎝、幅88㎝、壙底の長さ150㎝、幅20㎝ある。深さは床面まで17㎝あるが、このうち下段の深さは12㎝ほどで、床面は西から東へ傾斜している。遺物は検出されなかった。

ＳＫ06（第59図）

ＳＫ05の東側、ＳＤ01の北側に位置し、主軸をＮ―0°―Ｅにとる土坑 である。175㎝×75㎝の不整形のプランを呈し、深さは10㎝ほどである。床面はほぼ水平である。遺物は須恵器片がフク土上面と周辺から多く検出された。（第60、61図９～34、図版105）

ＳＫ06内出土の遺物は、坏が２点ある。（第60図―16、第61図―33）他はＳＫ06周辺Ｋ―12グリッドから出土している。第60図９は、皿で底部回転糸切りを施している。10～18、21、23は、高台の付かない坏である。10～18は、同じように口縁がくびれており、底部は回転糸切りを 施している。21は、底部が上げ底気味で、口縁が直縁的に立ち上る。坏23は、器高が高く、口縁に比べ底部の器肉が厚い。底部外面は回転糸切りを 施している。22は、高台の付く壺の底部の破片である。24、25は、蓋で両方ともつまみを欠いており、器高が低い。26～28は、高台の付く坏である。26は、外方に開く低い貼り付け高台を持ち、口縁はやや外方に直線的に立ち上る。29～33は、高台の付く盤状のもので、低い口縁に高台を貼り付けている。34は、直口広口の甕で、口縁下に把手が付く。外面には平行タタキ、内面には向心円状のタタキが施される。これらの須恵器は奈良時代後半のものと思われる。

ＳＫ07（第62図）

Ⅲ区東側に位置し、「コ」字状の溝に直交するように穿たれている。主軸をＮ―16°―Ｅにとり、プランは長方形を呈し二段に掘り込まれている。

規模は上縁の長さ210㎝、幅100㎝、壙底の長さ170㎝、幅30㎝を測る。深さは 床面 まで50㎝ほどあるが、このうち下段の深さは約35㎝である。木棺の小口板と側板の痕跡が検出された。遺物は発見できなかった。「コ」字状溝、ＳＫ13と切り合いになる。

ＳＫ08（第62図）

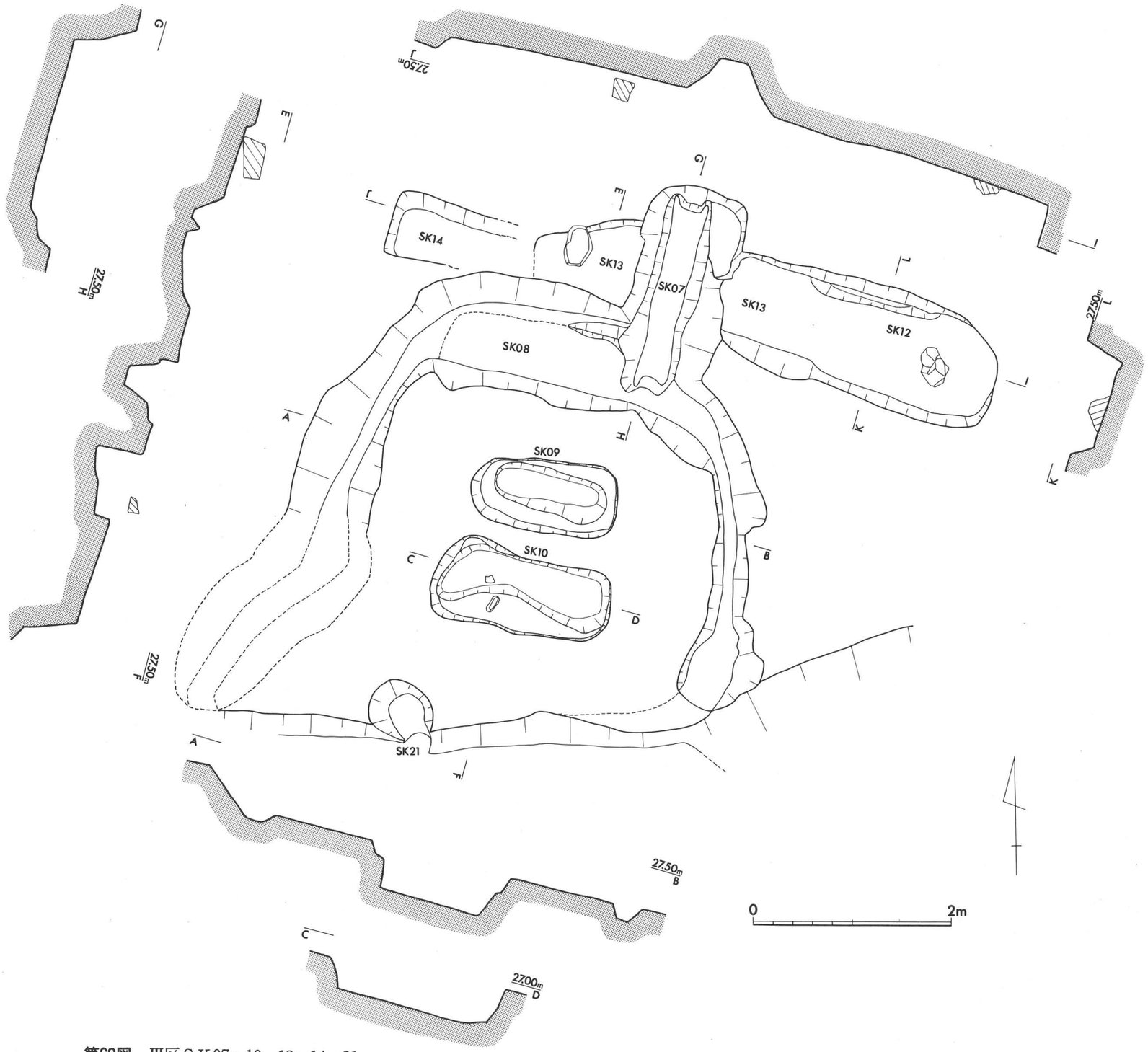
「コ」字状の溝の中に位置し、主軸をＥ―12°―Ｓにとる 土壙である。全容を把握するのは難しいが、180㎝×60㎝程度のものと考えられる。遺物は発見できなかった。

ＳＫ09（第62図）

ＳＫ10とともに「コ」字状の溝に囲まれた土壙で、主軸をＥ―13°―Ｓに とっている 不整長方形プランを呈し、二段に掘り込まれている。規模は上縁の長さ154㎝、幅74㎝、壙底の長さ106㎝、幅24㎝である。深さは床面まで44㎝あるが、このうち下段の深さは28㎝で床面は平坦である。遺物は検出できなかった。

ＳＫ10（第62図）

ＳＫ09の南側に隣接して穿たれた土壙で、主軸をＥ―16°―Ｓにとり、 不整長方形プランを呈し



第62図　Ⅲ区ＳＫ07～10・12～14・21

ている。規模は長さ185㎝、幅80㎝で深さ40㎝を測る。覆土上面で検出された16㎝×8㎝×9㎝ほどの石は墓標と考えられる。遺物は検出できなかった。

ＳＫ11

Ｅ—27°—Ｎに主軸をとる土壙で、長方形プランを呈している。規模は長さ140㎝、幅55㎝で、深さ17㎝を測る。遺物は検出できなかった。

ＳＫ12（第62図）

ＳＫ07と直交するように位置し、Ｅ—18°—Ｓに主軸をとる土壙である。長方形プランを呈し、ＳＫ13と重複しているため全容は明らかでないが、規模は長さ290㎝、幅115㎝で深さ35㎝と思われる。床面東側には40×25×13㎝の枕状の石が置かれていた。Ⅲ区の土壙の中では比較的大きなものである。

ＳＫ13（第62図）

ＳＫ07に中央部分が切られているため全容が明らかでないが、Ｅ—18°—Ｓに主軸をとる長方形プランの土壙である。規模は長さ310㎝×幅105㎝で、深さ35㎝くらいと思われる。土壙内部の西側よりで、40×27×20㎝の偏平な石が床から7㎝ほど浮いた状態で発見された。

ＳＫ14（第62図）

ＳＫ13と重複して一部を残すのみであるが主軸はＥ—10°—Ｓになると思われる。残存部は幅65㎝で深さ15㎝を測る。

ＳＫ15（第63図）

ＳＤ05とＳＤ07にはさまれるように位置する不整形の土壙でＥ—19°—Ｓに主軸をとり、規模は長さ250㎝、幅68㎝、深さ33㎝を測る。

ＳＫ16、ＳＫ20（第64図）

ＳＫ20と重複する不整形の土壙でＥ—13°—Ｓに主軸をとり規模は長さ175㎝、幅100㎝深さ12㎝を測る。土壙内より土師器壺が出土している。ＳＫ20は、不整形でＥ—28°—Ｎに主軸をとり、長さ100㎝、幅50㎝、深さ6㎝を測る。土師器（第82図52）は、土師器の壺の破片で底部を欠く。口縁は、外反気味に立ち上る複合口縁である。頸部から胴部にかけてヨコ方向に櫛目を施す。

ＳＫ17（第65図）

ＳＫ16の北側に位置し、Ｅ—7°—Ｓに主軸をとる長方形プランの土壙で、規模は長さ180㎝、幅62㎝、深さ13㎝を測る。

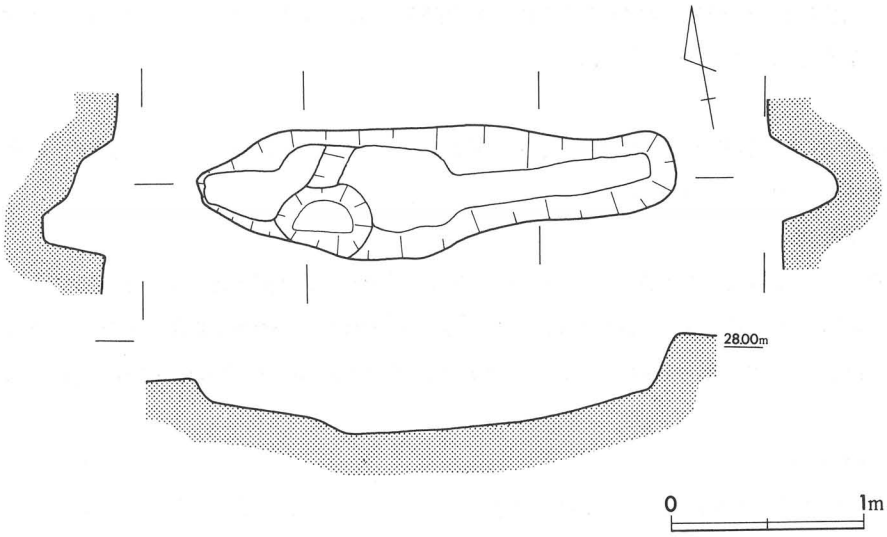
ＳＫ18（第66図）

ＳＫ17の南隅に接するように位置し、Ｅ—30°—Ｓに主軸をとる不整形の土壙で、規模は長さ80㎝、幅40㎝、深さ15㎝を測る。

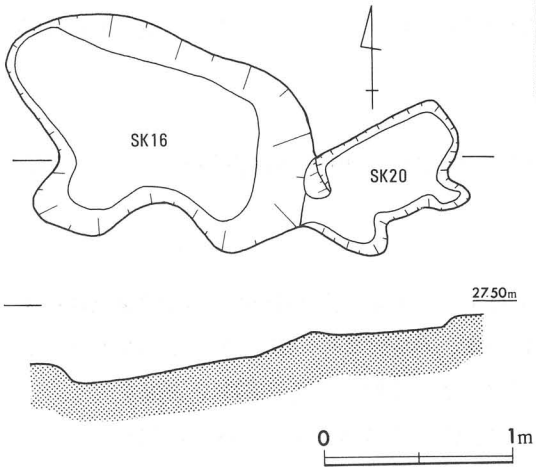
ＳＫ21（第62図）

ＳＫ10の南側の丘陵端に位置する円形の土壙で崖のため南側は一部欠損しているが、径65㎝、深さ40㎝ほどになると思われる。

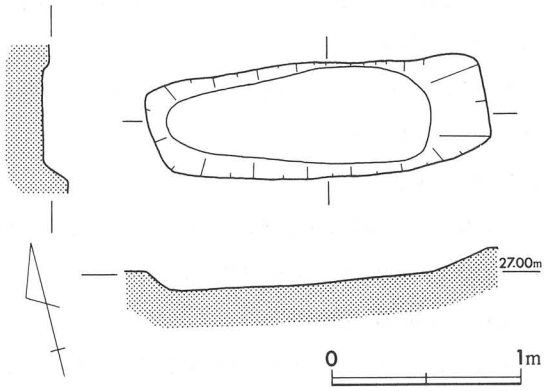
ＳＫ22（第67図）



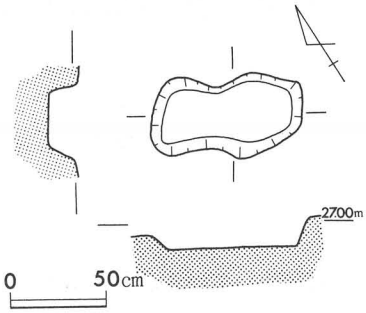
第63図　Ⅲ区ＳＫ15実測図



第64図　Ⅲ区ＳＫ16・20実測図



第65図　Ⅲ区ＳＫ17実測図



第66図　Ⅲ区ＳＫ18実測図

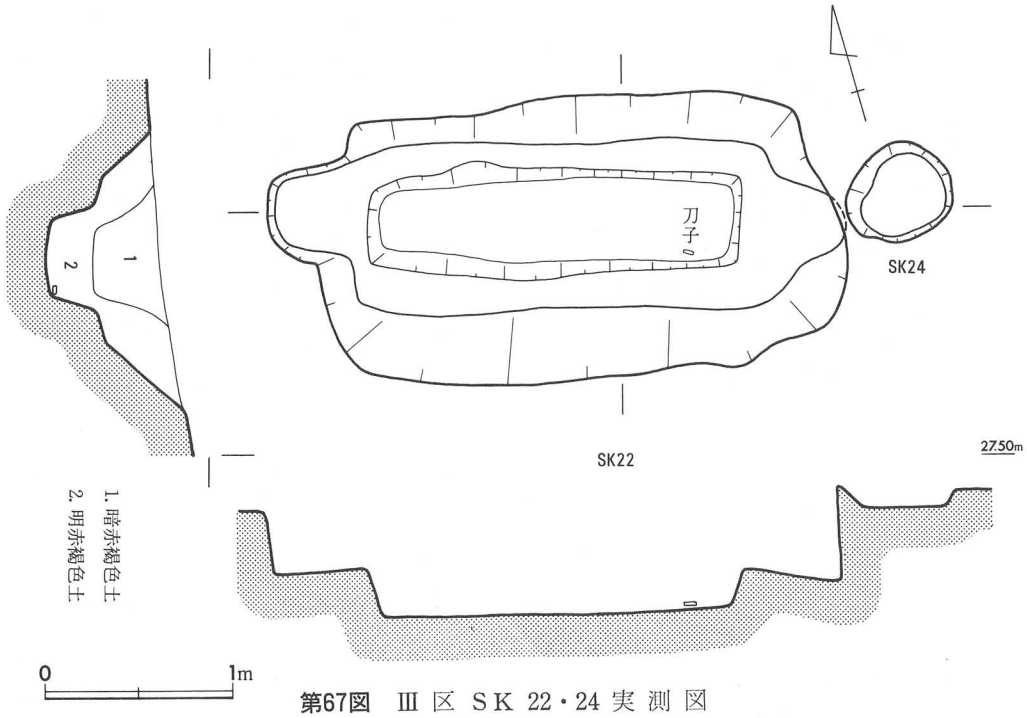
ＳＫ15の北側に位置し、Ｅ—16°—Ｓに主軸をとる長方形プランの土壙で、二段に掘り込まれている。規模は上縁の長さ302㎝、幅152㎝、壙底の長さ190㎝、幅42㎝を測る。深さは床面まで60㎝ほどあるが、このうち下段の深さは24㎝である。東南隅で刀子が発見されている。

ＳＫ23（第69図）

ＳＫ22の東側に位置する長方形プランの土壙でＥ—13°—Ｓに主軸をとる。規模は長さ190㎝、幅80㎝、深さ54㎝を測る。

ＳＫ24（第67、68図）

ＳＫ22の東側に接して位置する径55㎝の円形プランの土壙である。土壙内には、一個体の土師器、甕が半載し覆せてあった。



第67図 Ⅲ区 SK 22・24 実測図

土師器、甕（第81図43）の完形で、口径22.2㎝、器高34.7㎝を測る。口縁は、外傾気味に立ち上る複合口縁で、頸部は屈曲し内面に稜ができる。胴部は、なで肩である。底部は、平底がわずかに残っている。胴部同面は、ヘラ削りが施され器肉が薄い。時期は、小谷式の時期に含まれると思われる。

ＳＫ25（第70図）

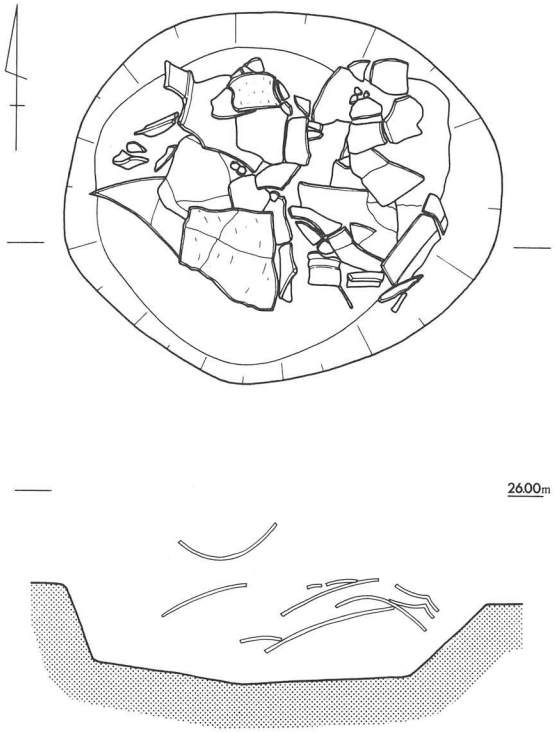
ＳＫ23の南側に位置する土壙で主軸をＥ—11°—Ｓにとり、長さ188㎝、幅68㎝の長方形プランを呈している。深さは浅く４㎝ほどで床面は平坦である。

ＳＫ26（第52図）

ＳＤ07と重複する不整形プランの土壙で、主軸をＮ—2°—Ｅにとり規模は225×120㎝深さ35㎝を測る。

ＳＫ27（第73図76図、図版87）

Ⅲ区のほぼ中央部に、主軸を丘陵と同じ方向にむけた礫床で主軸をＥ—21°—Ｓにとっている。遺構検出面での土壙の全長は3.80ｍ、中央での幅1.05ｍである。土壙の床は長さ3.2ｍ、幅40～60㎝で、高さ５㎝ほど、地山を加工し棺床を造り出している。床面は東側が西側に比較して約13㎝高い。礫は径1.0㎝～8.0㎝で、主として頭部と周辺に大きなものが多い。礫が敷かれているのは東側の頭部で幅約50㎝、東側で40㎝、長さは2.8㎝の範囲で棺床より若干狭い。また、厚さも頭部側が５～７㎝と厚く他は３㎝内外である。また礫床の中央部が、長さ2.1ｍ、幅0.2ｍの範囲で凹みがみられた。遺物は土師器と臼玉２個がある。土師器はこの礫床検出以前に土壙上面で発見されたもの（第75図、81図43）と、礫床内で検出されたものとがある（図版106）。土壙上面で発見された土



第68図　Ⅲ区ＳＫ24実測図　0　20cm

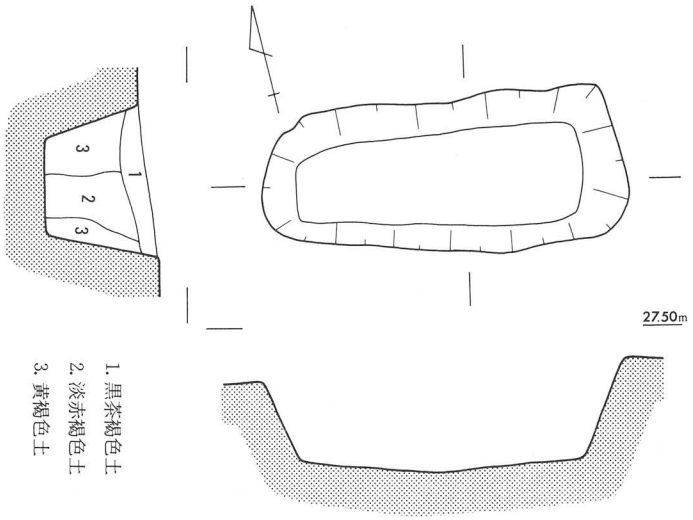
師器（第81図43）は胴部下半を欠くが復元すれば胴部径31.0cm、口径22.5cm、くびれ部径14.5になり、現存する器高は23.0cmある。外面は頸部より下はハケ目、内面はヘラ削りが施される。口縁は複合口縁の形態をとり、肩部に竹管文が入る。風化がすすみ、長い間風雨にさらされていたと考えられる。また礫床内から検出された土師器は、皆２～３cmほどの細片であり、故意に打ち欠いて散布されたと考えられる（第73図）。臼玉は淡黄緑色をした碧玉製で、礫床内の南側中央部に２個検出された（図版106）

ＳＫ31（第48図）

ＳＤ14に囲まれた随円形プランの土壙で、主軸をＮ―18°―Ｅにとり、規模は150×110cm、深さ50cmを測る。周辺より須恵器大甕の破片が出土した。

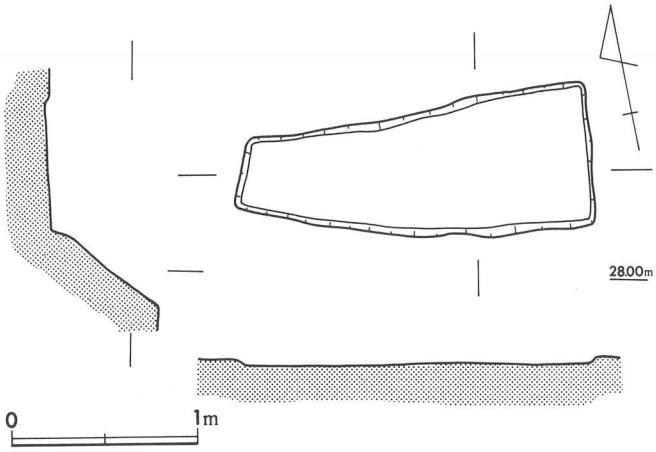
ＳＫ32（第77、78図、83図）

丘陵南側加工段に位置する長方形プランの土壙である。規模は長さ120cm、幅88cm、深さ35cmを測る。底部は平坦であるが、中央部に13×16cmから30×46cmで厚さ10cmぐらいの６個の人頭大の石が並べられ、その上及び周囲には人骨、炭化物、鉄釘などが散在していた。火葬場を即そのまま墓に利用したものと思われる。壁は火を受け赤変していた。

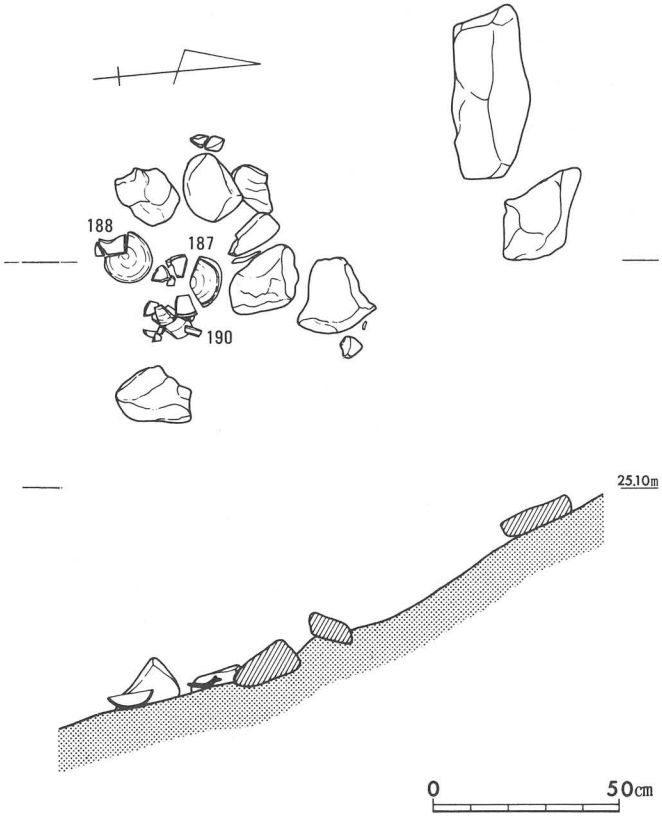


第69図　Ⅲ区ＳＫ23実測図　0　1m

人骨は鳥取大学医学部井上晃孝助教授によれば、１体分が埋葬されたものと考えられ、完全焼骨の所見を呈している。性別は不明であるが、死後まもなく茶毘に伏された小児のものと考えられる。また病変などの異常は認められないとのことである。



第70図　Ⅲ区ＳＫ25実測図

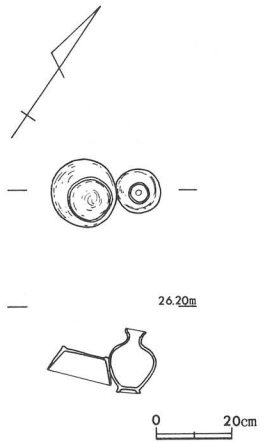


第71図　Ⅲ区石組実測図

ＦＰ01（第79図）

ＳＫ01の東隣にあり、90㎝×60㎝の隅丸長方形プランを呈している。深さは10㎝ほどあり、覆土の黒色土には多量の炭化物がブロック状に混入していた。覆土中より須恵器の破片５が出土している。

坏は２点ある。第60図19は、高台が付かず、第60図20は高台部を欠き口縁部のみの破片である。24は、蓋のつまみを欠き、器高は低い。いずれも二次焼成を受けもろい。



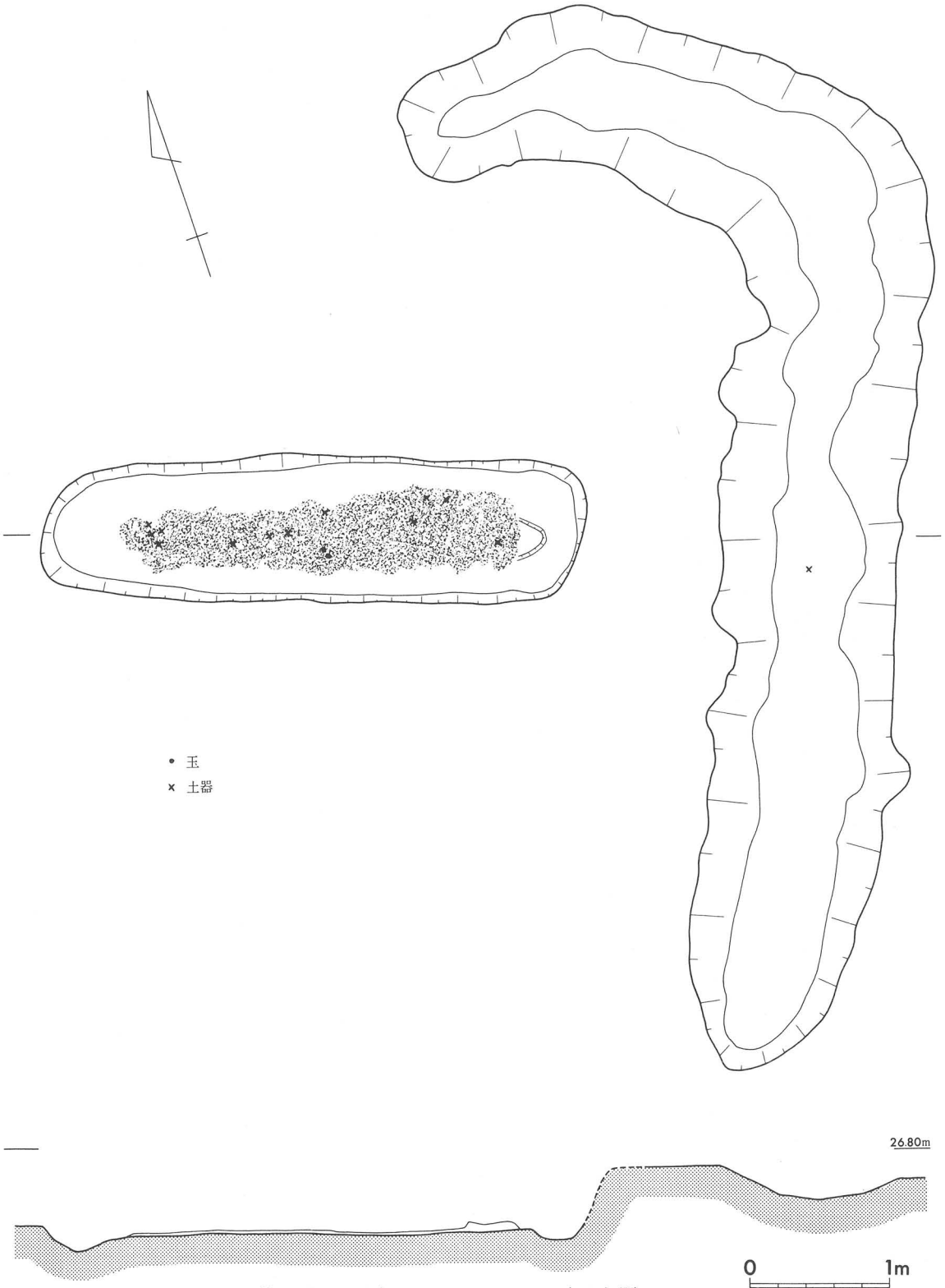
第72図　Ⅲ区Ｊ－10区遺物出土状態

ＦＰ02（第79図）

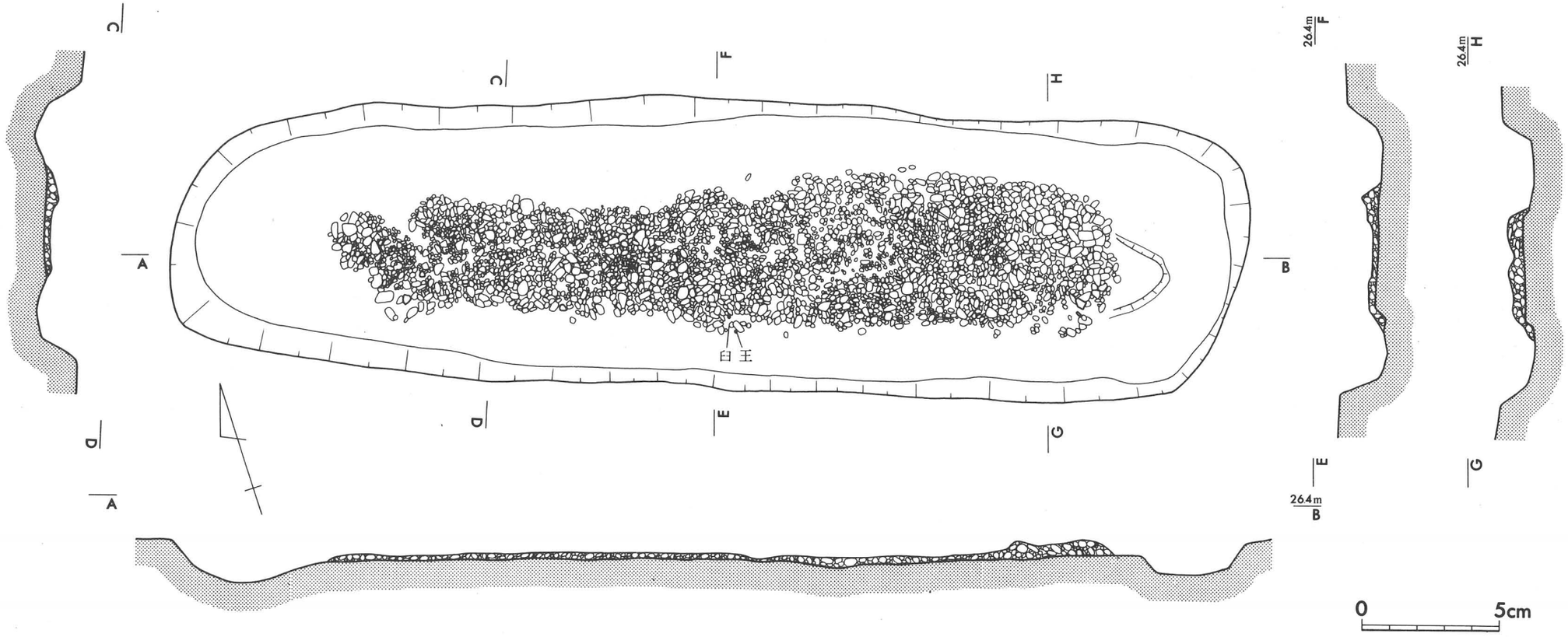
Ⅲ区丘陵東端に位置し、80㎝×80㎝の不整形の平面プランを呈している。深さは23㎝ほどあり、覆土には炭化物が混入していた。

ＦＰ03（第79図）

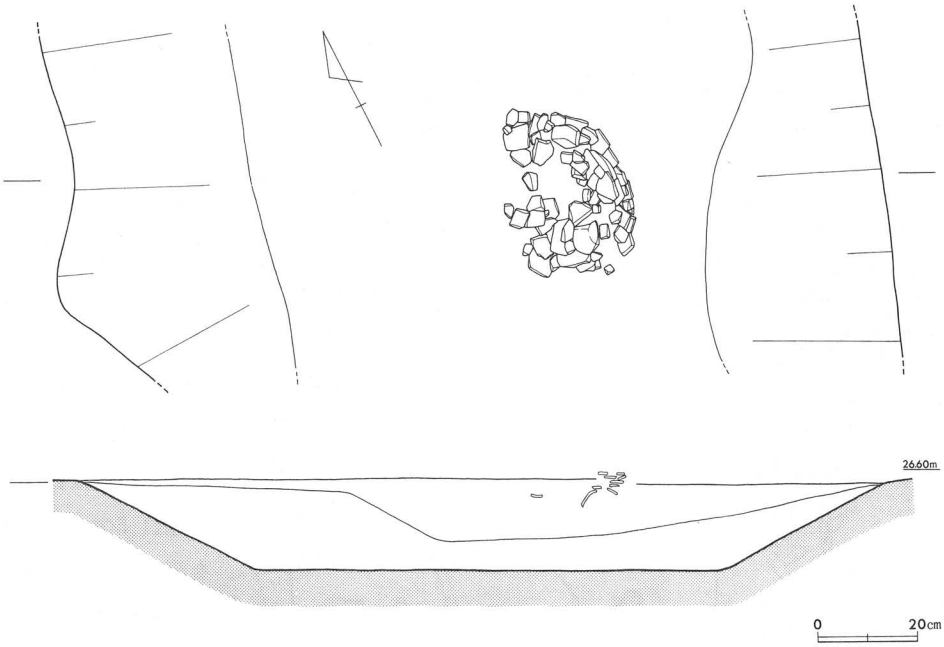
Ⅲ区中央付近南側に位置し、ＳＢ03の柱穴に隣接して穿たれている。直径45㎝の円形プランを呈し、深さは18㎝ほどあるが南側壁は崖面のため損なわれている。底面は火を受けたようで一部焼土化し、赤色、黒色に部分的に焼けている。ピットの底は楕円形であり、覆土は、黒灰色で中に炭化物、灰等を含んでいる。



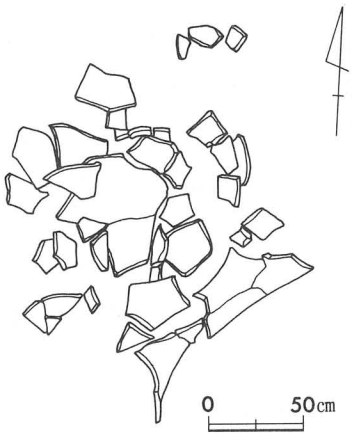
第73図　Ⅲ区 SK 27・SD 02 実測図



第76図　Ⅲ区 SK 27 実測図



第74図　Ⅲ区ＳＤ02土器出土状態



第75図　Ⅲ区Ｋ—11区土器出土状態

ＦＰ04（第79図）

ＳＫ14の北側にあり、67㎝×55㎝の不整形な平坦プランを呈している。深さは一定せず浅いところでは６㎝、深いところでは14㎝となっている。覆土は、灰褐色で中には炭化物を含んでいる。

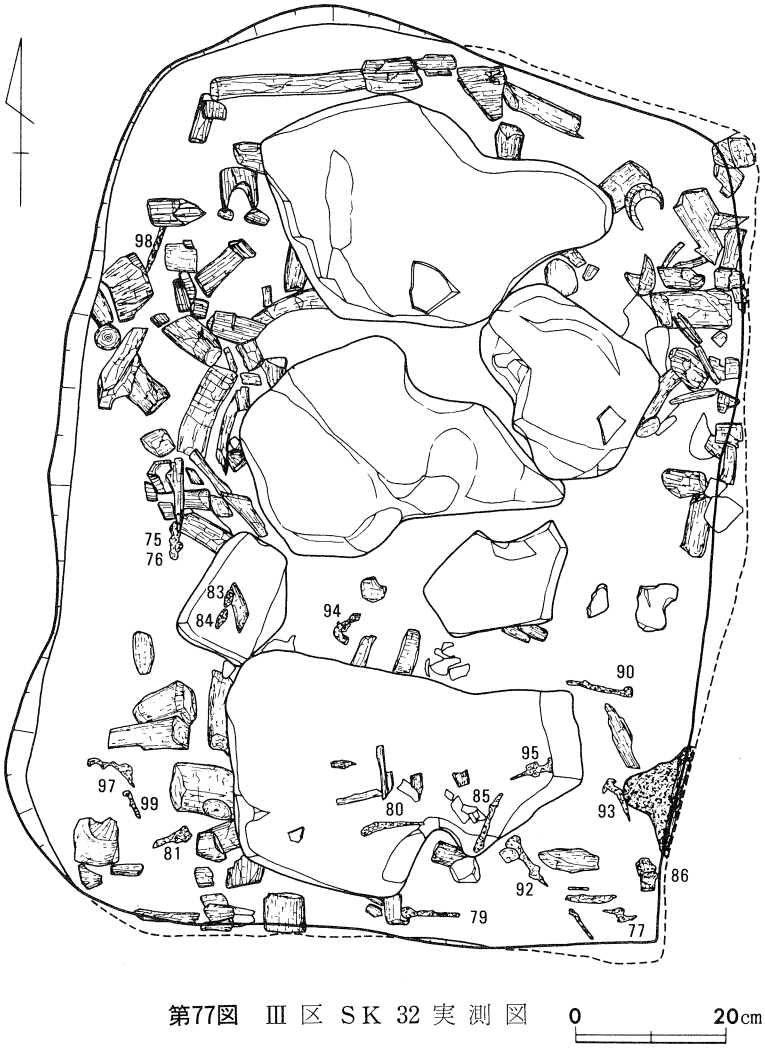
石組み遺構（第71図）

石組み状遺構はＳＤ13の南側、尾根から急斜面に移る手前の比較的緩やかな斜面に位置している。石組みは、斜面の尾根側に径20㎝程の石を半円形に並べている。石で囲まれた中に須恵器の坏４個体が、あたがも置かれたような状態で出土している。

（第105図187～190）は、坏蓋である。187は、天上部が比較的平坦で、口縁はやや開き気味である。天上部と口縁部の境には低い稜をなしている。天上部外面は、回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他はヨコ方向のナデを施す。189は、187と同じような調整である。天上部と口縁部の境の稜線は不明瞭となる。188も形態は似ているが、口縁端部はするどくなっている。190は、坏身である。底部は丸く口縁へ向けゆるやかに広がり、たち上りは内傾したち上る。底部外面は、回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他はヨコナデを施している。これらの坏は、山陰Ⅲ期に含まれると思われる。

Ｊ—10グリッド出土須恵器（第72図、第110図191、192、図版115）

第110図191、192はⅢ区Ｊ—10グリッド内、ＳＫ01とＳＫ03の中ほどより検出された須恵器であ



第77図　Ⅲ区SK32実測図

る。191は小形の壺で器高は12.9cm、最大径は肩部にあり11.0cmを測る。頸部は比較的短く、口縁は径5.4cmで口唇は垂直。底部は回転糸切痕が残り末調整。高台は短く貼付である。胴部下半にヘラ記号「×」が施されている。192は高台付の坏である。口径は17.0cm、高台径11.5cm、器高は6.6cmを測る。底部には回転糸切痕が残り末調整。高台は貼付で短く外にやや開く。体部は逆八ノ字状に直線的に開き口唇にむかい器肉は薄くなる。

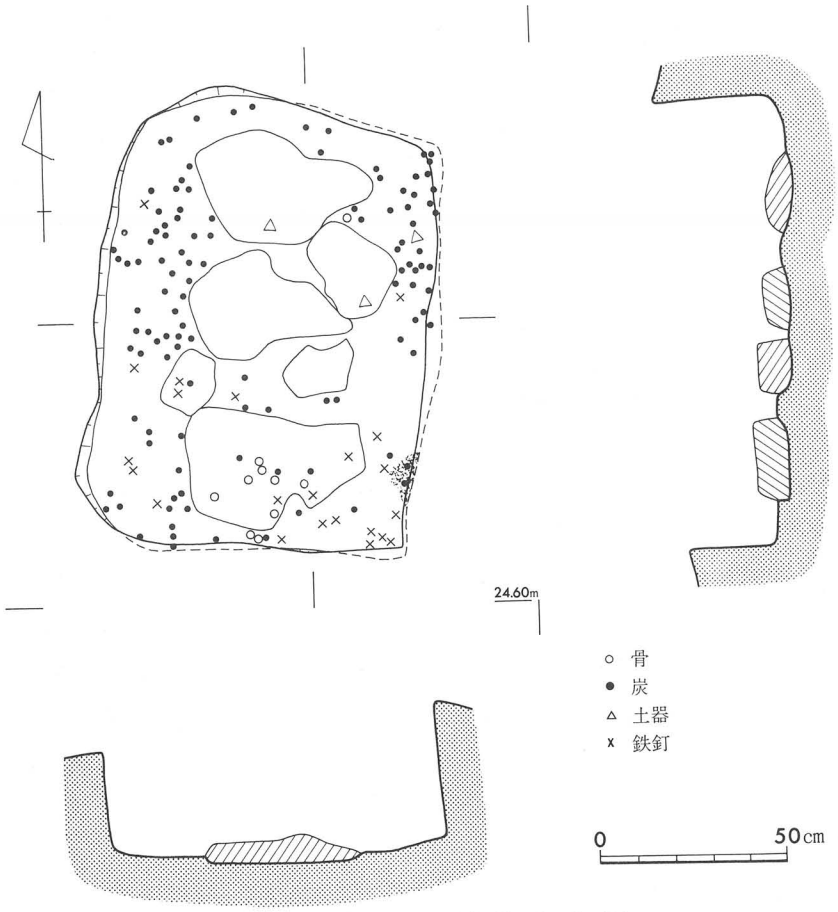
この二つの須恵器は192の坏を北側に、その南に壺を並べて地山の上に据置かれた状態で出土した（図版90）。坏は逆位で、その中に鉄滓が入れられていた（図版115）。これに伴う土壙、その他の遺構は検出することが出来なかった。坏の中に入れられていた鉄滓を重視すれば、これに関する祭祀跡とも考えられよう。

遺構に伴わない遺物

第82図50は、土師器の甕でM—14区から出土している。器形等は、SK—24出土の土師器に似ている。口縁と底部の破片で胴部を欠いている口縁部は、外反気味に立ち上る複合口縁で底部はやや平底気味の丸底である。時期は小谷式の時期であると思われる。

第82図51は、土師器甕でL—12区で須恵器の甕とともに出土している。「く」の字形の口縁で、肩はなだらかで底部に至る。口縁部内外面、内面頸部以下にヘラ磨きを施している。

第81図46、47は鉄斧でL—13区の覆土中より検出された。46は上部を欠き、現存長8.4cm、刃幅4.2cm、中央部で3.2cm、厚さは1.5cmを測る。上部は中空となっており、袋部を作る。断面は長方形でその厚さは約3mmである。刃部がやや擬状に開く。47は現存長8.8cm。頭部での幅3.0cm、



第78図　Ⅲ区SK32遺物分布図

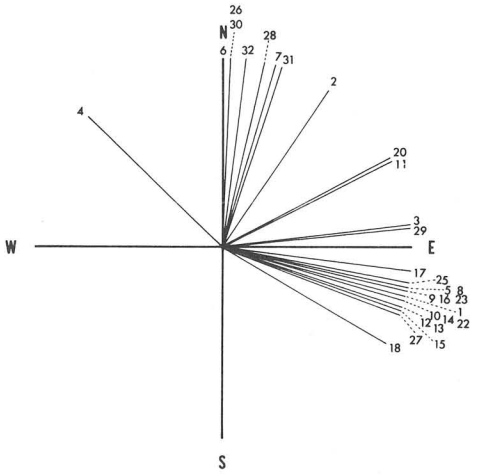
刃部幅は3.8cmと広いが直線的である。中央部での厚さは1.2cm。構造は46と同様である。46、47いずれも鋳造品と考えられる。元来土壙群に伴っていたものと思われる。

第81図44は埴輪円筒片である。表土除去中にⅢ区南側斜面で、表土中から発見された。内外面とも風化していて細かな調整等は不明である。タガの部分で、赤褐色を呈す。復元径は21.3cm。円形透しが一部残っており、中段と下段の間のタがであることが分る。この破片の限りでは黒斑はみられない。丘陵上の中竹矢古墳群、社日古墳群からの流出と考えられる。

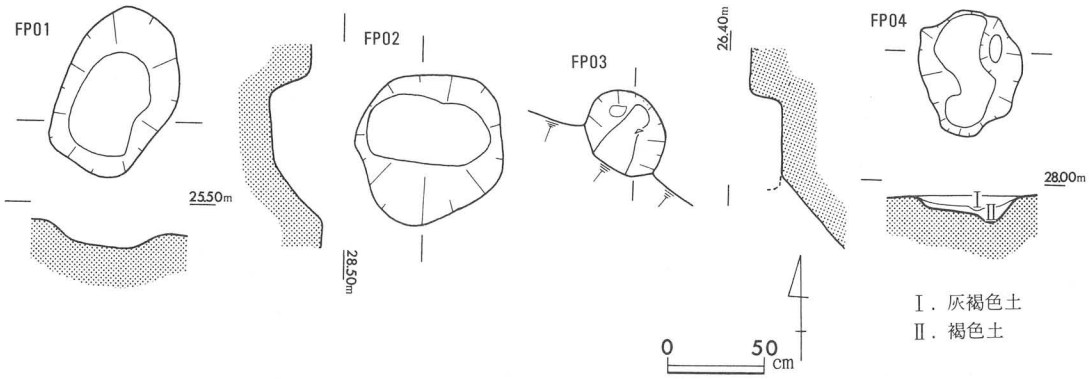
石鏃（第81図49）は、Ⅲ区の中竹矢2号墳の墳丘上で表採されたものである。脚のつくタイプのもので黒曜石製である。先端の脚の一部を欠く。復元すれば全長2.5cm、最大幅1.5cm、中央での厚さ4mmを測る。

石斧（第81図48）はⅣ区の池の東側斜面で検出された。遺構には伴わない。基部と刃部の一部を欠くが、現存するのは、7.0×5.0cm、幅2.0cmを測る磨製石斧で、比較的偏平な形状を呈す。

第81図45は用途不明鉄製品である。長さ6.3cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測る。N—14グリッド内の覆土から検出された。遺構には伴わないが遺物として扱った。



中竹矢遺跡Ⅲ区土壙頭位一覧

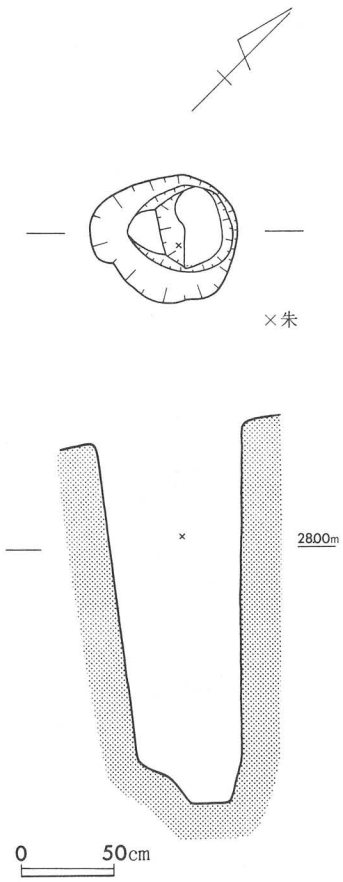


第79図　Ⅲ区ＦＰ 01～04 実測図

Ⅲ区検出の土壙頭位

Ⅲ区丘陵部では合計29の土壙を検出した。その頭位は中竹矢遺跡Ⅲ区土壙群頭位一覧として表にあらわした。これによればＳＫ04以外はＮ―Ｅ付近に集中していることが分る。

土壙のうち、明らかに土壙墓と考えられるのは、礫床のＳＫ27、刀子を出土したＳＫ01、22、石製の墓標、または石枕があるＳＫ10、12、13、さらに、ＳＫ23で皆、ほぼ東にむけている。但し、ＳＫ07は北にむいており、例外的存在である。土壙墓は、概ね東頭位を指向していると云えよう。これに対し、北指向のものは、例えば、ＳＤ07、ＳＫ06のような奈良時代の須恵器を出土するか遺物がなくとも、土壙墓に比較して、不整形であることが云える。



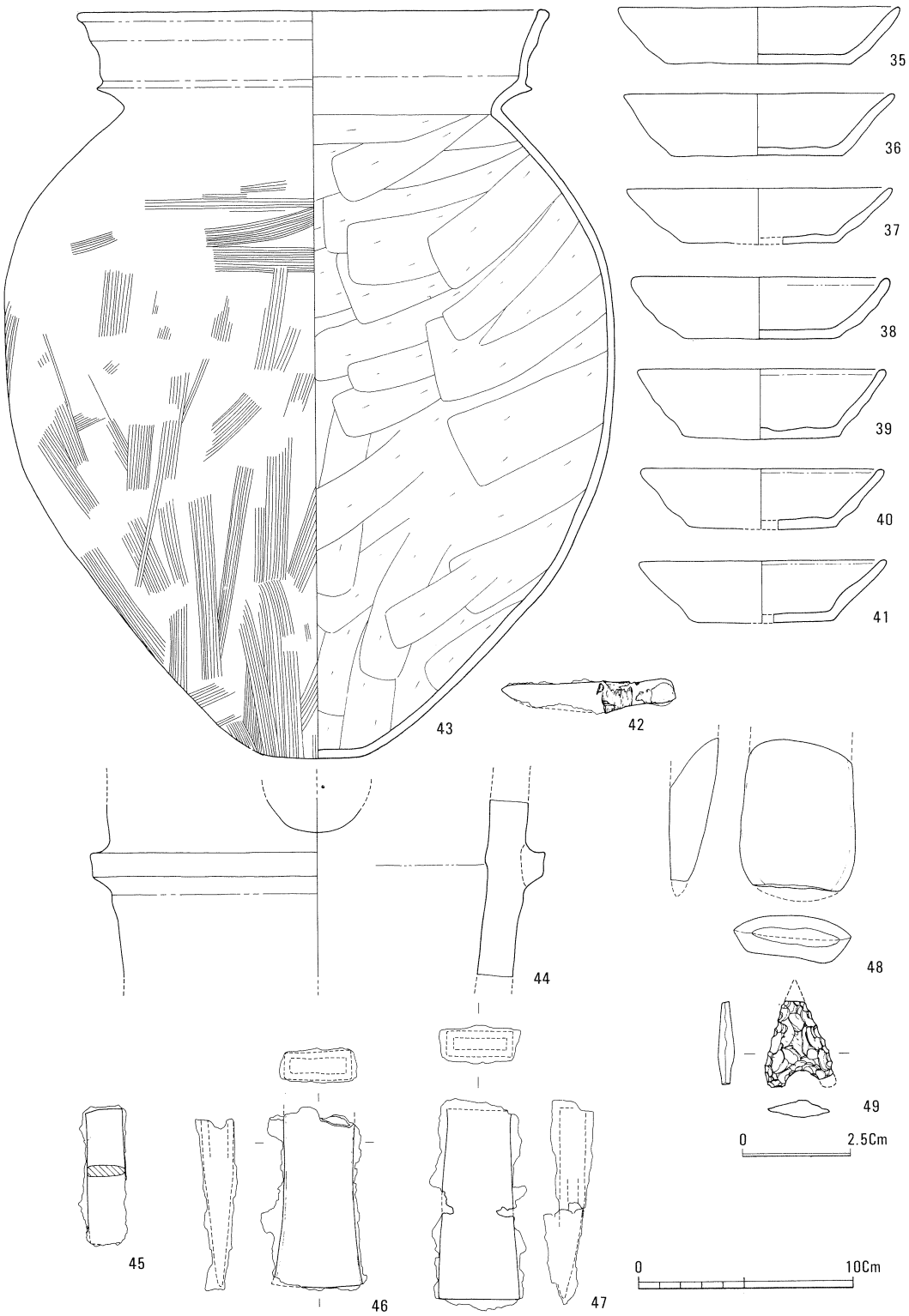
第80図　Ⅲ区Ｐ01実測図

Ｐ01（第80図）

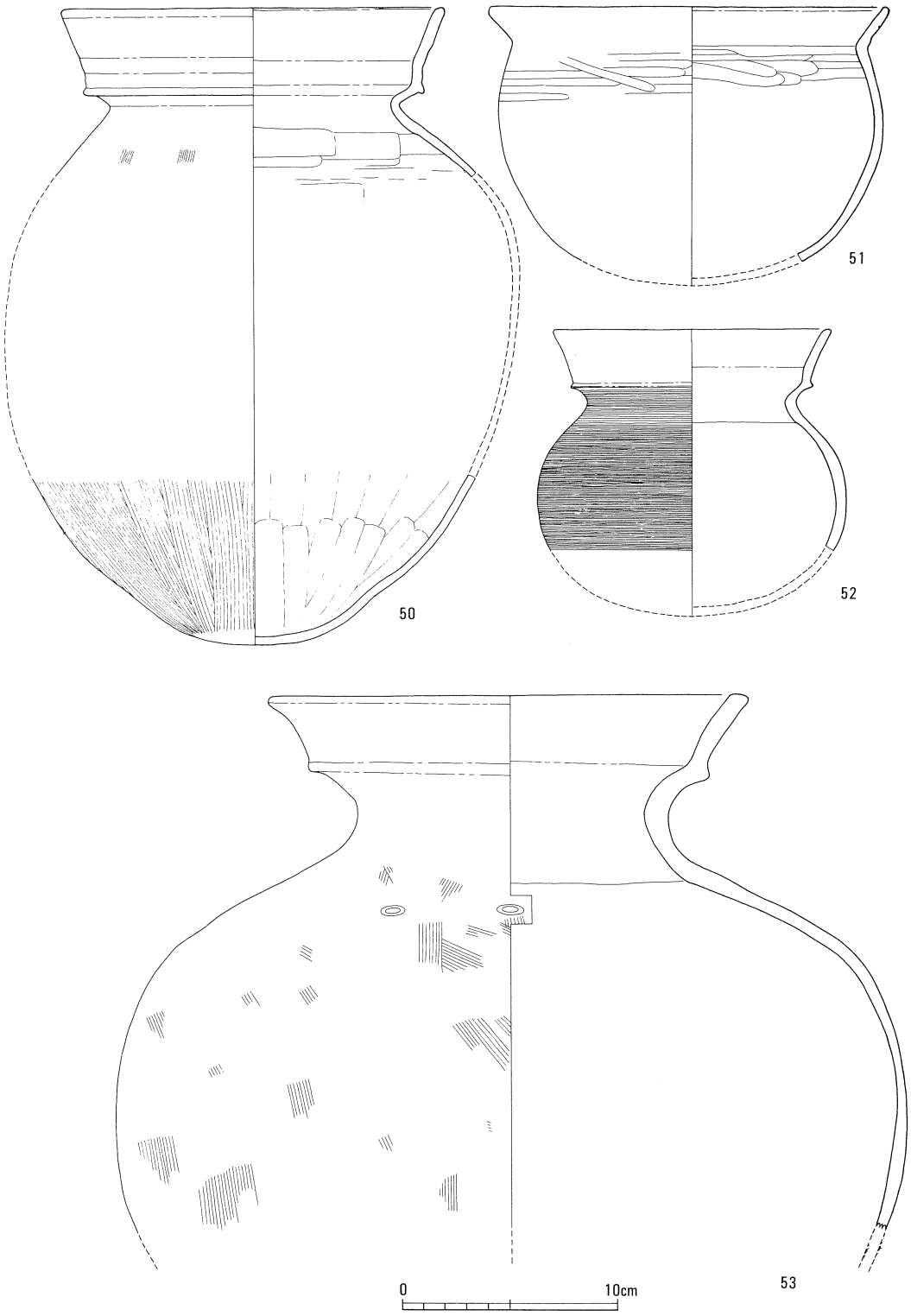
ＳＫ15の南側約１*m*のところに位置する。平面プランは約80.0×70.0*m*のダ円形であるが、深さは約2.0*m*と深い土壙である。土壙の中に充填していた土は黄褐色地山層が崩壊したやわらかいものであった。遺構検出面より約50*cm*、土壙のほぼ中央で、少量の赤色顔料と思われる物質を検出した。検出した赤色顔料は鳥取大学医学部法医学教室井上晃孝助教授のもとで化学分析を行った水銀と鉛元素の含有量が著しく多くみられ、水銀朱、及び鉛丹様物質の可能性が高いことが指摘された。土壙内からは、他の遺物は何ら発見することはできなかった。土壙の形状、出土遺物をⅢ区丘陵部の他の土壙と比較すると、このＰ01のみが極めて異質な存在であることが分る。とすれば、この土壙は近年のものか、若しくは特殊な性格を有したものと考えられよう。

ＳＫ32出土の鉄釘（第83図75～99）

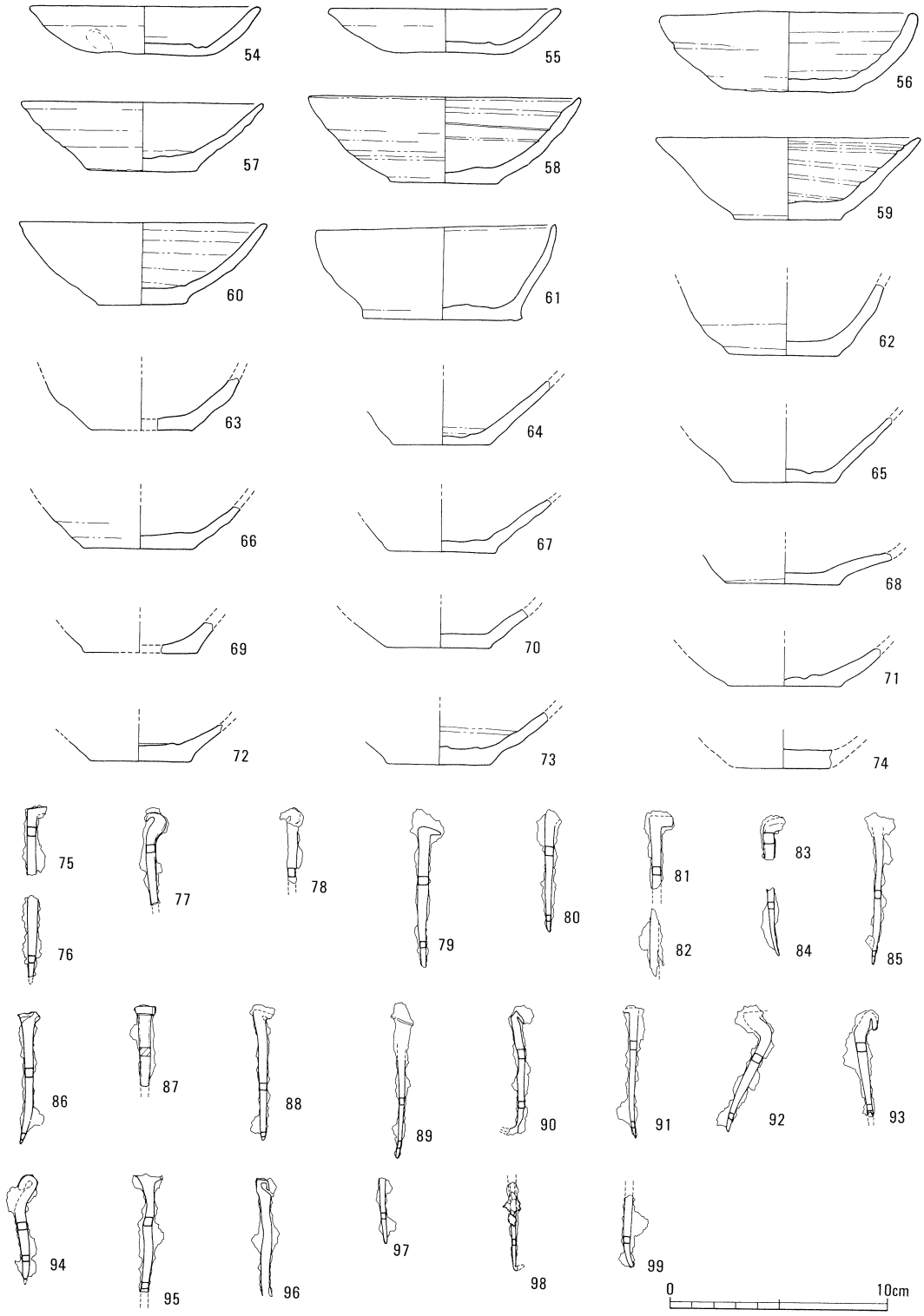
鉄釘は、合計22個体ある。完形のもので計測可能なものは、長さ６*cm*である。いずれも角釘で断面は、正方形と長方形である。頭部は、「Ｌ」字形に曲り、途中や先端で折れ曲るものもある。



第81図 Ⅲ区出土遺物実測図(3)



第82図　Ⅲ区出土遺物実測図(4)



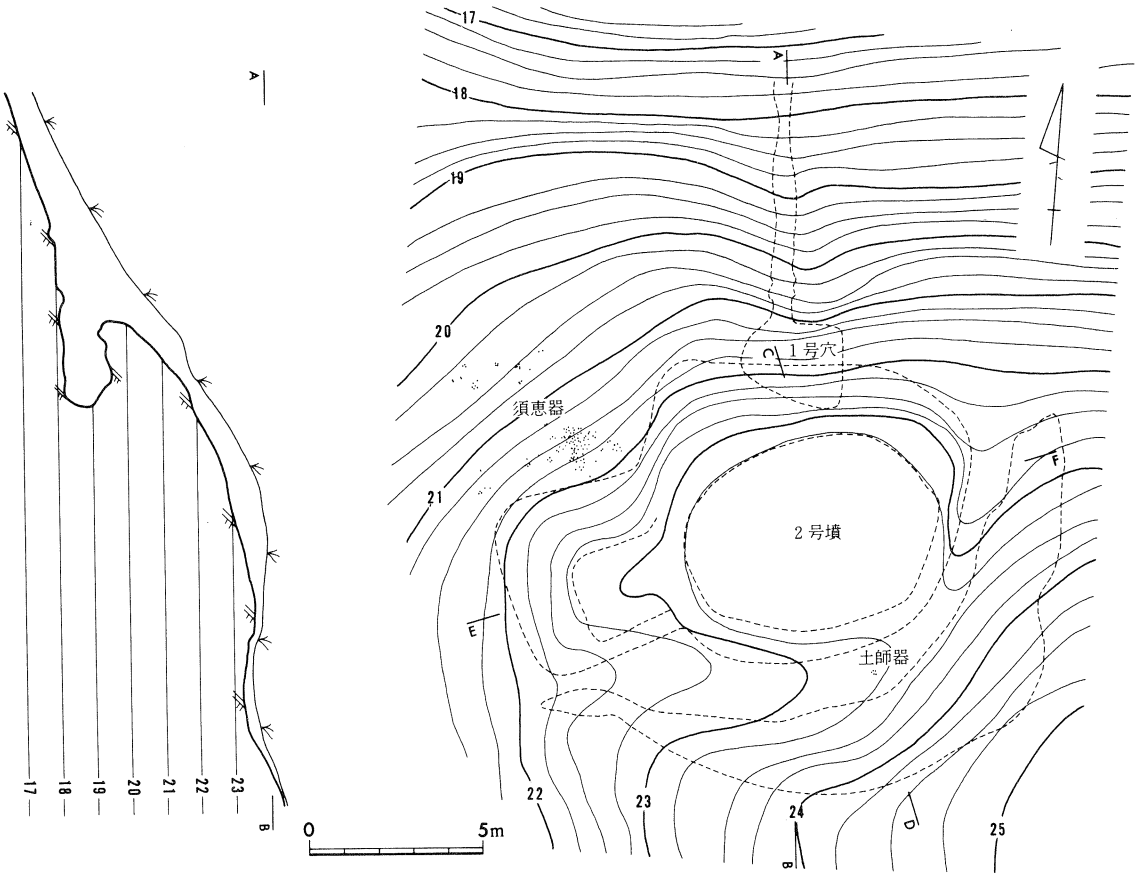
第83図　Ⅲ区出土遺物実測図(5)

中竹矢２号墳

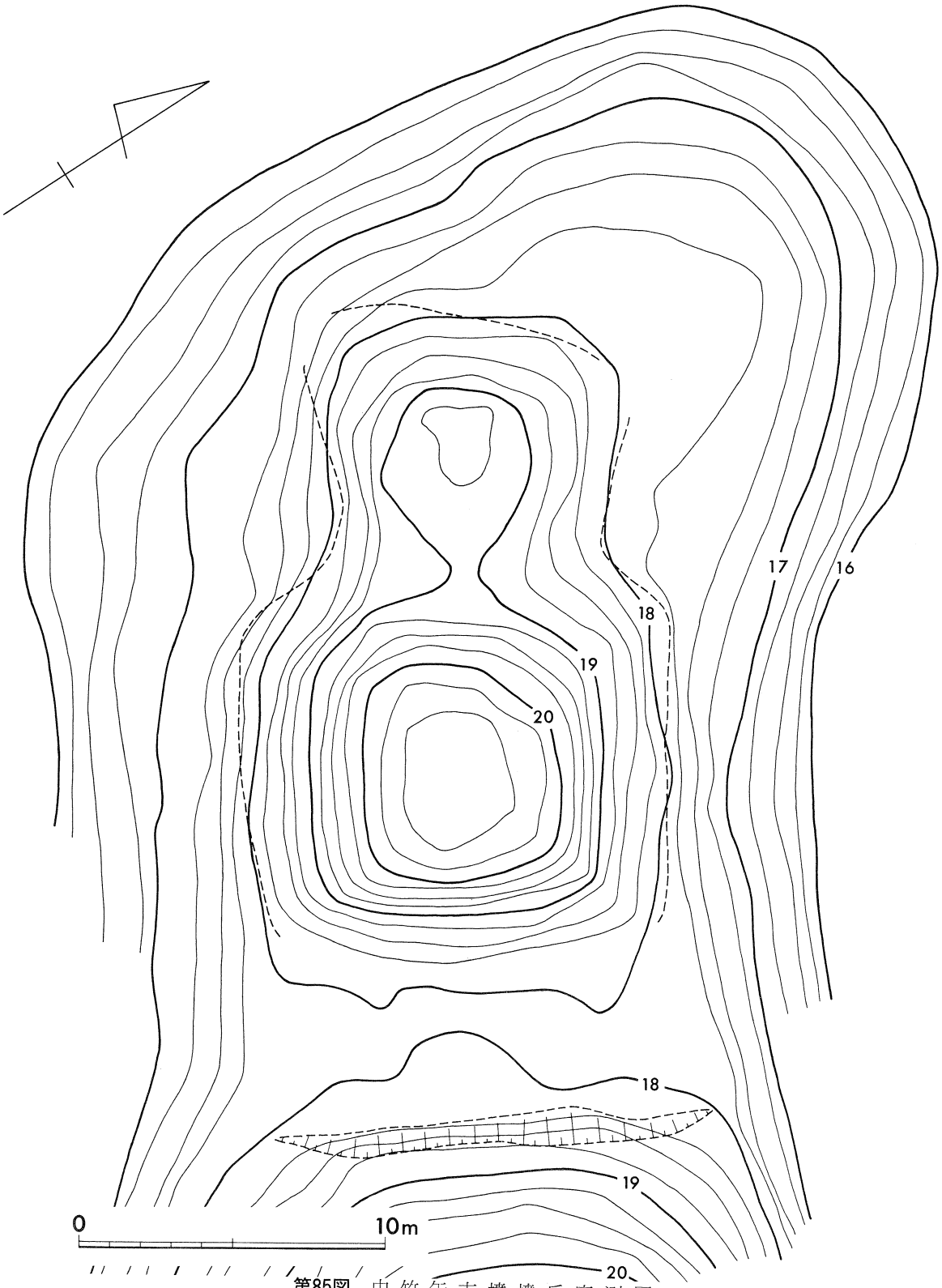
中竹矢古墳群は、全容は不詳であるが、少なくとも６基以上の古墳で構成されている。中竹矢古墳（註１）は北西に延びる丘陵尾根上に位置し、早くから所在が知られていた前方後方墳で長さ22ｍ、後方部幅14ｍ、前方部長９ｍを測る。 後方部の高さは、2.5ｍあり周囲から墳丘が明確に判断できる。後方部の東側には切削溝がみられるが、後世山道に使われ一部削られている。前方部北側には、幅５ｍの平坦面がある。中竹矢古墳は、墳丘の先端に位置しており、２号墳はその東約15ｍのところ、１号墳より３ｍばかり高所に位置している。２号墳の南側にも、尾根が続きそこに４基の古墳が確認されている。いずれも10ｍ前後で墳形は不明である。また同じ尾根上でⅢ区東側には社日古墳（註２）がある。一辺10ｍの方墳であり墳頂部に社日の石積みと石塔がある。中竹矢２号墳は、Ⅲ区の丘陵が西側の低丘陵へと下る斜面にあり、ほぼ東西に主軸をもつ前方後方墳である。調査は、この主軸上と前方部、くびれ部、後方部でそれぞれ、これと直交する３本のセクションベルトを設けて行った。

（註１）山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」島大論集第１号　1951

（註２）「松江市の文化財」遺跡分布調査報告　1980

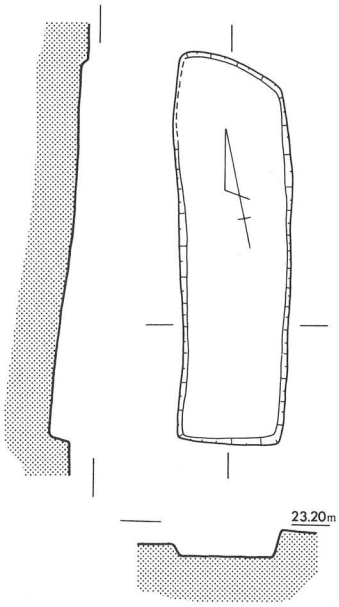


第84図　中竹矢２号墳墳丘実測図



第85図　中竹矢古墳墳丘実測図

第86図 中竹矢2号墳墳丘土層図



第87図　Ⅲ区ＳＫ28実測図

墳丘（第84図、86図）

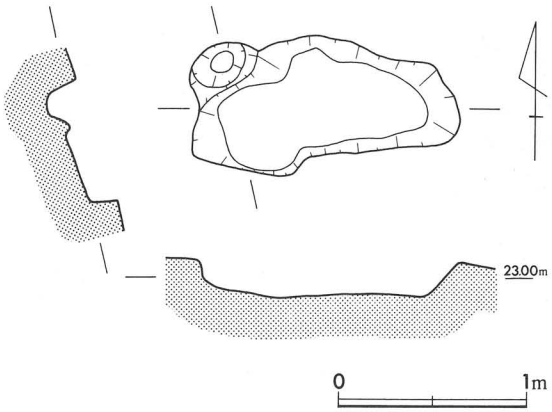
南側と東側の丘陵尾根側を削って周溝を穿ち、丘陵と切り離している。墳形は、前方後方形で、全長14*m*、前方部長４*m*、後方部長10*m*である。周溝側は、全体的に丸味を持ち、くびれ部も明確でない。後方部、北側は、地形に制約されており整っていない。全体的に前方部へ向けて傾斜して下っていく。墳丘は、斜面に周溝を掘った土を盛り土としている。盛土の順序は、北側斜面の低い方に盛土をし高い方の地山面とレベルを合せ平坦面をなした後、さらにその上に盛り土をし墳丘を形成している。

周溝（第84図）

周溝は、半円形にめぐっており、上端幅４*m*、下端幅１～２*m*で底はゆるやかに孤状を呈している。後方部南東コーナーには掘り残し部分があり多少高くなっている。

ＳＫ28（第87図）

墳丘盛土中から検出したもので、長辺２*m*、短辺60*cm*の長方形プランの呈している。深さ５*cm*と浅く、土壙主軸方向も古墳とずれることから、主体部とは考え難い。



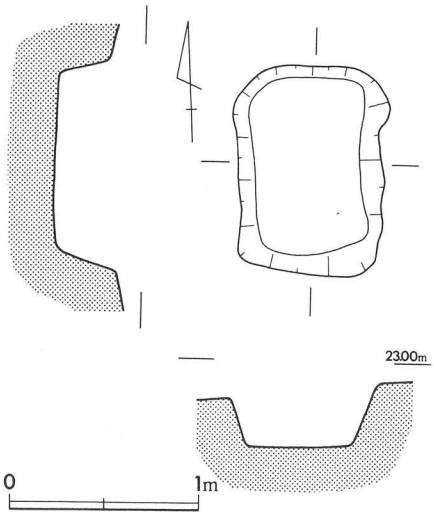
第88図　Ⅲ区ＳＫ29実測図

ＳＫ29（第88図）

盛り土を取り除いた本墳の基底面に掘り込まれており、不整形プランで長辺1.4*m*、短辺70*cm*、深さ15*cm*を測る。墓坑底面には、凹凸がみられる。この土壙は、古墳築造前のものと考えられる。

ＳＫ30（第89図）

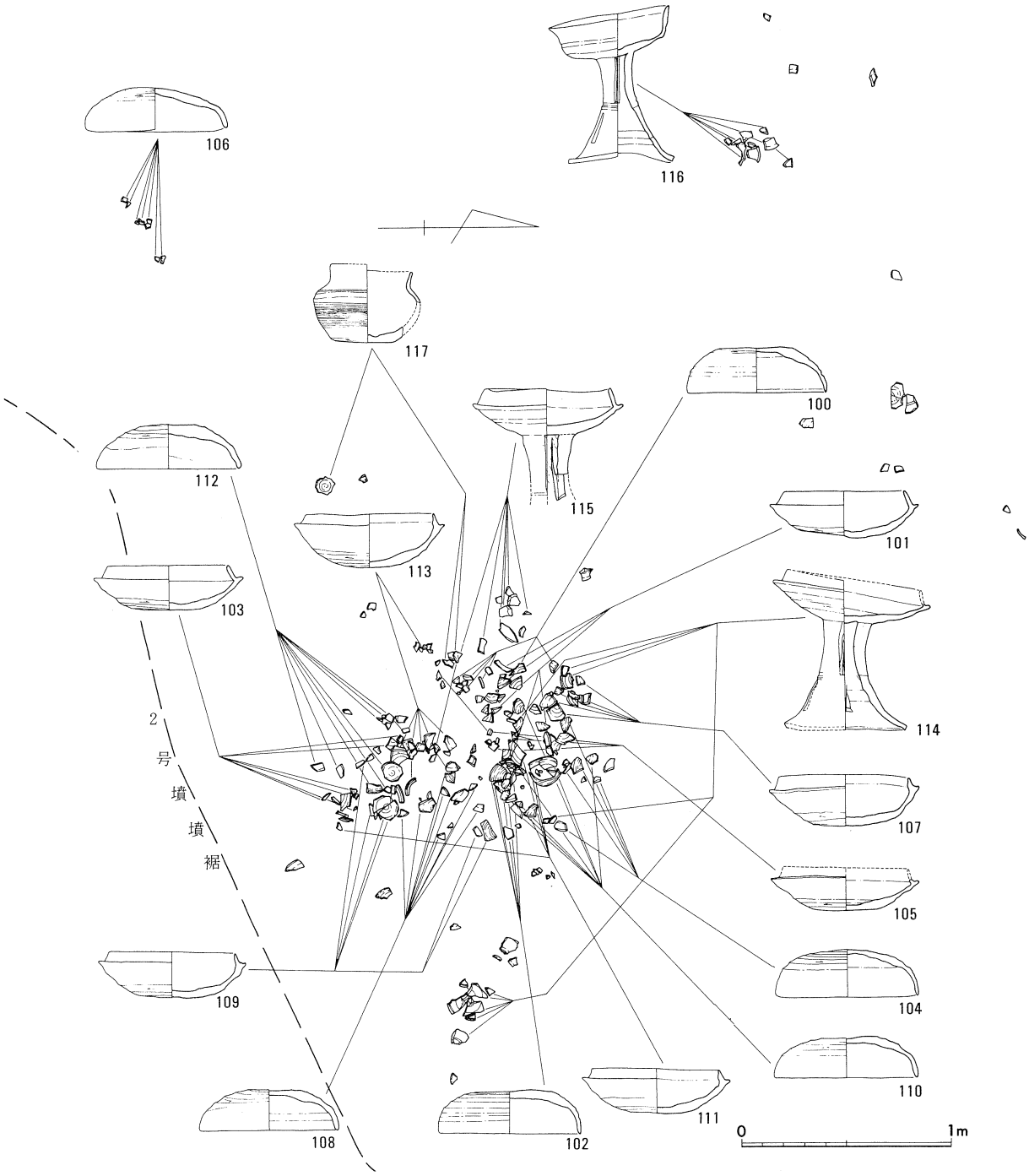
周溝底面に掘り込まれた長方形プランの土壙で長辺1.1*m*、短辺0.85*m*、深さ30*cm*を測る。土壙の壁は垂直に近く立ち上っている。これらの土壙からは、遺物が出土していない。



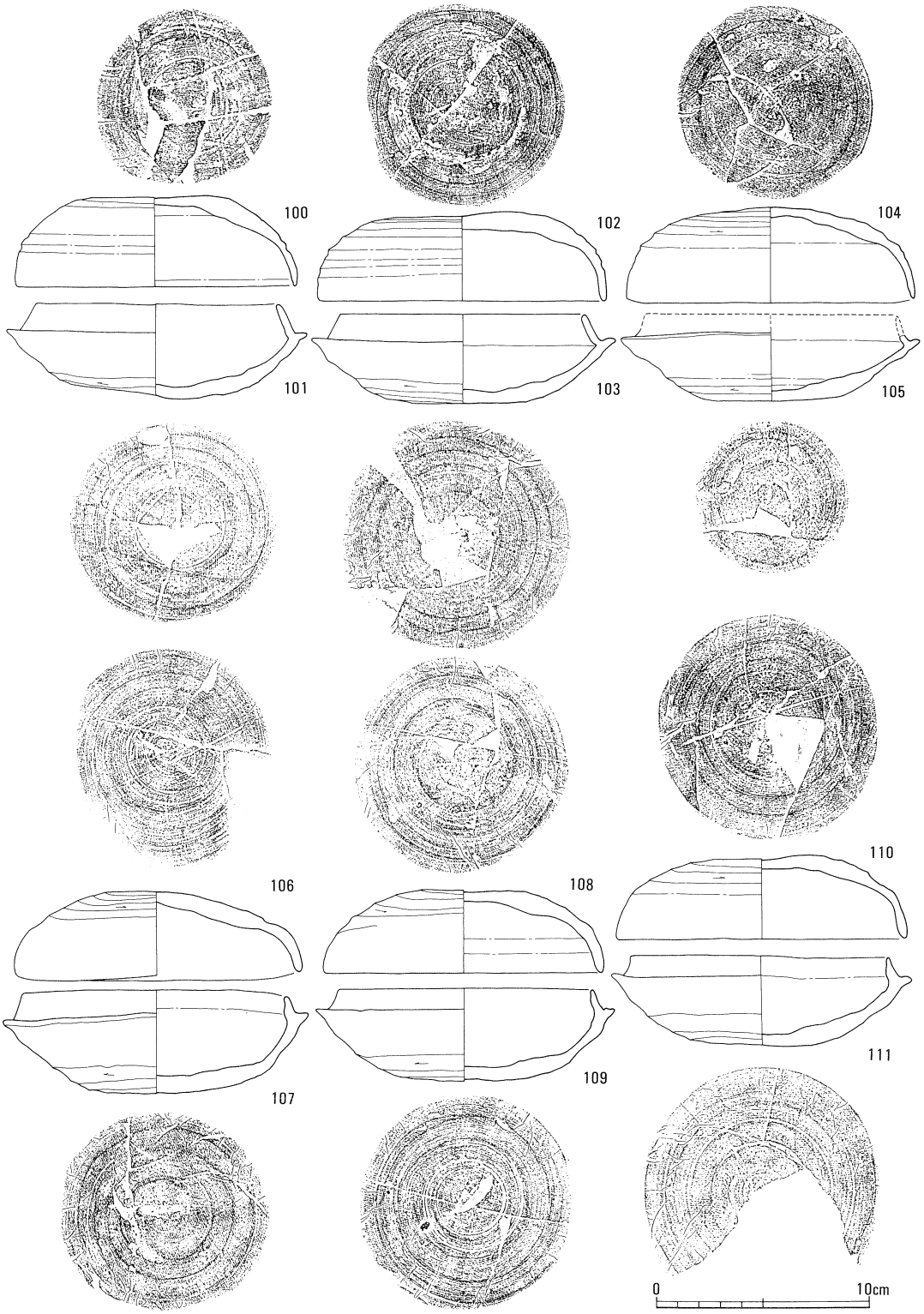
第89図　Ⅲ区ＳＫ30実測図

遺物出土状況（第90図）

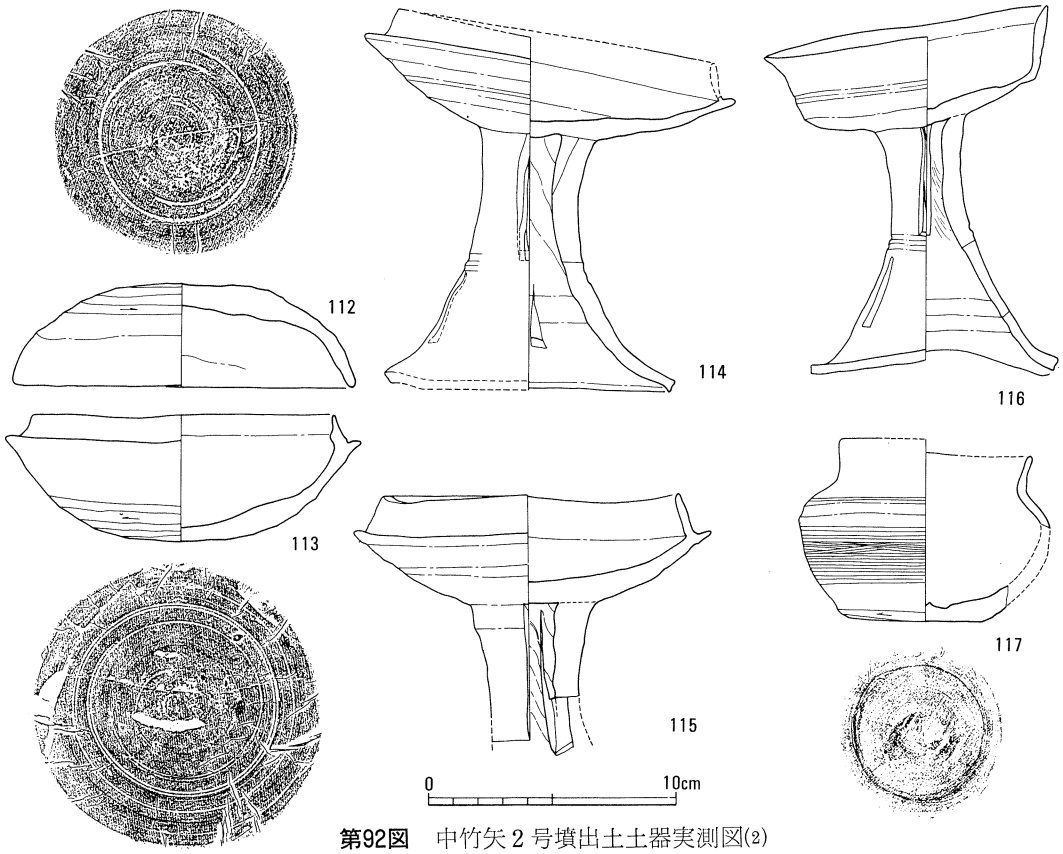
くびれ部北側より須恵器の坏14、高坏３、壺１が２×



第90図　中竹矢２号墳墳裾土器出土状態



第91図　中竹矢２号墳出土土器実測図(1)



第92図　中竹矢２号墳出土土器実測図(2)

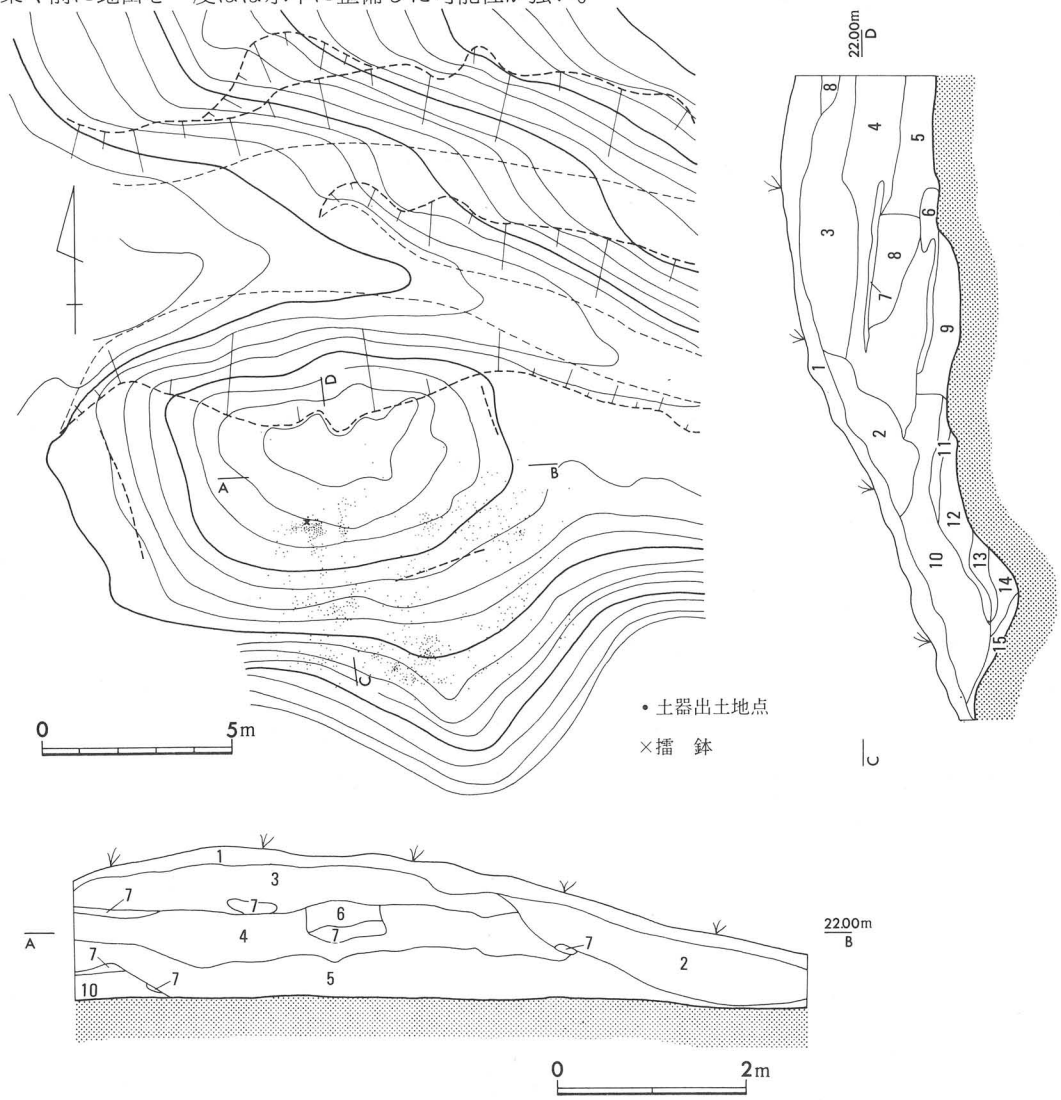
1.5*m*の範囲から出土している。須恵器の坏は２類に分けられる。Ⅰ類（第91図100～105）とするものは、坏、蓋の口縁部と天上部の境に低い稜をつくり、全体に薄手である。身は浅く、立ち上りが内傾気味に立ち上る。Ⅱ類（106～113）とする坏、蓋は口縁部が広がり気味で、口縁と天上部との稜が不明瞭となり、天上部が丸く、「ノ」のヘラ記号を施す。身は立ち上りが内傾気味で低く、器厚も全体的に厚手である。底部に「ノ」のヘラ記号を施す。Ⅰ類、２類とも分散して出土するものの一部ではⅡ類の土器がⅠ類の土器に被っている。２類の土器があることは、２回供献したものか、１回に２類の土器を供献したものであると考えられる。２回の供献があったとしても、層位的な観察からは各々に時期的な隔たりは少ないと思われる。

遺物（第91図92図）

須恵器の坏は上述のように、Ⅰ類（第91図100～105）、Ⅱ類（第91図106～113）に分けることができる。Ⅰ類は３セット、Ⅱ類は４セット出土している。高坏は３点あり、114、115は受部、たち上りをつくっている。坏部が内傾気味にたちあがり、坏部は浅い。脚部に三角形の透しが上下２段ちどりに穿たれている。116は、坏部口縁部が外方に直線的に立ちあがり、端部はするどい。脚部に細長い長方形の透しを上下２段に３方穿っている。壺（第91図117）の口縁部は直立し、体部外面にカキ目を施している。２号墳出土の須恵器は、坏の特徴より山陰Ⅲ期に含まれると思われる。坏Ⅰ類に比べ、坏Ⅱ類は、時期的にやや下る様相もあると思われる。

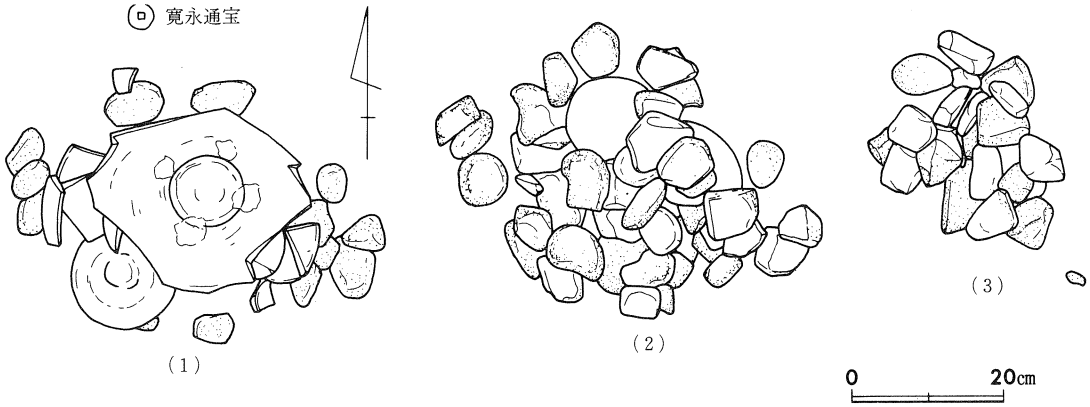
方台状遺構（第93図、94図、95図、96図、97図、図版92）

Ⅲ区の西南隅に築かれた方台状の遺構である（第93図）。丘陵の南側斜面にあたり 標高は 約20m ほどである。土壇の北側は約⅓を後世の山道の為削られ失っている。東西長は 9.8m を測り、南北長は復元すれば8.0mほどになると思われる。土壇頂は方墳のように明確な 平坦面 はみられない。高さは南側の裾より1.25mある。土壇の東と西には幅 4 ～ 5 mの平坦がある。盛土は版築されたところはなく皆しまりがない。盛土の中には旧表土と考えられる土層はみられなかったので、土壇を築く前に地山を一度ほぼ水平に整備した可能性が強い。



1. 表土
2. 暗茶褐色土
3. 明茶褐色土
4. 明茶褐色土
5. 褐色土
6. 黒褐色土
7. 黒茶色土
8. 明茶褐色土
9. 黄褐色土
10. 明茶褐色土
11. 暗茶色土
12. 暗褐色土
13. 暗茶褐色土
14. 茶褐色土
15. 赤褐色土

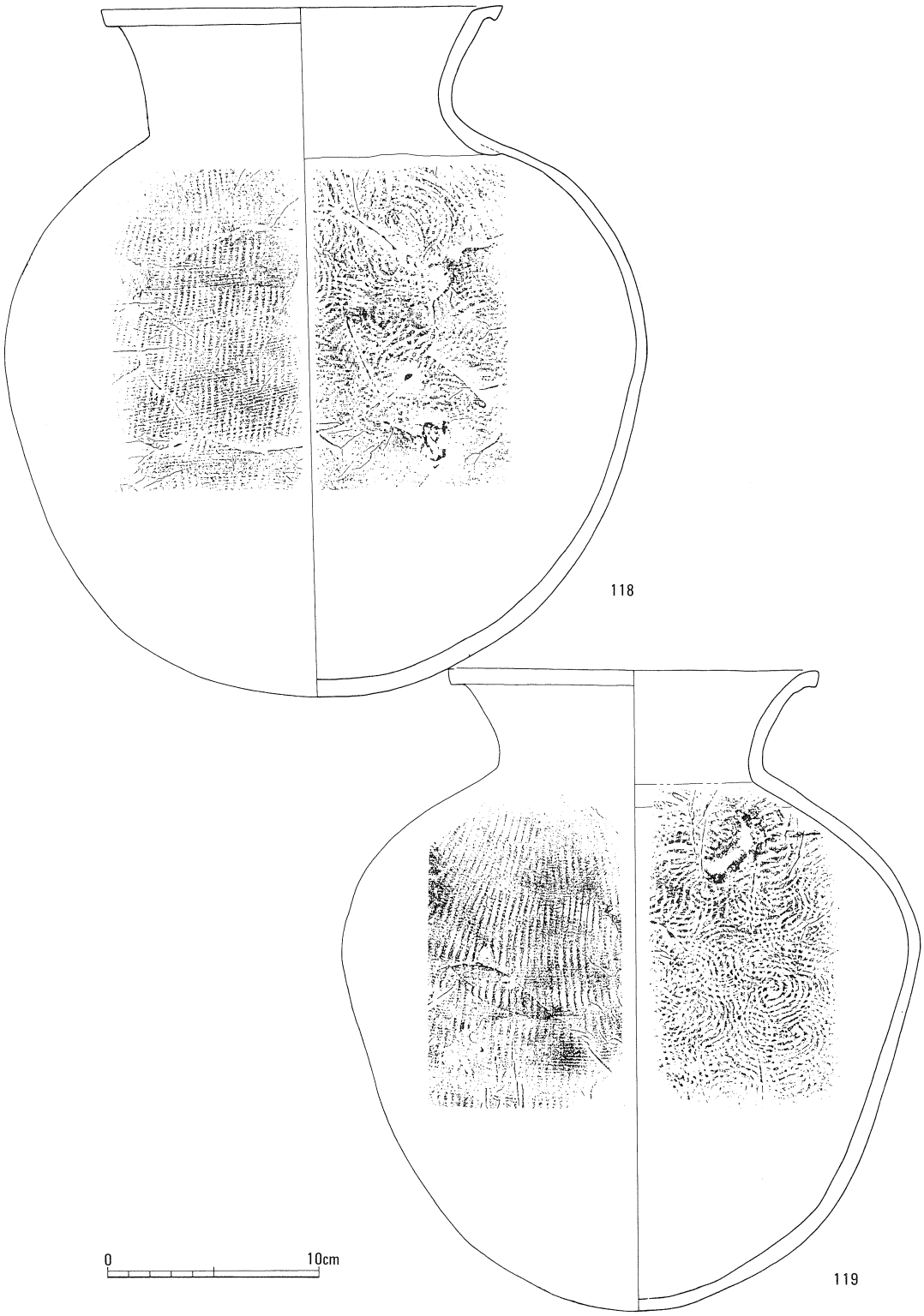
第93図　Ⅲ区方台状遺構実測図



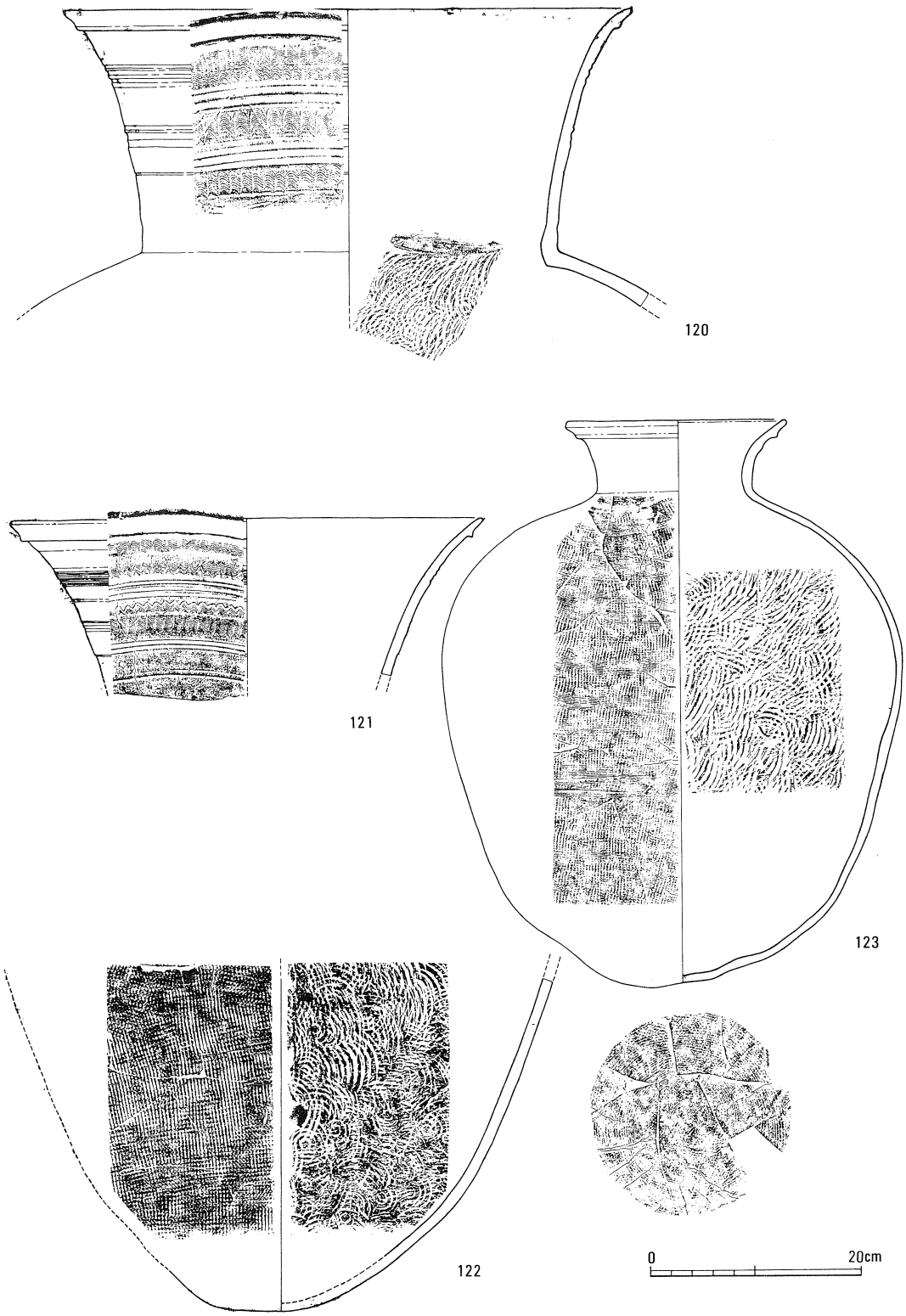
第94図　Ⅲ区方台状遺構土器出土状態

遺物は土壇全体と、その周辺から須恵器の大甕が、破細し散布した状態で、第1層、すなわち、表土から出土した（第93図）。このうち図示できたのは6個体である（第95.96図）。第95図の、118、119はほぼ完全形に復元できたもの丸底である。いずれも外面は平行叩き痕、内面は青海波文である。口縁外面にはクシ描波状文はみられない。青灰色を呈し、焼成は良好である。完形のものは胴部が球状になるもの（第95図118）と、いくぶん楕円形になるもの（第95図119）がある。これらの須恵器はこの土壇の年代を直接示すものではなく、何らかの事情で使用されたものと思われる。直接この土壇の年代を示すと思われるのは、第3層中より検出された遺構、遺物である。表土からは約50㎝を測る（第94図1～3）。最初に7.0～8.0㎝の自然石を20×30㎝の範囲に置き、次にその上に伏せたかわらけと自然石を交互に重ね、最後に口縁部を欠いた擂鉢を伏せた状態であった（第94図）。かわらけは合計12個あり（第97図125～136）、いずれも、ロクロを使用しないで成形し、外面底部近くには指頭圧痕が認められる。底部は内側にやや凹み、内面には、底部で一周し口唇にむけてにげるナデが施される。口径は11.5～12.2㎝、器高は2.8～3.3㎝でいずれも同一人によって作成されたと思われる。擂鉢（第97図124）は口縁部を故意に打ち欠いたものである。口縁部の内外のみに黄褐色の釉をかけている。他の部分は全て無釉である。内面に7本を一単位とした条を入れ、使用痕がみられる。外面底部は碁笥底風に削り出している。内側に5ケ所、外側に4ケ所の重ね敷きの痕が残るが、これらは、5×4㎝ほどの二枚貝を使用している。唐津糸の擂鉢で慶長～元和の焼成のものであろう。また、この擂鉢の付近より寛永通宝2枚が発見された（図版108）。これらを囲む施設、あるいは、土壙状のものは検出されず、当初からなかったと考えられる。方台状遺構の年代は少くとも寛永年間以降である。

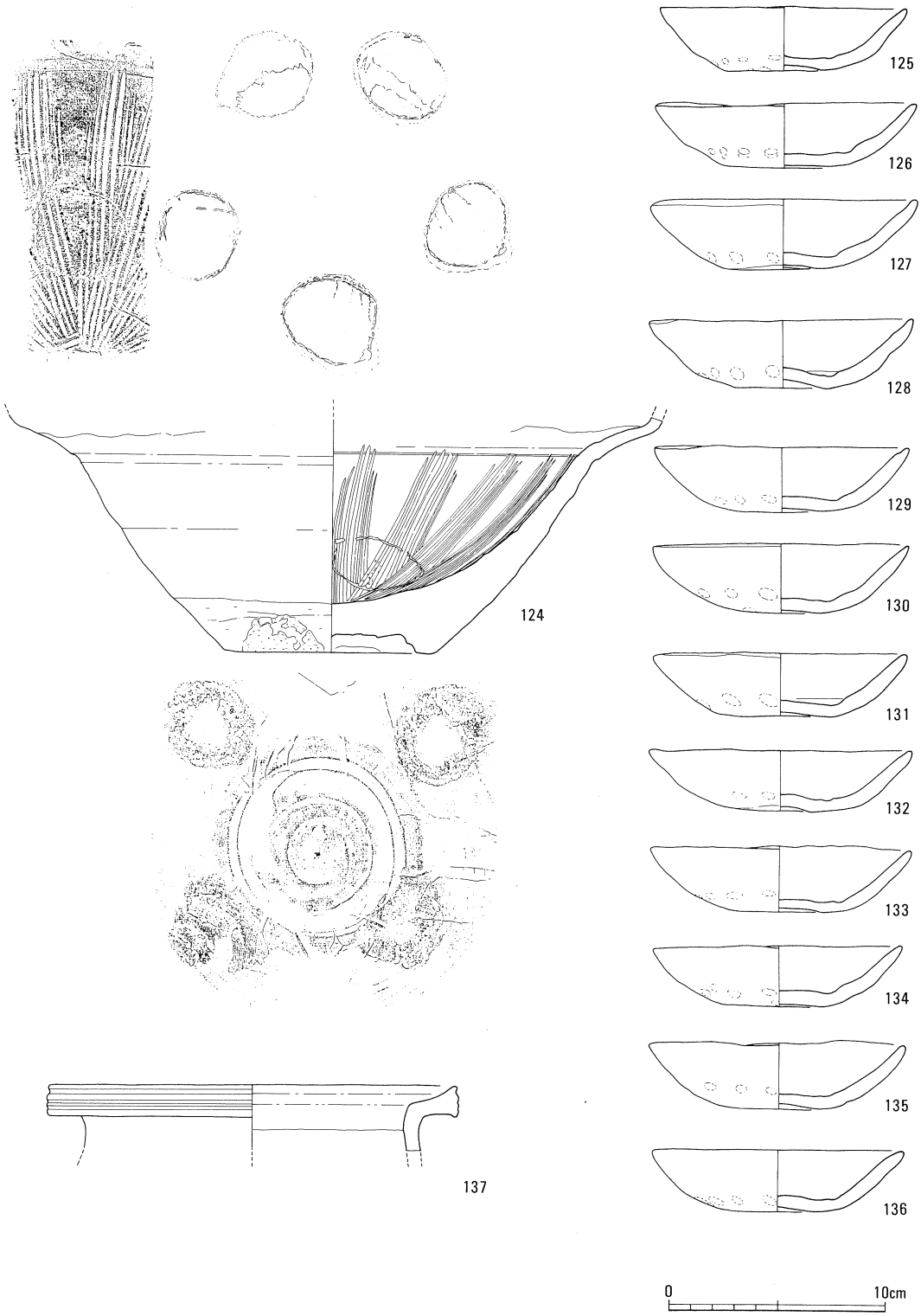
この方台状遺構の性格であるが、盛土の下には墓坑のようなものは検出されなかった。盛土中より発見された、自然石、カワラケ、擂鉢の出土状態も墓制に関係するものとは思われない。とすれば、この遺構に近い例としては、松江市乃白町松本で調査されたことのある松本修法壇跡を上げることができよう（横山純夫、近藤正「松江、松本修法壇跡『島根県埋蔵文化財調査報告書』第3集島根県教育委員会　昭和46年3月）。



第95図　Ⅲ区方台状遺構出土遺物実測図(1)



第96図　Ⅲ区方台状遺構出土遺物実測図(2)



第97図　Ⅲ区方台状遺構出土遺物実測図(3)

中竹矢1号横穴（第98図、100図、図版97）

地形測量の際に2号墳の北側斜面に溝状の落ち込みが認められたため、幅3mのトレンチを設定し掘り下げ、プランを確認した。

墓道は、全長7.1mあり、北向に開口している。羨門から1mの部分は平担で、そこから前方は緩斜面になっている。墓道の中ほどでの上端幅1,66m、下端幅0.56m、羨門部では上端幅1.2m、下端幅0.64mである。墓道は、羨門から中ほどにかけて広がり、先端にかけては緩やかに狭まっている。墓道の横断面は逆台形を呈しており、床面は丸くくぼむ。羨門より1.5mの所から前面は2段掘となる。墓道には、地山上に黄褐色の土が30cmの厚さ程敷かれており、遺物もその上面から出土している。墓道の最下層、すなわち、地山上に敷かれた黄褐色土は、地山加工時にできたもので故意に敷かれたものである。

羨門は、縦1.13m、横0.82m、深さ10cmの枠を掘り込み閉塞石等を受けるようにしている。羨門の前側部分は、閉塞石を受けるように一段低くなっており、更にその前面には幅40cmの段状の高まりを削り出している。羨門の規模は、幅60cmを測り、高さは推定で1mである。

羨道には、長さ50～80cmの細長い石を羨道と平行に3段に積んでいる。石積は羨道の高さの半分残っており、上部の石は墓道上に散乱していた。羨道に積まれた石は、閉塞石か塞門に穿たれた刳り込みに蓋をする際の内側からの支えと考えられる。羨道は、長さ60cm、幅50cmで玄門に至る。高さは天井が崩落しており、推定で約1m程と思われる。幅は玄門の方がやや広くなる。

玄室は玄門上部と天井部が崩落している。平面形は、台形の短辺が丸味を持った形で、その側面に玄門を穿っている。玄室長は左壁で2.4m、右壁で1.2m、玄室幅2.95m、右袖幅10cm、左袖幅1.33mを測る。床面周囲に幅10cm、深さ5cmの排水溝が巡り、羨道から玄門に至る。床面は、中軸線上やや左壁寄りの部分から約10cm高くなり平坦をなしている。主軸に沿って断面をみると、床面はほぼ水平で、天井部は崩落しているが玄門より奥壁が高くなり、1.05mある。断面形はドーム形を呈している。玄室内には、天井部、右壁にはノミ痕がみられる。ノミ痕は浅い「U」字形の断面をしている。

遺物の出土状況（第100図）

玄室内からの出土遺物は、馬具の轡1、鉸具2、飾金具4、剣1、刀子2、鉄鏃6、鉄斧1、須恵器の坏3、提瓶1、ガラス玉90である。

馬具は、轡と鉸具が左側壁に沿って出土し、飾金具が玄室中央から2点出土している。鉄剣は、主軸と平行するように切っ先を玄門方向に向けている。刀子は一本が切っ先を剣と対立するように出土しており、もう一点剣の近くで鹿角装具の刀子が出土している。鉄鏃は、奥壁の中央部の提瓶の下から3点出土し、そこから左壁に寄った所で1点、左壁の中央で1点出土している。左壁のコーナー近くより鉄斧1が出土している。鉄鏃は、動かされた可能性がある。須恵器は、奥壁中央から提瓶が口縁を上向に出土し、右壁近くからは坏の身が1点は正位、1点が逆位、坏蓋が正位で出土している。ガラス王は、玄門の延長上で奥壁の少し手前から出土している。

墓道からは、須恵器の蓋坏、高坏、瑤、脚付坩2、壺3が出土し、その内羨門付近の短頸壺1点

を除くと、他は墓道の中間地点2mの範囲内に集中している。石の下になり壊れたものもあるが、ほとんどが完成品で墓前祭祀に使用されたものと考えられる。

遺物（第101図、102図、103図、104図、図版111～114）

鉄器（第101図）

剣（第101図138）鋒先を欠くが、全長63cm、刃幅3.3cm、身厚は1.0cm、鋒先の方は0.7cmと薄くなる。剣身の鎬は不明瞭で、木質が全面覆っている。両関をなしており、茎の断面は長方形である。幅は、1.5～2.3cmあり、関の部分には柄木が付着している。刀子（第101図139）は、現存長23.7cm、刃幅2.0cm、厚み0.7cmある。木質が残り、関の作りは不明である。鹿角装刀子（第101図140）は、現存長16.3cm、刃幅1.5cm、厚み0.4cmある。茎に鹿角装具が着装されている。鏃は、6本出土している。細根式は2本あり現存長は、11.9cm、鋒幅1.2cm、厚み0.2cmである。広根式4本あり143は、全長9.4cm、鋒幅2.3cmで、逆刺が付く。144 は全長9.8cm、鋒幅2.3cm、厚み0.2cmで逆刺が付く。145も 144 と同型式で全長、9.5cm、鋒幅2.4cm、箆被1.0cm、厚み0.2cmで逆刺が付く。146は現長6.0cm、鋒幅2.7cm、厚み0.2cmである。147は、剣138の鞘部分と思われる。長さ3.4、厚み0.2cmである。鉄斧148は、全長10.3cm、幅3.8cmある。3.5×2.3cmの袋部を有する無肩式である。

馬具（第101図149～154）

馬具は玄室内左袖床に密着して轡が、轡に伴うと考えられる。飾り金具四個は散佚した状態で出土した。轡は保存状態が比較的良好で、引手を玄室右壁にむけ、鏡板とその西側で検出された鉸具との距離は約25.0cmである。恐らく鏡板と鉸具との間は革帯によって結ばれていたと考えられる。従ってこれらは、ほぼ原位置を保っていたものと考えて良いと思われる。

轡は銜、引手、鏡板が残り第98図はその復元図である。

銜は長さ15.1cm、引手は長さ14.5cm、鏡板は8.0×7.8cmで、断面は5.0×6.0mmの方形で検出時には銹化が著しかった。鉸具は長さ5.9cm、幅3.7cmである。

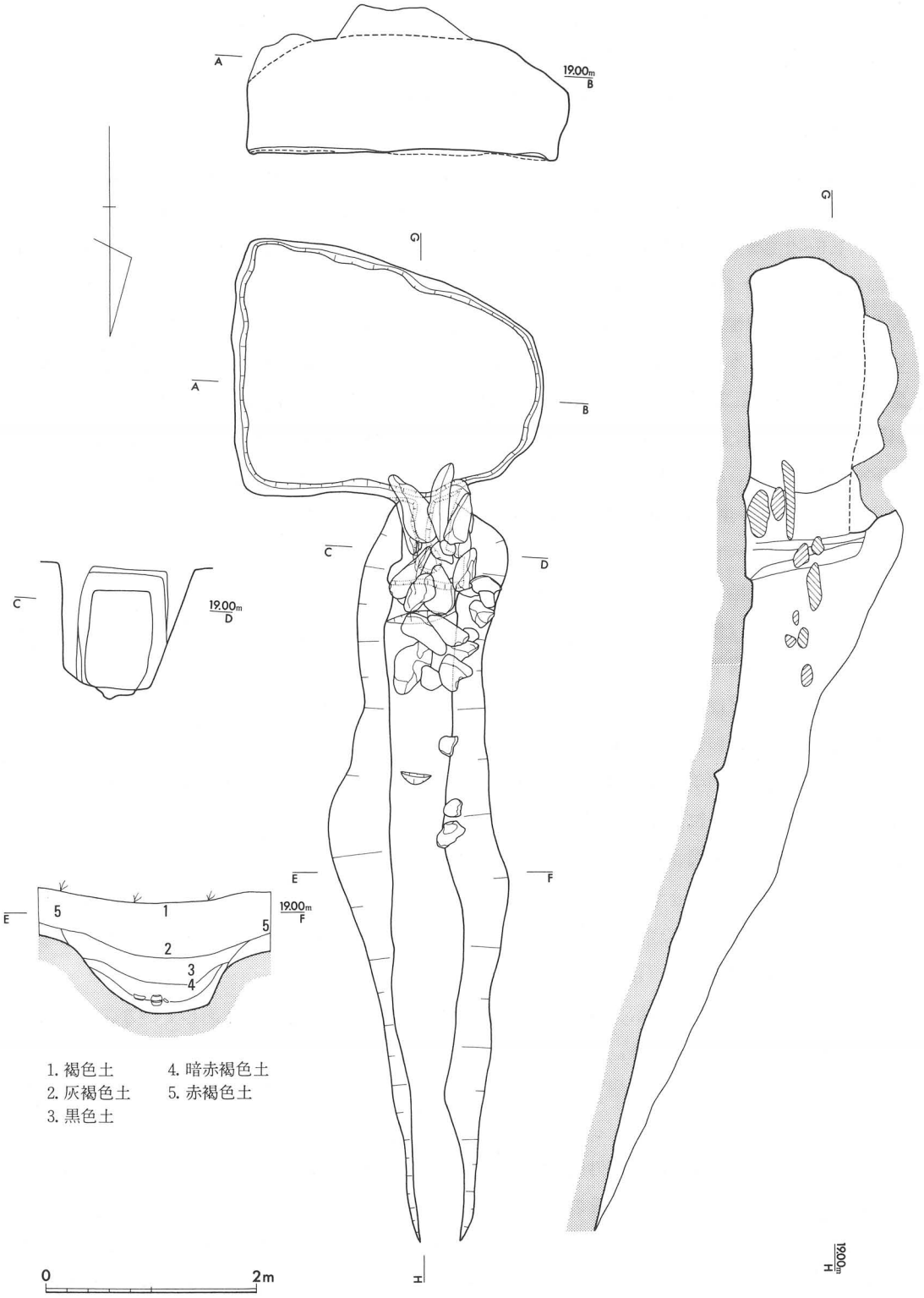
須恵器（第102図、103図、104図、105図）

坏は、玄室、墓道合わせて18個出土している。坏身は、同形である。立ち上りは内傾気味に立ちあがり、受部は水平にのび底部外面はヘラ削りを施す。黒灰色で焼成は良く、焼けひずみのあるもの（第103図160、162、166、169）がある。

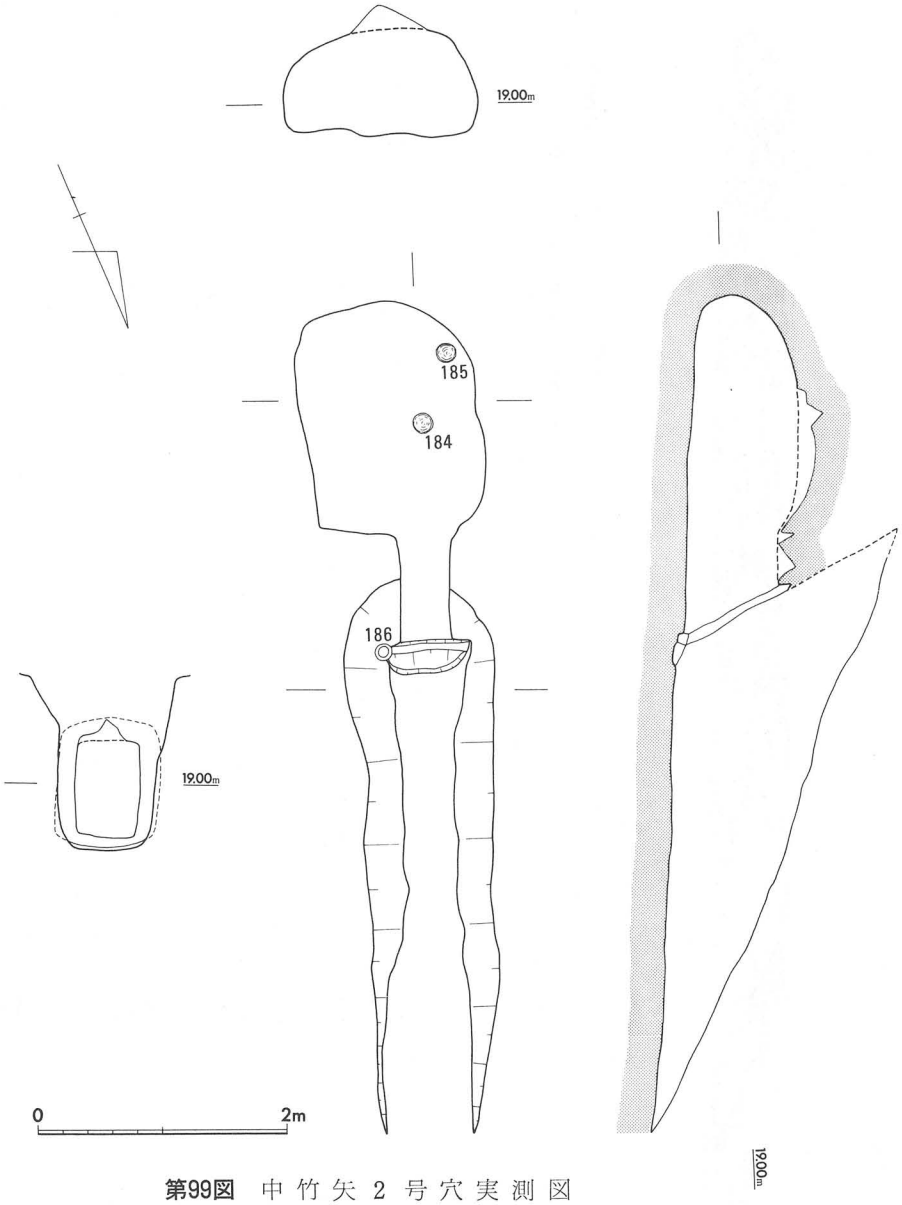
坏蓋（第103図160、169）は、天井部と口縁部の境に沈線を入れ稜を作り出している。口縁は内傾し、端部内面に沈線を入れる。

提瓶（第102図159）は、正円形で、肩部に鈎形の把手が着き、体部外面には同心円にカキ目が施される。

高坏（第103図165）は、口縁が外反気味に立ち上り、外面に5条の凹線を入れる。脚部には上下、3方に長方形の透しを入れる。上段の透しは内面まで貫通していない。甕は、2個体ある。176は、口頸部に櫛目を施し、体部上部に櫛描列点文が施される。177は、口頸部に櫛描波状文を入れ、体部には櫛描列点文を施しており、多小大きく作られている。壺178～181は、ともに短い口縁を持つ。178は、体部外面に櫛描列点文を施す。180は、体部外面のナデが残るのみで全く文様は施されない。

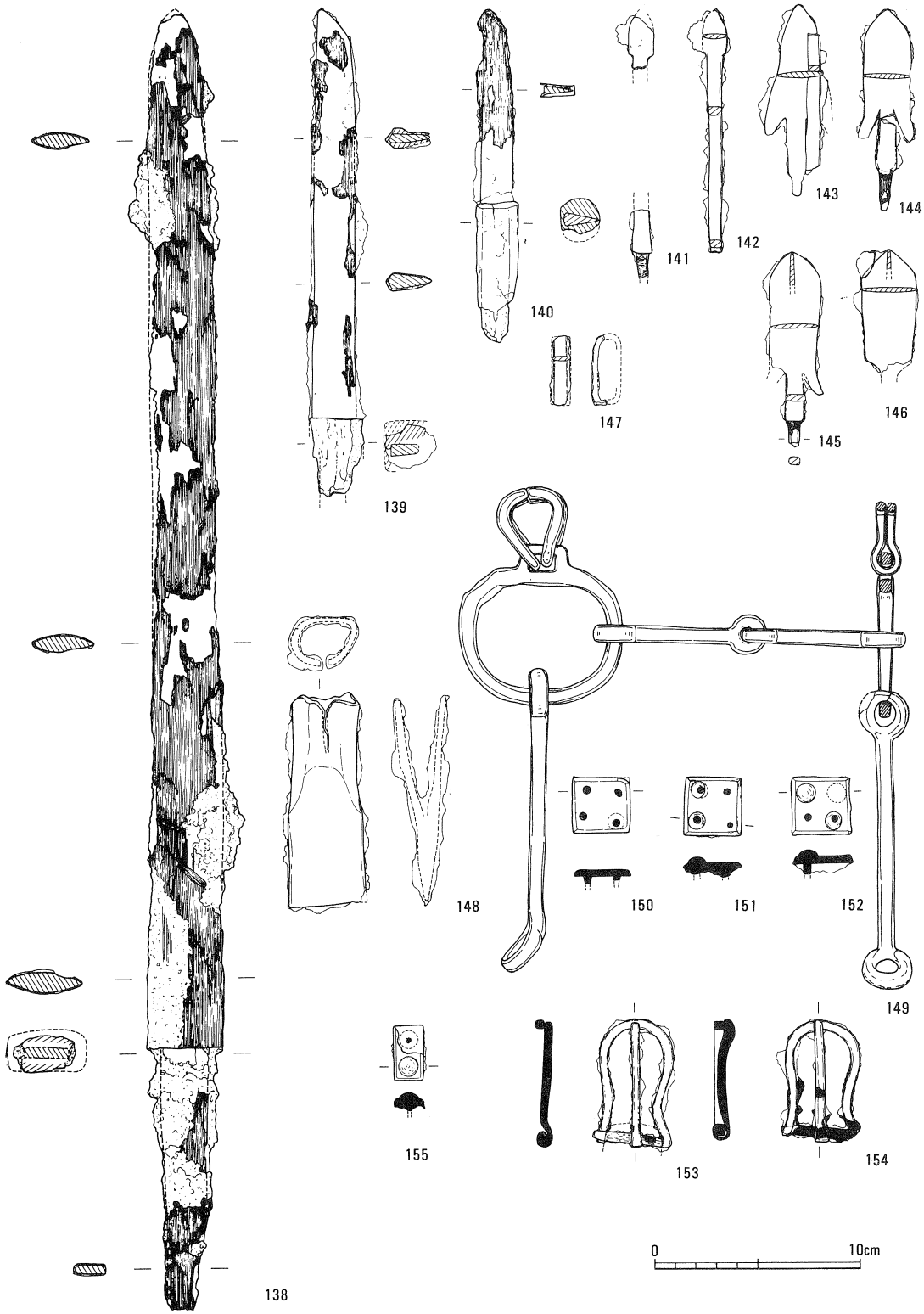


第98図 中竹矢1号穴実測図

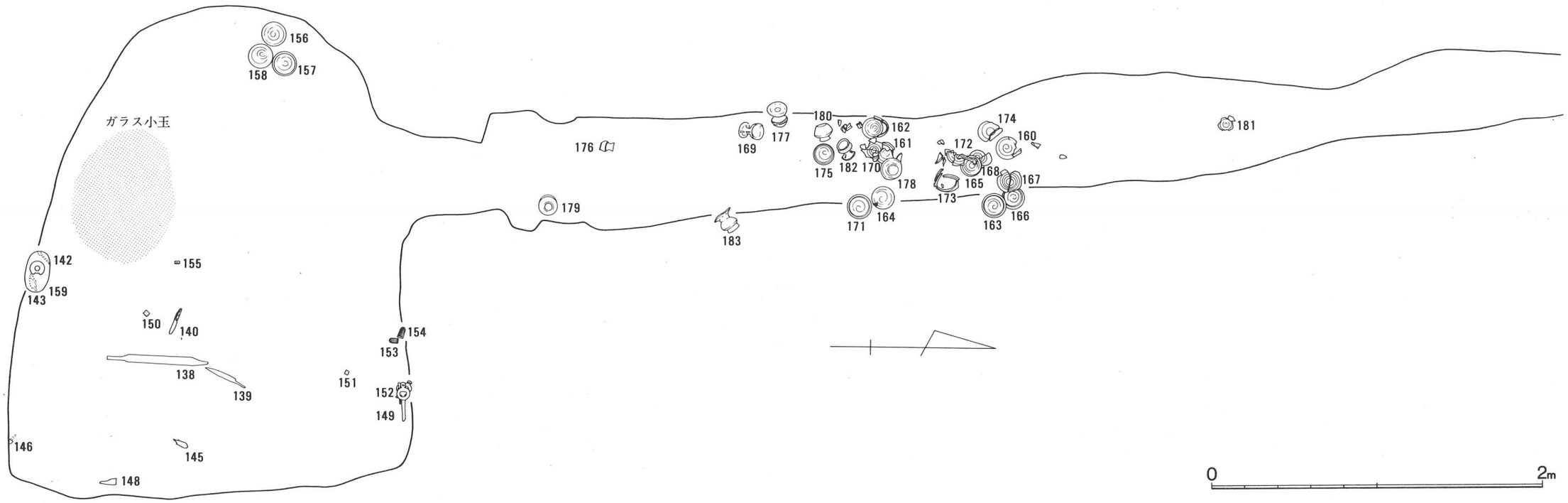


第99図 中竹矢2号穴実測図

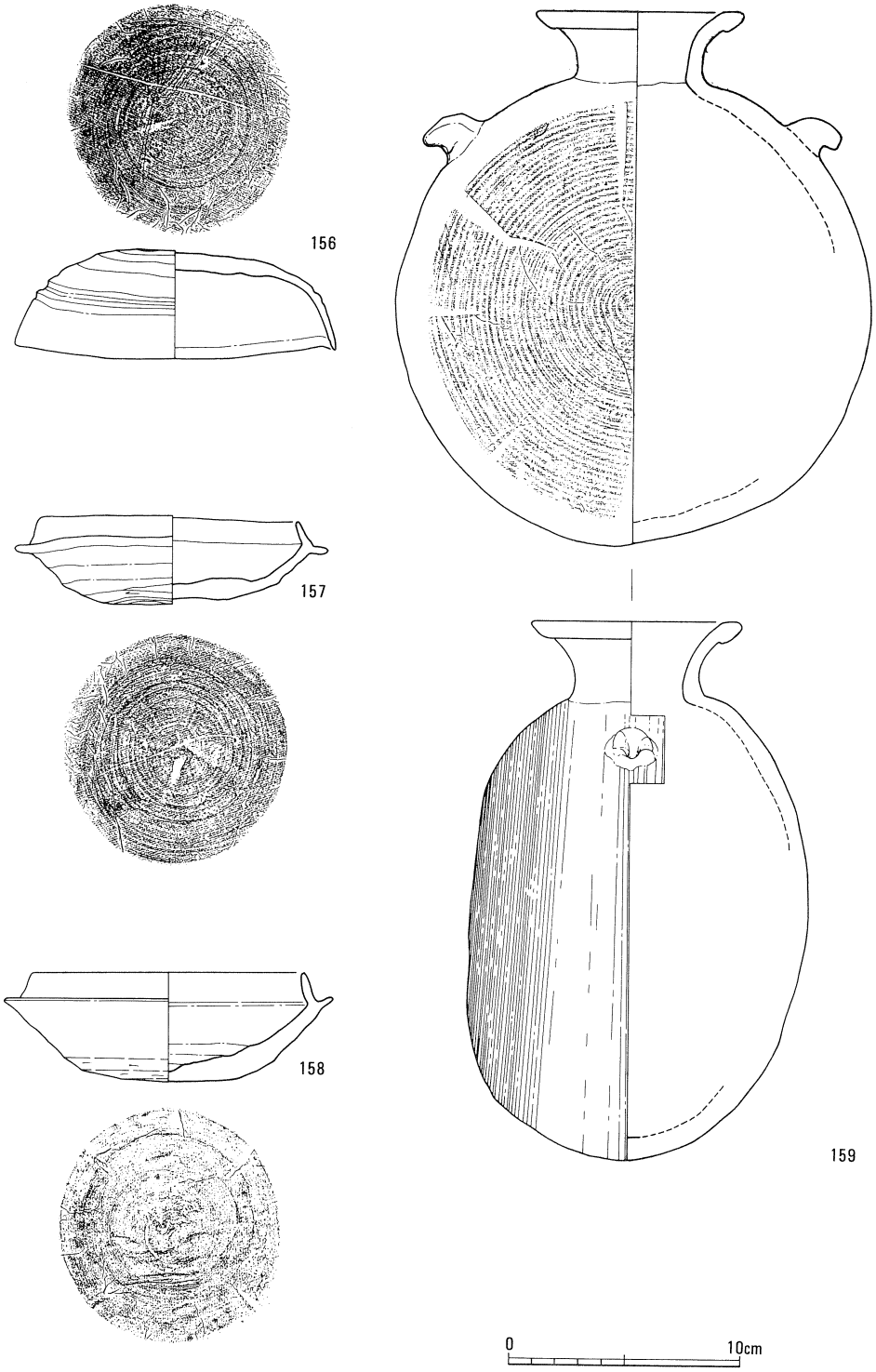
181は、口縁部が外反気味に立ち上り、体部外面下半にカキ目を施す。底部外面に「一」のヘラ記号を施している。182、183は、脚付の坩で、182は、口縁部が短く、一部成形時にゆがんでいる。体部外面に櫛描列点文を施す。脚部には、3方に2個方形、1個三角形の透しを入れる。183は、口縁部が外反気味、体部が折曲し稜が付き、脚部は裾が広がり、上下段合計7個の円形の透しが入る。坏の蓋には明確な稜が付いており、身の立ち上りも低い、これらは、山陰Ⅲ期の特徴である。2号墳の墳裾出土の坏、蓋には稜が付くものと、そうでないものの2種類があった。1号穴出土のものは、2本の沈線により明確に稜を作り出しており、三者には蓋の形態によりバラエティがある。



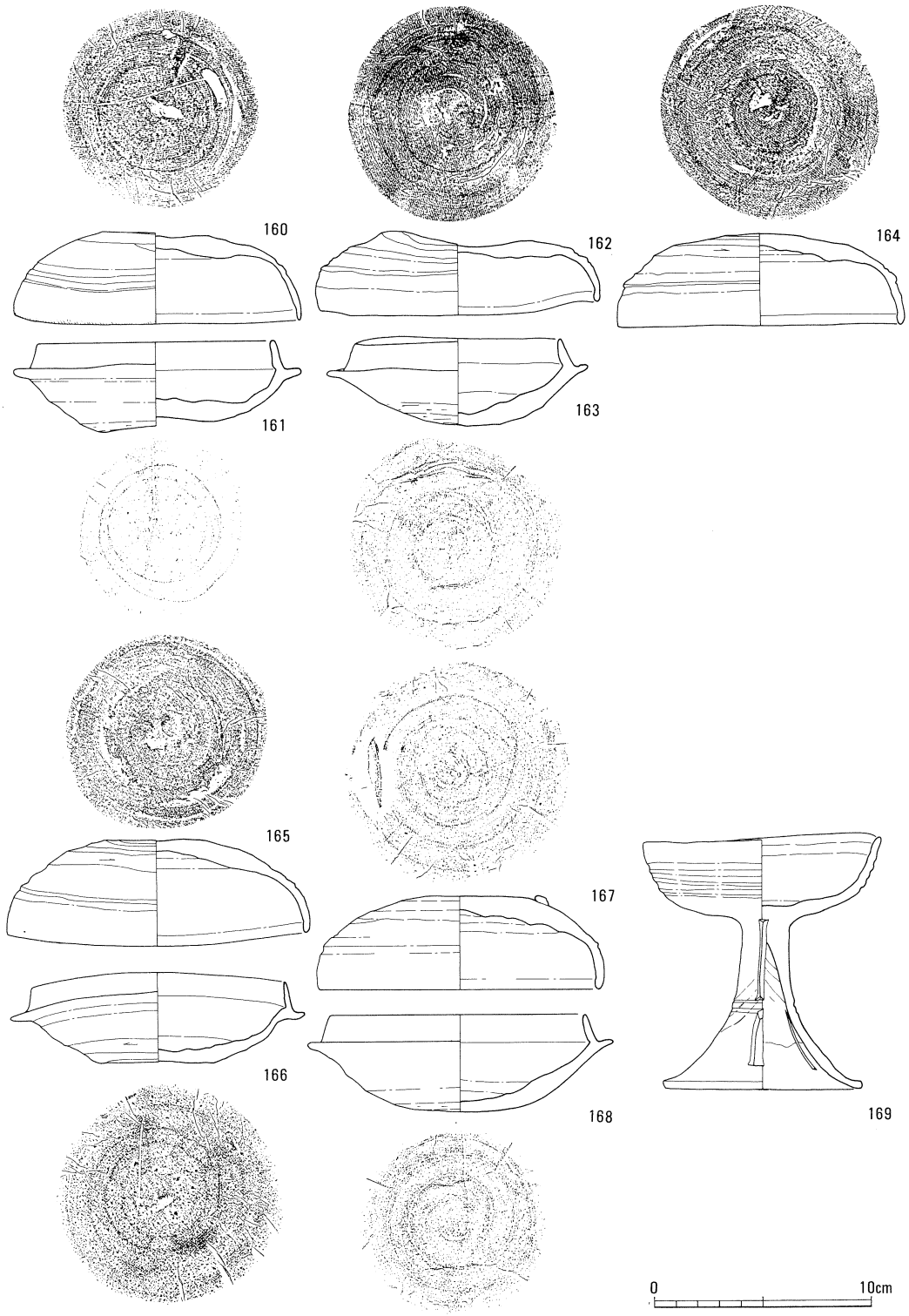
第101図　中竹矢横穴群出土遺物実測図(1)



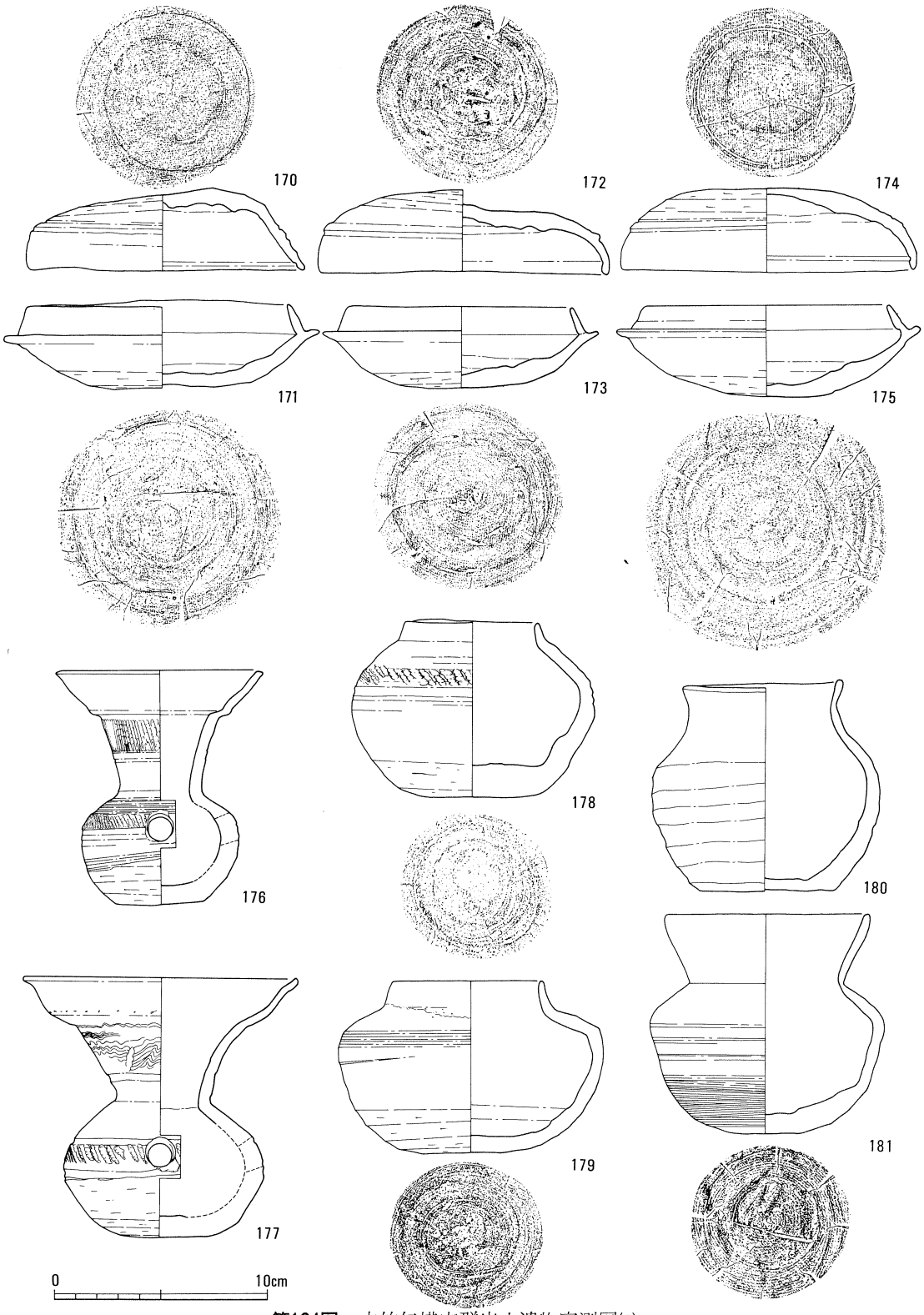
第100図 中竹矢1号穴遺物出土状態



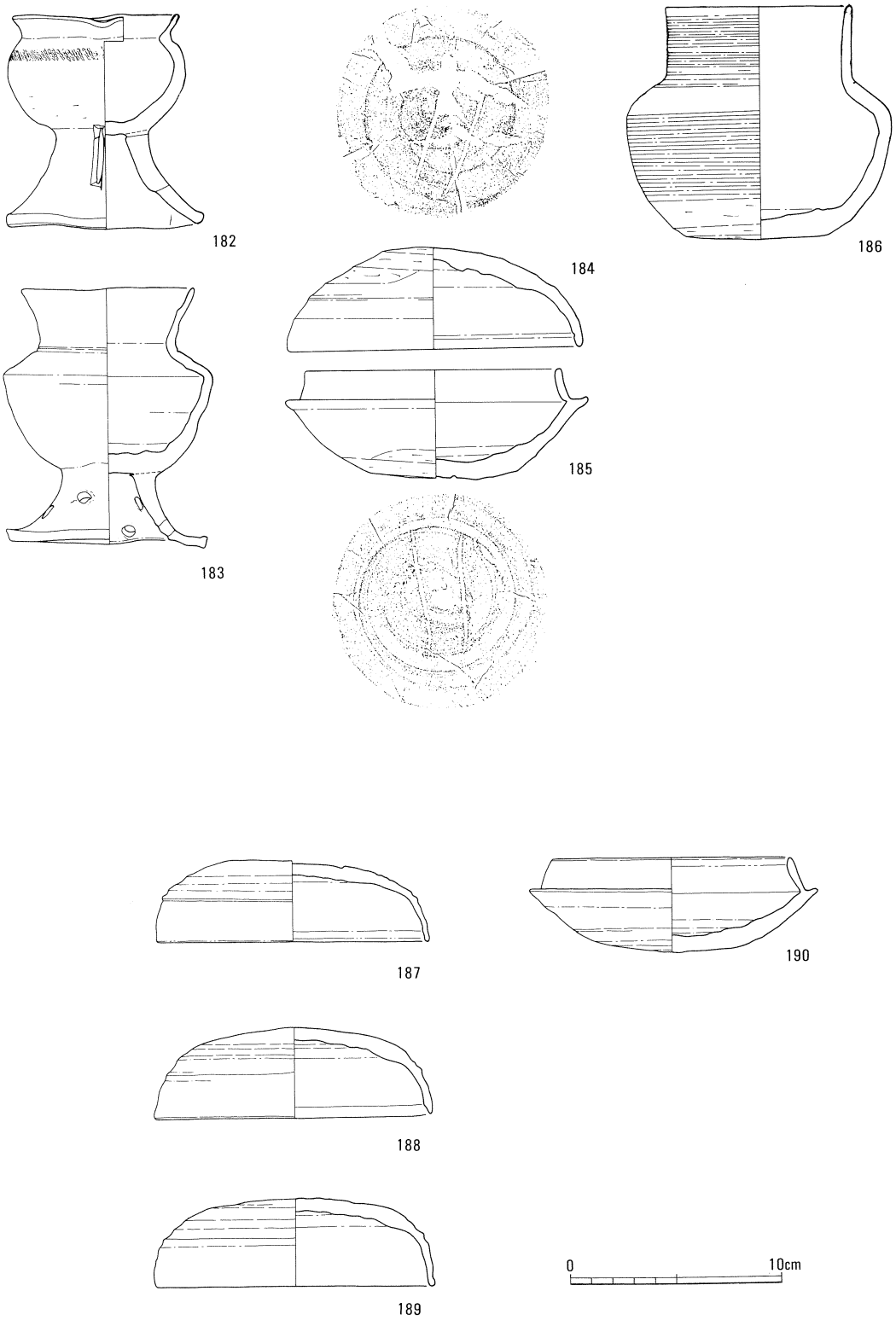
第102図　中竹矢横穴群出土遺物実測図(2)



第103図　中竹矢横穴群出土遺物実測図(3)



第104図　中竹矢横穴群出土遺物実測図(4)



第105図　中竹矢横穴群出土遺物実測図(5)

ガラス玉（図版114）

ガラス玉は、90個あり、径は、2.78㎜～5.90㎜と比較的小形のものである。厚さ0.91㎜～3.66㎜で径に比べて多少薄くなっている。孔径は、0.6㎜～2.86㎜である。 25・26・34～36・38・40は、側面に孔と平行に気泡が並んでおり、管切法によるものと思われる。両端面とも平端面となっている。断面が方形を呈するものには、40・63がある。色調は、41が黄色、30～32が濃いコバルトブルー、10・24～26・33～40がスカイブルー、他は、コバルトブルーである。

2号穴（第99図、図版101）

地形測量の時点で1号横穴と同様に溝状の落ち込みを確認していた。1号横穴の検出により横穴の存在が予想されたため、幅3㎡のトレンチを設定、遺構を検出した。1号横穴と2号横穴の墓道先端でのレベル差は、2号穴の方が1.5㎡程高くなっている。

墓道

墓道は、全長3.9㎡あり、北向に開口している。墓道の傾斜角は5°で玄室から同様の傾斜が続いている。墓道の中間部分での上端幅1.0㎡、下端幅0.42㎡である。 上端の幅には変化が少く、下端の幅は、中間部分から先端部にかけてやや広がっていく。断面は逆台形状を呈しており、底は丸味を持っている。羨門の部分だけは二段掘となっている。

羨門は、長さ80㎝、幅40㎝あり、高さは推定で70㎝程度と思われる。1号穴のような刳り込みはなく、羨門下部に閉塞用の掘り込みがある。

玄室は、玄門から天井部にかけて崩落している。平面形は、長方形の三隅が丸くなった形で、玄門の位置が右に寄っている。平面プランは、右側が狭く、孤状に回り、左側が広く方形のコーナーを作っており、1号横穴と共通している。 玄室長1.85㎡、 玄室幅1.4㎡を測る。床面は、羨道の左側の延長線上より左側が約5㎝程高くなり、平坦をなしている。主軸に沿って断面をみると、床面は玄門の方が低く、約5°の傾斜をなしている。天井部は崩落しているが、ドーム形を呈していると思われる。

遺物の出土状況（都99図）

玄室内からは、須恵器の蓋坏が床面上より出土している。玄室の右側で、蓋と身が正位で45㎝離れて出土している。羨門前から、須恵器の直口壺が、口縁を上にし床面から30㎝浮いた状態で出土している。

遺物（第105図、図版112）

玄室内出土の須恵器の蓋は、口縁部と天井部の境にわずかに低い稜があり、天井部がかなり丸味を持っている。口縁部内外面はヨコナデ、外面は、回転ヘラ削りを施している。身は、立ちあがり内傾気味で低く、端部は丸い。底部外面は回転ヘラ削りを施す。蓋と身ともにヘラ記号は「‖」である。墓道出土の壺は、口縁外面と肩から胴部下半にかけてカキ目、底部に回転ヘラ削りを施している。底部のヘラ記号は「‖」である。須恵器の時期は、山陰Ⅲ期に含まれると思われる。

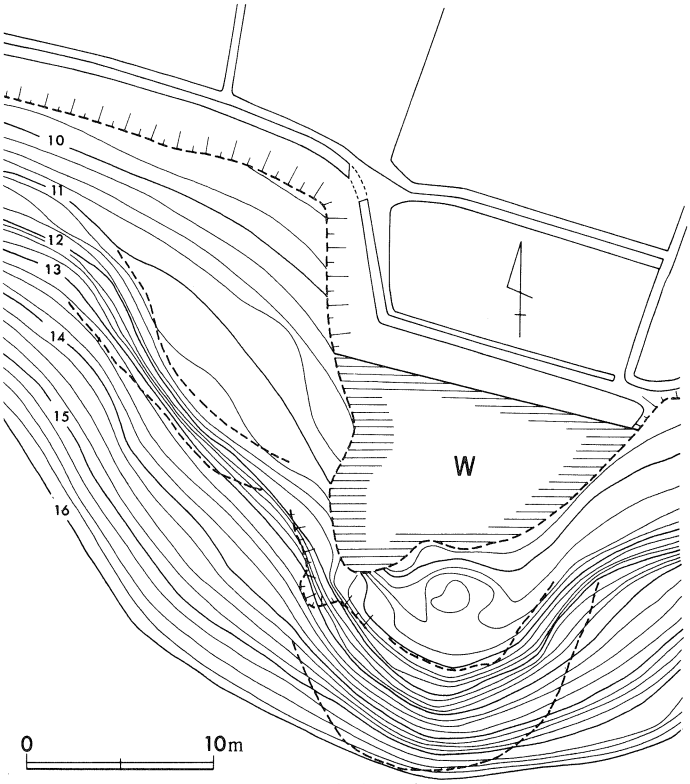
中竹矢1号穴出土ガラス玉計測表

No.	径 mm	孔径	厚	重さ mg	No.	径 mm	孔径	厚	重さ mg	No.	径 mm	孔径	厚	重さ mg
1	4.23	1.04	3.15	80	31	4.14	1.2	3.05	63	61	3.64	0.99	2.45	50
2	4.24	0.94	2.78	65	32	4.06	1.23	2.71	64	62	3.88	0.73	2.5	59
3	3.71	0.81	2.16	49	33	4.81	1.41	2.75	89	63	3.84	1.3	3.21	69
4	3.1	0.49	2.31	33	34	4.31	1.06	3.66	116	64	4.22	0.9	2.41	53
5	2.97	0.63	1.88	25	35	4.54	1.26	2.88	81	65	3.84	0.96	2.68	57
6	3.04	0.88	2.09	29	36	3.55	0.95	2.26	39	66	4.16	0.8	2.8	55
7	3.15	0.88	1.95	26	37	3.19	0.85	1.55	21	67	3.48	1.07	2.51	44
8	3.09	0.73	1.56	23	38	4.81	1.12	4.1	121	68	3.54	0.81	2.41	43
9	3.03	0.66	1.82	21	39	3.5	1.17	2.56	44	69	3.64	0.78	2.7	49
10	2.78	0.82	1.26	14	40	3.59	1.19	3.39	60	70	4.6	1.06	2.4	72
11	3.79	0.75	1.94	38	41	3.52	0.81	2.02	33	71	3.55	1.04	3.01	53
12	3.55	0.8	2.25	40	42	3.65	0.79	2.18	41	72	3.8	1.19	2.8	52
13	4.08	1.14	2.61	66	43	3.56	0.79	2.44	43	73	4.4	1.36	2.66	76
14	4.64	0.85	2.46	64	44	4.11	0.89	2.46	57	74	3.01	0.93	1.41	18
15	3.9	1.04	2.66	58	45	3.26	0.85	1.96	31	75	4.74	1.26	2.63	87
16	3.76	0.81	2.31	50	46	3.19	0.89	1.94	28	76	4.12	1.24	2.59	60
17	4.01	1.18	2.59	62	47	4.48	1.4	1.79	43	77	5.09	1.97	2.91	94
18	4.08	0.93	2.88	69	48	3.52	0.89	2.04	37	78	4.94	1.2	3.07	100
19	3.68	0.64	1.89	41	49	3.16	0.69	1.89	30	79	3.66	0.81	3.11	61
20	3.55	0.71	2.06	39	50	4.18	1.2	2.38	61	80	4.35	0.97	2.44	64
21	3.98	0.89	3.04	73	51	3.46	0.89	2.25	35	81	4.21	2.86	0.91	61
22	3.71	0.78	2.24	43	52	3.41	0.83	2.06	34	82	3.74	0.81	3.08	62
23	3.41	0.83	1.98	30	53	3.89	1.32	2.48	47	83	4.22	0.91	2.96	77
24	4.77	1.36	3.34	101	54	3.08	0.91	1.89	26	84	4.04	1.18	2.61	62
25	4.25	1.16	3.5	90	55	3.2	0.6	2.1	30	85	3.79	0.77	2.67	54
26	3.57	0.73	1.96	35	56	3.23	0.68	1.99	28	86	4.28	1.03	2.86	69
27	3.5	0.73	1.98	29	57	3.17	0.64	2.31	38	87	4.3	1.01	2.64	69
28	3.41	0.69	1.92	30	58	3.5	0.86	2.69	51	88	4.51	1.05	3.34	94
29	4.47	0.9	2.8	69	59	3.86	0.82	2.6	54	87	4.86	1.11	2.74	94
30	4.42	1.19	2.86	81	60	4.11	1.24	2.48	66	90	4.19	0.84	2.49	60

Ⅳ区

ＳＢ04（第109図、図版103）

丘陵の北側裾部に位置し、大半は崖面のため消滅している。残存するのは南側周溝の一部とピット５個である。南側周溝は直線的で現存長は3.0*m*を測る。東側で隅を丸くしていて、北側に続いていたと考えられる。周溝の幅は10～20*cm*、深さは約10*cm*である。ピットは径16～36*cm*、深さ10～35*cm*を測るが、東西に一列に並ぶ４個のピット間の距離は不均一で、東側の間隔が6.5尺（193*cm*）、中央が5.5尺（164*cm*）、西側が８尺（237*cm*）ある。遺物はピット内、床面、及び周溝内から出土した。



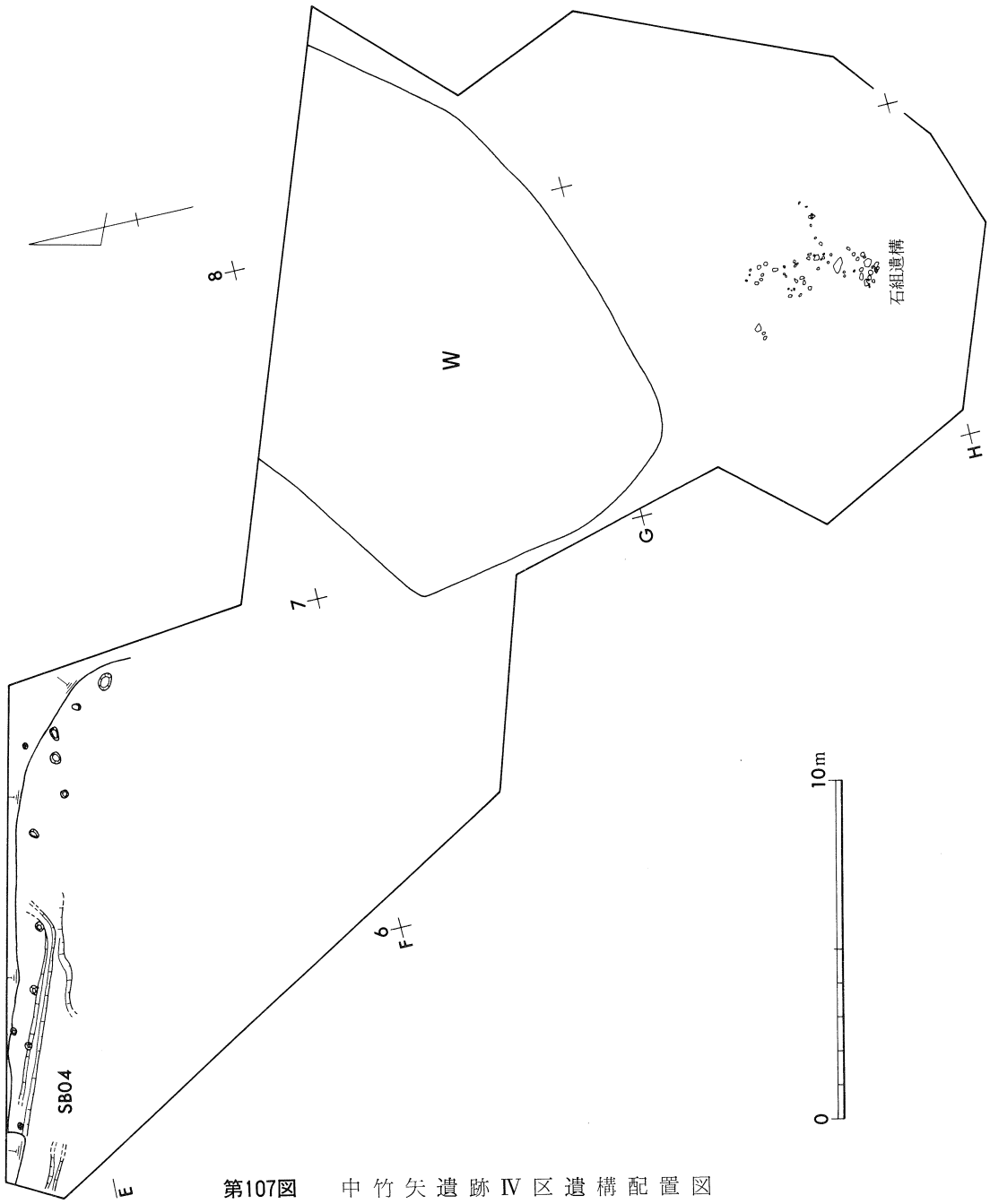
第106図　中竹矢遺跡Ⅳ区地形測量図

ＳＢ04出土の遺物（第110図）には、坏形の土師質土器が５点ある。その中で１、３は床面直上から出土しており、他は覆土中からの出土である。１、２、３、５は、高台が付く。１、２は貼り付けの高台で、３、５は脚台を付けている。１の底径は5.6*cm*、２は4.3*cm*で、両者とも内外面にナデを施している。３は、台付の坏で脚台端部を広げ、底部は回転糸切りを用いる。坏部内外面ともヨコナデを施している。底径7.4*cm*、口径13.7*cm*、現存高5.1*cm*を測る。５は、脚台部の破片で、底径4.4*cm*ある。表面の風化は著しく、調整は不明ある。４は小形の坏で、底径3.4*cm*と小さくで、器肉もうすく、底部は回転糸切りを施す。

これらの土器は、当地方において類例が少なく、編年もすすんでいないので速断は出来ないが、平安時代から鎌倉時代にかけての時期と思われる。

石組遺構

丘陵の北側に上幅15*m*、深さ約６*m*の擂鉢状に扶られた地形のところがある（第106図）。底にあたる部分は幅約6.0*m*の平坦面となり、その北側は、後述する池である。地山までの堆積土は、斜面で50*cm*、平坦面で60*cm*、最も厚いところで約120*cm*を測る。石組遺構は、この堆積土の中ほど、すなわち地山から約15*cm*浮いた状態で検出された（第108図）、平坦面から約2.0*m*上の斜面には、径10*cm*、高さ25*cm*の自然石を直立させ、その周囲にかわらけを配し（図版103）、さらにその前面に径10～30*cm*、厚さ５*cm*ほどの扁平な自然石が二列に並べられていた。平坦面には60×45*cm*の範囲でかわらけが集中して出土したところがあった。その周囲には自然石や古瓦が散乱した状態で検出された。これらの石組遺構やかわらけは、恐らく池に関係した祭祀的性格のものであろう。とすれば



第107図　中竹矢遺跡Ⅳ区遺構配置図

斜面と平坦部の二ケ所に祭祀の中心的場所があったと考えられる。

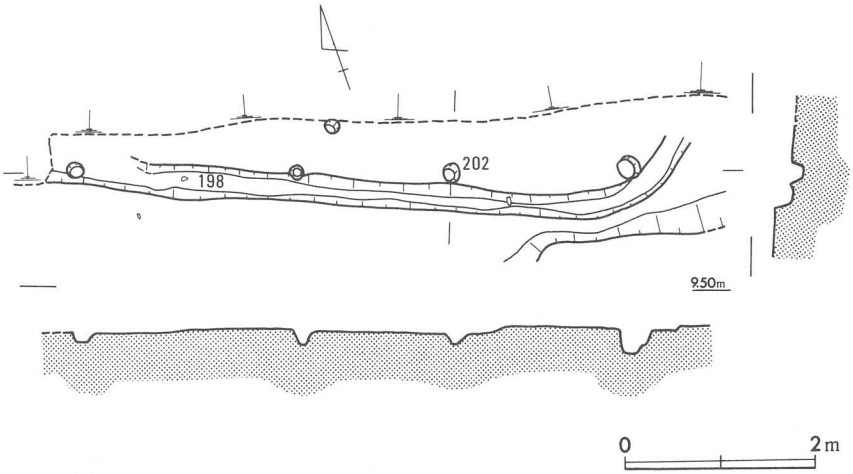
出土したかわらけは、そのほとんどが細片となっており、復元できなかったものが多い。第83図54～74の21点の資料は比較的残存状態の良好なものである。いずれも坏形を呈し、大別すれば糸切痕のあるものとないものの二種がある。後者は、体部が直線的に外にひらくものと（55、64、65、69、71）、内湾しながら立ち上るもの（57、58、63、70）、さらに、それらの中間的なもの（62、56）

第108図　中竹矢遺跡Ⅳ区石組遺構実測図

がある。口径は11.0～13.0㎝、器高は3.0～4.2㎝である。前者は口径11.0㎝、器高2.0㎝で、浅くやや小形のものである。

池（図版102）

池は擂鉢状地形の中にあり、調査当時にはその北にある水田にも水が引かれており、自然の湧水を塞止めたものである。南西部は6.0×4.0㎡にわたり、後世、堀削をうけ広がっている。北側の幅16㎡、南北4㎡の広がりを有する。池の中からは多量の瓦、須恵器、陶磁器、木質等が出土した。



第109図　中竹矢遺跡Ⅳ区ＳＢ04実測図

図示した第110図197～203はその一部である。

193は須恵器の坏で底部は高台がつかなく、回転糸切痕が残る。口径は11.7㎝、器高は4.4㎝。194は陶垂で長さ4.5㎝、径1.8㎝。195は須恵器坏の底部に「寺」と読める墨書土器片である。196は中国製白磁碗で口径は15.5㎝、器高7.3㎝を測る。13世紀頃のものと考えられる。197と198は鬼板瓦片である。198は池より、199は池のすぐ南にある平坦面より出土した。197はやや焼成不良、198は須恵質である。197は左脚部で左目と鼻、牙の一部、また、珠文が残る。198は右目と鼻の一部、頬、珠文、牙が残る。両者は別個体で鬼の表現方法に違いがある。198は出雲国分尼寺に同文の資料が3個体出土しているが、それらのいずれとも同一個体は見出せなかった。また、笵型による成作である。

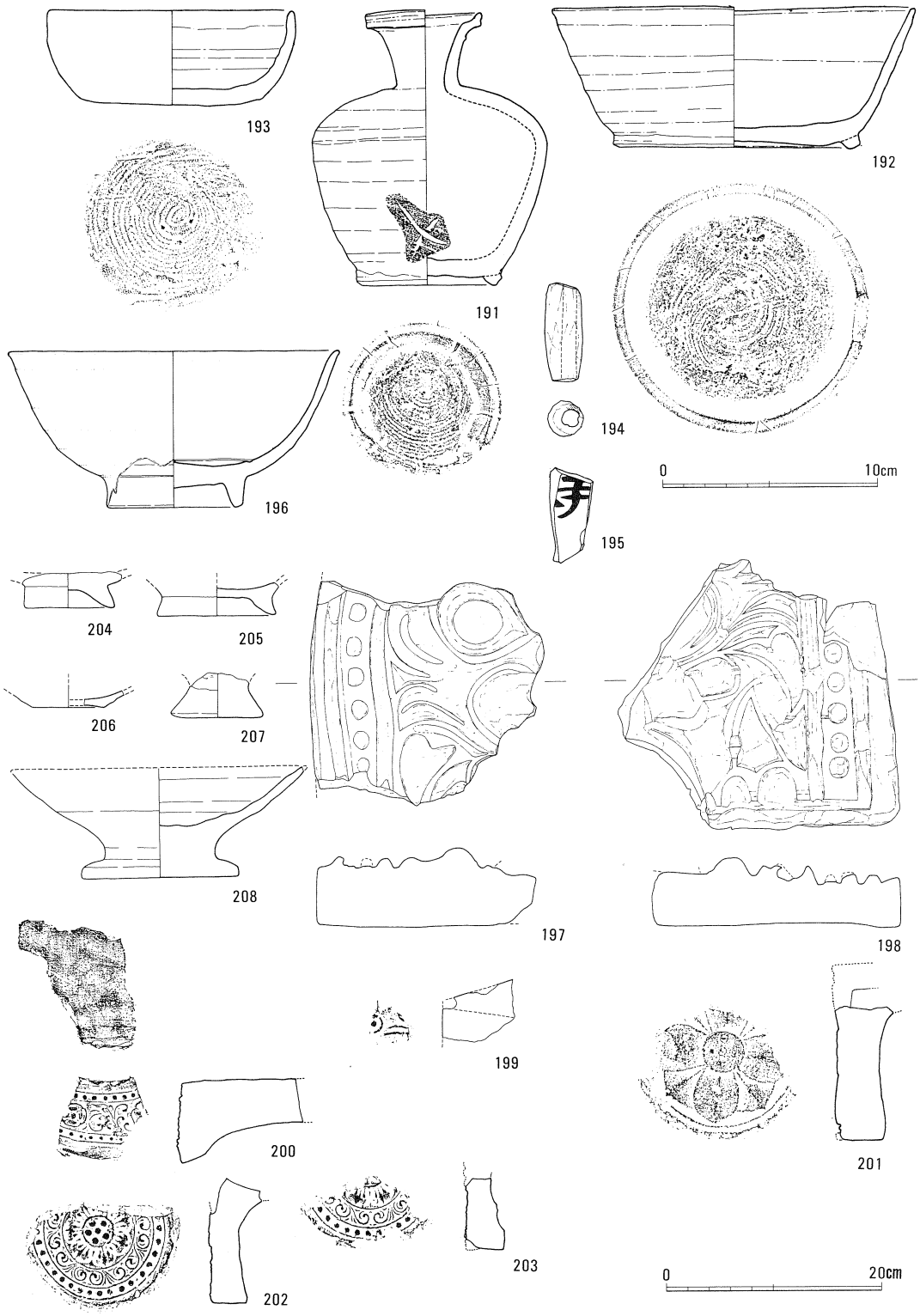
その他の遺物

第110図193、194、195、196、197は遺構に伴わない遺物である。194は中竹矢Ⅰ区より、他はⅡ区からの表採である。

200は軒平瓦片である。瓦当面の幅は7.5㎝を測る。瓦当文様は四弁の花文と華麗な唐草文を配したものである。顎部は比較的明瞭で曲線顎である。平瓦部の厚さは4.0㎝ある。凹面は瓦当面より約6.0㎝の幅でヘラ削り調整、それ以外は糸切痕と布目痕が残り未調整である。199と203は軒丸瓦の瓦当部片である。瓦当面径は15㎝を測る。これら3点の軒平、軒丸瓦は出雲国分寺創建期の一群のものである。いずれも、須恵質に焼成されている。202は中心飾りがハート状をしていて左右に3転回する均整唐草文を配する文様を持つ軒平瓦で、これはその中心飾の一部である。同じものは国分尼寺からも出土していて、平城宮瓦の6664、または、6732系の流れをくむものと考えられよう。201は瓦当面径16㎝の軒丸瓦片である。瓦当文様は松江市山代町四王寺廃寺出土のものと同文で、また笵にみられる傷から同笵であることがわかる。

中竹矢遺跡が、出雲国分寺、同尼寺の中間に位置し、出雲国分寺瓦窯跡が隣接していることを考えれば、これらの遺物はこうした遺跡に関係するものであろう。特に、山代町四王寺系軒丸瓦の出土は、国分二寺のいずれかに使用されていたか、もしくは、この種の軒丸瓦を出雲国分寺瓦窯跡で焼成した可能性も示すものとして注目される。

（広江耕史、内田律雄、宮沢明久）



第110図　中竹矢遺跡VI区出土遺物実測

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
42—1	Ⅱ区窪地	甕	口径 19.0 器高(26.9) 器厚 0.9	「く」の字形の口縁を呈しなで肩で底部に至る。底部は丸底である。	胎土、砂粒を多く含む。 色調 灰橙色 焼成 良好	外面 口縁部はヨコ方向のナデ、体部はタテ方向の刷毛目。 内面 口縁部はヨコ方向の刷毛目、頸部以下はヘラ削り	NAF15
42—2	Ⅱ区窪地	甕	器高(13.3) 器厚 0.8	頸部はゆるやかに折曲し肩に至る。	胎土 砂粒多し 色調 内面は灰黄白色 外面は灰白桃色 焼成 良好	外面 口縁部はヨコ方向のナデ、体部はタテ方向の刷毛目。 内面 口縁部はヨコ方向のナデ、体部はヘラ削り。	NAF21
42—3	Ⅱ区窪地	甕	器厚 0.5	丸底を呈す。	胎土 砂粒多し 色調 内面は灰白橙色 外面は暗灰橙色（一部黒変、スス付着） 焼成 良好	外面はタテ方向の刷毛目 内面はヘラ削り。	NaF06
43—4	Ⅱ区窪地	甕	口径 21.9 器高(17.0) 器厚 0.6	口縁は「く」の字形を呈し、なで肩である。	胎土 砂粒多し 色調 内面は白橙色 外面は灰白橙色（一部黒変） 焼成 良好外	面口 縁部はナデ、体部はタテ方向の刷毛目、他は不明。	NAF20
43—5	Ⅱ区窪地	甕	口径 17.4 器高 19.2 器厚 0.6	口縁は「く」の字形を呈し 体部は張らない。 底部は丸底である。	胎土 砂粒多し 色調 内面は暗褐色 外面 灰白橙色 焼成 良好	外面 口縁部はナデ体部はヨコ方向の刷毛目の後ナデ。 内面 ヘラ削り。	NAF03
43—6	Ⅱ区包含層	甕	口径 28.0 器高 (5.9) 器厚 0.9	口縁は「く」の字形を呈し、体部は張らない。	胎土 砂粒多し 色調 内面は暗灰橙色 外面 灰橙色 焼成 良好	外面 口縁部はナデ 内面 口縁部はナデ体部はヘラ削り。	NAF19
44—7	Ⅱ区	打製石斧	長さ(13.3) 幅 10.5 厚さ 3.0	頭部を欠き表離から剝離を施す。			
44—8	Ⅱ区	敲石	径 10.5 厚さ 6.7	楕円形、中央に浅い敲打痕、側縁に敲打痕			
44—9	Ⅱ区包含層	杯	器高 (1.0) 器厚 0.8	底部は平らである。	胎土 砂粒はほとんど含まない。 色調 内外面とも暗青灰色 焼成 良好	内外面ともナデ。 底部は回転糸切りによる。	NAF28
44—10	Ⅱ区黒色土	壷	器高 (4.7) 器厚 0.8	底部は平底、ゆるやかに立ち上がり肩が張る。	胎土 極めて細かく密 色調 内外面とも明灰色 焼成 良好	内外面ともナデ。 底部は回転糸切りの後ナデ。 高台は貼り付け。	NAH55
44—11	Ⅱ区黒色土	盤	器高 2.0 器厚 1.0	底部は平底、ゆるやかに立ち上がる。	胎土 微砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 良好	内外面ともナデ。 底部は回転糸切りによる。	NAR
44—12	Ⅱ区包含層	盤	器高 (2.0) 器厚 0.8	低い高台をもちゆるやかに立ち上がる。	胎土 砂粒を含む 色調 内外面とも青灰白色 焼成 良好	底部は回転糸切り後ナデ、それ以外は内外面ともヨコナデ。 高台は貼り付け。	NAF29
44—13	Ⅱ区黒色土	杯	器高 (2.4) 器厚 1.0	底部は平底で低い高台をもつ。	胎土 極めて細かく密 色調 内外面とも灰色 焼成 良好	内外面ともヨコナデ 序部は回転糸切り後ナデ。高台は貼り付け。	NAH56
44—14	Ⅱ区包含層	杯	器高 (2.3) 器厚 0.7	底部は平底で低い高台をもつ。	胎土 細かく密で砂粒を含む 色調 内面は淡青灰色 外面は暗青灰色で薄く自然釉が付着 焼成 良好	内外面ともヨコナデ。底部は回転糸切り後ナデ。高台は貼り付け。	NAF25

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
44—15	II区黒色土	杯	器高 (4.4) 器厚 0.9	底部は平底で低い高台をもつ。	胎土 極めて細かく密 色調 内外面とも明灰色 焼成 良好	内外面ともヨコナデ。底部は回転糸切り後ナデ。高台は貼り付け。	NAN54
44—16	II区包含層	蓋杯(蓋)	口径 18.4 器高 (1.5) 器厚 0.7	器高が低い。口唇部が短かく、鋭く尖っている。	胎土 少量の砂粒を含む 色調 内面は灰白色、外面は暗灰色 焼成 やや良好	内外面とも回転ナデ。	NAF24
44—17	II区包含層	蓋杯(蓋)	口径 14.6 器高 (1.7) 器厚 1.0	宝珠状のつまみがくると思われる。外面天井部は中央に向かってわずかに低くなる。蓋の返りは低い。	胎土 砂粒多し 色調 内面は薄紫がかった灰色、外面は暗灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラケズリ調整 天井部内面は直線方向のナデ。 他は内外面ともヨコナデ。	NAH53
44—18	II区包含層	蓋杯(蓋)	口径 14.5 器高 (1.9) 器厚 0.8	蓋の縁弁部は低く、天井部から口唇部にかけてゆるやかに広がる。	胎土 砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	NAF22
44—19	II区包含層	蓋杯(蓋)	口径 17.2 器高 (1.7) 器厚 0.7	蓋の返りは低い。天井部から口唇部にかけてゆるやかに広がる。	胎土 細かく密、砂粒、小石含む 色調 淡青灰色（一部に自然釉かかる） 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	NAF23
44—20	II区包含層	盤	器高 (1.8) 器厚 0.9	高台は垂直に立ちあがる。底部は平らでゆるやかに立ち上がる。	胎土 少量の砂粒を含む 色調 内外面とも青灰色	ヨコナデ。高台は貼り付け。	NAF26
44—21	II区包含層	蓋杯(杯)	器高 (1.8) 器厚 0.8	底部は平底で、低い高台をもつ。	胎土 細かく密、少量の砂粒、小石を含む 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	NAF27
44—22	II区	青磁碗(中国製)		ゆるやかに内彎しながら立ち上がる体部。	断面は黒色に近く、青磁釉はくすんだ深緑		NAR 4
44—23	II区	美濃天目		ゆるやかに内彎しながら立ち上がる体部。	胎土 乳白色で釉は黒茶褐色		NAR 5
44—24	II区柱穴内	染付碗(中国)		わずかに内彎しながら立ち上がる体部。	胎土、焼成は良好		NAR 6
44—25	II区	唐津小皿	口径 11.8 器高 (1.5) 器厚 0.4	立ち上がりが逆「ハ」の字状。	胎土 やや薄い青灰色で、薄い青緑色の釉がかかる。		NAR 1
44—26	II区	唐津小皿		内面の底部と体部が明瞭。	胎土 くすんだ青灰色	外面の高台付近は無釉でヘラ削り。	NAR 2 内面に胎土目当
44—27	II区	唐津小皿		低い高台をもつ。	胎土 青灰色で薄い黄緑の釉がかかる細かな貫入が入る。	削り出し高台	NAR 3 内面に砂目当
44—28	II区表土	染付碗(伊万里)		薄い底部。	胎土 良好	外面底部に花文、底部内面には大極巻図文を描く。	NAR 7
44—29	II区黒色土	染付碗(伊万里)	高台径 7.1 器高 (3.0) 器厚 0.8		胎 良好で薄緑の青磁釉がかかる。	畳付部分のみ無釉。内面底部に砂金袋を描く。	NAR 8
44—30	II区	青磁香炉(伊万里)	口径 10.4 器高 (6.5) 器厚 0.8	体部が直線的に立ち上がる。	胎土 やや灰色を帯びか白色、青磁釉は薄い青緑色	内面は口唇部を除いて無釉。	NAR 9
54—46	III区SD07	杯	口径(11.7) 器高 4.3 器厚 0.9	底部は平底でゆるやかに内彎しながら立ち上がる。 口唇部はわずかに外反する。	胎土 粗い砂粒を含む 色調 やや暗い青灰色 焼成 良好	底部内面には粗いナデ。その他は回転ナデ。 底部は回転糸切りのまま未調整。	NAR20

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
54—47	Ⅲ区SD07	杯	口径 11.8 器高 4.2 器厚 0.9	底部は平底でゆるやかに内彎しながら立ち上がる。 口唇部はわずかに外反する。	胎土 砂粒を含む 色調 薄い青灰色、外面底部に茶褐色部分がある。 焼成 もろい	底部内面には不整方向のナデ。その他は回転ナデ。 底部は回転糸切りのまま未調整。	NAR19
54—48	Ⅲ区SD07	杯	口径(10.5) 器高 4.2 器厚 0.9	底部は平底。ゆるやかに内彎しながら立ち上がる。 口唇部はわずかに外反する。	胎土 ほとんど砂粒はない 色調 薄い青灰色 焼成 良好	底部内面には一定方向のナデ。その他は回転ナデ。 底部は回転糸切りのまま未調整。	NAR18
54—49	Ⅲ区SD07	杯	口径 18.3 器高 4.2 器厚 1.0 高台径11.3	高台は垂直に付き、体部は内彎しながらゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かな砂粒を含む 色調 底部の内外面が茶褐色以外は青灰色 焼成 やや不良	底部内面には不整方向のナデ。その他は回転ナデ。底部は回転糸切り痕を残す未調整。高台は貼り付け。	NAR16
54—50	Ⅲ区SD07	杯	口径 18.2 器高 4.1 器厚 0.9 高台径11.8	底部は平底でゆるやかに立ち上がる。高台をもつ。	胎土 砂粒をまばらに含む 色調 青灰色 焼成 やや不良	底部内面は不整方向のナデ。その他は回転ナデ。 底部は回転糸切り痕を残す未調整。高台は貼り付け。	NAR15
54—51	Ⅲ区SD07	蓋	器高 2.8	宝珠状のつまみをもつ器高は低い。	胎土 砂粒をまばらに含む 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、天井部内面は不整方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAR21
54—52	Ⅲ区SD07	杯	口径 12.4 器高 4.4 器厚 1.0 高台径 8.5	平底で、外方へひらき気味の低い高台をもつ。 口縁に向けて直線的に立ち上がる。	胎土 まばらに砂粒を含む。 色調 やや薄い青灰色	底部内面は不整方向のナデ、底部外面は回転糸切り痕を残す未調整。その他は回転ナデ。高台は貼り付け。	NAR17
54—53	Ⅲ区SD07	壷	口径 10.6 器高 18.0 器厚 1.2 高台径 8.9	口径は大きく広がるが頸部は短かい。頸部径は比較的広い。肩はやや張る。高台は短かく、先が鋭く尖る。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色、自然釉のかかる付近は灰黒色に近い。 焼成 良好	内面には著しくろくろ痕が残る。体部外面下半はヘラ削り。その他は回転ナデ。全体的に調整ナデが粗い。	NAR14
60— 9	Ⅲ区K—12	杯	口径(12.6) 器高 3.0 器厚 1.0	底部は平底。口縁にむけてゆるやかに広がる。端部は丸い。	胎土 0.5㎜以下の砂粒多し 色調 灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。その他はヨコナデ	NAH44
60—10	Ⅲ区K—12	杯	口径(11.6) 器高 4.0 器厚 0.8	底部は平底。口縁にむけてゆるやかに立ち上がる。口縁部近くでわずかにくびれる。	胎土 0.5㎜以下の砂粒を微量に含む。 色調 暗灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り、底部内部は直線方向のナデ。その他はヨコナデ。	NAH37
60—11	Ⅲ区K—12	杯	口径 11.5 器高 4.0 器厚 0.8	やや上げ底。口縁にむけゆるやかに立ち上がる。口縁部近くでややくびれる。	胎土 0.5～1㎜の砂粒を含む。 色調 暗茶灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り、底部内面は直線方向のナデ。その他はヨコナデ	NAH42
60—12	Ⅲ区K—12	杯	口径(10.0) 器高 3.7 器厚 0.7	やや上げ底。口縁にむけてゆるやかに立ち上がる。	胎土 0.5～1㎜の砂粒多し 色調 灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。その他はヨコナデ。	NAH28
60—13	Ⅲ区K—12	杯	器高 4.0 器厚 1.0 高台径 (12.6)	体部はゆるやかに立ち上がり、高台はひらき気味。	胎土 2㎜の砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 良好	底部内面はタタキ目の後ナデ。その他はヨコナデ。	NAH48
60—14	Ⅲ区K—12	杯	口径 12.2 器高 4.5 器厚 1.0	平底で、口縁にむけてゆるやかに立ち上がる。口縁部近くで少しくびれる。	胎土 黒色粒子を含む。 色調 灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り、底部内面は直線方向のナデ。その他はヨコナデ。	NAH34
60—15	Ⅲ区K—12	杯	口径(11.0) 器高 4.4 器厚 0.6	底部はやや上げ底。口縁にむけて内彎気味に立ち上がる。端部は丸い。	胎土 細かな砂粒が多く密 色調 灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り、底部内面は直線方向のナデ。その他はヨコナデ。	NAH36

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
60—16	Ⅲ区SK06	杯	口径(11.8) 器高 4.0 器厚 0.7	底部はやや上げ底気味、口縁へ向け、内彎気味に立ち上がる。口縁付近で少しくびれる。	胎土 細かな砂粒が多く密 色調 暗灰色 焼成 不良	底部外面は回転糸切り 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH35
60—17	Ⅲ区K—12	杯	口径 11.4 器高 3.9 器厚 0.6	底部は上げ底。口縁にむけて内彎気味に立ち上がる。端部は丸い。	胎土 細かな砂粒多し 色調 赤茶灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH39
60—18	Ⅲ区K—12	杯	口径 11.4 器高 3.9 器厚 0.8	底部は上げ底。口縁部へむけゆるやかに立ち上がる。端部は丸い。	胎土 細かな砂粒多し 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH49
60—19	Ⅲ区FP01	杯	口径(10.8) 器高 4.2 器厚 0.7	底部は上げ底気味。口縁部へ向けて内彎気味に立ち上がる。端部は丸い。	胎土 細かい砂粒を多く含み密 色調 灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切、 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH47
60—20	Ⅲ区FP01	杯	口径(10.5) 器高 4.2 器厚 0.8	底部は上げ底気味。口縁部へ向けて内彎気味に立ち上がる。口縁部近くでわずかにくびれる	胎土 細かな砂粒を含み密 色調 茶灰色 焼成 良好	底部は上げ底気味。口縁へ向け内彎気味に立ち上がる。口縁部近くがわずかにくびれる。	NAH32
60—21	Ⅲ区K—12	杯	口径(11.7) 器高 3.9 器厚 0.9	底部はわずかに上げ底。口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。端部は丸い。	胎土 2㎜程度の砂粒を含み密 色調 暗茶灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH33
60—22	Ⅲ区K—12	杯	口径(11.4) 器高(4.0) 器厚 0.5	口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 青灰色 焼成 良好	ヨコナデ	NAH29
60—23	Ⅲ区K—12	杯	口径 10.9 器高 3.8 器厚 0.5	底部は上げ底。口縁へ向け、直線的に立ち上がる。端部は丸い。	胎土 極めて密 色調 灰白色 焼成 良好	底部外面は回転糸切、 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH40
60—24	Ⅲ区FP01	蓋	口径(14.0) 器高 1.2 器厚 0.7	天井部は平坦で、縁端部は粗い。	胎土 細かな砂粒を含み密 色調 暗灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラ削り 天井部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH30
60—25	Ⅲ区K—12	蓋	口径(18.2) 器高 (1.2) 器厚 0.9	天井部は平坦で緩く端部へ向けて広がる。縁端部は低い。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 茶灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラ削り 天井部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH52
61—26	Ⅲ区K—12	杯	器高 (3.5) 器厚 0.9 高台径 10.8	底部は平底、外方に開く。低い高台をもつ。口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かい砂粒多し 色調 暗灰色焼成良 好底	部外面は回転糸切り後高台貼り付け 底部内面は直線方向のナデ その他はヨコナデ。	NAH50
61—27	Ⅲ区K—12	杯	口径 14.9 器高 7.0 器厚 1.0 高口径 11.0	底部は平底、外方に開く。低い高台をもつ。口縁へ向けて直線的に立ち上がる。端部は丸い。	胎土 細かい砂粒多し、密 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後高台貼り付け 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH41
61—28	Ⅲ区T—12	杯	器高 (1.8) 器厚 1.0 高台径 (7.8)	底部は平底、外方に開く。低い高台をもつ。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 茶灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後高台貼り付け 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH46
61—29	Ⅲ区K—12	器	器高 1.8 器厚 1.0 高台径 13.1	底部は平底、少し開き気味の高台をもつ。	胎土 細かい砂粒を含む 色調 暗灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後高台貼り付け 底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH51

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
61—30	Ⅲ区K—12	盤	口径(17.0) 器高 3.4 器厚 1.0 高台径 (13.2)	底部は平底、外方に開く高台をもつ。口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。口縁は外反する。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 茶灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り 後高台貼り付け、底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH43
61—31	Ⅲ区K—12	盤	口径(18.2) 器高 4.3 器厚 0.9	底部は平底、直立する高台をもつ。口縁へ向けやや内彎し立ち上がる。口縁はやや外反する。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 暗灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後高台貼り付け、底部内面は直線方向のナデ。 その他はヨコナデ。	NAH45
61—32	Ⅲ区K—12	盤	口径(19.6) 器高 4.2 器厚 0.8	直立する高台をもつ。口縁へ向け内彎気味に立ち上がる。口縁はやや外反する。	胎土 砂粒を含み密 色調 暗灰色 焼成 良好	高台は貼り付け その他はヨコナデ。	NAH38
61—33	Ⅲ区SK06	盤	口径(13.0) 器高(2.2) 器厚(0.9)	底部は平底、直立する高台をもつ。	胎土 細かい砂粒を含む 色調 暗灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後高台貼り付け、底部内面は直線方向のナデ。	NAH31
61—34	Ⅲ区K—13	直口広口甕	口径(38.0) 器高 28.7 器厚 1.4	胴部下半部丸味がある。口縁部は直立する。胴部上半に把手が付く。	胎土 砂粒多く密 色調 灰白色 焼成 不良	体部の外面上半は平行叩き目の後ナデ、更に把手貼り付け、外面下半は平行叩き目、内面は円弧叩き目を施す。 口縁内面の円弧叩き目の後ナデ。	NAH57
81—35	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径 13.3 器高 2.7 器厚 0.5	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 砂粒を少し含む、密 色調 灰黄褐色（一部スス付着） 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他は回転ナデ。	NAF09
81—36	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径 12.8 器高 2.9 器厚 0.5	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 砂粒をわずかに含む、密 色調 灰黄褐色（一部スス付着） 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他は回転ナデ。	NAF08
81—37	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径(12.5) 器高 2.6 器厚 0.4	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 砂粒を少し含む、密 色調 灰黄褐色 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他は回転ナデ。	NAF14
81—38	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径 12.2 器高 2.9 器厚 0.5	底部は平底、口縁へ向けてやや内彎気味に立ち上がる。	胎土 砂粒を少し含む、密 色調 灰赤褐色 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他はヨコナデ。	NAF13
81—39	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径 11.7 器高 3.3 器厚 0.5	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 砂粒をわずかに含む、密 色調 灰黄褐色（スス付着） 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他は回転ナデ。	NAF11
81—40	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径(11.4) 器高 2.8 器厚 0.5	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 少量の砂粒を含む、密 色調 灰黄褐色（一部スス付着） 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他は回転ナデ。	NAF12
81—41	Ⅲ区SD02	かわらけ	口径(11.7) 器高 2.9 器厚 0.5	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 砂粒を含む、密 色調 灰褐色 焼成 良好	底部外面はナデ。 その他は回転ナデ。	NAF10
81—43	Ⅲ区SK24	甕	口径 22.4 胴部最大径 28.6 器高 35 器厚 0.4	口縁は外反する複合口縁。屈曲部の稜は鋭い。口縁端部は平坦。頸部は短かく、胃はややなで肩、底部は丸底気味の平底。器壁は薄い。	胎土 1～2㎜の砂粒を多く含み密 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部の内外面はヨコナデ。頸部から胴部上半の外面はナデ、下半部は刷毛目頸部以下の内面はヘラ削り。	NAF02

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
81—44	Ⅲ区南側斜面	同筒埴輪	口径(19.8) 器高 8.3 器厚 1.2	タガを有し、円筒形を呈す。円形透し有。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	外面はタテ方向の刷毛目の後ナデ。タガ部は貼り付け。 内面はナデ。	NAF18
82—50	Ⅲ区M—14	甕	口径 18.0 器高 29.4 器厚 0.4	口縁は外反する複合口縁、屈曲部に稜がつく。 口縁端部は丸い。頸部は短かい。底部は丸底。	胎土 砂粒をあまり含まない、密 色調 明灰黄褐色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ。 外面；体部上半はタテ方向の刷毛目の後ナデ、下半部はタテ方向の刷毛目。 内面；頸部以下はヘラ削り。	NAF58
82—51	Ⅲ区L—13	甕	口径(18.7) 器高(11.8) 器厚 0.5	「L」の字形の口縁を呈し、体部は肩があまり張らない。	胎土 砂粒含まず、密 色調 橙褐色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ。体部上半はヘラミガキ、下半はナデ。	NAF04
82—52	Ⅲ区SK16	壷	口径(13.0) 器高(10.3) 器厚 0.5	口縁は外反する複合口縁、口縁端部は丸い。頸部短かく、肩がやや張る。	胎土 細かく密 色調 明灰橙色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ。体部外面はヨコ方向の刷毛目、内面は頸部以下のヘラ削り。	NAF05
82—53	Ⅲ区SK27付近	壷	口径(22.4) 胴部径 37.0 器高 25.9 器厚 1.1	口縁は外反する複合口縁、端部は平坦。頸部は長く、体部は肩が張る。	胎土 少量の砂粒を含む、密 色調 黄灰白色 焼成 良好	口縁から頸部にかけての内外面はヨコナデ。 体部外面は刷毛目の後ナデ。上半に竹管の刺突を施す、内面は頸部以下にヘラ削り。	NAF01
83—54	Ⅳ区池の南	かわらけ	口径 10.8 器高 2.3 器厚 0.5	底部平坦で、口縁に向けて広がる。	胎土 密 色調 淡褐色 焼成 やや軟い	口縁部はヨコナデ。 その他はナデ。	NAN40
83—55	Ⅳ区池の南	かわらけ	口径 11.1 器高 2.1 器厚 0.5	底部は平坦で、口縁へ向けてゆるやかに広がる。	胎土 きわめて細かく密 色調 淡褐色 焼成 やや軟い	口縁部はヨコナデ。 その他はナデ。	NAN41
83—56	Ⅳ区池の南	杯	口径 12.0 底径 6.4 器高 3.7 器厚 0.6	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かな砂粒を含む 色調 淡褐色 焼成 良好	底部外面は静止糸切り、内面はナデ。 口縁内外面はヨコナデ。	NAN43
83—57	Ⅳ区池の南	かわらけ	口径 11.3 器高 3.2 器厚 0.9	底部は平底、口縁へ向けて直線的に広がる。	胎土 細かな砂粒を含む、密 色調 淡橙褐色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAN44
83—58	Ⅳ区池の南	杯	口径(12.7) 器高 4.0 器厚 0.7 底径(5.0)	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF43
83—59	Ⅳ区池の南	杯	口径 12.3 器高 3.8 器厚 0.9 底径 5.0	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF42
83—60	Ⅳ区池の南	杯	口径 11.6 器高 3.8 器厚 0.8 底径 4.1	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF51
83—61	Ⅳ区池の南	杯	口径 11.3 器高 4.5 器厚 0.7 底径 7.5	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 砂粒を含む 色調 淡褐色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 口縁部は内外面ともヨコナデ。 その他はナデ。	NAN42
83—62	Ⅳ区池の南	杯	器高 3.3 器厚 0.7 底径 5.1	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF45
83—63	Ⅳ区池の南	杯	器高 2.4 器厚 0.6 底径 (4.8)	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF56

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
83—64	Ⅳ区池の南	杯	器高 3.0 器厚 0.6 底部 4.5	底部は平底、口縁へ向けて直線的に広がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF49
83—65	Ⅳ区池の南	杯	器高 3.0 器厚 0.6 底径 4.8	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 色調 焼成	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF48
83—66	Ⅳ区池の南	杯	器高 2.0 器厚 0.7 底径 5.1	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF53
83—67	Ⅳ区池の南	杯	器高 (2.5) 器厚 0.6 底径 4.9	底部は平底、口縁へ向けて直線的に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 淡灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF50
83—68	Ⅳ区池の南	杯	器高 1.5 器厚 0.6 底径 5.3	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF54
83—69	Ⅳ区池の南	杯	器高 (1.4) 器厚 (0.5) 底径 5.2	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF46
83—70	Ⅳ区池の南	杯	器高 (1.8) 器厚 0.7 底部 4.8	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに広がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF44
83—71	Ⅳ区池の南	杯	器高 1.8 器厚 0.7 底径 5.2	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF47
83—72	Ⅳ区池の南	杯	器高 (1.8) 器厚 0.8 底径 4.6	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF55
83—73	Ⅳ区池の南	杯	器高 2.5 器厚 0.8 底径 4.7	底部は平底、口縁へ向けてゆるやかに広がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF52
83—74	Ⅳ区池の南	杯	器高 1.8 器厚 0.7 底径 5.2	底部は平底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。 その他は回転ナデ。	NAF57
83—75	火葬墓 T—8	釘	長さ (6.8) 幅 0.4	L字形に頭を曲げる断面方形。			NAN29
83—77	火葬墓 T—8	釘	長さ (4.2) 幅 0.4	頭部は逆L字形に折り曲げる。			NAN33
83—78	火葬墓 T—8	釘	長さ (3.5) 幅 0.35	頭部はL字形に曲げる。			No15
83—79	火葬墓 T—8	釘	長さ 6.5 幅 0.5				
83—80	火葬墓 T—8	釘	長さ 6.5 幅 0.5	頭部は不明、断面方形。			NAN27
83—81 82	火葬墓 T—8	釘	長さ 6.4 幅 0.4	頭部は逆L字形に折り曲げる。			NAN34
83—83 84	火葬墓 T—8	釘	長さ 5.0 幅 0.5	頭部は逆L字形に折り曲げる。			NAN30
83—85	火葬墓 T—8	釘	長さ 7.0 幅 0.3	頭部は不明。断面方形。			T—1
83—86	火葬墓 T—8	釘	長さ (6.1) 幅 0.4	頭部は逆L字形に折り曲げる。			T—16
83—87	火葬墓 T—8	釘	長さ (3.7) 幅 0.5	頭部不明、断面方形。			NAN17
83—88	火葬墓 T—8	釘	長さ 6.3 幅 0.4	頭部は逆L字形に折り曲げる。			T—17
83—89	火葬墓 T—8	釘	長さ 7.2 幅 0.3	頭部は折り曲げる。			T—5
83—90	火葬墓 T—8	釘	長さ (5.6) 幅 0.4	頭部は折り曲げる			T—4
83—91	火葬墓 T—8	釘	長さ 6.1 幅 0.5	頭部は逆L字形に折り曲げる。			NAN25
83—92	火葬墓 T—8	釘	長さ (5.8) 幅 0.4	頭部は逆L字形に折り曲げる。			NAN24
83—93	火葬墓 T—8	釘	長さ 4.9 幅 0.5	頭部は折り曲げる。使用により曲がる。			NAN26
83—94	火葬墓 T—8	釘	長さ (4.8) 幅 0.4	頭部を折り曲げる。			NAN28

挿図番号	出土遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土、焼成	手法の特徴	備考
83—95	火葬墓 T—8	釘	長さ (5.4) 幅 0.4	頭部を折り曲げる。			T—2
83—96	火葬墓 T—8	釘	長さ 5.4 幅 0.5	頭部を折り曲げる。			T—2
83—97	火葬墓 T—8	釘	長さ 3.1 幅 0.3	頭部欠損、断面方形			NAN31
83—98	火葬墓 T—8	釘	長さ (2.7) 幅 0.2	頭部欠損、断面方形			
83—99	火葬墓 T—8	釘	長さ (3.3) 幅 0.3	頭部欠損、断面方形			NAN32
91-100	2号墳	杯(蓋)	口径 13.6 器高 4.3 器厚 1.0	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る。端部内面わずかに凹み、丸い。天井部は平底を呈した後外下方へのびる。	胎土 砂粒細かく密 色調 灰白色 焼成 多少軟らかい。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り、底部の内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH15
91-101	2号墳	杯(身)	口径 11.5 受部径 14.2 器高 4.5 器厚 0.8	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部は丸い。受部は水平で短かい。坏部は浅く丸底で外方に延び、受部に至る。	胎土 部分的に2mm程の砂粒がある。細かい。 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り。底部内面は直線方向のナデ。他の内外面は回転ナデ。	NAH10
91-102	2号墳	杯(蓋)	口径 13.6 高さ 4.2 器厚 0.9	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る。端部は丸い。天井部は平底を呈した後、外下方に広がる。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り、天井部内面の中央は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH2
91-103	2号墳	杯(身)	口径 11.5 器高 4.2 器厚 0.8	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部は丸い。受部は水平で短かい。底部は平底に近く外上方に延び、受部に至る。	胎土 黒色粒子、砂粒を含み密 色調 内面は明灰色 焼成 良好、自然釉付着	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り、底部内面の中央は直線方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	NAH11
91-104	2号墳	杯(蓋)	口径 13.8 器高 4.5 器厚 0.8	口縁部は内彎気味に広がり端部に至る。端部は丸い。天井部は丸底を呈し、外下方に延びる。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH5
91-105	2号墳	杯(身)	口径(11.8) 受部径 14.0 器高 (3.5) 器厚 0.9	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がる。受部は水平で短かい。底部は平底に近く外上方に延び、受部に至る。	胎土 細かな砂粒を含み密 色調 灰白色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り、底部内面は直線方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	NAH16
91-106	2号墳	杯(蓋)	口径 13.7 器高 4.2 器厚 0.8	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る。端部は丸い。天井部は丸底を呈し、外下方に延びる。	胎土 砂粒細かく密 色調 外面は灰白色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH13 ヘラ記号「／」
91-107	2号墳	杯(身)	口径 12.6 受部径 14.4 器高 4.9 器厚 0.8	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり。端部は丸い。受部は水平で短かい。底部は深く丸底で外上方に延び、受部に至る。	胎土 砂粒細かく密 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り。底部内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH9
91-108	2号墳	杯(蓋)	口径 13.2 器高 3.9 器厚 0.9	口縁部は内彎気味に広がり端部に至る。端部は丸い。天井部は平底を呈した後、外下方に延びる。	胎土 砂粒細かく密 色調 灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH1 ヘラ記号「／」

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
91-109	2号墳	杯(身)	口径 12.2 受部径 14.0 器高 4.3 器厚 0.8	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部は丸い。受部は水平で短かい。底部は深く丸底で外上方に延び、受部に至る。	胎土 砂粒細かく密 色調 灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り。 底部内面は直線方向のナデ。 その他は回転ナデ。	NAH8 ヘラ記号「／」
91-110	2号墳	杯(蓋)	口径 14.1 器高 4.0 器厚 0.8	口縁部は内彎気味に広がり端部に至る。端部は丸い。天井部は平底を呈した後外下方に延びる。	胎土 砂粒細かく密 色調 灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ。 その他は回転ナデ。	NAH4 ヘラ記号「／」
91-111	2号墳	杯(身)	口径 12.2 受部径 14.2 器高 4.4 器厚 0.8	立ち上がりは内傾しながら立ち上がり、端部は丸い。受部は水平で短かい。底部は深く丸底で外上方に延び、受部に至る	胎土 砂粒を含み密 色調 灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り。 底部内面は直線方向のナデ。 その他は回転ナデ。	NAH7 ヘラ記号「／」
92-112	2号墳	蓋杯(蓋)	口径 14.2 器高 4.2 器厚 1.1	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る。端部は丸い。天井部は平底を呈した後、外下方に延びる。	胎土 砂粒細かく密 色調 灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ。 その他は回転ナデ。	NAH3 ヘラ記号「／」
92-113	2号墳	蓋杯(身)	口径 12.5 器高 5.1 器厚 1.0	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部は丸い。受部は水平で短かい。底部は深く、丸底で外上方に延び、受部に至る。	胎土 密、黒色粒子を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。底部½回転ヘラ削り。 底部内面は直線方向のナデ。 その他は内外面回転ナデ。	NAH6
92-114	2号墳	高杯	口径 13.0 受部径 15.2 器高 15.3 脚部径 11.8 脚部高 10.6	杯部の立ち上がりは内傾し上方に立ち上がり、端部は丸い。受部は外方に短かく延び、端部は丸い。杯部は浅く、外上方に延び、受部に至る。脚部は外下方に広がり端部は四角く、平面を有する。脚部中心に2条の凹線が巡り、上段に細長い四角形の透しが三方に、下段に三角形の透しが三方に穿たれている。	胎土 細かい砂粒を含み、密 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形。脚部は貼り付け、杯部、底部外面½回転ヘラ削りの後ナデ。杯部の底部内面には直線方向のナデ。 その他は内外面とも回転ナデ。	NAH14
92-115	2号墳	高杯	口径 12.0 受部径 14.4 器高(10.5) 器厚 1.0(杯) 1.4(脚) 脚部径 3.6 脚部高 (6.1)	杯部の立ち上がりは内傾し、上方に立ち上がり、端部は丸い。受部は外方が短く延び、端部は丸い、杯部は浅く、外方に延び、受部に至る、脚部に至る脚部は外下方に広がる、上段に細長い透しが三方に入る。	胎土 砂粒は細かく密 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形、脚部は貼り付け、杯部は底部外面½回転ヘラ削りの後ナデ調整、底部内面は直線方向のナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	NAH18
92-116	2号墳	高杯	口径 11.6 器高 14.9 脚部径 10.0 脚部高 10.5	杯部の立ち上がりは外方に直線的に立ち上がり、端部は鋭い、中央には1条の凹線が入る。 脚部中央に2条の凹線が巡り、上段に	胎土、極めて細かい砂粒を含む 色調 暗灰色 焼成 良好	アキアゲ、ミズビキ成形脚部は貼り付け杯部内面中央は直線方向のナデ。 その他はヨコ方向のナデ。	NAH12

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
92-117	2号墳	短頸壷	口径 8.0 器高 7.4 器厚 0.9	口縁部は直立し、端部に至る。端部は丸い。 体部は内彎気味に立ち上がり、肩部は外方に張り出す。底部は平底	胎土 砂粒細かく少ない緻密 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形、外面、体部下半と底部は回転ヘラ削り。体部上半はカキ目調整 内面と口縁部は回転ナデ。	SAH17
95-118	方台状遺構	甕	口径 18.8 胴部径 30.1 器高 32.3	口縁部は外反し、端部は屈曲する。体部は肩が張り、底部は丸底。	胎土 細かく密 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ、体部外面は平行叩き目の後ヨコ方向のカキ目、内面は同心円叩き目。	NAF07
95-119	方台状遺構	甕	口径 17.4 器高 29.9 器厚 0.8	口縁部は外反し、立ち上がる。端部は平垣。 体部は肩が張り、底部は丸底。	胎土 砂粒少なく密 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ、体部外面は平行叩目の後部分的にカキ目、内面は同心円叩き目。	NAF16
96-120	方台状遺構	甕	口径 54.4 器高(28.4) 器厚 1.4	口縁部は外反気味に立ち上がる。頸部は屈曲し、体部へ至る。	胎土 細かく密 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内外面は回転ナデ、6条の凹線を入れる。 体部外面は平行叩き目、内面は同心円の叩き目	NAF03
96-121	方台状遺構	甕	口径 44.8 器高(14.8) 器厚 1.0	口縁部は外反気味に立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ、外面に7条の凹線を施す。	
96-122	方台状遺構	甕	器高 31.4	底部から体部上半へ向け、ゆるやかに立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 青灰色 焼成 良好	体部外面は平行叩き目内面は同心円叩き目	NAF 002
96-123	Ⅲ区M—14	甕	口径 21.2 胴部径 43.6 器高 53.6	口縁部は外反し、立ち上がる。体部は肩が張り、底部に至る。底部は丸底。焼成時に多少ゆがむ。	胎土 砂粒多く密 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内外面はヨコナデ、体部外面は平行叩き目の後カキ目、内面は円孤叩き目を施す。	NAF58
97-124	方台状遺構	鍋鉢 (唐津)	口径(31.0) 器高(11.0) 器厚 3.3(底部)	体部はやや内湾しながら逆ハの字状に立ち上がり、口縁部は広く外反する。	胎土 微細で、細黒色粒を含む 色調 淡黄褐色 焼成 良好	削り出しによる碁笥底。外面底部に四ケ所、内面底部に五ケ所二枚貝による目当痕が残る。 口縁内外面のみ鉄釉をかける。内面に7本単位の条が入る。	NAN22 内面に使用痕あり。
97-125	方台状遺構	カワラケ	口径 11.6 器高 2.9 器厚 0.7	底部は上げ底。口縁へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ。指頭圧痕が残る。 その他はヨコナデ。	NAF34
97-126	方台状遺構	カワラケ	口径 12.2 器高 3.0 器厚 0.6	底部はやや上げ底、口縁へ向けて内湾気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ。指頭圧痕が残る。 その他は回転ナデ。	NAF31
97-127	方台状遺構	カワラケ	口径 12.4 器高 3.3 器厚 0.7	底部はやや上げ底。口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ。指頭圧痕が残る、 その他は回転ナデ。	NAF41
97-128	方台状遺構	カワラケ	口径 12.3 器高 3.2 器厚 0.8	底部は上げ底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ。指頭圧痕が残る、 その他は回転ナデ。	NAF40
97-129	方台状遺構	カワラケ	口径 11.9 器高 3.0 器厚 0.7	底部はやや上げ底 口縁へ向けてやや内彎気味に立ち上がる。	胎土 細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ、指頭圧痕が残る。 その他は回転ナデ	NAF32
97-130	方台状遺構	カワラケ	口径 12.0 器高 3.2 器厚 0.6	底部はやや上げ底で、丸味がある。口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 少量の砂粒を含み密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ、指頭圧痕が残る。 その他は回転ナデ。	NAF37
97-131	方台状遺構	カワラケ	口径 11.8 器高 2.9 器厚 0.7	底部はやや上げ底で丸味がある。口縁へ向けて、内湾気味に立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ。指頭圧痕が残る、その他はヨコナデ。	NAF38

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
97-132	方台状遺構	カワラケ	口径 12.2 器高 2.8 器厚 0.6	底部はやや上げ底、丸味あり、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ指頭圧痕が残る。 その他はヨコナデ。	NAF36
97-133	方台状遺構	カワラケ	口径 12.2 器高 3.0 器厚 0.6	底部はやや上げ底、丸味あり、口縁へ向けて内湾し、立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ、指頭圧痕が残る、 その他はヨコナデ。	NAF33
97-134	方台状遺構	カワラケ	口径 11.6 器高 2.8 器厚 0.7	底部はやや上げ底、丸味あり。口縁へ向けて内彎し、立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ。指頭圧痕が残る。 その他はヨコナデ。	NAF30
97-135	方台状遺構	カワラケ	口径 11.9 器高 3.2 器厚 0.7	底部はやや上げ底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 砂粒含ます細かく密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ、指頭圧痕が残る。 その他はヨコナデ。	NAF35
97-136	方台状遺構	カワラケ	口径 11.7 器高 2.9 器厚 0.6	底部はやや上げ底、口縁へ向けて内彎気味に立ち上がる。	胎土 砂粒少量含み密 色調 灰橙色 焼成 良好	底部外面はナデ、指頭圧痕が残る。 その他はヨコナデ。	NAF39
97-137	方台状遺構	カワラケ	口径(19.2) 器高 (3.0) 器厚 0.6	口縁部は外方に開き、直立する。	胎土 砂粒多く、密 色調 灰黄褐色 焼成 良好	底部外面に3条の凹線を施す。内外面はヨコナデ、内面頸部以下はヘラ削り。	NAF17
102—156	1号穴玄室	杯(蓋)	口径 14.0 器高 4.7 器厚 0.8	口縁部は直線的に広がり、端部に至る。口縁内面が多少凹む、天井部は平底を呈した後、外下方に延びる。天井と口縁の境は、2本の沈線を入れ、突縁をつくり出す。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 暗灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAH21「／」のヘラ記号
102—157	1号穴玄室	杯(身)	口径 11.3 受部径 13.5 器高 3.8 器厚 0.9	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部に至る。端部は丸い、受部は水平で短い。底部は平底で多少凹み、外上方に延び、受部に至る。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 暗青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形、底部½回転ヘラ削り、底部内面は直線方向のナデ、その他は内外面とも回転ナデ	NAH23「／」のヘラ記号
102—158	1号穴玄室	杯(身)	口径 11.9 受部径 14.4 器高 4.7	立ち上がりは内傾しながら端部に至る。端部は丸い、受部は水平で短い、底部は平底、外上方へ向けてゆるやかに立ち上がる。	胎土 微砂粒を含み密 色調 青灰色 焼成 良好	マキアゲ、ミズビキ成形底部½回転ヘラ削り、底部内面は直線方向のナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	NAN39
102—159	1号穴玄室	提瓶	口径 9.1 口頸部径 5.9 器高 23.2 器厚 1.0	口縁部は基部から外反して、上部で屈曲して立ち上がる。	胎土 白色砂粒を含み密 色調 青灰色 焼成 良好	体部成形後口縁部を貼り付ける。体部外面は同心円状のカキ目、口径部は回転ナデ、把手は貼り付け	NAH48
103—160	1号穴前庭部	蓋杯(蓋)	口径 13.3 器高 4.3 器厚 1.0	口縁部は内湾気味に広がり、端部に至る。端部内面は多少凹む。 天井部は平底を呈した後外下方に延びる、天井と口縁の境は2本の沈線を入れ、突起をつくり出す。	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 暗灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、天井部内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ、口縁外面に刻み目を入れる。	NAH20
103—161	1号穴前庭部	杯(身)	口径 11.1 受部径 13.2 器高 4.2 器厚 0.9	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部に至る受部は水平で短い。底部はやや上げ底で、ゆるやかに立ち上がり、受部に至る。	胎土 白色砂粒をわずかに含み密 色調 青灰色 焼成 良好	底部は½回転ヘラ削り内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAN56「／」のヘラ記号

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
103—162	1号穴前庭部	蓋杯(蓋)	口径 13.2 器高 3.9 器厚 0.8	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る口縁部内面が多少凹む、天井部はやや凹み、外下方に延びる天井部と口縁の境に突線をつくり出す。	胎土 砂粒少なく、黒色粒子が目立つ 密色 調暗青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAH22
103—163	1号穴前庭部	杯(身)	口径 11.5 受部径 14.1 器高 4.0 器厚 1.0	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部に至る。端部は丸い、受部は水平で短い。底部は丸く、やや外上方にゆるやかに立ち上がる。	胎土 白色、黒色砂粒を含む、密 色調 青灰色 焼成 良好	底部は½は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、内外面ともヨコ方向の回転ナデ。	NAN45
103—164	1号穴前庭部	杯(蓋)	口径 13.3 器高 4.3 器厚 0.9	口縁部は内湾気味に広がり、端部に至る、口縁内面が多少凹む、天井部はやや盛り上がり、外下方に延びる。天井と口縁の境は突縁をつくり出す。	胎土 砂粒を多く含む 色調 暗灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAH19
103—165	1号穴前庭部	杯(蓋)	口径 14.0 器高 4.9 器厚 0.9	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る、口縁部内面は多少凹む。天井部は平坦を呈し、外下方に延びる天井と口縁の境には突線をつくり出す。	胎土 細かい砂粒が多く密 色調 明灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAH24
103—166	1号穴前庭部	杯(身)	口径 12.0 器高 4.2 器厚 0.7	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部に至る。端部は鋭い、受部は水平で短い。底部は平底、外上方に延び受部に至る。	胎土 細かい砂粒を含み部分的に黒色の粒子を含む。 色調 灰褐色 焼成 良好	底部は½回転ヘラ削り底部内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAH27「／」のヘラ記号
103—167	1号穴前庭部	杯(蓋)	口径 13.4 器高 4.3 器厚 1.1	口縁部は内彎気味に広がり、端部に至る。端部内面は多少凹む、天井部は平底を呈した後外下方に延びる、天井部と口縁の境は沈線により突線をつくり出す。	胎土 細かい砂粒をわずかに含み、密 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAN57
103—168	1号穴前庭部	杯(身)	口径 12.0 受部径 14.1 器高 4.5 器厚 0.9	立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり、端部に至る。受部は水平で短い、底部は平底でゆるやかに立ち上がり受部に至る。	胎土 細かい砂粒を含む密 色調 黒灰色 焼成 良好	底部は½回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAN55
103—169	1号穴前庭部	高杯	口径 11.0 脚径 9.2 器高 11.8	杯部、口縁はやや開き気味に立ち上がり、端部は丸い、外面へ4本凹線が入る。脚部；裾へ向けてゆるやかに広がり、端部に至る。上下2段、3方に直方形の透しが入る。上段は貫通していない	胎土 細かい砂粒を含む、密 色調 灰色 焼成 良好	杯部；口縁部内外面はヨコ方向の回転ナデ、底部内面は直線方向のナデ。脚部；内外面にしぼり目が残る。ヨコ方向の回転ナデ。	NAH26
104—170	1号穴前庭部	杯(蓋)	口径 12.9 器高 3.8 器厚 0.9	口縁は直線的に開く、天井部は丸味を帯びる。口縁へ向けてゆるやかに広がる。天井部と口縁の境は沈線を2本入れ、突線を表現する	胎土 細かい砂粒を含み密 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAN51

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
104—171	1号穴前庭部	杯(身)	口径 12.2 受部径 14.8 器高 4.2 器厚 0.8	立ち上がりは内彎気味に立ち上がり、端部は丸い、底部は平底でゆるやかに広がり、受部に至る。受部は水平に短く延びる。	胎土 細かい砂粒を含み、密 色調 青灰色 焼成 良好	底部は½回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ、その他はヨコ方向の回転ナデ。	NAN50
104—172	1号穴前庭部	杯(蓋)	口径 13.2 器高 3.9 器厚 0.9	口縁部は内彎気味に開く、天井部は丸味を帯びて、口縁に向けてゆるやかに広がる。天井部と口縁の境に2本の沈線を入れ、突線と表現する	胎土 細かい砂粒をわずかに含む 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAN53
104—173	1号穴前庭部	杯(身)	口径 12.2 受部径 14.2 器高 3.8	立ち上がりは内傾気味に立ち上がり。底部は平底でゆるやかに広がり、受部に至る。受部は水平で短く延びる。	胎土 微砂を含み、密 色調 外面は暗灰色 内面は淡青灰色 焼成 良好	底部外面は½回転ヘラ削り内面は直線方向のナデ。その他はヨコ方向の回転ナデ。	NAN54
104—174	1号穴前庭部	杯(蓋)	口径 13.8 器高 3.9 器厚 0.9	口縁は内彎気味に開く。天井部は平坦で、口縁へ向けてゆるやかに広がる。天井部と口縁部の境は2本の沈線を入れ、突線を表現する。	胎土 細かい砂粒を含み、密 色調 外面は暗青灰色 内面は灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	NAN52
104—175	1号穴前庭部	杯(身)	口径 11.6 受部径 14.2 器高 4.3 器厚 0.9	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。底部は平底でゆるやかに広がり、受部に至る。受部は水平で短く延びる。	胎土 白色の細かい砂粒を含む 色調 灰色 焼成 良好	底部は外面½回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ。その他はヨコ方向の回転ナデ。	NAN38
104—176	1号穴前庭部	瓶	口径 9.7 胴部径 7.2 底径 4.0 器高 11.0	頸部から口縁部の境に段がつく。体部は丸味がある。	胎土 白色の細かい砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	体部の下半部回転ヘラ削り頸部に櫛描波状文、肩部に櫛描波状文を施す。	NAN58
104—177	1号穴前庭部	瓶	口径 12.9 胴部最大径 9.3 器高 12.2	頸部から口縁部へ向けて大きく開き、体部は丸味がある。	胎土 白色細砂を含む 色調 灰色 焼成 良好	体部の下半部回転ヘラ削り、頸部外面に不整な波状文、体部に櫛描列点文を施す	NAN47
104—178	1号穴前庭部	短頸壷	口径 6.3 最大径 11.3 器高 8.3 器厚 1.6	口縁部は内傾して短く立ち上がる。体部は丸味があり、底部は平底である。	胎土 白色細砂を含み、密 色調 暗灰色 焼成 良好	体部の下半部回転ヘラ削り、肩部に櫛描列点文を施す。その他はヨコ方向のナデと施す。	NAN48
104—179	1号穴前庭部	短頸壷	口径 7.0 最大径 12.4 器高 8.0 器厚 0.8	口縁部はやや内傾し立ち上る。体部はやや肩が張り丸味がある。	胎土 白色く細かい砂粒を含む 色調 外面は黒灰色 内面は青灰色 焼成 色好	体部の下半部回転ヘラ削り、肩部に4本の沈線を施す。その他はヨコ方向の回転ナデ。	NAN59
104—180	1号穴前庭部	短頸壷	口径 7.6 器高 9.9 器厚 1.0	口縁はやや開き気味に立ち上がり、端部は丸い。体部は内湾し、肩が張り、底部へ至る。底部は平底	胎土 砂粒多く密 色調 暗灰色 焼成 良好	底部外面はヘラ削り。その他はヨコ方向の回転ナデ。	NAH25
104—181	1号穴前庭部	壷	口径 (9.6) 最大径 11.0 器高 10.3 器厚 1.1	口縁はやや開き気味に立ち上がり、頸部は屈曲する。体部は肩が張り、底部は丸味がある。	胎土 細かい砂粒を含み、密 色調 青灰色 焼成 良好	体部中位に3本の沈線を施し、下半には櫛描のカキ目を施す。	NAN61「／」のヘラ記号

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
105—182	1号穴前庭部	脚付坩	口径 8.0 器高 10.0 器厚 1.1 脚径 9.3	口縁部は外方に短く立ち上がる。体部は丸味を持ち脚部に至る。脚部ゆるやかに広がり端部に至る。	胎土 白色の細かい砂粒を含み、密 色調 暗灰色 焼成 良好	口縁外面はヨコ方向の回転ナデ。 体部上半は櫛状工具による刺突文。下半は回転ヘラ削りの後ヨコ方向の回転ナデ 脚部は貼り付けで、三方に直方形の透しを入れる。ヨコ方向の回転ナデ。	NAN46
105—183	1号穴前庭部	脚付坩	口径 8.2 器高 12.2 最大径 10.0 底径 9.4	口縁部は外方へ向け、直線的に立ち上がる。体部は肩が屈曲し、ゆるやかに脚部に至る。脚部はゆるやかに広がり端部に至る。	胎土 白色の細かい砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内ともヨコ方向の回転ナデの後、斜め方向のナデ。その他は回転ナデ。脚部は貼り付け、脚部に7個の円形透し。	NAN37
105—184	2号穴玄室	杯(蓋)	口径 14.0 器高 4.8 器厚 0.9	口縁部はやや広がり気味に開く、天井部は丸味を帯びて、口縁へ向けてゆるやかに広がる。天井部と口縁部の境は、低い突線を表現する。	胎土 白色の細かい砂粒を含む 色調 淡灰色 焼成 良好	天井部は外面は回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	NAN36 ヘラ記号「//」
105—185	2号穴玄室	杯(身)	口径 12.2 最大径 14.3 器高 5.2 器厚 1.0	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。底部は平底で、ゆるやかに広がり、受部に至る。受部は水平で短く延びる。	胎土 白色の細かい砂粒を含む 色調 淡白色 焼成 良好	底部外面は½回転ヘラ削り、内面は直線方向のナデ。その他はヨコ方向の回転ナデ。	NAN35 ヘラ記号「//」
105—186	2号穴玄室	直口壷	口径 8.9 器高 11.0 器厚 1.3 胴部径 12.4 底径 6.9	口縁部は直立して立ち上がる。体部は肪が張り、ゆるやかに底部に至る。底部は平底。	胎土 白色の細かい砂粒を含む 色調 灰白色 焼成 やや軟い	口縁外面は櫛状工具によるカキ目。頸部から体部上半にかけて、ヨコ方向のナデ、体部は肩から下半にかけて、櫛状工具によるカキ目。体部下半と底部は回転ヘラ削り。内面はヨコ方向の回転ナデ。	NAN60 ヘラ記号「／」
105—187	Ⅲ区 石組み遺構 M—14	杯(蓋)	口径 13.0 器高 3.85 器厚 0.7	口縁部は内彎気味に立ち上がる。天井部は平坦で口縁へ向けてゆるやかに広がる、天井部と口縁の境に低い突線をつくり出す。	胎土 色調 焼成	天井部外面は½回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ。その他はヨコ方向の回転ナデ。	No. 1
105—188	Ⅲ区 石組み遺構 M—14	杯(蓋)	口径 13.2 器高 4.3 器厚 0.8	口縁部はやや開き気味に立ち上がる。天井部は丸味を帯びて、口縁へ向けてゆるやかに広がる。天井部と口縁の境に低い突線をつくり出す。	胎土 1㎜以下の砂粒を少量含む 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は½回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ。その他は回転ナデ。	No. 2
105—189	Ⅲ区 石組み遺構 M—14	杯(蓋)	口径 13.2 器高 4.1 器厚 0.8	口縁部は直線的に立ち上がる。天井部は平坦でゆるやかに広がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は½回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ、その他は回転ナデ。	No. 3
105—190	Ⅲ区 石組み遺構 M—14	杯(身)	口径 11.3 受部径 13.7 器高 4.4 器厚 0.9	立ち上がりは内湾気味に立ち上がる。底部は丸味を帯びて、ゆるやかに広がり受部に至る。受部は水平に短く延びる。	胎土 1㎜以下の砂粒を少量含む 色調 淡青灰色 焼成 良好	底部外面は½回転ヘラ削り。内面は直線方向のナデ、その他はヨコ方向の回転ナデ。	No. 4

挿図番号	遺構	器種	法量	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
110—191	Ⅲ区J—10	小形壷	口径 5.3 器高 12.9 器厚 0.8	口縁部はゆるやかに立ち上がる。端部で屈曲する。体部は肩が張り、底部に至る。底部は平底で低い高台を貼り付ける	胎土 1㎜ほどの白色砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 良好	口縁内外面とも回転ナデ、体部は回転ヘラ削りの後ナデ、底部は回転糸切りの後、高台貼り付け	NAR13「〆」のヘラ記号
110—192	Ⅲ区J—10	杯	口径 17.0 器高 6.6 器厚 1.2	体部は逆八の字形で直線的に開く。外面底部はやや内側に凹むが、高台は短く、外に踏んばり、外面底部とほぼ同じ高さである。	胎土 0.5㎜ほどの小さな砂粒を含む 色調 やや薄い青灰色 焼成 不良	底部外面に回転糸切り痕を残す、未調整。内面は巴文状のナデ。その他は回転ナデ、高台は貼り付け。	NAR12
110—193	Ⅳ区池の内	杯	口径 11.4 器高 4.5 器厚 0.8	底部は平底である、体部はやや内湾気味にゆるやかに立ち上がる。	胎土 微砂を含む 色調 灰色 焼成 良好	底部外面に回転糸切り痕を残す。その他は回転ナデ	N21
110—195	Ⅳ区池の北	杯	器厚 (0.7)		胎土 白い砂粒がまばらにみえる 色調 青灰色 焼成 良好	外面は系切りの後ナデ。 内面ナデ。 外面には「寺」の墨書。	底部の破片
110—196	Ⅳ区池の内	白磁碗（中国）	口径 15.5 器高 7.3 器厚 1.2	口縁にむかってゆるやかに内彎しながら立ち上がる。体部の器肉は薄い。しっかりした高い高台をもつ。	胎土 乳白色で磁器化している。 色調 わずかに青味がかった白磁釉 焼成 良好	外面は回転ヘラ削り痕が明瞭、外面高台付近は無釉で、他は内面も白磁釉をかける。貫入は内外面ともみられない。	NAR11
110—204	Ⅳ区1号住覆土	杯	器高 (1.6) 器厚 0.7 底径 4.3	底部は平底でほぼ垂直な低い高台をもつ。	胎土 0.5㎜以下の砂粒を含む 色調 桃白色 焼成 良好	内外面ともナデ、高台は貼り付け。	
110—205	Ⅳ区1号住覆土	杯	器高 (1.5) 器厚 0.4 底径 5.6	底部は平底。やや外方に開く低い高台をもつ。	胎土 砂粒少なく緻密 色調 黄白色 焼成	内外面ともナデ、高台は貼り付け。	
110—206	Ⅳ区1号住覆土	かわらけ	器高 (0.8) 器厚 0.2 底径 3.4	底部は平底、口縁へむけて逆八の字に立ち上がる。	胎土 砂粒少なく密 色調 黄白色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り。	
110—207	Ⅳ区1号住覆土	杯	器高 (2.4) 底径 4.4	底部は平底、外方に開く高台をもつ。	胎土 極細かく緻密	底部外面は回転糸切り。	
110—208	Ⅳ区1号住覆土	杯	器高 器厚	高台をもつ杯で体部は口縁にむかって大きく開く。底部は平底。	胎土 1㎜程度の砂粒を含む、密 色調 黄灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り、その他はヨコナデ。	

小　　結

Ⅰ区

Ⅰ区からは土壙192と溝状遺構1が検出された。比較的狭い範囲でこれほど多くの土壙が検出された例は県内ではなく、その性格については判断しがたい。そのためここでは土壙群の特徴を整理した上で、その性格について若干の検討を加えるにとどめたい。

検出された土壙の特徴を整理すると次のとおりである。

①いずれも平面形は不整形である。

②底面は凹凸の著しいものが多い。

③埋土はほとんどが自然堆積によるものと思われる（最上層がレンズ状に堆積しているものが多い）。

④埋土中に木葉、木の実、自然木などが含まれているものがある。

⑤出土遺物のうち、完形品は3個体のみで（34－8・35－3・38－8）、破片が圧倒的に多い。

⑥遺物は、土壙内に据え置かれた状態で出土したものはなく、無作為に投げ込まれるか、または転がり込んだ状態で出土したものがほとんどである。

⑦各土壙は複雑に重複している。同時期の土壙2個～3個が重複している箇所もある（ＳＫ03・04・06・63・64など）。

⑧これらの土壙は弥生時代前期後半から古墳時代前期にかけて作られたものであるが、弥生時代中期中葉と古墳時代前期に特に集中して作られたものである。また、弥生時代中期前葉と古墳時代初頭（鍵尾式期）のものは検出されていない。

⑨方位、規模など、各土壙間の規則性は認められない。

一般に土壙の性格については、Ⅰ土壙墓、Ⅱ貯蔵穴、Ⅲ落し穴、Ⅳごみ捨穴などが考えられているこのうち、ⅠとⅡ～Ⅳとは本質的に違う性格を持つ。すなわち、Ⅰには当時の人々の死生観が表現され、Ⅱ～Ⅳには生活そのものが現われていると考えられる。また、埋土の状況を考えた場合、Ⅰは人工的に埋めるのであって、自然に埋没することは考えられない。反対にⅡ～Ⅳは、廃棄された場合、自然堆積によって埋没するのが普通と考えられる。さらに、土壙墓の場合出土遺物は「供献遺物」であり、基本的には完形品を「供えた」ものであると言えよう。

Ⅰ区の土壙群についてみると、各土壙は無作為に掘り込まれた状況であり、方向性、規則性は全くみられない。また、埋土、遺物出土状況（特徴③、⑤、⑥）など土壙墓として認められない点が多い。むしろ貯蔵穴、ごみ捨穴のような生活に係わる遺構と考えたほうがよかろう。

このように、Ⅰ区の土壙群が生活に密着した遺構と考えるなら、当然周囲に集落跡の存在が予想される。しかしながら、中竹矢遺跡周辺で当該期の集落が検出されていない現段階では、あくまで想像にすぎず、今後の調査研究に期待したい。

遺物については、出土数はわずかながら注目すべきものがある。まず、木製品は、ＳＫ06出土の鋤（30－9）、ＳＫ21出土の鉢（31－8）が、弥生時代中期中葉の土器に伴って出土していること

が注意される。近年、県内では木製品の出土例が増加しているが、[註1]時期のわかる資料はほとんどなかった。わずか2点であるが、本遺跡で時期のわかる木製品が出土したことは、今後木製品を研究する上で重要な資料となろう。

次に、土器はＳＫ110（34－８）・ＳＫ113（35－８）・ＳＫ181（39－１）出土土器が注目される。特にＳＫ110出土の壺（34－８）は、形態が畿内Ｖ様式に似ており、当地方と近畿地方との交流を考える上で好例と言えよう。また、ＳＫ113（35－８）・ＳＫ118（39－１）出土の単純口縁の甕も当地方ではあまりみないもので、他地方の系統のものと考えられる。このようにＩ区出土の土器には他地方の影響を受けたものがあり、各地との接触がかなりあったものと思われる。

（柳浦俊一）

Ⅱ区

Ⅱ区で検出された遺構は掘立柱建物跡である。その覆土には石器が、表土には近世陶磁器が含まれていた。

掘立柱建物跡には、およそ８世紀後半代から17世紀代の遺物がともなっている。このことは、出雲国分寺（僧寺、尼寺）と共通し、この遺跡が出雲国分寺と深い関係にあったことをうかがわせる。国分僧寺は二町四方、国分尼寺は一町四方が推定されているが、この遺構はそのどちらの推定寺域からもはずれている。既に「出雲国分寺」『出雲・隠岐』で指摘されたごとく、[註2]Ⅲ区で検出された掘立柱建物跡（ＳＢ02・03）も含め、出雲国分寺の寺域外の調査、研究も必要であり、これらの掘立柱建物跡は貴重な資料を提供することになった。Ⅱ・Ⅲ区の建物跡については出雲国分寺関連遺跡としてとらえることができよう。そして、あえて国分二寺のいずれかと結びつけようとすれば、202の軒丸瓦と同文の資料を出土している国分尼寺との関係がより深いと云えよう。特にⅡ区で検出した遺跡は、さらに東側、すなわち国分尼寺の方向に広がっていることが予想され、宅地化の進行しつつあるこの地域の保護対策が急がれよう。

石器については、これに伴なう遺構は検出されず何ら確証はないが、隣接するＩ区の弥生時代の遺構と関係するものであろう。

近世陶磁器類のうち、伊万里系染付については、大極圏図文にみられるごとく、九州有田地方の江戸末期の磁器と共通するものである。大極圏図文は中国明時代の赤絵・染付にもみられるが、現在のところ日本では有田を中心とする地方で江戸末期の皿・碗類に知られている。中竹矢遺跡出土資料もほぼ同時期と考えられよう。江戸末期においても肥前有田地方の生産力がしのばれるのである。

Ⅲ区

Ⅲ区で検出した遺構は土壙、礫床、前方後方墳、横穴、掘立柱建物跡、方台状遺構、及びこれらと関係する溝であった。

土壙は、合計32あり、このうち土壙墓と考えられるのは、ＳＫ01、03、07～26で、ＳＫ07を除きいずれも頭位は東方を指向している。このうち鉄器を出土したのはＳＫ01とＳＫ22の２基で、土師器がともなうものは、ＳＫ16、26とＳＫ22の付属施設と考えられるＳＫ24であり、全体に遺物の量

は少ない。またＳＫ10、12、13は石枕あるいは墓標と考えられる自然石があった。

土壙の中で注目されるのは、墓標のあるＳＫ10、ＳＫ09とＳＤ08との関係、ＳＫ27の礫床とＳＤ02との関係である。前者は、南側は崩れているが、東西北側にコの字状の周溝に２基の土壙が囲まれており、周辺より一段低いところに作られていることを重視すれば、一辺約４ｍのいわゆる方形周溝墓の可能性がある。県内では確実に方形周溝墓の例は知られておらず[註3]、ここではその可能性を指摘するのにとどめておくことにする。後者については、発掘調査後、調査以前の測量図と照合したところ、わずかに土の盛り上りのコンター（標高30.0ｍ）がみられ、ＳＫ27はもともといくらかの盛土を持ちＳＤ02を周溝とした一辺約６ｍの方墳であったことが推定できよう。礫床遺構を主体部とした古墳は、八束郡東出雲町寺床１号墳、松江市西川津町管田丘古墳、同金崎６号墳、同法吉町月廻古墳群（５基)、八束郡鹿島町奥才古墳群（８基）が知られており、出雲でも特に東部に集中した分布を示している。ＳＫ27もそうした中におさまる。さらに、土師器の小片（図版106）が、礫床の構築にあたり故意に入れられたと思われるふしのある出土状態を示したのは前述の寺床１号墳も同様で[註7]、礫床の墳墓祭祀において共通性があると云えよう。この礫床の時期については、付近で出土した竹管文を有する古式土師器（第82図53）の時期である小谷式をあてておきたい。さらにＳＫ15とＳＤ05・07も今少し穿ったみかたをすれば、これも周溝墓とうけとれる。またＳＫ36は、床に扁平な自然石（通称大海崎石）を敷いた火葬墓で、熱残留磁気測定によれば、14世紀の年代が与えられた。さらに日本アイソトープ協会のＣ14測定によれば490±70yB. P. との結果がでている。この類の火葬墓も県内で類例は今のところない。今後この種の墳墓の類例を待ち他の中世墳墓とともに検討していくことが必要であろう。

Ⅲ区には中竹矢古墳として夙に知られる全長24ｍの前方後方墳が存在し、その東側の発掘調査区内で発見した前方後方墳を中竹矢２号墳と呼ぶことにした。既に述べたごとく中竹矢２号墳は全長14ｍで、全国的にみても、最小規模の墳丘の前方後方墳である。この古墳には主体部と認められるものは発見できなかった。しかし、中竹矢２号墳の後方部直下には、中竹矢１号横穴の玄室があり、あたかも中竹矢２号墳の主体部かのように思わせるものがあった。それぞれの遺構、遺物は概説してあるので、ここでは両者の関係をもう少し積極的に考えてみたい。

まず、中竹矢２号墳の墳丘は丘陵の北端によって築かれていることが上げられよう。すなわち、全長14ｍの墳丘であれば、それを築く余裕は十分あり、横穴を意識した計画的な築造と考えられる。次に、墳丘上に明確な主体部が発見されなかったこと、また、横穴の玄室が後方部の下に位置していること、両者から出土した須恵器は、大づかみにみて、山陰第Ⅲ期の範囲内に収まることが根拠になる。

しかしながら、後方部には実測図でみるかぎりコンターの乱れがみられ、後世若干の削平をうけていることが考えられること、また、中竹矢２号横穴の上には墳丘、もしくは溝はみられないことなどここで推測する１号横穴と２号墳との関係を否定する要素も認められる。

ところが、山口県朝田墳墓群では、中竹矢１号横穴と同様な墓道を有した横穴の上に周溝をもつ方形の盛土がある例が報告されており、また、福岡県行橋市竹並遺跡の横穴墓にも知られている。[註4]

さらに最近、鳥取県米子市陰田遺跡でも同様な横穴が数基発見され、出土する須恵器の時期も山陰第Ⅲ期のものであり、中竹矢例に近い。また、未発掘ではあるが、陰田遺跡に近い、能義郡伯太町井戸古墳群、安来市矢田町椿谷古墳群といった島根県でも東端部にそれと思われる横穴群も存在し、中竹矢2号墳と同じ1号横穴も以上の諸例と同様に考えられよう。山陰地方では現在のところ、横穴出土の須恵器は山陰第Ⅱ期に遡りうるものは発見されてはいない。とすれば、遺物からみるかぎり、この類いの墓制は今のところ、山口県地方、さらには九州北部との関係を考えなければならないであろう。

Ⅲ区には中竹矢2号墳の他、一見して方墳状を呈す遺構があり、これを方台状遺構として古墳と区別した。この遺構の北側は後世の山道により約⅓が破壊されていたが、復元すれば一辺10m、高さ1mになる。墳丘の表土中からは須恵器甕が破細され散乱した状態で発見された。墳丘からは、いわゆる墓壙状の遺構は検出できず、盛土の様子は古墳のようなしっかりしたものではなく、全体に軟弱であった。盛土中から検出したこぶし大の自然石、かわらけ、鐎鉢、寛永通宝を埋納した遺構が、この方台状遺構の性格と時期を表わすものである。こうした土壙を伴わない塚は、勝負遺跡、松江市乃木町松本修法壇跡、また、松江市東津田町喰ケ谷2号墳もその可能性が指摘されている。[註5] これらの例を参考にすれば、この方台状遺構は中世以降にみられる修法壇遺構の可能性がある。しかしながら、古代の須恵器の利用など理解できない問題が残ることになった。

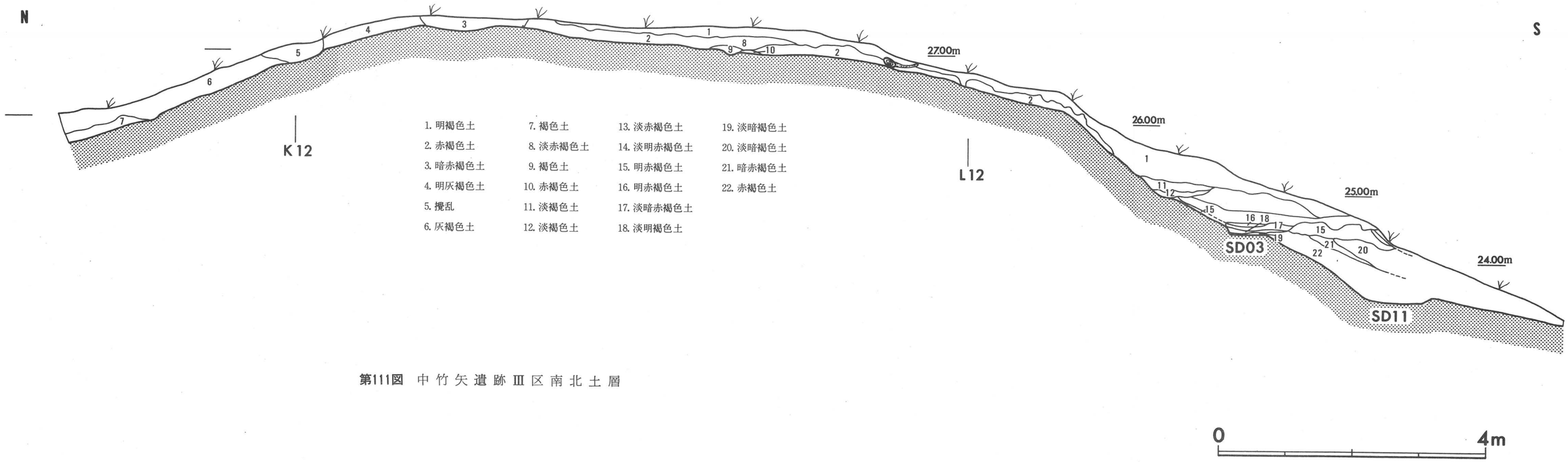
Ⅳ区

Ⅳ区の中心的な遺構は、池とその南側に池を囲むようにあった鐎鉢状の遺構である。

池からの出土遺物をみると、8世紀以降から中世まで認められる。遺物は、多量の平瓦、丸瓦、鬼瓦、塼、須恵器、土師器、中国磁器があり、須恵器の中には「寺」と読める墨書土器もあった。鬼瓦は、出雲国分尼寺で使用されたものの廃棄物とも考えられるが、「周り六里あり。鴛鴦(おし)・鳧(たかべ)・鴨・鮒あり。四邊に葦(あし)・蒋(まこも)・菅生(すがお)へり。養老元年より以住には、荷葉自然に叢生ふること太多なりしも、二年より以降、自然に失せき。都べて茎なし。俗人の云えらく、其の底に陶器・瓸・甎等の類多にあり。古より時時に人溺れ死ぬ。深き浅きを知らず。」という『出雲国風土記』秋鹿郡「恵雲陂」[註6]の条を想起させるものがある。仮に、古代から何らかの祭祀の意味で、この池が意識されていたならば、それは、池の周辺斜面でみられた石組やかわらけ、また西に隣接して検出された掘立柱建物跡も、池、もしくは水に対する祭祀関係のものとしてとらえられよう。

(広江耕史・内田律雄・宮沢明久)

註1　松江市西川津町西川津遺跡、同タテチョウ遺跡
2　石田茂作・山本　清「出雲国分寺」『出雲・隠岐』昭和38年
3　出雲市教育委員会『天神遺跡』昭和52年
4　山口県教育委員会『朝田墳墓群』Ⅴ昭和51年　竹並遺跡調査会『竹並遺跡』昭和54年
5　横山純夫・近藤　正「松江・松本修法壇跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集　昭和46年　松江市教育委員会『喰ケ谷古墳群』昭和56年
6　加藤義成『校注出雲国風土記』　昭和56年
7　松本岩雄氏の御教示による。



第111図　中竹矢遺跡Ⅲ区南北土層

V 才ノ峠遺跡

―松江市竹矢町―

1. 調査の経過 …… 346
2. 遺跡の概要 …… 347
3. 検出遺構と遺物 …… 353
4. 小結 …… 429

挿　図　目　次

第 1 図　調査区配置図 …… 346
第 2 図　Ⅰ・Ⅱ区土層図 …… 349
第 3 図　Ⅲ区遺構配置図 …… 351
第 4 図　ＳＢ０１実測図 …… 353
第 5 図　ＳＢ０２実測図 …… 354
第 6 図　ＳＢ０３実測図 …… 354
第 7 図　ＳＢ０４実測図 …… 355
第 8 図　ＳＢ０５実測図 …… 356
第 9 図　ＳＢ０６実測図 …… 356
第 10 図　ＳＢ０７実測図 …… 357
第 11 図　ＳＢ０８実測図 …… 357
第 12 図　ＳＢ09・10 実測図 …… 358
第 13 図　ＳＢ１１実測図 …… 358
第 14 図　ＳＢ１２実測図 …… 359
第 15 図　ＳＢ１３実測図 …… 359
第 16 図　ＳＢ１４実測図 …… 359
第 17 図　ＳＢ１５実測図 …… 360
第 18 図　ＳＢ１６実測図 …… 360
第 19 図　第６加工段遺物出土状態 …… 361
第 20 図　ＳＩ０１実測図 …… 362
第 21 図　ＳＩ02・03 実測図 …… 363
第 22 図　ＳＩ０５実測図 …… 364
第 23 図　ＳＩ０６実測図 …… 364
第 24 図　ＳＫ０１実測図 …… 365
第 25 図　ＳＫ０２実測図 …… 365
第 26 図　須恵器実測図（1） …… 366
第 27 図　須恵器実測図（2） …… 370
第 28 図　須恵器実測図（3） …… 371
第 29 図　須恵器実測図（4） …… 372
第 30 図　須恵器実測図（5） …… 373
第 31 図　須恵器実測図（6） …… 374
第 32 図　須恵器実測図（7） …… 375
第 33 図　須恵器実測図（8） …… 376

第 34 図　須恵器実測図（9）…… 377
第 35 図　須恵器実測図（10）…… 378
第 36 図　須恵器実測図（11）…… 379
第 37 図　須恵器実測図（12）…… 380
第 38 図　須恵器実測図（13）…… 381
第 39 図　須恵器実測図（14）…… 382
第 40 図　須恵器実測図（15）…… 383
第 41 図　須恵器実測図（16）…… 384
第 42 図　須恵器実測図（17）…… 385
第 43 図　土師器実測図（1）…… 387
第 44 図　土師器実測図（2）…… 388
第 45 図　土師器実測図（3）…… 389
第 46 図　土師器実測図（4）…… 390
第 47 図　土師器実測図（5）…… 391
第 48 図　土師器実測図（6）…… 392
第 49 図　瓦実測図（1）…… 394
第 50 図　瓦実測図（2）…… 395
第 51 図　瓦実測図（3）…… 396
第 52 図　瓦実測図（4）…… 397
第 53 図　瓦実測図（5）…… 398
第 54 図　瓦実測図（6）…… 399
第 55 図　瓦実測図（7）…… 400
第 56 図　瓦実測図（8）…… 401
第 57 図　祭祀遺物実測図（1）…… 404
第 58 図　祭祀遺物実測図（2）…… 405
第 59 図　祭祀遺物実測図（3）…… 406
第 60 図　祭祀遺物実測図（4）…… 407
第 61 図　祭祀遺物実測図（5）…… 408
第 62 図　祭祀遺物実測図（6）…… 409
第 63 図　祭祀遺物実測図（7）…… 410
第 64 図　祭祀遺物実測図（8）…… 411
第 65 図　祭祀遺物実測図（9）…… 412
第 66 図　木製品実測図（1）…… 413
第 67 図　木製品実測図（2）…… 414
第 68 図　木製品実測図（3）…… 416

第 69 図　木製品実測図（4）…… 417
第 70 図　木製品実測図（5）…… 418
第 71 図　木製品実測図（6）…… 419
第 72 図　木製品実測図（7）…… 420
第 73 図　木製品実測図（8）…… 421
第 74 図　陶磁器実測図…… 423
第 75 図　石器実測図…… 424

Ⅰ 調査の経過

昭和55年度

5月30日　水田部をⅠ、Ⅱ区、丘陵部をⅢ区とし、10m方眼のグリッドを設定した。Ⅱ区から発掘開始。

6月10日　Ⅲ区地形測量。

6月17日　Ⅰ区にて木簡らしきもの出土。

6月23日　Ⅲ区にグリッドを設設定し、発掘を始める。

8月25日　柱穴様ピット検出（ＳＢ01）。

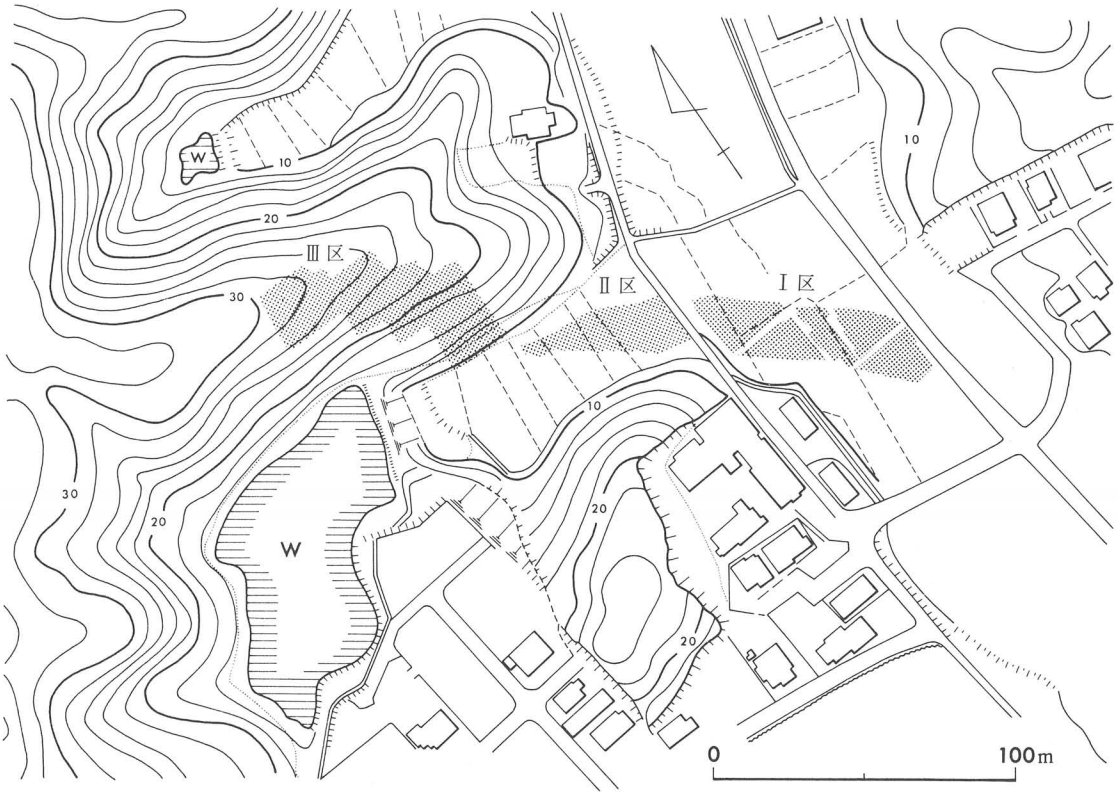
8月28日　ＳＢ09、10検出。

9月19日　第Ⅲ加工段の遺構検出、実測。

9月28日　Ⅰ・Ⅱ区写真撮影。

10月２日　Ⅱ区調査終了。

10月３日　Ⅰ区にて縄文土器出土。



第１図 調査区配置図

10月17日　Ⅰ区調査終了。
10月18日　第Ⅱ加工段実測。
10月22日　第Ⅲ加工段実測。
10月23日　第Ⅳ・Ⅴ加工段実測。
10月28日　Ⅲ区各遺構レベル読み。
10月29日　Ⅲ区写真撮影。
10月31日　調査終了。初雪。

2　遺　跡　の　概　要

Ⅰ区、Ⅱ区

才ノ峠遺跡の調査区は、東側の水田部をⅠ・Ⅱ区、西側の丘陵部をⅢ区としている。Ⅰ・Ⅱ区は、現在も水田に使用しており低湿地となっている。

Ⅰ区

Ⅰ区は、Ⅲ区の丘陵と東側にみられる丘陵との間の水田に設定している。Ⅰ区の土層は、上層から標高5.5*m*に耕作土、その下層は明灰色土、灰色土、黒灰色土、青灰色砂、青灰色粘土と続いている。青灰色粘土層の標高は4*m*である。西側では、白色粘土までの深さは50*cm*で東側へ行くに従い厚くなり1.5*m*の深さでも到達しない。灰色土の厚さも西側では30*cm*、東側では60*cm*と厚くなっている。遺物は、陶磁器が表土下から出土している。灰色土層下の黒灰色土と青灰色砂から、木製器、石器、土師器、須恵器、瓦といった遺物が出土している。木製品は、Ⅰ区東側において黒灰色粘土層中から集中して出土しており、木簡、下駄、曲物がある。木製品が出土した土層は、植物が多く含まれ、黒く粘性が強い土である。須恵器、瓦は、Ⅰ区西側青灰色粘土上からまとまって出土している。北西コーナー部分においては、青灰色粘土層が擂鉢状に落ち込み、その中に粘土層と砂層が交互に堆積している。その砂層中から縄文式土器の破片が多くの木片とともに出土している。青灰色粘土層は、西側から東側に向け緩かに傾斜している。耕作土下には、調査区を南北に走るように暗渠が埋設されていた。現在でも水が流れている。

Ⅱ区

Ⅱ区は、Ⅲ区の丘陵とⅡ区南側の丘陵に挟まれた谷部に設定している。現在、この谷の奥は池となっている。基本的な層序は、上層から耕作土、灰褐色土、黒色土、黒褐色砂質土、茶褐色砂質土、黒褐色土層、黒灰色砂と続く。Ⅱ区もⅠ区と同様に、西から東へ向け緩やかに傾斜している。層序は、Ⅰ区と同様の堆積状況を示しているが、Ⅰ区より多く砂が混入している。灰褐色土層上面からは、陶磁器が出土している。灰褐色土層より下層からは、瓦、須恵器、土師器、木製品、手捏土器、土錘が出土している。下層に行くに従って遺物の出土点数も多い。礫群の北側からは、黒褐色土層より土馬2体が出土している。この2体は、間隔をおいて、同じような高さから出土している。手捏土器は、Ⅱ区だけでも総数24個体出土している。土玉、土錘は、Ⅱ区からの出土数が最も多く70

個出土している。木製品には、曲物、琴柱、火鑽臼等がみられ、中には木片の一部に火を受けたものがある。瓦の出土もⅡ区が最も多く、平瓦の大きな破片もある。土師器は甕の破片と思われるものが多く出土しているがいずれも小破片で、復元は不可能であった。土師器の破片には、カマドの破片も含まれている。土製支脚の破片も突起部分で折れたものが出土している。

Ⅰ区、Ⅱ区とも元は、沼もしくは池であったと思われる。そこに粘質土が堆積し、その中に遺物が含まれたものと思われる。遺物は、何らかの理由で混入したものである。遺物の出土数は、特にⅡ区の方が多く調査区全域から出土しているが、Ⅰ区は西側から須恵器、瓦がまとまって出土している。各種の遺物以外にも種物種子等の自然遺物も多く、中でも桃の種子が多く出土している。Ⅱ区で遺物の点数が多いのは、Ⅲ区からの流れ込みとも考えられる。また、瓦の出土数が多いのは、Ⅱ区南側丘陵を隔てて出雲国分寺址があることから、そことの関連もあると思われる。

（広江耕史）

Ⅲ区

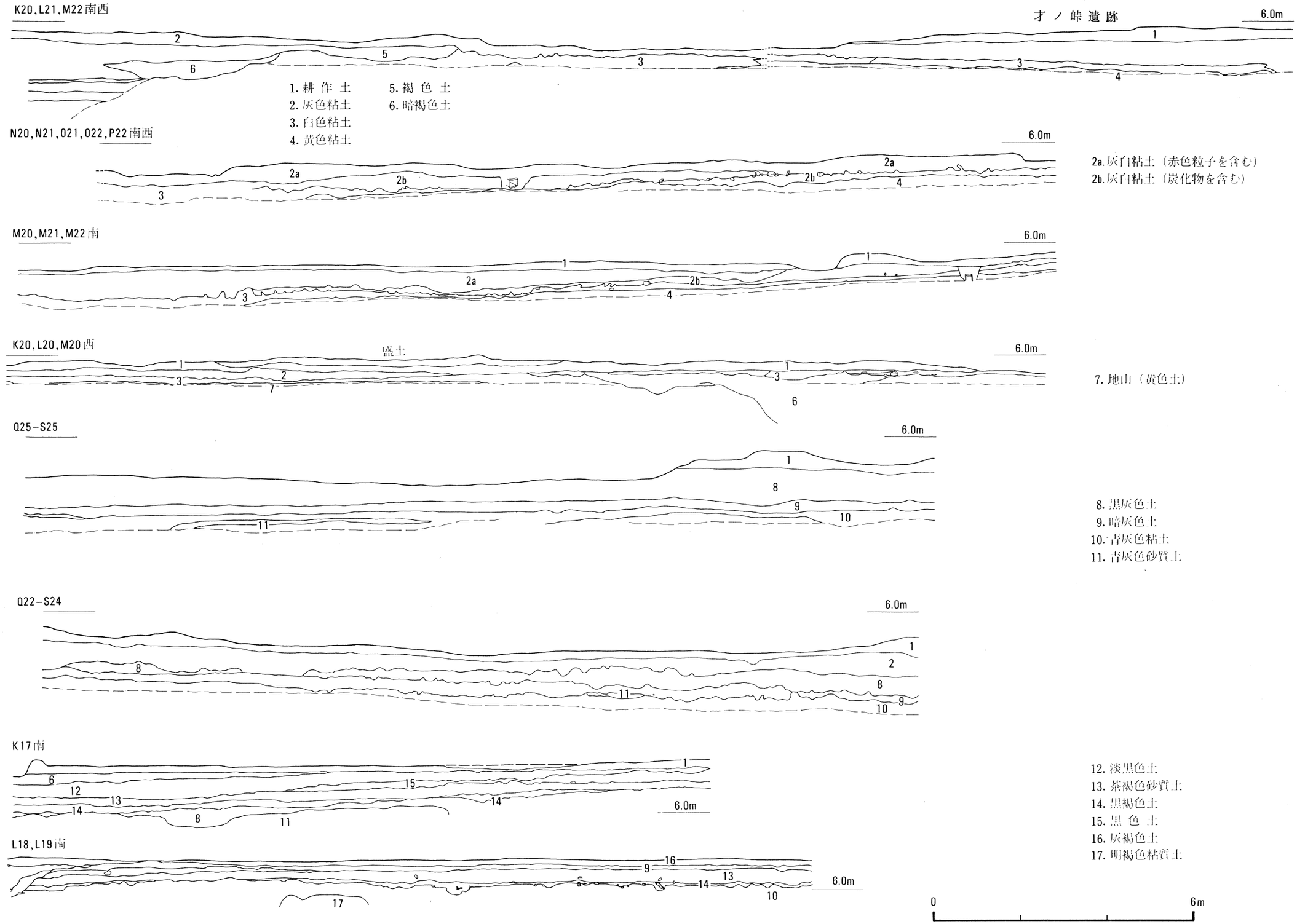
才ノ峠遺跡Ⅲ区は丘陵部である。今回の発掘調査では、主として才ノ峠１号墳の西側とその南側斜面が対象区域であり、第１加工段から第７加工段まで７つの加工段が検出された。発掘調査区域内には部分的に丘陵北側斜面が入っていたが、遺構、遺物は発見することはできなかった。

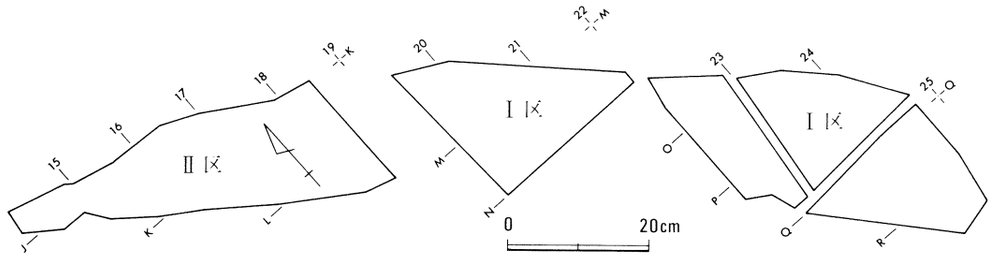
加工段は丘陵の最頂部の平坦面を第１加工段とし、順次南へ最下段の第６加工段まで名称をつけ、第３加工段の西で検出したＳＩ06を第７加工段とした。（第３図）

遺構は、７つの加工段に、堀立柱建物跡16、土坑２、住居跡状遺構６があり、特に第２加工段に堀立柱建物跡が集中していた。堀立柱建物跡はその大小を問わず２間×３間を原則としており、第４加工段、第６加工段では南側が消失している。第４加工段と第６加工段ではＳＢ12・ＳＢ13・ＳＢ14・ＳＢ15・ＳＢ16の他、多数の柱穴状ピットが検出されたが、堀立柱建物跡としてまとまったのは、これら４棟のみであった。堀立柱建物跡の中で最大規模のＳＢ01は、丘陵頂部の広い平坦面、すなわち、第１加工段の南隅にあり、特殊な建物と考えられる。ＳＢ01と才ノ峠１号墳とは約40m離れており広い空間があり、精査したのにもかかわらず何らの遺構も検出することはできなかった。恐らく、Ⅲ区丘陵部で検出された遺構・遺物に関係した広場として利用されたことであろう。

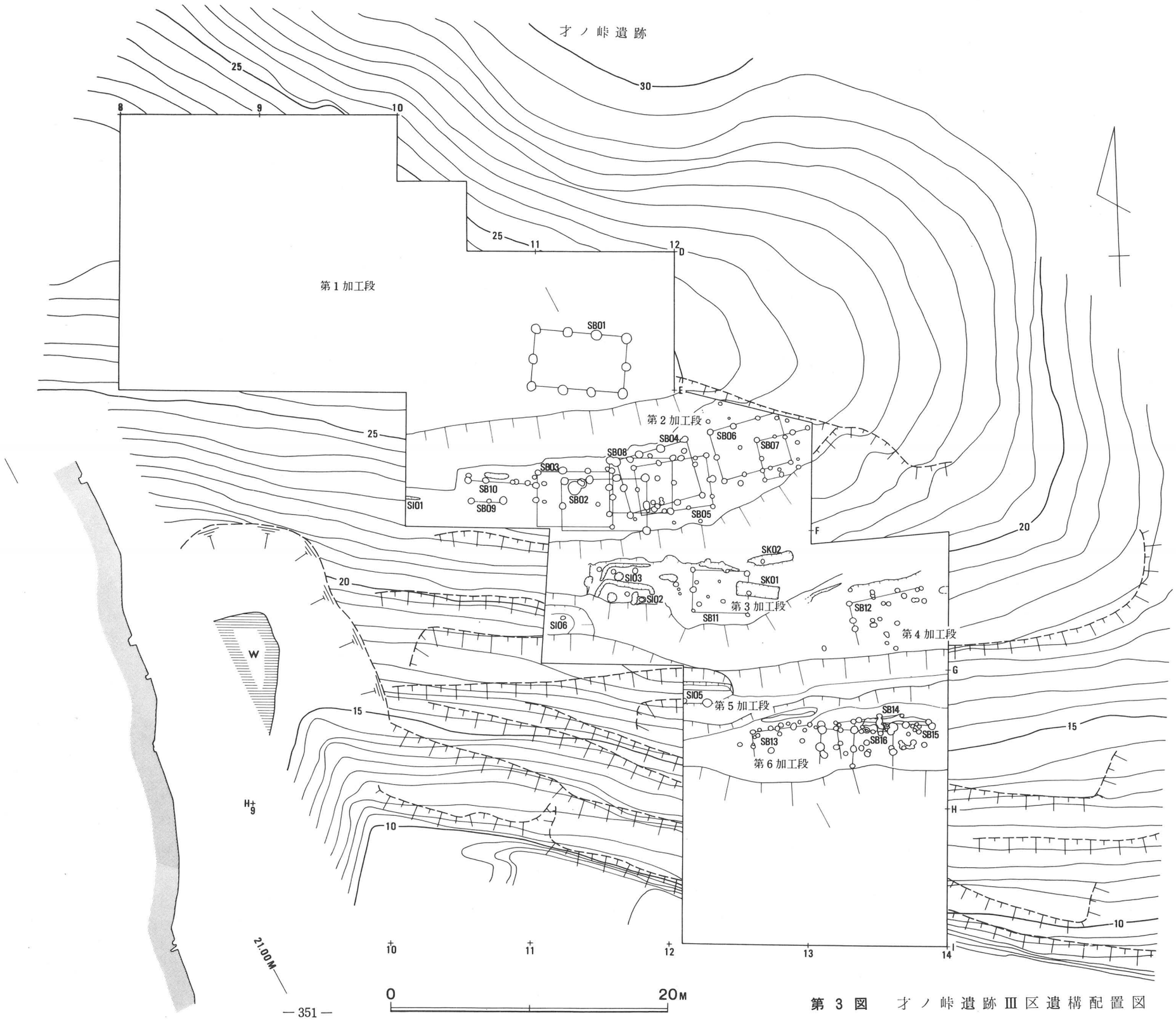
遺物は、第１加工段の広場から、第６加工段の南側斜面にわたる全域から出土した。遺物には、須恵器、土師器、土製支脚、土製カマド、土錘、瓦塼、小形手捏土器等が主要なものであり、特殊なものとして、ＳＩ03付近のピット内から細粒砂岩製の石鈴が、またⅡ・Ⅲ区からは土製鏡が出土した。また、昭和50年度報文にもみられる、スサ入りの質恵質の窯壁も少量あった。須恵器は主として、７世紀代から、９世紀代にかけてのものが多く、坏、高坏、磐、皿といった日常食器として使用された品種の内面には、ほとんど例外なく使用痕と考えられる磨滅が認められた。このことは、土製カマド、支脚、甕や、堀立柱建物が重複していること、遺構が丘陵の南側に集中しているなどを考えあわせるとこの遺跡が集落跡であることを示している。さらに、多くの祭祀的遺物を考慮すれば単なる普通の集落でなく、Ⅰ区・Ⅱ区とともにこの遺跡の特殊性をうかがうことができよう。

（内田律雄）

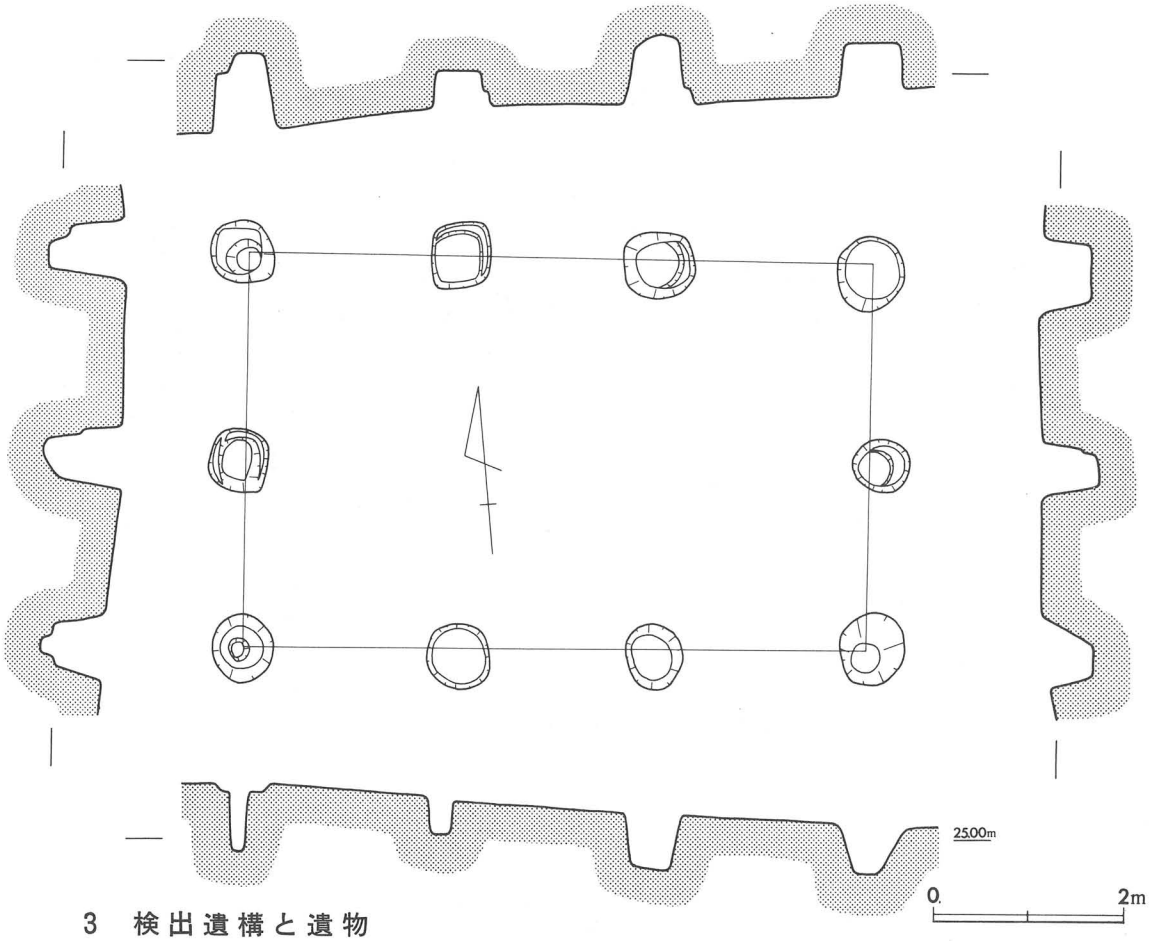




第 2 図　Ⅰ・Ⅱ 区 土 層 断 面 図



第3図　才ノ峠遺跡Ⅲ区遺構配置図



第４図　ＳＢ01 実　測　図

３　検出遺構と遺物

ＳＢ01（第４図）

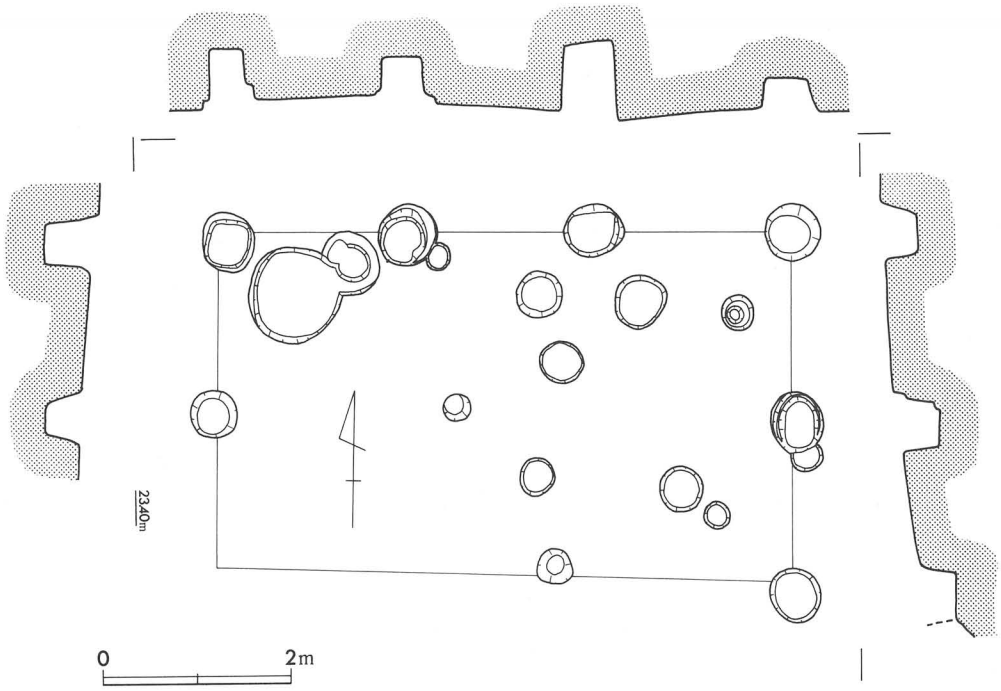
調査区最上段の第１加工段にある２間（416㎝）×３間（670㎝）の東西棟の建物跡で、建物軸方向はＮ－6°－Ｅを測る。柱間距離は、桁行は東から7.8尺（230㎝）、7.4尺（220㎝）、7.8尺（230㎝）になり梁行は７尺（208㎝）等間になる。検出した柱穴は10ケで円形又は隅丸方形プランである。柱穴は、円形のものが直径60～70㎝、隅丸方形のものが60㎝×70㎝で、深さ40㎝～80㎝である。本調査区内において柱穴の大きさ等の建物の規模では、最も大きなものである。第１加工段中唯一の建物である。

ＳＢ02（第５図）

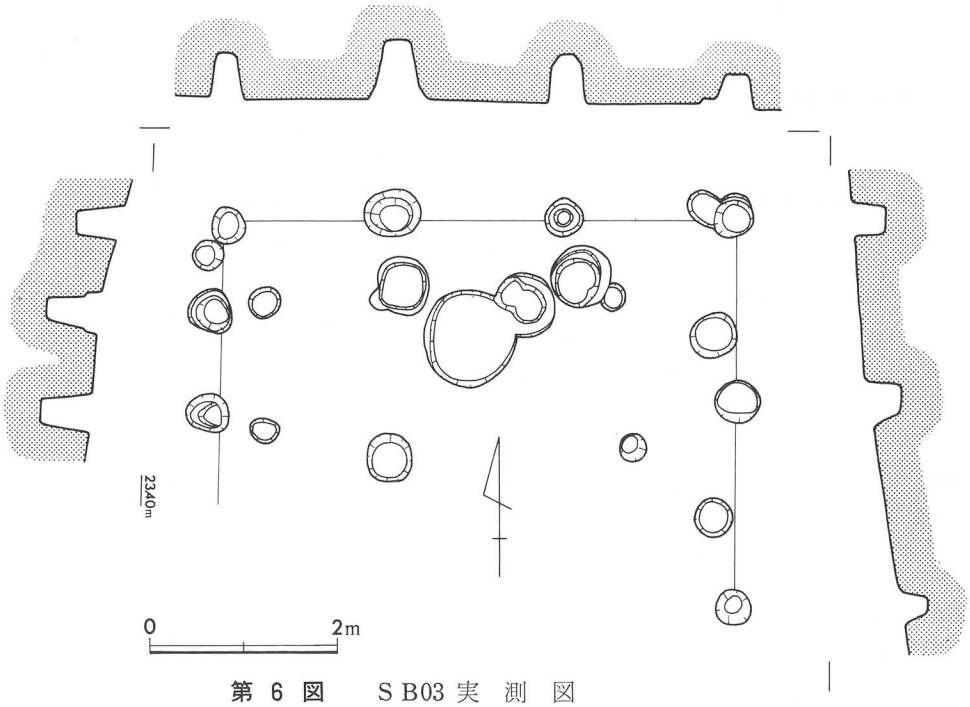
第２加工段にある２間（358㎝）×３間（612㎝）の東西棟建物跡で、建物軸方向はＮ－0°－Ｅを測る。柱間距離は、桁行は東から７尺（208㎝）、７尺（208㎝）、6.4尺（190㎝）になり、梁行は北から７尺（208㎝）、６尺（178㎝）になる。検出した柱穴は８個で円形プランである。

ＳＢ03（第６図）

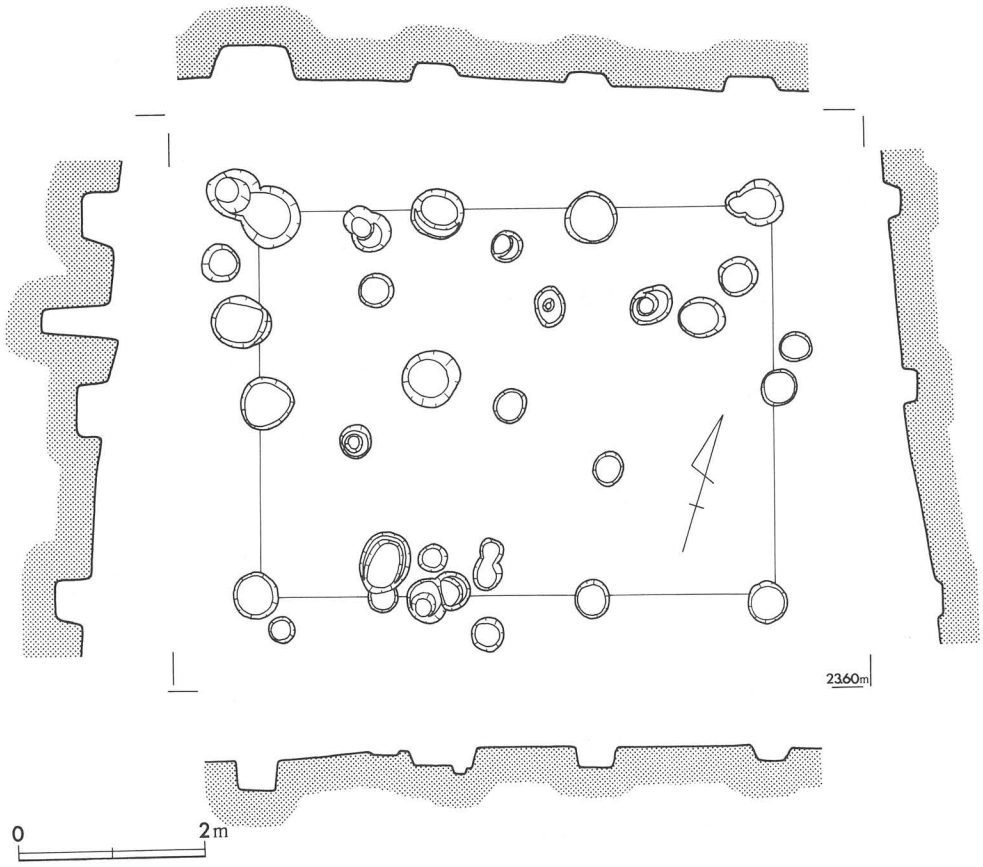
第２加工段にある３間（546㎝）×２間（405㎝）以上の東西棟建物跡で、建物軸方向はＮ－0°－Ｅを測る。柱間距離は、桁行は東から6.4尺（190㎝）、６尺（178㎝）、６尺（178㎝）になり、梁行



第 5 図　SB02 実 測 図



第 6 図　SB03 実 測 図



第 7 図　ＳＢ04 実 測 図

は北から6.4尺（190㎝）、7.22尺（214㎝）になる。検出した柱穴は８個で円形プランである。

ＳＢ04（第７図）

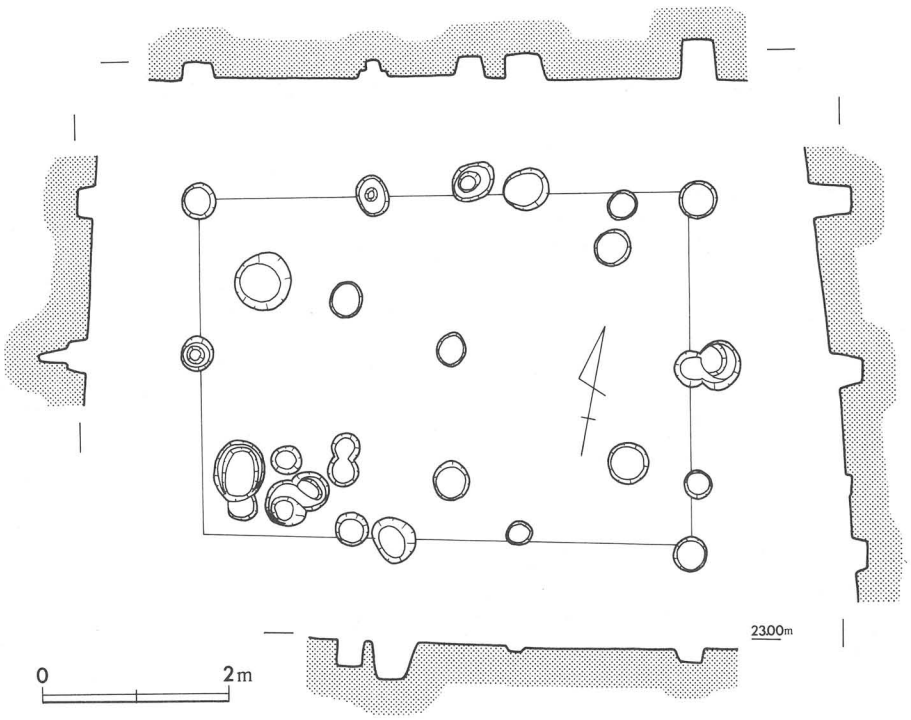
第２加工段にある２間（410㎝）×３間（549㎝）の東西棟建物跡で、建物軸方向はＮ－18°－Ｗを測る。柱間距離は、桁行は東から6.5尺（193㎝）、5.5尺（163㎝）、6.5尺（193㎝）になり、梁行は北から6.5尺（193㎝）、7.3尺（217㎝）になる。検出した柱穴は10個で円形プランである。

ＳＢ05（第８図）

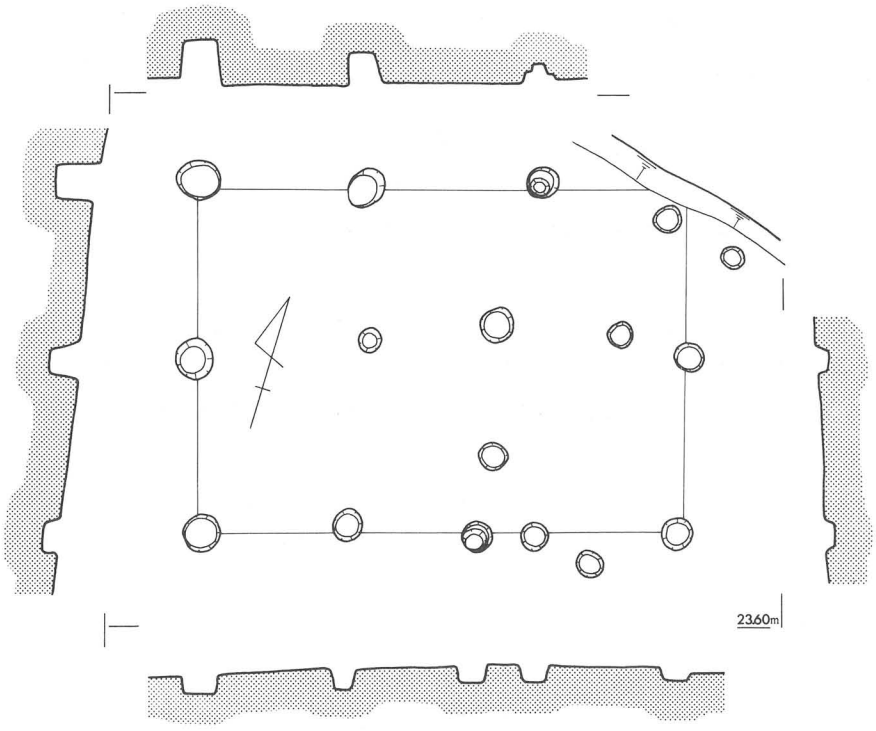
第２加工段にある２間（371㎝）×３間（519㎝）の東西棟建物跡で、建物軸方向はＮ－9°－Ｗを測る。柱間距離は、桁行は東から5.7尺（169㎝）、5.6尺（166㎝）、6.2尺（184㎝）になり、梁行は北から6.4尺（190㎝）、6.1尺（181㎝）になる。検出した柱穴は９個で円形プランである。

ＳＢ06（第９図）

第１加工段にある２間（365㎝）×３間（522㎝）の東西棟建物跡で、建物軸方向はＮ－17°－Ｗを測る。柱間距離は、桁行は東から5.3尺（157㎝）、6.3尺（187㎝）、６尺（178㎝）になり、梁行は北から６尺（178㎝）、6.3尺（187㎝）になる。検出した柱穴は９個で円形プランである。



第 8 図　SB05 実測図



第 9 図　SB06 実測図